

大宰府史跡

昭和55年度発掘調査概報



昭和56年3月

九州歴史資料館

大宰府史跡

昭和55年度発掘調査概報

昭和56年3月

九州歴史資料館

序

昭和55年度の大宰府史跡発掘調査概報をおとどけします。この概報には昭和55年度に行いました発掘調査の概要と昨年度に行いました推定金光寺跡の調査概要を収録しております。金光寺をはじめとする観世音寺子院については、これまで未解明のままであり、これからの調査がおおいに期待されております。今回の報告は昭和53年度に行いました調査結果とあわせて遺構・遺物ともに内容豊富であり、今後の子院関係遺跡の調査は勿論広く一般の中世遺跡の調査に対しても寄与する点は多々あるものと確信しています。また第73次調査として行いました大宰府条坊中軸線の調査は条坊制を復原するうえにおいて新たな一石を投じました。今後一層の調査が必要と痛感されます。いつものことではありますが、発掘調査を実施するにあたりましては、大宰府史跡発掘調査指導委員会の諸先生方をはじめ、九州芸術工科大学沢村仁教授等の諸先生方に何かとお世話になりました。ここに厚く御礼申し上げます。

最後に私ごとを申し上げ恐縮ですが、この調査概報を最後に館長職を退くように申し出ております。私自身も古稀をすぎ、いくら定年なしとはいえ早く身を引くべきと考えていましたが、延引今日に到りました。顧りみますと、史跡の発掘調査事業も10年以上を経過し、概報報告書も定着した感があります。この間地元の方々をはじめ、温くこの事業を支えて下さった方々に感謝の念をささげたいと思います。今後とも新しい館長のもとで、この発掘調査事業が益々発展することを祈念して止みません。

昭和56年 3月31日

九州歴史資料館長 鏡 山 猛

例 言

1. 本概報は昭和55年度に実施した大宰府史跡の発掘調査概要の報告である。ただし第67次調査は昭和54年度の事業であるが未報告であるので併せて報告する。また第70、74次調査の概要については現在遺物整理中であるので次回にゆずる。また第71次調査については顕著な遺構・遺物は検出されなかったので報告は割愛した。
2. 検出遺構については九州芸術工科大学沢村仁教授の指導を得た。また第67次調査出土の木簡の判読については奈良国立文化財研究所の加藤優氏にお願いした。
3. 遺構・遺物の写真については学芸第一課石丸洋の撮影による。
4. 本概報の執筆、編集については調査課の石松好雄、倉住靖彦、高倉洋彰、横田賢次郎、森田勉、高橋章が行った。また遺物の整理については井上トシ子、松浦敏子、田崎道子、大田和子の協力を得た。

目 次

序	
I 調查計画	1
II 調査経過	2
1 概 要	2
2 第67次調査	4
検出遺構	4
出土遺物	14
小 結	85
3 第72次調査	89
検出遺構	89
出土遺物	91
小 結	101
4 第73次調査	103
検出遺構	103
出土遺物	104
小 結	108

挿 図 目 次

第 1 図	大宰府史跡発掘調査地域図	折込み
第 2 図	第67次調査層位模式図	5
第 3 図	第67次調査遺構配置図	折込み
第 4 図	第57・67次調査遺構配置図	折込み
第 5 図	S B 1590礎石配置図	6
第 6 図	井戸 S E 1585実測図	10
第 7 図	土壇 S K 1615実測図	12
第 8 図	杯・皿分類図	14
第 9 図	S B 1590礎石掘方出土土器実測図(1)	15
第10図	S B 1590礎石掘方出土土器実測図(2)	15
第11図	S D 1452出土土器・陶磁器実測図	16
第12図	S D 1586出土土器・陶磁器実測図	17
第13図	S D 1431・1439・1446・1587・1591・1592・1641・1651・ 1653・1656・1657・1659出土土器・陶磁器実測図(1)	19
第14図	S D 1431・1439・1446・1587・1591・1592・1641・1651・ 1653・1656・1657・1659出土土器・陶磁器実測図(2)	20
第15図	S K 1630出土土器・陶磁器実測図	22
第16図	S K 1615出土陶磁器実測図	23
第17図	S K 1588・1604・1605・1609・1611・1635出土土器・陶磁器実測図	25
第18図	S K 1655出土土器・陶磁器実測図	27
第19図	S X 1630出土土器・陶磁器実測図	28
第20図	S X 1629・1633・1637出土土器・陶磁器実測図	30
第21図	S X 1637出土陶器実測図	31
第22図	S X 1633出土土器実測図	32
第23図	整地層出土土器・陶磁器実測図	34
第24図	腐植土層出土土器・陶磁器実測図	36
第25図	暗茶色土層出土土器・陶器実測図	38
第26図	暗青灰色土層出土土器・陶磁器実測図	40
第27図	黒色土層出土土器・陶磁器実測図(1)	41
第28図	黒色土層出土土器・陶磁器実測図(2)	43

第29図	黒色土層出土土器・陶磁器実測図(3)……………	44
第30図	黒灰色土層出土土器・陶磁器実測図(1)……………	46
第31図	黒灰色土層出土土器・陶磁器実測図(2)……………	47
第32図	黒灰色土層出土土器・陶磁器実測図(3)……………	48
第33図	黒灰色土層出土土器・陶磁器実測図(4)……………	49
第34図	黒灰色土層出土土器・陶磁器実測図(5)……………	51
第35図	黒灰色土層出土土器・陶磁器実測図(6)……………	53
第36図	黒灰色土層出土土器・陶磁器実測図(7)……………	54
第37図	暗灰色土層出土土器・陶磁器実測図(1)……………	55
第38図	暗灰色土層出土土器・陶磁器実測図(2)……………	56
第39図	軒丸瓦拓影・実測図……………	59
第40図	軒平瓦拓影・実測図……………	61
第41図	鬼瓦実測図……………	63
第42図	S K 1615出土木製品実測図……………	67
第43図	整地層出土木製品実測図……………	68
第44図	その他の遺構出土木製品実測図……………	70
第45図	各層出土木製品実測図……………	71
第46図	S K 1615出土鉄製品・銅製品実測図……………	73
第47図	金属製品実測図……………	75
第48図	石製品・鉄釘実測図……………	76
第49図	一石五輪塔梵字拓影……………	77
第50図	石塔類実測図……………	78
第51図	土製仏像実測図……………	79
第52図	銅銭拓影(2/3)……………	折込み
第53図	期別遺構配置概念図……………	86
第54図	第72次調査遺構配置図……………	折込み
第55図	S D 570 出土土器・陶磁器実測図……………	91
第56図	S D 587-1出土土器実測図(1)……………	93
第57図	S D 587-1出土土器実測図(2)……………	94
第58図	S D 587-2下層出土土器・陶磁器実測図(1)……………	96
第59図	S D 587-2下層出土土器・陶磁器実測図(2)……………	97
第60図	S D 587-2上層出土土器・陶磁器実測図(1)……………	99
第61図	S D 587-2上層出土土器・陶磁器実測図(2)……………	100

第62図	軒丸瓦拓影・実測図	101
第63図	第31・35・72次調査遺構集成図	折込み
第64図	第73次調査遺構配置図	折込み
第65図	茶褐色土層出土土器・硯実測図	104
第66図	軒先瓦拓影・実測図	105
第67図	道具瓦拓影・実測図	106
第68図	鋳型実測図・写真	107

図 版 目 次

図版 1	第67次調査 推定金光寺跡の検出建物 (上) 礎石建物 S B 1430 (上方) と礎石建物 S B 1440 (左) (中) 礎石建物 S B 1590 全景 (下) 礎石建物 S B 1600 全景
図版 2	礎石建物 S B 1590
図版 3	(上) 礎石建物 S B 1590 (東から) と井戸 S E 1585 (下) 礎石 S B 1590 (西から)
図版 4	(上) 礎石建物 S B 1590 (北西から) (下) 礎石建物 S B 1590 (北東から) と井戸 S E 1585
図版 5	(上) 礎石建物 S B 1590 (南東から) と溝 S D 1586 D・井戸 S E 1585 (下) 溝 S D 1592 (南東から)
図版 6	土壇 S K 1615 (上) 斧・鎌・鉞鎌・錐などの出土状態 (下) 同上拡大
図版 7	(上) 土壇 S K 1615、青磁盤・下駄などの出土状態 (下) 土壇 S K 1615 (下) と土壇 S K 1595 (上)
図版 8	礎石建物 S B 1600
図版 9	(上) 礎石建物 S B 1600 (南東から) (下) 礎石建物 S B 1600 (北東から) と池状遺構 S X 1630
図版 10	礎石建物 S B 1600 雨落・排水溝 (上) 溝 S D 1651・1652 の屈曲部 (下) 溝 S D 1652
図版 11	(上) 礎石建物 S B 1590 (右) と礎石建物 S B 1600 (左) を隔てる柵 S A 1620

(下) 池状遺構 S X 1630 (中央) と石組遺構 (左端)

図版12 礎石建物 S B 1610

図版13 (右) 道路状遺構 S X 1670全景 (北から)

(下) 溝 S D 1452と道路状遺構 S X 1670

図版14 渡り石 S X 1675全景

図版15 井戸 S E 1585全景

図版16 第72次調査 調査区全景

図版17 掘立柱建物 S B 1900と溝 S D 587-2

図版18 (上) 掘立柱建物 S B 580・1885 (東から)

(下) 溝 S D 587-1の土師器出土状態 (東から)

図版19 第73次調査 調査区全景

図版20 (上) 土壇 S K 1915

(下) 土壇 S K 1910の瓦出土状態

図版21 第67次調査 溝 S D 1452・1586出土土器・陶磁器

図版22 第67次調査 溝 S D 1587・1653・1659出土土器・陶磁器

図版23 第67次調査 土壇 S K 1603出土土器

図版24 第67次調査 土壇 S K 1615出土陶磁器

図版25 第67次調査 土壇 S K 1588・1603・1605・1655出土陶磁器

図版26 第67次調査 S X 1630出土陶磁器

図版27 第67次調査 S X 1663・1629・1637出土土器・陶磁器

図版28 第67次調査 整地層出土土器・陶磁器

図版29 第67次調査 腐植土層・暗茶色土層出土土器・陶磁器

図版30 第67次調査 暗青灰色土層出土土器

図版31 第67次調査 暗青灰色土層出土土器・陶器

図版32 第67次調査 黒色土層出土土器

図版33 第67次調査 黒色土層出土土器・陶磁器

図版34 第67次調査 黒色土層出土陶磁器

図版35 第67次調査 黒色土層出土陶磁器

図版36 第67次調査 黒灰色土層出土土器・陶器

図版37 第67次調査 黒灰色土層出土土器

図版38 第67次調査 黒灰色土層出土陶磁器

図版39 第67次調査 黒灰色土層出土陶磁器

図版40 第67次調査 黒灰色土層出土陶磁器

- 図版41 第67次調査 黒灰色土層出土土器・陶器
 図版42 第67次調査 暗灰色土層出土土器
 図版43 第67次調査 暗灰色土層出土土器・陶磁器
 図版44 第67次調査 溝S D1439・土壇S K1603・腐植土層・暗茶色土層・黒灰色土層出土土器・陶器
 図版45 第67次調査 溝S D1439・土壇S K1655・腐植土層・暗青灰色土層・黒灰色土層・黒色土層茶褐土層・暗灰色土層・床土出土陶磁器
 図版46 第67次調査 出土軒丸瓦
 図版47 第67次調査 出土軒平瓦
 図版48 第67次調査 出土鬼瓦・鳥衾
 図版49 第67次調査 腐植土層出土木簡
 図版50 第67次調査 腐植土層・土壇S K1595出土木簡
 図版51 第67次調査 土壇S K1615出土木製品
 図版52 第67次調査 溝S D1452・1642・1656・土壇S K1595・1603・1605出土木製品
 図版53 第67次調査 整地層出土木製品
 図版54 第67次調査 各層出土木製品
 図版55 第67次調査 土壇S K1615出土鉄製品・銅製品
 図版56 第67次調査 出土金属製品
 図版57 第67次調査 出土石製品・鉄釘
 図版58 第67次調査 出土石塔類
 図版59 第67次調査 出土土製地藏菩薩像
 図版60 第72次調査 溝S D570・587-1・土壇S K1886出土土器
 図版61 第72次調査 溝S D587-2下層出土土器
 図版62 第72次調査 溝S D587-2上層出土土器
 図版63 第73次調査 出土軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦



第1図 大宰府史跡発掘調査地域図

I 調査計画

昭和55年度の発掘調査は昭和52年度に立案した5カ年計画の第4年次にあたる。この5カ年計画では調査の対象を観世音寺および同子院跡ならびに条坊地区におき、それぞれの遺構の解明を主眼としている。したがって今年度の調査も基本的にはこの計画の趣旨に沿って次の地域について調査を行うこととした。

調査回数	調査地区	調査面積(㎡)	調査期間	備考
70	6KKZ-B	1,220	4月～6月	観世音寺僧房
71	6KKZ-B	10	4月	観世音寺南辺部
72	6ZGK	900	7月～10月	学校院東辺部
73	6AYI-D	1,200	11月～1月	条坊地区

まず、第70次調査は観世音寺僧房推定地の調査である。この観世音寺僧房についてはすでに昭和51年度に第43次調査として講堂背後の一面について調査を行っている。この調査では講堂と約68尺の間隔をおいて東西にのびる礎石建物（S B1080）を検出している。遺構の保存状態は必ずしも良好ではなかったが、わずかに残る根石から復原するとこの建物は『延喜五年観世音寺資財帳』に記載のある大房にはほまちがないことが判明した。しかしながら同資財帳にはこのほかに小子房二字、馬道屋一字、客僧房二字などが記載されており、さらに多くの建物が存在していたことを知ることができる。今回の調査はこれらの遺構確認のため昭和51年度調査地北方の一面について調査を行うこととした。

第71次調査は住宅改築にともなう事前調査である。

第72次調査は学校院東辺部の調査を行うこととした。この地域は鏡山猛氏の大宰府条坊復原案によると学校院と観世音寺の境界にあたり、条坊制を考えるうえにおいても重要な地域である。昭和46年度に行った第9次調査および昭和50年度に行った第36次調査において、この地域から奈良～平安期の掘立柱建物7棟、平安時代後半から鎌倉時代にかけての井戸27基、溝5条などを検出している。今回は第9次調査地の南に接した一面について調査を行うこととした。

第73次調査は条坊遺構の確認を目的としたものである。大宰府の条坊制についてはこれまで鏡山猛氏の復原案によるものを準拠として調査を進めてきたが、これまでのところ、この復原案を実証するような遺構は検出できてない。昭和53年度に行った第58次調査は政庁南門前面の左右両郭を分ける中心線上で行ったが遺構は何ら検出されず、したがって朱雀大路に相当する南北道路の存在を証明するような遺構も勿論発見されていない。この政庁前面についてはこのほかに右郭五条二坊、左郭五条二坊推定地において調査を行いそれぞれ礎石建物、掘立柱建物

が検出されている。このような過去における調査結果からみると政庁前面は左・右両郭の五条一坊推定地にはもともと遺構が存在しない一定の空間が設けられ、その東・西に官衙が配された可能性も考えられる。したがって少なくとも政庁前面については従来の条坊制の復原等では律し切れない問題が生じてきたということがいえよう。今回はこの点をさらに追求するため第58次調査地の北に接した地域について調査を行うこととした。なおこの第73次調査は現在太宰府町によって実施されている観世音寺地区土地区画整理事業に対する事前調査をも兼ねている。

以上の計画については昭和55年5月20・21日開催した大宰府史跡発掘調査指導委員会議において了承されたため計画どおり調査を実施することとした。

Ⅱ 調査経過

1. 概 要

昭和55年度はまず第70次調査（観世音寺僧房跡）に着手するとともに住宅建設に伴う事前調査である第71次調査を実施した。観世音寺僧房についてはすでに述べたように第43次調査として大房の調査を行っているが今回の調査地は、この第43次調査の北側に接した地域で、地形的には約1mほど高くなっている。調査の結果表土直下には中世の石組み溝や礎石が遺存していたが、いずれも断片的にしか残っておらず全体の遺構配置を明らかにすることはできなかった。これらの遺構は1m以上にも及ぶ中世の遺物、主に土器片を多量に含んだ層の上に構築されており、このため調査の主眼である僧房の遺構を検出するにはこの土を除去しなければならず、この排土作業にかなりの労力を費した。さらに8月から9月にかけての長雨のため作業はしばしば中断し、結局最下層における一応の遺構検出を終えたのは9月の末であった。この最下層の遺構面は攪乱がはげしく結局顕著な遺構としては南北にのびる土管列7条を検出したにとどまり、僧房に関する遺構は明らかにすることができなかった。また第71次調査は調査面積が狭少なこともあり顕著な遺構は検出されなかった。9月中旬から第72次調査として政庁東辺部の調査に着手した。この調査は本年度計画には入っていないものであるが、昭和54年度にこの一画に遺構保存のための覆屋が完成したため周辺の整備計画との関係から急きょ今年度に調査を行うことにしたものである。第70次調査終了とともに第73次調査として政庁南門前面の条坊中軸線上の調査に着手した。この地域は大宰府条坊制を復原するうえにおいて重要な地域であり昭和53年度に一部調査を行っている。しかしながらこの調査では顕著な遺構は検出されおらず、さらに現在進行中の観世音寺地区土地区画整理事業の対象になっている関係から、その事前調査の意味を兼ねて調査を実施したものである。調査の結果、前回の調査と同様に条坊制復原の手懸りとなるような遺構は何ら検出されず、この地域における条坊制復原については

再検討の必要性が生じてきた。次に当初の計画では第72次調査として学校院東辺部の調査を夏期に行う予定であったが、さきにも述べたように第70次調査が予想外に長びいたことや、政庁東辺部の調査を新に加えたこともあって調査時期を変更し、第74次調査として正月あけとともに調査に着手した。調査の結果掘立柱建物2棟、井戸7基、溝9条を検出した。

昭和55年度の発掘調査地を地区別に記すと下記のとおりである。

調査回数	調査地区	調査面積(m^2)	調査期間	備 考
70	6 KKZ-B	1,150	80. 4. 6~80.12. 2	観世音寺僧房
71	6 KKZ-B	5	80. 4.10~80. 4.15	観世音寺南辺部
72	6 AYT-C	360	80. 9.16~80.11.05	政庁東辺部
73	6 AYI-D	980	80.12. 3~81. 1.14	条坊地区
74	6 ZGK	(560)	81. 1.12~81. 3.19	学校院東辺部

2. 第67次調査

昭和53年度に第57次調査として観世音寺子院金光寺跡推定地の発掘調査を実施し、礎石建物2棟を検出した。このうちの1棟（S B1430）はすでに昭和28年に九州文化総合研究所によって調査を受けていたが、^(註1)第57次調査によって本堂的性格を与えることができた。またS B1430の北東部に接するようにして別の建物1棟（S B1440）が検出され、この建物の周囲から土器・陶磁器や木製品などの日常什器が集中的に出土したことから、ここに日常生活の場一庫裡一性格を与えられた。遺構の残存状態は良好で、すでに宅地化された南側を除けば北・東・西側へとさらに広がっていた。第67次調査はこのような前回の調査の成果を受け、寺域の画定を含めた観世音寺子院の実態の把握を目的として実施した。

金光寺跡は後背の四王寺山から南へ伸長する谷筋の一つに立地しており、観世音寺の北約600mの位置にある。所在・実態の不明瞭な子院の中にあつて伽藍の配置を解明しうる可能性を有する好資料であり、第57次調査の成果もその期待に沿うものであった。そこで第57次調査区の北側を中心とし、同調査区と東西に伸びる尾根の裾部との間の若干の未調査部分を含め、約1,150m²を調査の対象地とした。地番は太宰府町大字観世音寺字今光寺991-1番地である。

調査は昭和54年12月17日に着手した。北に向かうにしたがつて土砂の堆積が深くなり、翌昭和55年1月末にいたって遺構面の一部を検出することができた。遺構の残存状態は前回ほど良好ではなかったが、十分に規模・配置をうかがいうるものであり、その検出に2・3月の2ヵ月を要した。その後4月上旬から遺構の写真撮影・実測および細部の補足調査を行なった。こうして5月30日には全ての調査を終了し、直ちに埋め戻して原状に復した。

なお、調査にあたって第57次調査と同じく実測の基準線の方位は国土座標系の北から西へ11°偏している。

検出遺構

今回の調査で検出した主な遺構に礎石建物3、建物を囲む雨落・排水溝などの溝17、柵2、井戸1、道路状遺構1、歩廊状遺構1、池状遺構1、石組遺構・土壇・柱穴多数などがある。これらの遺構にはその一部をすでに第57次調査で確認していたものが含まれる。また礎石建物S B1590の検出にともない同調査区の関連部分を再発掘している。

第57次調査では検出遺構を大略三期に区分することができた。今回の検出遺構はその第Ⅱ・Ⅲ期に相当し、建物の建替え・改修あるいは溝の付け替えなどからそれらをやはり大略二期に区分しうる。それらの区分については検出遺構・出土遺物を検討した上で述べることにする。

土層の関係（第2図）

遺跡所在地は四王寺山から派生する谷筋にあたる。そのため東西の尾根からの土砂の流れあ

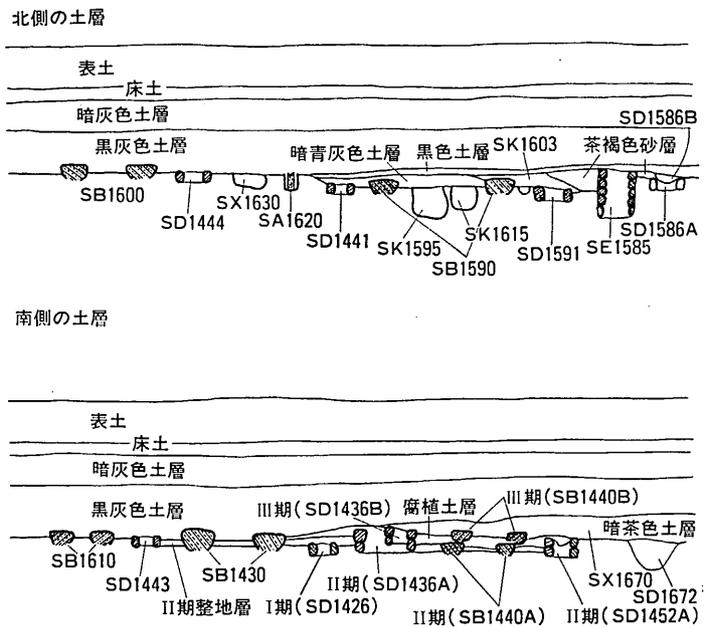
るいは地形上雨水の流路となるなどの自然的条件や水田としての利用などのため、土層の一部に攪乱がみられる。しかしおおよそは第2図に示した模式図のような層序の関係にあり、第57次調査の土層に通じている。

まず調査区の北側では表土・床土・暗灰色土・黒灰色土の順に堆積しており、暗灰色土層までは近世遺物を含んでいた。しかし遺構面を覆う黒灰色土層には近世の遺物が含まれておらず、遺跡の

下限を示している。西半部では礎石建物SB1600とその周囲の溝、池状遺構SX1630、柵SA1620などの遺構が黒灰色土層の直接下層で検出された。東半部では黒灰色土層下を黒色土層が薄く覆い、さらにその下位の暗青灰色土層が礎石建物SB1590およびそれに関連する遺構を覆っている。暗青灰色土層から切り込まれる遺構には土壇SK1603がある。一方、東端付近では黒色土層と暗青灰色土層との間に分厚く茶褐色砂層が堆積しており遺構面を覆っていた。しかし井戸SE1585・溝SD1586Bは茶褐色砂層に切り込んでおり、後出する遺構であることが知られる。

調査区の南側の土層は第57次調査および北側の層位で解釈しうるので、若干の補足にとどめたい。西半部では黒灰色土層直下で礎石建物SB1610が検出された。この建物の東を限る溝SD1443は第II期の整地に切り込んで構築されており、その時期が第II期ないしはそれ以降であることを示していた。東半部では黒灰色土層と遺構を覆う腐植土層との間に暗茶色土層がみられた。礎石建物SB1440の東を限る溝SD1452は第II期末に腐植土層で覆われ(A)、その後側石を積み上げて第III期に再度用いられる(B)が、さらに暗茶色土層で覆われ建物とともに廃絶する。その東側には道路状遺構SX1670などの遺構が存在するが、それらも暗茶色土層に覆われている。

以下、各遺構について説明を加えておく。

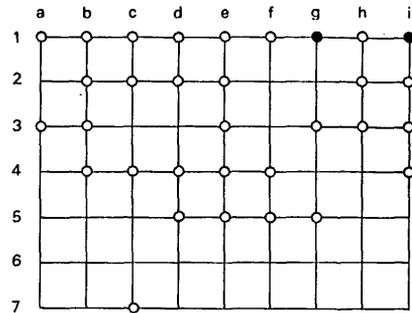


第2図 第67次調査層位模式図

礎石建物

S B1590A・B S B1440の北側、今回の調査区の中央付近で検出した礎石建物で、四周に石組みの雨落排水溝を配している。S B1430・S B1440とはほぼ同じ方位をとり、約 11° 西に偏している。また南側溝S D1438・1439の北側石積みは約100cmの高さに組まれており、その結果S B1440に対して約80cm、S B1430に対して約100～110cmほどの比高をもつ。礎石は1列のg・iの2個を残してすでに除去されており、その掘方・根石も南にいくほど残存状態が

悪くなるが、建物の規模を東西8間、南北6間に推定しうる（第5図）。柱間間隔は残りの良好な北側部分の間隔、あるいは南側側柱列中の7cの掘方・根石の位置などからすれば、東西・南北ともにS B1430同様1.97mの等間に考えられる。身舎部の北側には1列の心から約70cmの間隔でほぼ柱筋を合わせた径20cmほどの掘立柱・柱穴が検出されており、縁を取り付けていたことがうかがえる。側柱列と四周の溝との間隔からすれば、他の三辺にも縁を取りつける余裕はあるが遺構の上では確認できなかった。なお1列では各礎石間に小溝が設けられており、その中のf・gおよびh・iの2カ所には小石が直線に並べられていた。壁体の基礎をなすと思われる。

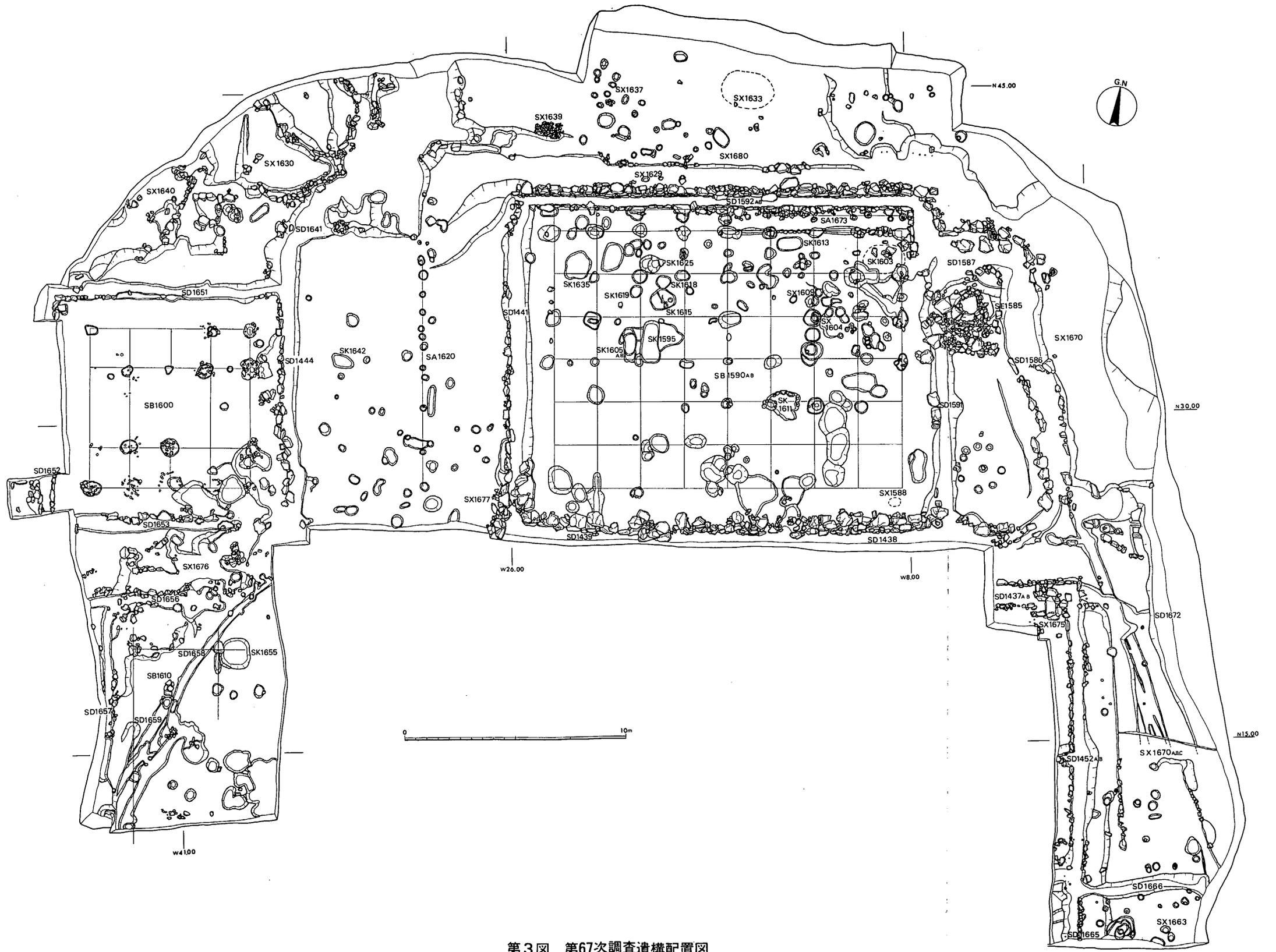


第5図 S B1590礎石配置図

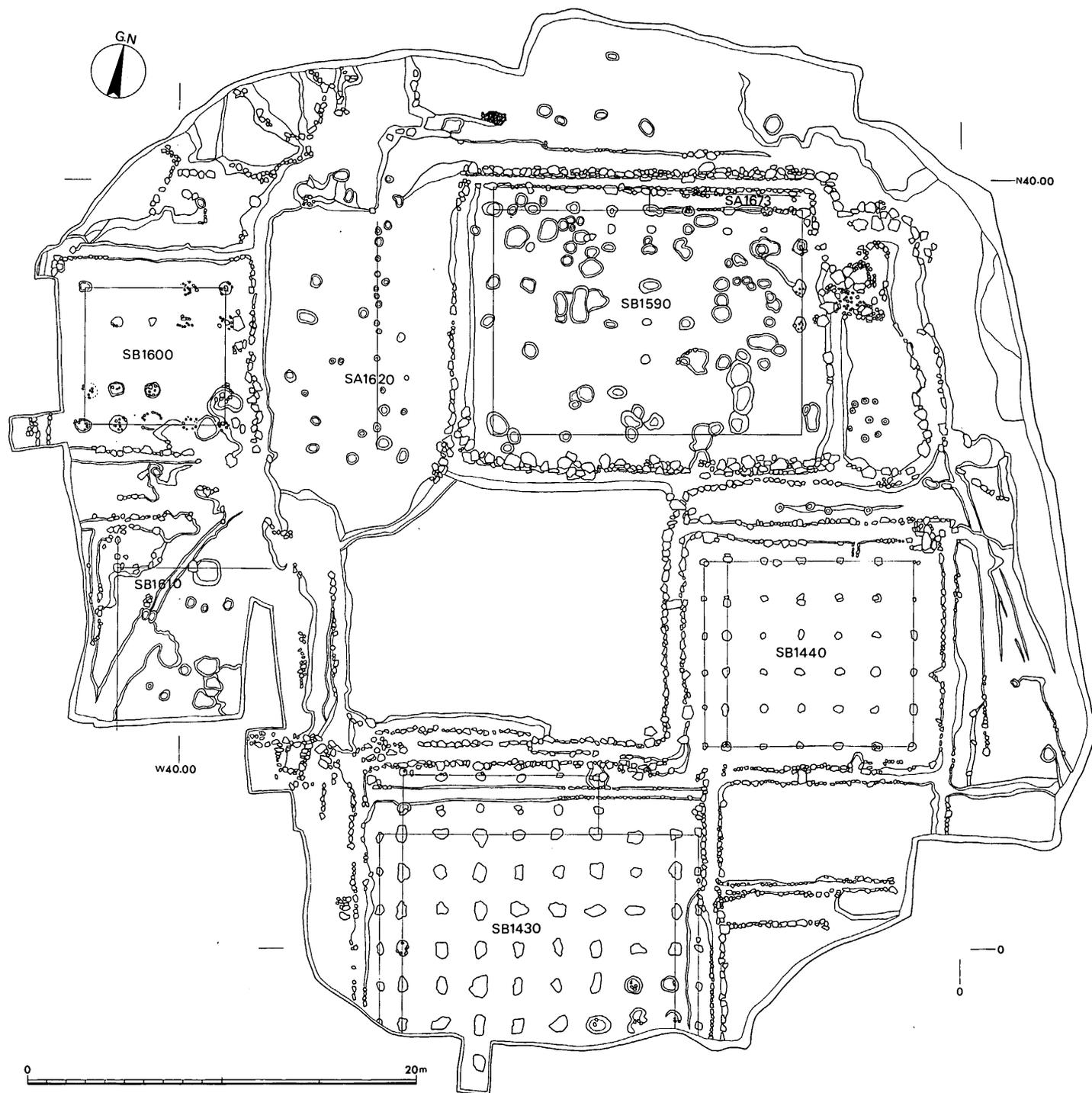
以上のS B1590Aに対してBはAと身舎部の構造を共通させているが、縁および雨落溝の一部に造り替えが認められることから区別した。縁はAでは掘立柱を利用していたが、Bでは礎石をもちいている。しかも東半分のみ礎石を配している。礎石は身舎と柱筋を合わせつつ北側溝S D1592の側石上に置いており、1列とは心々で約120cmの間隔をもつ。縁を取り付けない西半分には柵S A1673が設けられており、目隠しとしている。これらの改修の後に側石を一段かさあげしており、S B1440で観察されたように建物自体もかさあげをした上で造り替えを行なっている可能性が強いが確認できなかった。

縁の造り替えとの時期的関係は明らかでないが、東側溝S D1591が埋め立てられ、新たにS D1586Aがつくられる。すなわち東西溝S D1592はいったん南に折れ、約2mほどで東折し（S D1587）、さらに約3.5mほどで再び南に折れS D1586Aとなる。したがって建物を取り囲む溝に拡大がみられるが、建物とは対応しない。

S B1600 S B1590の西側、側溝の心々で約10mの距離をもって礎石建物1棟を検出した。S B1590に比較して約45cmほど高い位置を占めている。やはり四周に石組みの雨落・排水溝を配している。原位置をとどめる礎石は一個もないが、礎石の掘方・根石の残りは良く、正方形の建物であることを知る。しかし礎石の配置は東西4間に対し南北3間になっている。すな



第3図 第67次調査遺構配置図



第4図 第57・67次調査遺構配置図

わち南北方向の中央1間が両端の2間よりも倍幅の柱間間隔をとる東面する建物と考えられる。柱間寸法については礎石を欠くために明確な数値を出し難いが、東西方向および南北方向の両端はそれぞれ約180cm、南北方向の中央1間は約360cmと考えられる。北西隅の側溝屈折部の石組み内側に面取りされた平石が据えられており、縁が取り付けられていた可能性がある。なお本建物の周囲で大量の瓦が検出されており、瓦葺き建物であったことが知られる。

S B 1610 歩廊状遺構 S X 1676を挟んで S B 1600の南側に位置する。S B 1610は西側側柱列の柱筋を S B 1600の西から二列目の柱列と合わせており、溝の位置などを考慮すると、S B 1600にくらべて全体に東寄りに建てられている。遺構の残存状態は検出された5棟の建物の中ではもっとも悪く、その配置・規模などについては不明な点が多い。

確実な礎石は S D 1656の約2 m南に2個残っている。このうち西側の礎石と S D 1657との心々距離は110cmほどで他の建物に比較すればやや幅狭であるが、西側側柱礎石列の一つと考えられる。この礎石と土壇 S K 1655の一部を覆うようにして置かれた東の礎石とは心々で380～390cmをはかり、S B 1440の2間分の柱間寸法に近い。一方他例からすれば縁東礎石と考えられる石が2個 S D 1656の南側石上に置かれている。相互に約190cmの距離をもち、かつまた先の礎石列とも約190cmの位置にある。この建物の東限は S D 1443にあるので、これからの柱間寸法を約190cmの等間と考えれば、東西5間・南北4間以上の身舎部が推定され、北側に幅広の縁が取り付けられる。また北西隅礎石から北へ約150cmの位置にやはり縁東礎石の可能性をもつ石が置かれており、側石上のそれは拡張を示すのかも知れない。

ところで西側側柱列と推定した線よりも約150cm東寄りに礎石の根石と考えうる遺構が3カ所検出されている。それらは北側側柱列から約190・190・380cmの間隔を有しており、その企画性からみて礎石位置を示すのであろう。とすれば北側側柱列の柱間を西から150・230・230・230・150cmの間隔で5間にとれば S D 1443との関係でおさまりもよい。南北についてはやはり約190cm等間の4間以上となる。

このように二通りの配置・規模を推定しうるが、その根拠となる礎石・根石は同一整地面に認められ、それらが建て替えを意味するの否かについては判断できなかった。なお遺構面の北側は S B 1600の瓦で覆われており、それに先立って廃絶したことがうかがわれる。

溝

S D 1438・1439・1441・1591・1592 A いずれも連続する石組溝で、S B 1590の四周をめぐり、S D 1436あるいは S D 1442に連らなって南へ水を流している。S D 1438・1439・1441については第57次調査時に調査区の北端で検出されており、金光寺跡推定地の北への拡がりの可能性を示すものとして今回の調査の契機の一つとなった。S D 1441は長さ約15mで、幅は東側部分の側石のほとんどが除去されており明確ではないが約60cmほどであったと思われる。その南端近くに特に石組みを堅牢にした個所があり、他例からして渡り石(S X 1677)を設けてい

たと思われる。S B 1590の北を限るS D 1592Aはきわめて良好に残存していた。長さ約18mで幅40cm前後をはかり、溝の両側の護岸の石組みは25～30cmほどの深さに一段でなされている。東側を南に流れるS D 1591はすでに側石の多くが除去されており溝幅などを明確にしえず、さらにその北半は後出する井戸S E 1585とその付属施設によって覆われている。ところでS B 1590の東側の側柱 i 列とS D 1591との心々距離は西側の側柱 a 列とS D 1441の心々距離とほぼ一致している。ところがS D 1591の北への延長とS D 1592Aの南折部とは明らかに食い違っている。その接合部分からは箸状木製品などの木製品がかなり出土しており、この食い違いの意味、両溝の連続方法などに興味をもたれるが、残念ながらS E 1585が覆いさらにS D 1587によって攪乱されているために明らかにできなかった。

S D 1443・1656・1657 S B 1610の雨落・排水溝。北を限るS D 1656はその両側に護岸の側石がみられる。溝幅約30cm。北側のそれは歩廊状遺構S X 1676の基壇化粧を兼ねており、南側にくらべて高くつくられている。完存しないが基底から約70cmほどの高さになると考えられる。その西端は調査区外に続く。西を限るS D 1657はやはり幅約30cmをはかり、両側に側石が認められる。両溝ともに残存状態は良くない。S D 1443は第57次調査で検出されており、幅約50cmで建物側には側石がみられるが、東側については不明である。

S D 1444・1651・1652・1653 S B 1600の四周を画する雨落・排水溝で、いずれも連続すると思われる。南北方向に走るS D 1444は北側調査区外から流れてくるS D 1641を受け、S D 1443に続く。溝の西側には側石を置き護岸としているが、東側のそれは素掘りのままかも知れない。溝幅70cm前後をはかる。S D 1651は幅30～40cmほどの東西溝で、南側の一部に側石がみられたが、北側では確認できなかった。S D 1652はその一部を拡張区で検出した。S B 1600の西を限る溝で、残存状態の良い南側の拡張区でみると溝幅は約60cmをはかり、溝の西側で3段約60cm、東側で2段約40cmの護岸用の石積みを行なっている。S D 1652とS D 1653の交差部については確認していない。S D 1653は幅30～40cmをはかる東西溝で、その東側に攪乱がみられるが、S D 1444へ続くものである。溝の北側には側石を置いていたが、南側では確認できなかった。こうしてみるとS B 1600の周溝のうち東・南・北の三方については建物の側だけに側石を置き護岸としていた可能性がある。

S D 1452A・B S B 1440の東側雨落・排水溝で、第57次調査でその一部を確認していた。東側は若干残りが悪いが、両側ともに側石が認められる。溝幅約50cm。S D 1437からの流れを受け、その南端でS D 1432からの流れと合流し、S D 1665へと連続していく。A・Bとも同規模・同位置であるが、Ⅲ期の整地にあわせてBでは側石をかさあげしている。

S D 1586A・1587 S D 1586Aは、S B 1590の東を限る溝S D 1591を約3.5～5 m 東に造り替えた溝で、やはりS D 1438に連続する。調査区内の建物・溝は約11°西に偏する例が多いが、S D 1586Aはさらに西へ16°偏しており、道路状遺構S X 1670Cと方向をほぼ一致している。

側石には比較的大きな石を用いているが、多くはすでに抜かれていた。溝幅は約100cmほどで、南に向かうにしたがって細くなり50cm以下になる。S D1592とはその東端が南折して約2mのところまで東西溝S D1587を介して連続する。S D1587とS D1586Aとの接続部北東隅で径40cmを越える立木を検出したが、植樹と考えられる。S D1587はその南岸を検出できず、したがって溝幅などを知ることはできなかった。

S D1586B S B1586Aがいったん茶褐色砂によって埋没した後に再び同じ位置に溝がつくられている。一部に側石の可能性をもつ石を検出したが、素掘りと思われる。Aとは異なりS D1438には連続せず、そのまま南東方向に通じていた。その末端の確認はできなかったが、道路状遺構S X1670Cの西側に沿う竹筒を通した溝状遺構と方向をほぼ等しくしており、関連を有するかも知れない。

S D1592B 規模その他についてはAと一致するが側石上に石積みを行なっている。南側では側石上の西半分にはS B1590の縁東礎石を置き、その間に一段分石を積んでいる。礎石を置かれない東半分にも一段分の石積みを行なっている。つまり南側では側石を二段積みに造り替えている。これに対し北側側石には60×80cmにおよぶような大石を混じえつつ大略三～四段の石積みを行ない、基底からすれば四段約130cmの高さに造り替え石垣状にしている。

S D1641 池状遺構S X1630の東側を南西方向に流下し、S D1444に連続する溝である。S D1444・1651と合流する付近の西側に側石とみられる石列があったが、大半は素掘りのままであった。整地層を切り込んで流れており、新しい時期の溝である。

柵

S A1620 S B1590の西側溝S D1441とS B1600の東側溝S D1444との間に幅約10mの空間がある。この空間地の中央やや東寄りでは南北方向に並んだ柱列が検出された。約170～180cmの間隔をとっており、その位置から両建物間の遮蔽を目的としたことがうかがえる。

道路状遺構

S X1670A・B・C S B1440の東側溝S D1452に沿って南北方向の道路状遺構を検出した。S D1452の東側肩部から約1.4～1.5m東寄りに石列S X1668が南北方向に並んでいるが、これがS X1670Aの西側路肩の化粧である。石列は一部を残すのみであるが、石を欠く部分にも段落ちが認められる。東側の路肩は上部を覆うS X1670Cによって確認できず、したがって路幅も不明であるが、4m以上におよぶ。その方向性からみて直交するS B1440北側の歩廊状遺構S X1455に連続するものであろう。

Aを覆って方向を異にする道がつくられている。すなわちS D1586の東側では調査区の東端にせまる尾根の裾部を削って平坦地を設けており、道と思われる。溝・道ともにAよりも約16°西に偏している。この方向の道は二期に細分される。まずS D1672を東側溝とするBがつくられ、さらにそれを埋め戻してCがつくられる。Cには調査区の南端近くで西側路肩に施した化

粧の小石列が認められる。その外側には溝状の掘り込み S X 1671 がみられるが、掘り込み中から連続して置かれた竹筒が検出されており、溝というよりも竹筒を埋めるための掘方であろう。

歩廊状遺構

S X 1676 S B 1600 の南側溝 S D 1653 と S B 1610 の北側溝 S D 1656 の間に幅約 3 m、西側調査区外へと延びる長さ 9.5 m 以上の空間がある。その東側部分は大きく攪乱を受けていたが、柱穴などの遺構は検出できなかった。S D 1656 の北側護岸は石垣状をなしており、その内側には石が投げ込まれていたが、それらの一部には列をなす部分も認められた。歩廊構築時に補強としたものであろう。

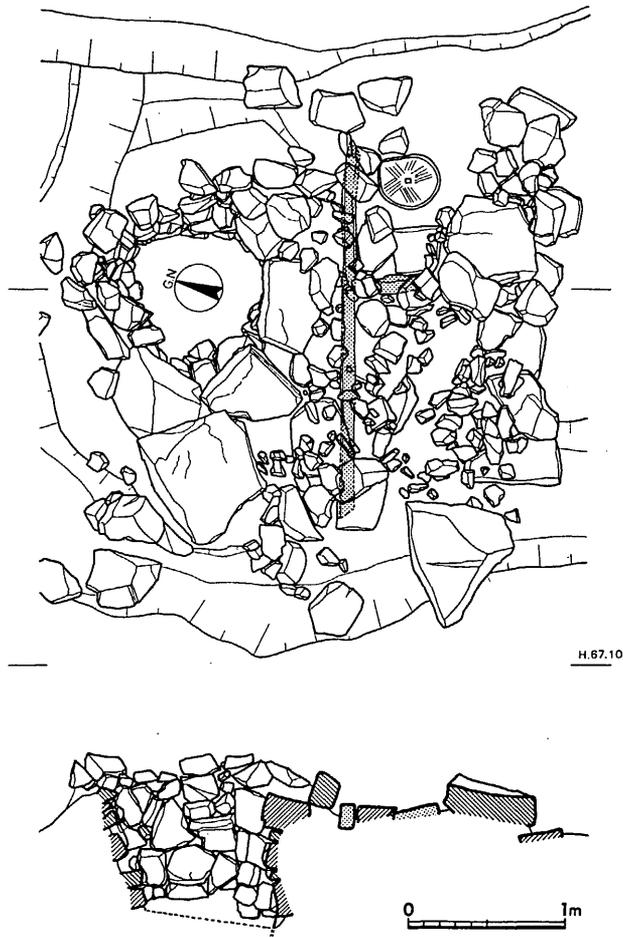
池状遺構

S X 1630 S B 1600 の北側で検出した。S D 1651 の北約 4 m に南に向かってゆるやかな円弧をなし面を北に向けた石列があり、またその北東に径約 4 m ほどの石で護岸をした半円形の隆起部が所在した。その間は黒灰色を呈する泥質土で埋まり木製品・木材などの木質物が混在していた。隆起部の西側にも幅約 60 cm で西に面を向ける石列がみられた。これらは石列の面の方向から考えて池とみられ、半円形隆起部は島であろう。調査区外へとさらに拡がっている。

井戸

S E 1585 S B 1590 の東で検出された。石組みの井戸で、S B 1590 の東側溝 S D 1591 を覆う茶褐色砂層に掘り込んでつくられていた。また S D 1591 を付け替えた S D 1586 A も茶褐色砂によって埋没しておりこれよりも新しい。したがってこの区画ではもっとも新しい遺構とすることができる。

井戸の上端径は約 90 cm で、人頭大の角石を乱雑に積んでおり



第 6 図 井戸 S E 1585 実測図

上端から約75cmの深さまで石積みを認めうる。それより下部には薄い木質が認められ、板枠設置の可能性があったが、崩壊の恐れが生じたため掘方とともに確認にはいたらなかった。現在でも豊富な湧水がみられる。

井戸の周囲には石積みされた形跡があり、ことに南側には長さ約3m、幅1.5mで石が敷かれていた。敷石の北端近くには東西方向に長さ245cm、幅9cm、厚さ17cmの角材が水平に置かれており、その両端は斜めに切られていた。何らかの施設が所在していたのかも知れない。敷石下には多量の自然石が投げ込まれ、井戸の裏込めをなしていた。

渡り石

S X 1675 S B 1440の北側を走る溝 S D 1437の東端近くで建物と歩廊状遺構 S X 1455とを結ぶ渡り石の施設が検出された。周囲を溝で囲まれた S B 1440には東側を除く三方に渡り石（S X 1453・1454・1467）が設置されており、ことに S D 1437にはすでにその西端付近で S X 1467が検出されている。今回の S X 1675の検出で北側溝には両端の2カ所に渡り石が設けられていたことになる。さて S X 1675は S D 1437の北側側石の前面に幅157cm、奥行75cm、高さ25cmほどの張り出し部を石積みにし、さらにそれに対応する南側側石は東端から約150cmほどを約50cm内側に後退させ、その上に上面の長さ94cm、幅41cm、厚さ約20cmの平石を渡している。後補の可能性をうかがわせる。

土坑

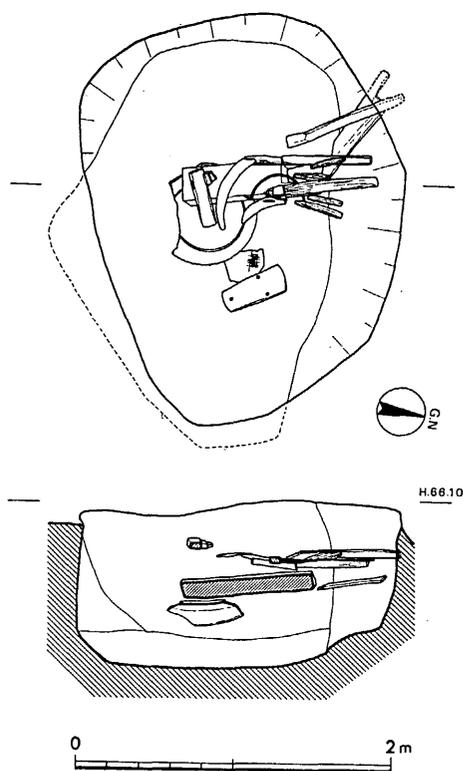
S K 1595 S B 1590内の3c・3d・4c・4dに囲まれた部分で隅丸長方形プランを呈する土坑を暗青灰色土層の下位で検出した。断面計測部で上端の長さ197cm、幅75cm、深さ55cmをはかる。坑内からはその中ほどから底面にかけて木簡15点が検出され、皇宋通宝・熙寧元宝・元豊通宝・元祐通宝など265枚の宋銭および元銭の至大通宝1枚を共伴した。

S K 1603 S B 1590の北東隅付近、ことに側柱礎石1列の礎石h・iおよびその間の一列に並べられた小石列の南側一帯は約2～2.5mの四方にわたり不定形な落ち込みとなっていた。東西溝 S D 1592はその東端で南折し、おそらくさらに東折して S D 1592に連続する。その南折部西側側石は1列の並びよりも一石だけ南に延びるが、さらに約60cmほど石積みを続けている。しかし側石の面は1列に沿って西折し、礎石h・i間の小石列は面を S K 1603に向けている。そこにこの落ち込みが意図的なものである可能性をうかがいうる。 S D 1592と S K 1603はこの石積みによって一応区画されるが、その南では連続している。したがって S K 1603には S D 1592から水が流入しうる状態にあり、それは S B 1590の東側で S D 1591と S D 1592の南折部とが筋違いになっていることと関連するかも知れない。 S K 1603の内部には多数の人頭大の石がみられたが、それらには配列されたような状況はうかがえなかった。これらの石の間には土師器・瓦片などとともに箸状木製品を主とする木製品が認められた。これらの遺物の包含土(埋土)は一部周辺の遺構を覆っており、その埋没は S B 1590の廃絶ないしはその後のことであろう。

SK1605 SK1595の西に接するように位置する。やはり隅丸長方形プランを呈し、南北方向に長軸をとる。断面計測部で上端の長さ152cm、幅53cm、深さ50cmをはかる。南側では下端を若干掘り込んでいる。堀内からは皇宋通宝・元豊通宝などの宋銭117枚が検出された。

SK1613 SB1590の側柱1列f・gの間には小石が一線に並べられていた。SK1613はそれに沿って掘り込まれた東西方向の隅丸長方形土塚で、上端の長さ115cm、幅62cmをはかる。底面は全体に西に向かって傾斜しており、東端の深さ39cmに対して、西端では55cmをはかる。SB1590基壇中に掘り込まれた土塚の中で西半部のそれには銭貨を包含するものが多かった。SK1613からは東半部の土塚には珍らしく熙寧元宝6枚をはじめ19枚の宋銭を検出している。

SK1615 SK1595の北側に接するように位置する。やはり暗青灰色土層の下位から掘り込まれている。五角形を思わせる不整形のプランを呈し、計測部で上端の長さ128cm、幅100cm、深さ55cmを測る。南東側を中心に側壁を掘り込んでおり、全体に袋状の土塚となっている。堀の上端から約10cmの深さのところまで斧・鎌・鉞鎌各1点をそれぞれ着柄の状態を検出した(第7図)。それらは並列してほぼ水平に置かれていた。鉞鎌付近からは錐の柄4点を検出したが、それらの身は鉞鎌の上にまとめて置かれており錆着していた。これらの鉄製農具とは別に木製鎌やそれとセットをなすと思われる木製矢羽などの木製品、あるいは銅製把手など多数の遺物が出土した。これらを除去すると堀の中ほどの深さに長さ41cm、幅10cm、厚さ6cmほどの加工した木材1点が置かれ、その下部付近から青磁盤・青磁碗・下駄・編物などを検出した。この付近から底部にかけて皇宋通宝・元豊通宝などの宋銭の散乱がみられ、合計113枚を採取した。そのほか木簡1点が出土している。



第7図 土塚1615実測図

このようなSK1615からの出土遺物を見るとたとえば鎌・矢羽のセットは上棟式にともなう張弓を思わせるものがあるなど、SK1615が単なる土塚ではなくSB1590の建築にともなう何らかの儀式に使用した用具を集納した遺構である可能性がみられる。

SK1618 SK1615の北に接して位置し、後出する。径30~35cmほどの角張った円形ピットで、深さ約15cmをはかる。堀中から23枚の宋銭を検出した。

S K 1619 S K 1615の西に位置する径55～60cm、深さ23cmほどの底の浅い円形土塚で、塚中から56枚の宋銭が検出された。

S K 1625 S K 1618の北側に接するように位置する径80～90cm、深さ30cmほどの不整形土塚で、一部二段になっていた。塚内からは箸状木製品・木片などが出土し、また天聖元宝・元豊通宝・元祐通宝など108枚の宋銭および明銭の洪武通宝1枚を検出した。その直上で五輪塔の一部を検出したが、それとの関連は明らかでない。

S K 1635 S B 1590の北西隅近くに位置する土塚で隅丸正方形プランを呈していた。上端で南北長98cm×東西長101cm、深さ34cmをはかる。塚中からは土師器・陶磁器に混在して皇宋通宝・元豊通宝など77枚の宋銭および元銭の至大通宝1枚が出土した。

S K 1655 S B 1610内に掘り込まれた土塚で、その礎石が上端をかするように位置していることから、S B 1610に先行する可能性がある。隅丸正方形のプランを呈し、南北長144cm、東西長138cmで深さ約90cmをはかる。湧水量が多く当初井戸を予測していたが、調査の結果では井戸とする資料は得られなかった。塚中からは土師器・宋銭5枚・箸状木製品などを検出した。

石組み遺構

S X 1639 S D 1592の北側段上で検出された。東西長130cm、南北幅80cmほどの範囲に拳大の石が胴張りのある長方形プランを呈して一面に敷かれていた。敷石の上面・下面ともに何らの遺構も検出されず、敷石の性格を明らかにすることはできなかった。

S X 1640 調査区の北西隅で検出した基壇状の遺構で、一部は調査区外に延びる。検出部の長辺はN-16°-Eに方位をとり、長さ330cmをはかる。その北東端で直角に折れ、北西105cmまで確認した。石組みの内部には何らの遺構も存在しなかった。池状遺構S X 1630とは若干重複するが、それに後出すると考えられる。

S X 1680 S B 1590の北側溝S D 1592の北側側石には後に基底から約130cmの高さになるよう二～三段の石が上積みされ石垣状をなしていた。その背後には整地が行なわれており、柱穴・柱根などの遺構がみられた。石垣と約130cmの間隔をもって東西方向につくられた石列S X 1680もその一つである。すでに石の多くは除去されているが、面を南に向け、その上端を石垣の上端に一致させている。後背のS X 1633では遺構としてのまとまりはなかったが多数の土師器が焼土・炭化物などに混在して出土しており、S X 1637付近には柱根を残す例を含めて柱穴が多くみられた。したがってS X 1680よりも北側に何らかのまとまりをもつ遺構の存在が推測される。

その他の遺構

S X 1604 S B 1590の中央よりもやや東寄りで検出された径37～43cm、深さ23cmほどの不整形の小ピットである。このような小ピットは周囲にいくつもみられたが、本ピットには小皿・杯など良好な土師器のセットがみられた。

S X 1609 S X 1604の約1mほど北に位置する円形ピットで、径約35cm、深さ約30cmをは

かる。ピット中には多数の小皿を主とする完形土師器が積み重さねるように置かれていた。

S X 1663 調査区の南東隅で検出された径27~43cm、深さ22cmほどの長円形小ピットである。ピット中には杯・小皿などの土師器が充満しており、S X 1604・1609とともに注目される。

出土遺物

今回の調査で出土した主な遺物は、土器・陶磁器・瓦類・木製品・銭貨・金属製品などである。これらは調査区全域から出土したが、遺構に伴うものは少い。しかし、14世紀から16世紀前半代にかけての豊富な資料を得ることができた。

土師器の分類

皿をa・b・c・dの4つに、杯をa・b・cに分類して、杯・皿を記述するが、その分類はまず法量を主体として行い、次にa・b・c・dそれぞれが何時発生し、どのような変化をたどるか、そしてそれら相互のセット関係を把握することを目的としている。

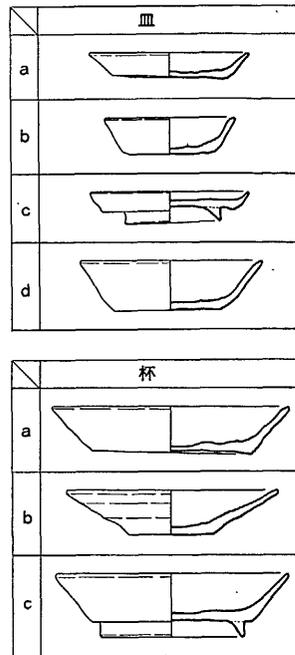
皿

aは器高が低く、底径が大きいものを指し、杯aから10世紀代に分岐し、口径は時代を追って変化するが、8cm前後を軸とする。bは器高が高く口径に比して底径の小さなもので、14世紀前後から普遍的に出現する器形である。cは皿に高台を貼付したもので、高台を除くとaの変化と対応する。dは皿とも杯とも言い難い形のもので、13世紀前半頃突然出現するが、各期を通じ出土する量は極めて少い。

杯

aは奈良時代以降連綿と続く杯形土師器の基本的形態であり、皿aと同様に各期に応じて法量は変化するが、口径13cmを軸とする。bは皿bと同様に口径に比して底径の小さなものをさす。14世紀中頃にaから分岐して出現し、時代を下る毎に口径に比して底径の割合を減じていく。bはこの他に14世紀後半から15世紀にかけて存する型のものがある。それはやはりaに対して底径が小さなものであるが器高が高い。口径が13・14・15cmのタイプがある。本来は新たに記号を付すべきであるが、その変遷が明らかでないので、今回はbの範疇に入れて報告した。cはaのタイプに高台を付したものである。これも皿cと同様に出土量は少く、日常頻繁に使用されたとは考え難いタイプのものである。

S B 1590礎石掘方出土土器（第9・10図、別表）



第8図 杯・皿分類図

土師器

皿 a (2) 口径8.3cm、底径5.3cm、器高1.5cmである。
内底はナデ。板状圧痕を有する。2 f の掘方から出土した。

皿 b (1) 口径6.7cm、底径4.0cm、器高1.8cmである。
内底はナデ。板状圧痕を有する。2 h の掘方から出土した。

瓦質土器

鉢 (3・4) 体部が大きく内湾する鉢である。3は体部上位に2条の凸帯を貼付し、その間に珠文と、菊花文をスタンプする。スタンプ部分の一ヶ所に、径0.5cmの穿孔があり、また葉状の透しがみられる。胎土には砂粒を比較的多く含み、硬質のものである。内外面赤褐色を呈する。掘方1 a から出土。4は、体部上位に2条の凸帯を貼付し、その間に雷文をスタンプする。凸帯のすぐ下に葉状の透しの一部がある。硬質。内外面黒色を呈する。外面はミガキがある。掘方2 f から出土した。

S D 1452出土土器・陶磁器 (第11図、図版21、別表)

土師器

皿 b (1・2) 口径6.6cm~7.3cm、底径4.2cm~4.7cm、器高1.6cm~1.9cmである。
1は器高が低いものである。

杯 b (3~6) 口径12.1cm~12.9cm、底径7.0cm~7.7cm、器高2.3cm~2.8cmである。
4は底径が小さいがやや器高が低いことからbにしたが、a類に入るかもしれない。

瓦質土器

鉢 (10) 体部上位が内湾し、復原口径47cm、最大径59.6cm、器高24cmを測る大形の鉢である。胎土は比較的多くの砂粒を含み、焼成は硬質である。内面は刷毛目調整、外面はヘラミガキ調整している。口縁部は茶褐色を呈し、燻しはおよんでいない。一ヶ所に脚の痕跡を残す。

青磁

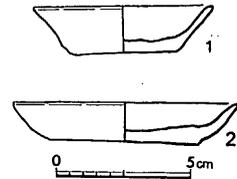
椀 (7) 口縁部を「く」の字状に外反させるものである。胎土は灰白色を呈し、やや灰色気味の淡緑色の釉をうすく施す。内外面に大きな貫入を伴う。

褐釉陶器

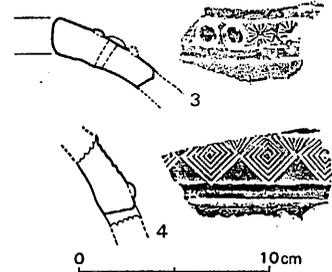
甕 (9) 上げ底風の底部をもつ甕の底部である。器肉は薄い。暗赤褐色の胎土で、ほとんど砂粒を含まない、焼成堅緻なものである。外面は暗褐色の薄い釉がかけられている。内面および底部は露胎となり、底部にはヘラナデしたと考えられる調整痕が認められる。

安南陶器

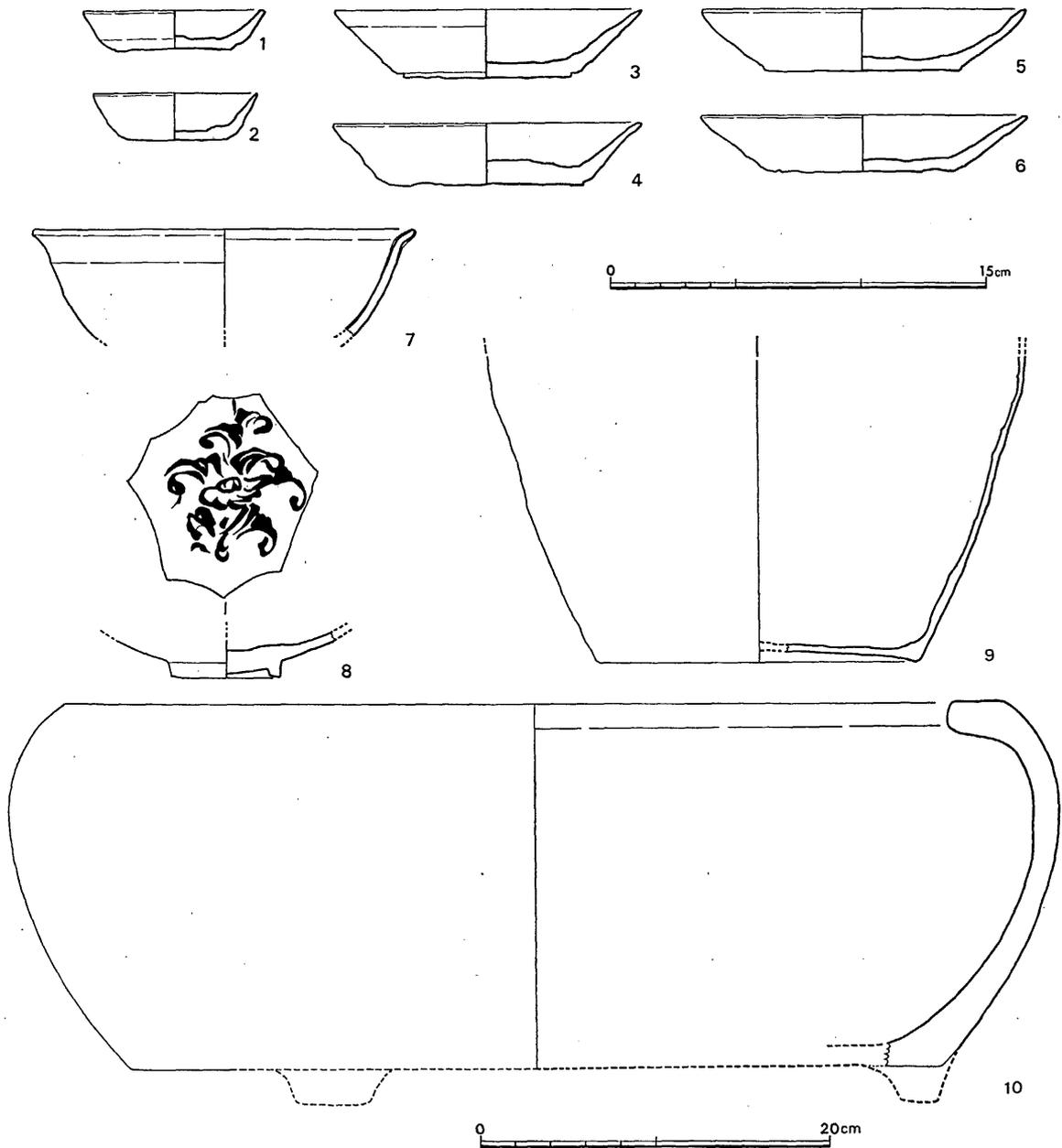
椀 (8) 胎土はやや粒子のあらいもので、白土を化粧がけしている。体部下半および底部



第9図 SB1590礎石掘方出土土器実測図



第10図 SB1590礎石掘方出土土器実測図(2)



第11図 S D1452出土土器・陶磁器実測図

は露胎となっているが化粧土がまばらに付着している。透明釉はやや黄味をおび、内面に細かい貫入がみられる。内底に鉄絵の菊花文をあしらった椀形の底部である。鉄絵は暗灰色を呈し、部分的に褐色を呈する。

S D1586出土土器・陶磁器（第12図、図版21、別表）

土師器

皿 a (3) 口径7.9cm、底径6.8cm、器高1.1cmである。

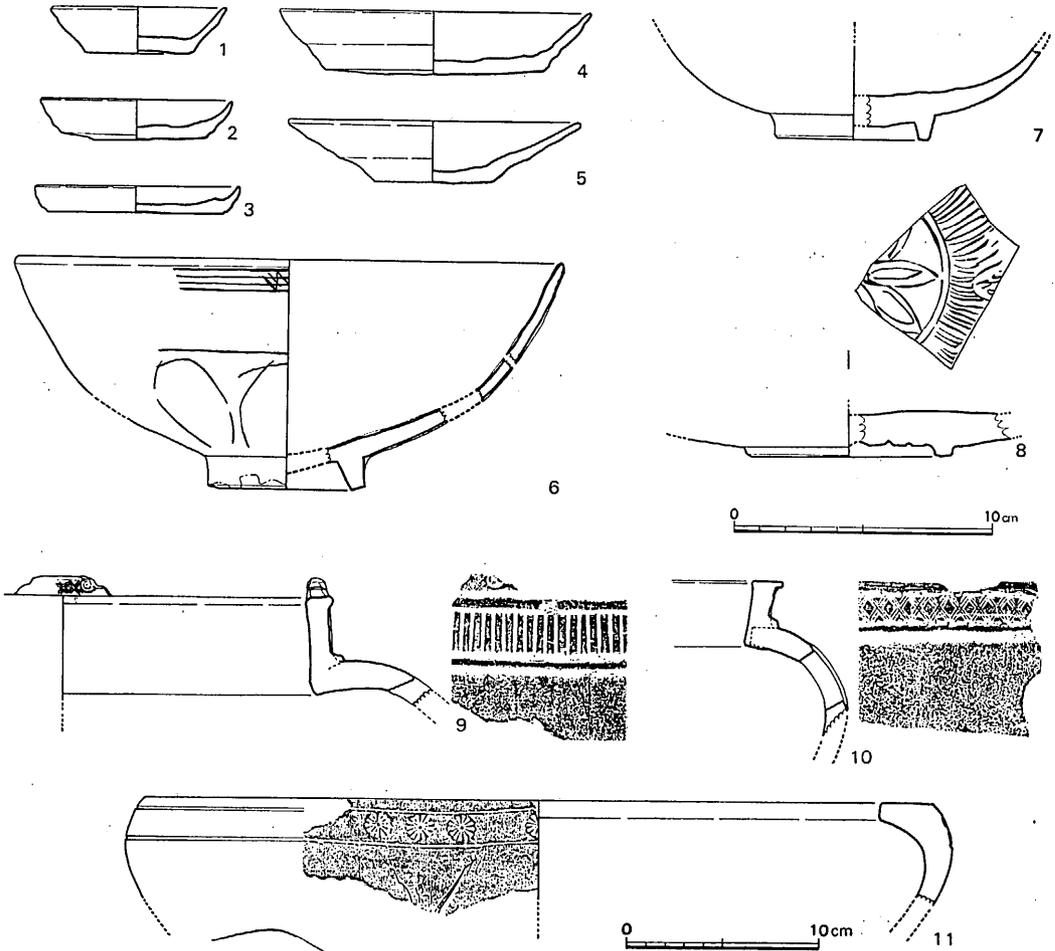
皿 b (1・2) 口径6.8cm~7.5cm、底径4.4cm~5.8cm、器高1.6cm~1.8cmである。

杯 a (4) 口径12.0cm、底径8.4cm、器高2.5cmである。

杯 b (5) 口径11.3cm、底径4.5cm、器高2.4cmである。

瓦質土器

鉢 (9~11) 9・10は口縁部を直立させる。9は復原口径28cmのものである。胎土に細砂粒を含み、硬質のもので、外面は白灰色内面は淡茶色を呈する。外面体部上位に蓮子状文をスタンプし、口縁部と体部との接合部に凸帯を貼付ける。また口縁上部に突起を貼付しているが、その外面には直違文がある。体部に透しの一部がみられる。10は口縁部外面に二直違文をスタ



第12図 S D1586出土土器・陶磁器実測図

ンプし、体部と口縁部の接合部に凸帯を貼付けする。外面は黒色、内面は淡茶色を呈する。内面には炭化物が付着している。9と同様に、体部に透しがある。11は体部上位が内弯する。復原口径35.0cm、最大径42.6cmの大形の鉢である。外面体部上位に2条の沈線とその間に13弁菊花文をスタンプする。

青磁

椀(6・7) 6は大形の椀で、外面の口縁部には4条の沈線がめぐる。また体部下半に1条の沈線と浅いヘラ描きによる蓮弁文がある。暗青灰色土層出土のものと同様に、また同一個体片と思われるものが黒灰色土層・暗灰色土層からも出土し、それを合わせて図示した。胎土は淡灰色を呈し、淡緑色の釉が薄目にかかっている。高台壘付部および内面は露胎となり、高台は断面四角形で、内面中心部は高くなっている。7は直立する高台をもち、胎土は灰白色の粗いもので、黄灰色をおびた淡緑色の釉をうす目に施す。高台壘付および外底面は露胎である。

高麗青磁

椀(8) 低い高台をもつもので、形状については不明である。胎土は灰白色を呈し、内面には花文とその周囲に黒・白象嵌で放射状の文様を描いている。灰色気味の淡青色の釉をうすく施す。高台見込みにはヘラの木口で突いた様な痕跡がある。壘付部と外底の一部に焼成時の砂粒が付着している。

SD1431出土陶磁器(第13図)

青白磁

杯(17) 口縁部を露胎とするいわゆる口禿のものである。胎土は白色で、若干空色を帯びた白色の釉がかけられている。外面中位には削り出しの隆帯を巡らしている。内面には雷文帯と蓮弁の印花文がある。

SD1439出土陶磁器(第13図、図版44・45)

白磁

椀(1・2) 1は平底のもので、高台を削り出した後、底部周囲をヨコナデしている。胎土は乳白色を呈し、釉はやや黄味を帯びた白色で、高台部の外面には釉が垂下している。2の胎土は灰色で黒い粒子が入る。釉はやや灰色気味の白色を呈する。

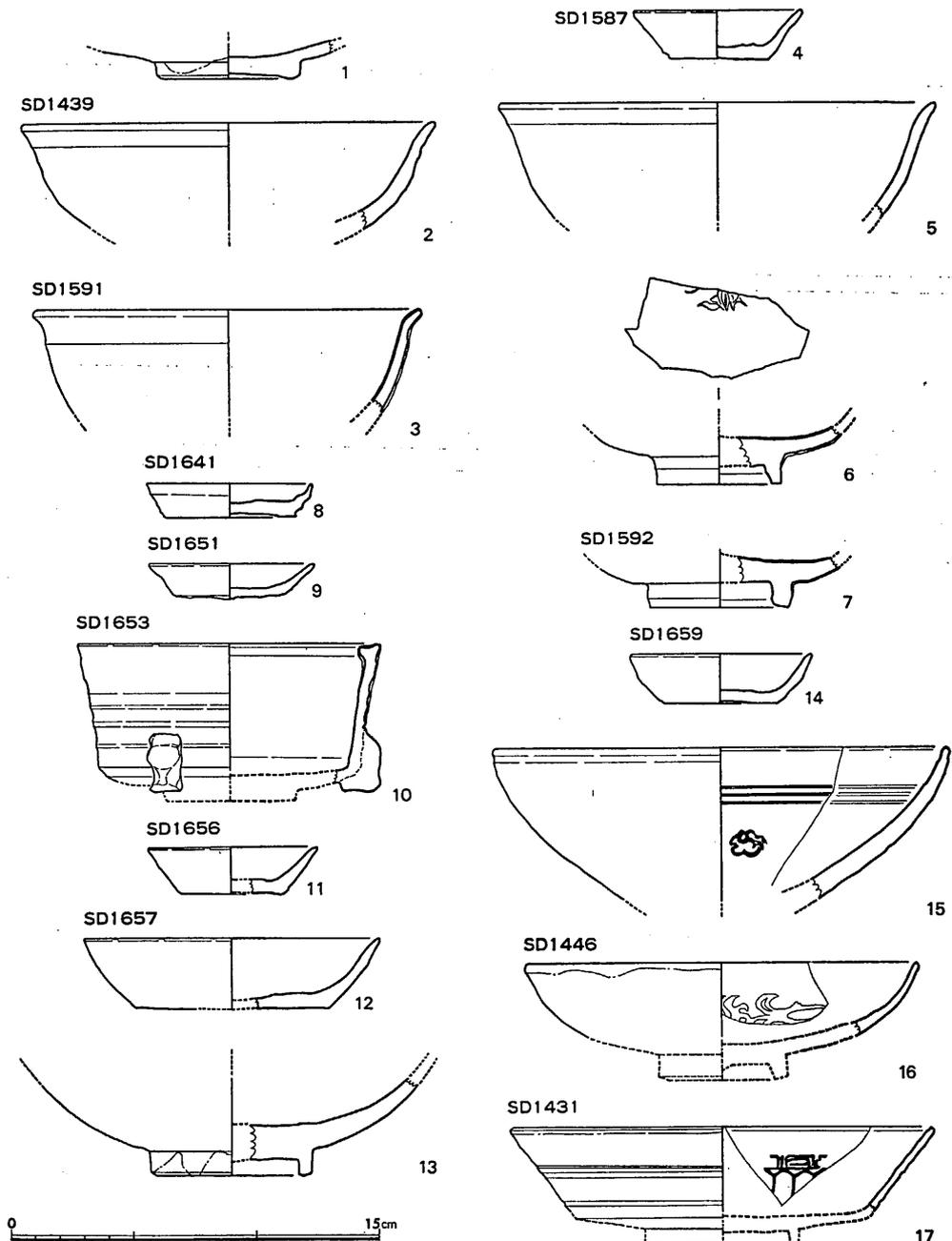
SD1446出土陶磁器(第13図)

白磁

皿(16) 体部上半の一部を残す小片である。皿形品に多くみられる釉ダマリが口縁部にあり、この部分は丸味を有する。精良な造りで器肉は薄く、印花は明瞭である。いわゆる「枢府磁」と呼ばれるものである。

SD1587出土土器陶磁器(第13・14図、図版22)

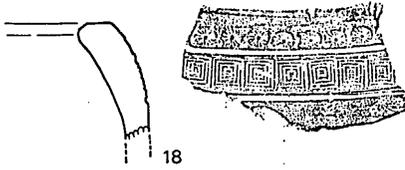
土師器



第13図 S D1431・1439・1446・1587・1591・1592・1641・1651・1653・1656・1657・1659出土土器・陶磁器実測図(1)

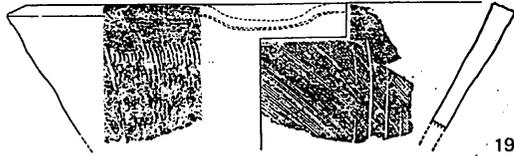
皿 b (4) 石組中から出土したもので、口径6.9cm、器高2.1cm、底径4.3cmを測る。
瓦質土器

SD1587



18

SD1592



19

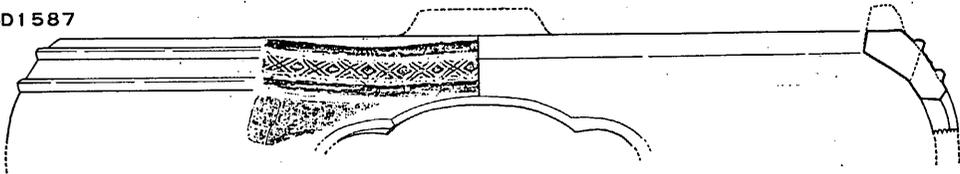
SD1653



20

0 10cm

SD1587



21

第14図 S D1431・1439・1446・1587・1591・1592・1641・1651・1653・1656・1657・1659出土土器・陶磁器実測図(2)

鉢(18・21) 18は体部が若干内弯する大形の鉢である。体部上位に2条の沈線があり、その上に16弁菊花文、間に三升文のスタンプがある。内外面白灰色を呈する。21は体部を内弯させる大形の鉢である。体部の上位に2条の凸帯を貼付し、その間に二直違文をスタンプする。凸帯の下に葉状透しがあり、口縁部上端に突起を貼付した痕跡がある。外面は灰黒色、内面は茶褐色で、内面には炭化物の付着が著しい。細砂粒を含む硬質のものである。

青磁

椀(5・6) 5は口縁部をわずかに外反させ、端部を丸くするもので、釉はうすめに施し、やや灰色味を帯びた淡緑色を呈する。胎土は白灰色を呈し、やや粗いものである。6はやや空色気味の淡緑色を呈す釉がかかり、高台部および見込みは露胎となる。見込みに草花文のスタンプを有する。

S D1591出土陶磁器(第13図)

青磁

椀(3) 口縁部を外反させ、端部は丸味をもち、釉はうすく、灰色味の強い濁った緑色を呈する。内外面に細かい貫入がある。

S D1592出土土器・陶磁器(第13・14図)

土師器

摺鉢(19) 断面四角の口縁をもつ片口の鉢である。内面を細かい刷毛目、外面を粗い刷毛目調整している。口縁部はヨコナデである。内外面白茶色を呈する。

青磁

椀(7) 灰色を帯びた緑色の釉は内外面にうす目に施釉され、高台畳付部および高台内面は露胎となる。見込みに花文のスタンプがあるが不明瞭である。

S D 1641 出土土器 (第13図、別表)

土師器

皿 b (8) 口径6.6cm、底径5.3cm、器高1.4cmである。

S D 1651 出土土器 (第13図、別表)

土師器

皿 b (9) 口径6.7cm、底径4.7cm、器高1.5cmである。

S D 1653 出土土器・陶磁器 (第13・14図、図版22)

瓦質土器

鉢(20) 体部が内弯する鉢である。焼成が軟質であるため器面が剥離している。体部上位に凸帯の痕跡があり、その間に直違文をスタンプする。外面灰黒色、内面淡茶褐色を呈する。

青磁

香爐(10) 口径12.4cmのものである。足が1個残存しているが、三足の香爐と思われる。体部外面は凸帯状に削っている。釉は淡緑色を呈し外面と内面の体部上位に施釉されている。口縁部上面に凹線を巡らす。

S D 1656 出土土器 (第13図、別表)

土師器

皿 b (11) 口径6.9cm、底径4.0cm、器高1.9cmである。

S D 1657 出土土器・陶磁器 (第13図、別表)

土師器

杯 a (12) 口径12.0cm、底径7.8cm、器高2.9cmである。

青磁

椀(13) 細く直立する高台で、先端を斜めに削る。内外面に淡灰緑色の釉を薄目に施釉する。高台部および底部は露胎で、暗灰色を呈する。暗青灰色土層出土のものと接合した。

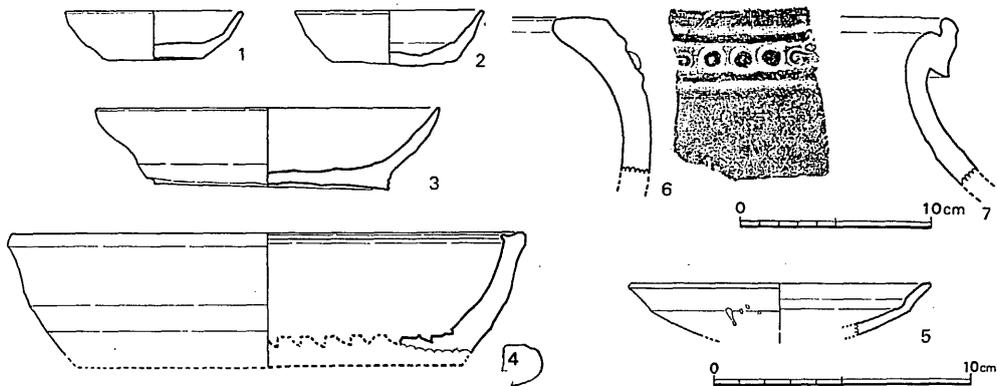
S D 1659 出土土器 (第13図、別表)

土師器

皿 b (14) 口径7.4cm、底径4.6cm、器高2.1cmである。

高麗青磁

椀(15) 茶灰色味の強い緑色を呈し、内面の体部上位には白象嵌による3条の区画線と、体部中位に梅鉢状の花文がある。焼成が悪く、釉の一部が剥離している。胎土は白灰色を呈し、若干砂粒を含む。



第15図 SK1603出土土器・陶磁器実測図

SK1603出土土器・陶磁器（第15図、図版23・25・44、別表）

土師器

皿b（1・2） 口径6.9cm～7.5cm、底部3.9cm～4.9cm、器高1.9cm～2.2cmである。

杯a（3） 口径13.2cm、底径9.0cm、器高3.2cmである。

瓦質土器

下ろし皿（4） 復原口径20.0cmで、底部は一部残存するのみである。口縁端部に凹線を入れる。胎土は砂粒を含み淡茶色を呈するが、内外面を薫し黒灰色を呈する。内底には粗く深い下ろし目を入れる。

鉢（6） 体部が内弯する大形の鉢で、体部上面に2条の凸帯を貼り付け、その間に珠文と唐草文を入れている。

陶器

甕（7） 「N」字状口縁をもつ甕の口縁部である。折り返しの幅は3cmのものである。胎土は黒色を呈した粗いもので口縁部付近は暗茶褐色、内面は暗茶褐色を呈し、外面の体部上位は灰を被り黄白色を呈する。内面体部上位は板によるヨコナデである。常滑産のものである。

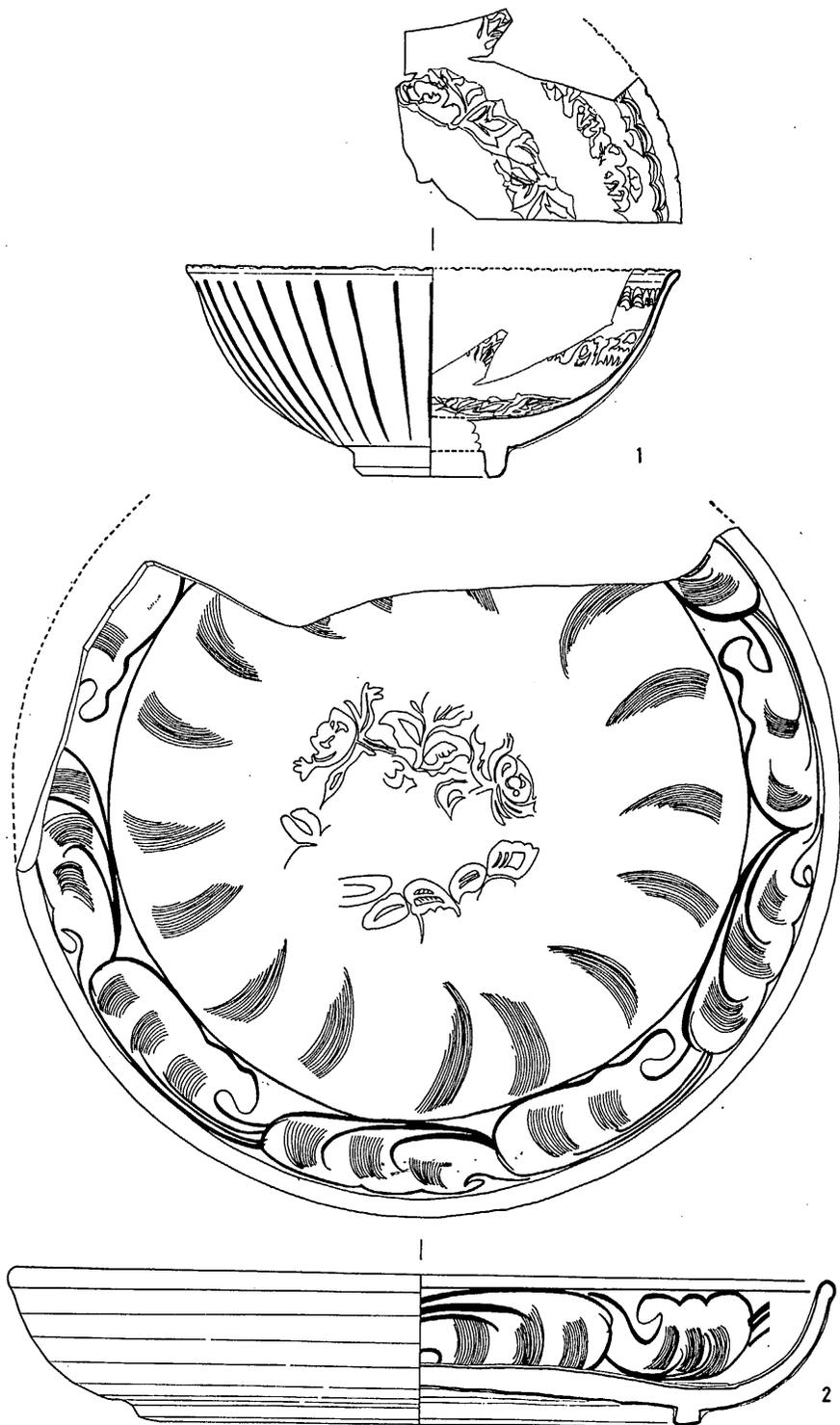
白磁

皿（5） 体部上位で屈曲させ、稜をもつ。屈曲部の内面には凹線を入れる。灰白色の胎土は粗く、細かい黒い砂粒が入る。外面には鉄斑があり、透明釉は黄白色を呈する。内外面に細かい貫入がある。

SK1615出土陶磁器（第16図、図版24）

この土坑からは、土師器の小片を除いて、まとめて出土した土器・陶磁器は、図示した2点だけである。

青磁



第16图 S K1615出土陶磁器实测图

椀(1) SK1618・SK1625・黒色土層・黒灰色土層・暗灰色土層からも破片が出土し接合した。この土塚から出土した部分は胴部片で、接合した部分ではもっとも大きいので、ここで報告する。口径19.9cm、器高8.4cm、高台径6.1cmを測る。口縁部に輪花、その外面下方に縦に沈線を入れている。また内面は上・下2段に浮文からなる印花文を押捺している。残存部は全て黄緑色の釉が掛けられているが、高台部の一部には釉がない部分もある。胎土は灰色を呈し、緻密である。体部外面は回転ヘラ削り調整がなされている。

盤(2) 4/5程残存している大形の盤で、口径33.3cm、器高6.0cm、高台径22.7cmを測る。丸味を有する体部と玉縁状の口縁からなる。暗灰色緻密な胎土に気泡の多い淡黄色を呈する釉を全面に厚く施釉している。全面施釉後、外底見込み部分の釉を環状にカキ取り露胎としている。この赤褐色を呈する露胎部分に、径16.6cmをはかる円形の焼台跡が焼き付いている。内底中央には牡丹文の印文、その周囲に櫛目文、また体部内側は片切と櫛目からなる文様を入れている。直接接合しないが欠損部の一部が暗青灰色土層から出土している。

この盤の形態と相似するものが、韓国新安海底から引き揚げられた盤の中にあり、また体部内側の文様と相似したものが貼花龍文盤^(註3)、デヴィッド・コレクションの牡丹文大鉢等に見られる。新安沖の船の沈没年代は、韓国側の研究によると出土した銅銭と、「辛未」銘^(註4)を有する漆器等から1331年～1349年とされ、また中国側の研究によると青磁皿の底部に陰刻された「使司帥府公用」の文字から上限は至正14年(1354)より下った時期、下限は至正27年(1367)という。貼花龍文盤、牡丹文大鉢ともに元のものであるとされている。これらのことから、この盤は14世紀中頃には既に存していたことが知れる。前述したように、SK1615には地鎮・棟上げの際使用した可能性を有する用具を埋めていることから、第Ⅱ期の整地がなされ、SB1590が造営される最初期にこの土塚が掘られたとすることができ、SB1590の上限を知る手掛りとなる。

SK1588出土土器・陶器(第17図、図版25、別表)

土師器

杯a(1・3) いずれも小片であるため口径については不明であるが、復原すると口径12.0cm・13.0cmになる。

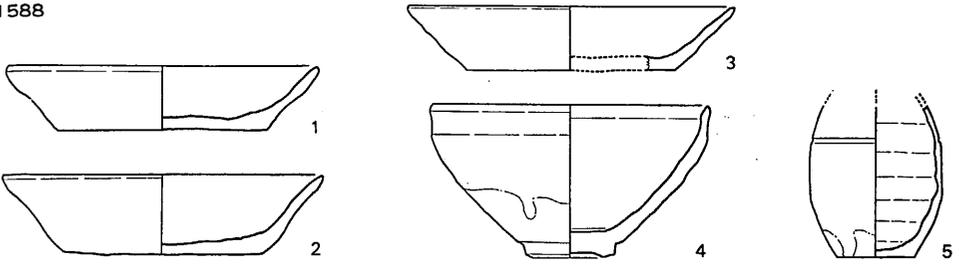
杯b(2) 口径12.8cm、器高3.0cm、底径8.0cmである。二次的に火熱を受け器面は黒色化している。

黒釉陶器

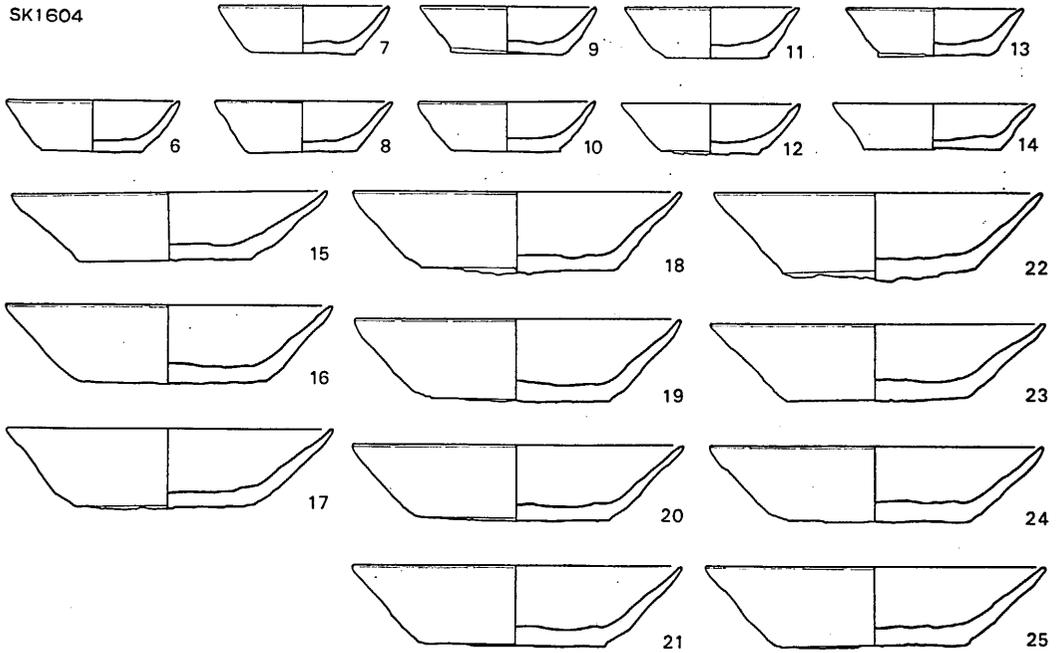
椀(4) 口径11.0cm、器高6.0cmである。口縁部は直立し、端部は若干外反する。体部下半は露胎となる。いわゆる禾目天目といわれるものである。

茶入れ(5) 体部中位に最大径があり、中位上に1条の沈線をめぐらす。胎土は淡茶色を呈す。きめの細かい胎土にやや黒味を滞びた茶褐色の釉をうすく施す。内面および外面の体部下位と底部は露胎となっている。底部には糸切り痕を残す。

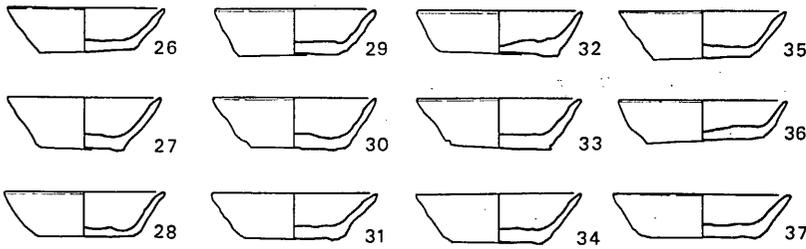
SK1588



SK1604



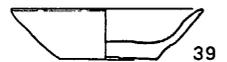
SK1609



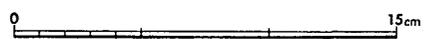
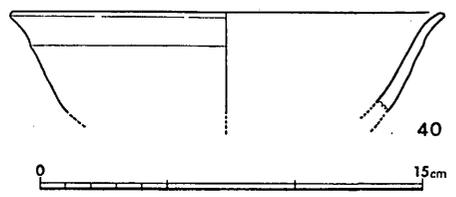
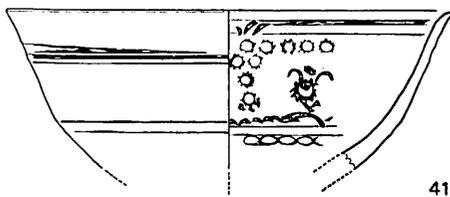
SK1635



SK1611



SK1605



第17图 SK1588·1604·1605·1609·1611·1635 出土土器·陶磁器实测图

SK1604出土土器（第16図、別表）

土師器

皿 b（6～14） 口径6.7cm～7.8cm、底径3.9cm～5.3cm、器高1.8cm～2.1cmである。

14はやや大形のものである。6・12・13には体部および口縁部に煤が付着する。

杯 b（15～25） 口径12.5cm～13.2cm、底径6.8cm～7.3cm、器高2.7cm～3.3cmである。

SK1605出土陶磁器（第16図、図版25）

高麗青磁

椀（41） 復原径17.4cmのもので、口縁部をわずかに外反させる。胎土は暗灰色で、やや粗いものである。口縁部には変形した唐草文帯があり、体部には小菊文と立菊文、それに波状文を配し、その下に区画線があり、さらにその下に連珠円文帯がみられる。外面にも口縁部付近と体部中位に二条の区画線をもつ。いずれも白象嵌のものである。SK1605のものと同接合し、同一個体片が暗青灰色土層から出土している（図版25-a）。李朝のものであろう。

SK1609出土土器（第17図、別表）

土師器

皿 b（26～37） 口径6.1cm～7.0cm、底径3.9cm～4.6cm、器高1.7cm～1.9cmである。

30・36には煤付着。

SK1611出土土器・陶磁器（第17図、別表）

土師器

皿 b（39） 口径7.5cm、底径3.9cm、器高2.0cmである。

白磁

椀（40） 胎土は乳白色を呈し、釉はうす目で黄白色を呈する。内外面に細かい貫入があり、口縁端部はヘラ削りにより面をなす。

SK1635出土土器（第17図、別表）

土師器

皿 b（38） 口径7.4cm、底径4.3cm、器高1.8cmである。

SK1655出土土器・陶磁器（第18図、図版25・45、別表）

土師器

皿 b（1） 口径7.3cm、底径4.3cm、器高2.0cmである。内底はナデ、外底には板状圧痕を有する。

杯 a（2） 口径13.5cm、器高2.9cm、底径9.6cmである。

杯 b（3・4） 口径12.9cm・13.8cm、底径7.5cm・8.8cm、器高3.5cm・3.4cmである。

青磁

椀 口縁を外反させ、丸くするもので、釉は厚く施釉され、輪花をもち、内面に印花文、体

部外面に縦に沈線を入れるものも出土している（図版45—o・p）。

高麗青磁

椀（5） 暗灰色味の強い緑色を呈する釉がうす目に掛けられている。内外に3条の白象嵌による区画線がある。釉内面には気泡がある。口縁端部の釉は剝離している。釉には細かい貫入を伴う。胎土は灰白色を呈する。

S X 1630出土土器陶磁器（第19図、図版26）

土師器

鍋（8） 復原径36cmのものである。口縁部は若干外反させるだけで体部から口縁部まではほぼ直線的にのびる。口縁部内面にヨコ方向、体部は斜め方向の刷毛目調整を施し、口縁部外面は指頭による凹凸著しい。外面には一面に厚く煤が付着する。

白磁

椀（1） 口縁部を露胎とするいわゆる口禿の椀である。小片からの復原であるため体部の傾きについてはやや疑問が残る。外面体部上位に削り出しによる隆帯状の突線が巡る。胎土は灰白色で、釉はやや青味をおびた白色を呈する。

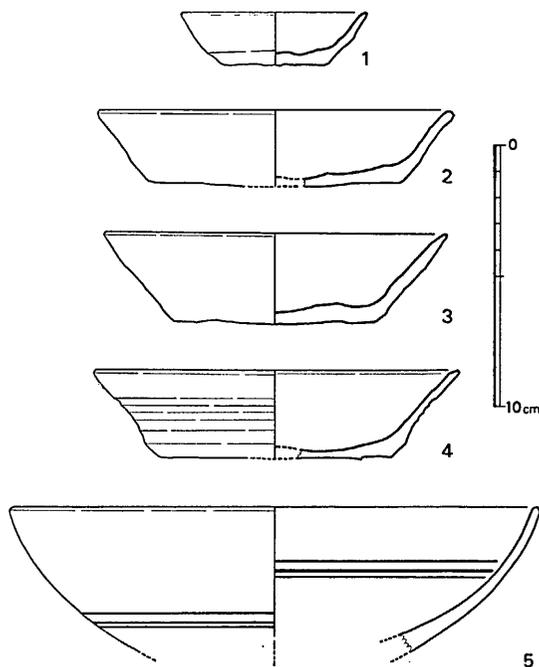
青磁

椀（2～4） 2は口縁部を外反させ、端部は丸味をもつ。胎土は気泡があり、釉は厚目に施釉され、灰色を滞びた淡緑色を呈する。内外面に細かい貫入がある。3は灰白色の胎土で、空色気味の淡緑色の釉を内外面の全面に厚目に施し、高台端部の釉を削り取っている。その部分は淡茶色を呈する。体部にはわずかに蓮弁の鎬がみえる。4は内面見込みに梅花文と「天」字をスタンプした椀である。胎土は灰白色のやや粗いもので、釉は灰色気味の暗い緑色を呈する。高台疊付および見込みは露胎で、淡茶色を呈する。高台の先端を斜めに削り尖がらしている。

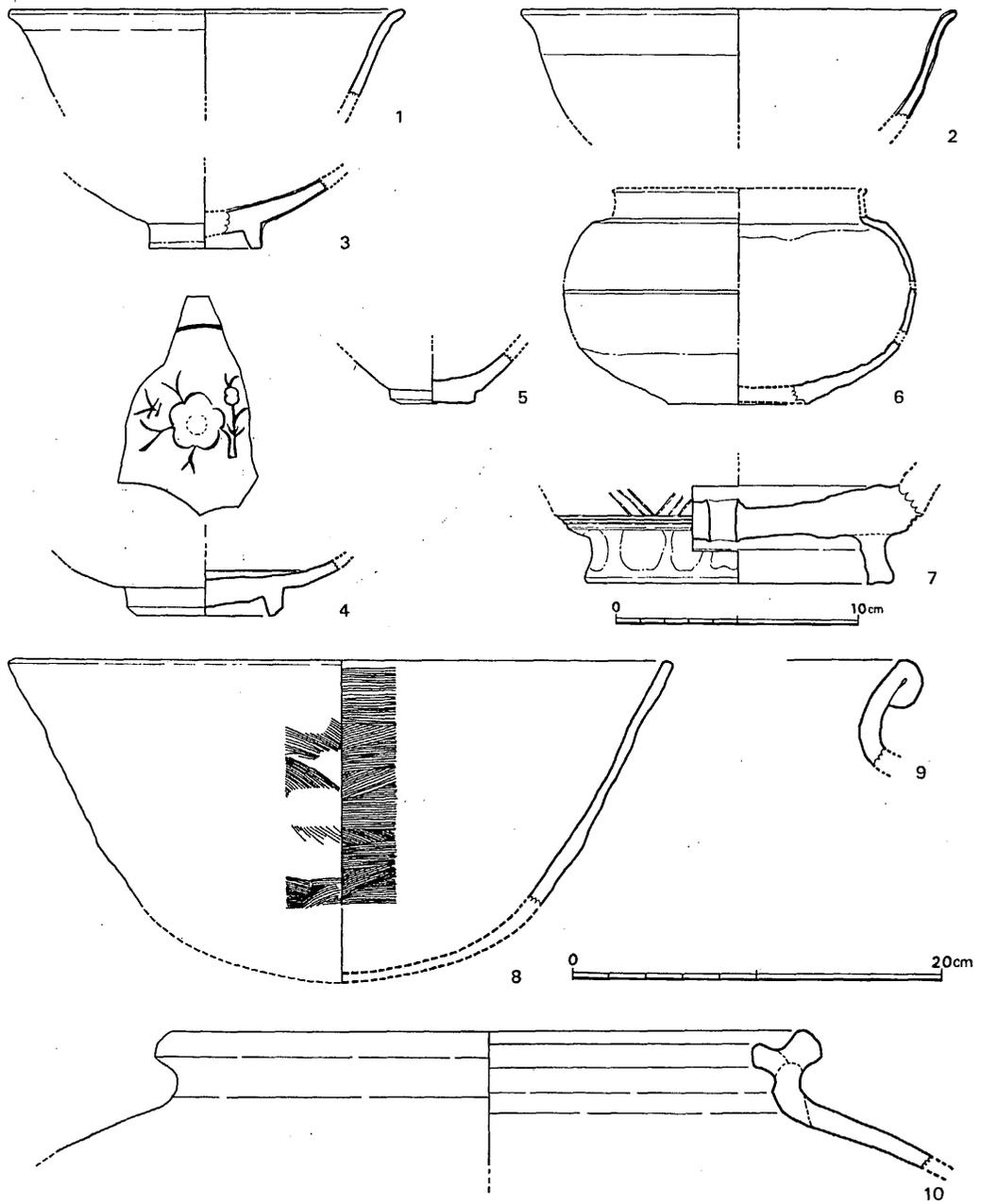
黒釉陶器

椀（5） 平底に近い高台のもので、内面に黒色のガラス質の釉がやや厚目にかかる。残存部外面は露胎である。

茶入れ（6） 小片からの復原である。体部の張りの大きい、肩部に稜をもつ茶入れである。



第18図 S K 1655出土土器・陶磁器実測図



第19図 S X 1630出土土器・陶磁器実測図

胎土は非常に精良で砂粒を含まず堅緻で、暗赤色を呈する。全体に釉はうす目にかかるが、外面の肩部は比較的厚く淡黄黒色を呈する。外面体部下位は露胎で、暗褐色を呈する。内面は口縁部付近に釉がみられるだけで、他は露胎である。内面には強いヨコナデにより凹凸が著しい。

外面の体部中位に紐かけの沈線がある。直接に接合しないが、同一個体の破片が黒色土層、暗青灰色土層、黒灰色土層、暗茶色土層から出土した。

鉢(7) 大形の鉢の底部である。胎土は砂粒を含まないが、やや粗いものである。内面の一部には垂下した釉がみられ、外面は体部下位まで施釉し、高台の部分は垂下した釉でまだら様になっている。体部下位には沈線による斜線と圏線がみられる。また底部中心部は自然釉状の釉がふき出ている。底部中心に径1.0cmの穿孔がある。この口縁部かと思われる波状になった破片がS D 1641から出土している(図版26-a)。

陶器

甕(9) 口縁部を「く」字に外反させ端部を折り曲げて玉縁とする。胎土は暗赤色で、内面は黒茶色、外面は灰を被り灰白色を呈する。備前焼である。

無釉陶器

甕(10) 「Y」字状の口縁をもつ大形の甕の口縁である。胎土は暗赤色を呈し、砂粒が多く粗い。口縁部はヨコナデで、体部上位の内面は当板痕をヨコナデで消し、外面は平行叩の上からヨコナデしている。中国産か。

S X 1629出土土器・陶磁器(第20図、図版27、別表)

土師器

皿b(1) 口径7.0cm、底径4.8cm、器高2.3cmである。

杯a(2) 口径12.4cm、底径8.2cm、器高2.9cmである。

白磁

碗(3) 体部外面に蓮弁文があり、胎土は濁白色で、やや黄白色の釉がうすくかけられる。内外面に細かい貫入がある。S X 1637出土のものと接合する。

高麗青磁

碗(4) 外反した内面の口縁部付近に変形した唐草文があり、体部に小菊文が一部みえる。体部外面には区画線と波状の斜線が白象嵌されている。胎土は暗灰色で、内外面は白灰色を呈する。李朝のものと考えられる。

S X 1633出土土器(第20図、別表)

土師器

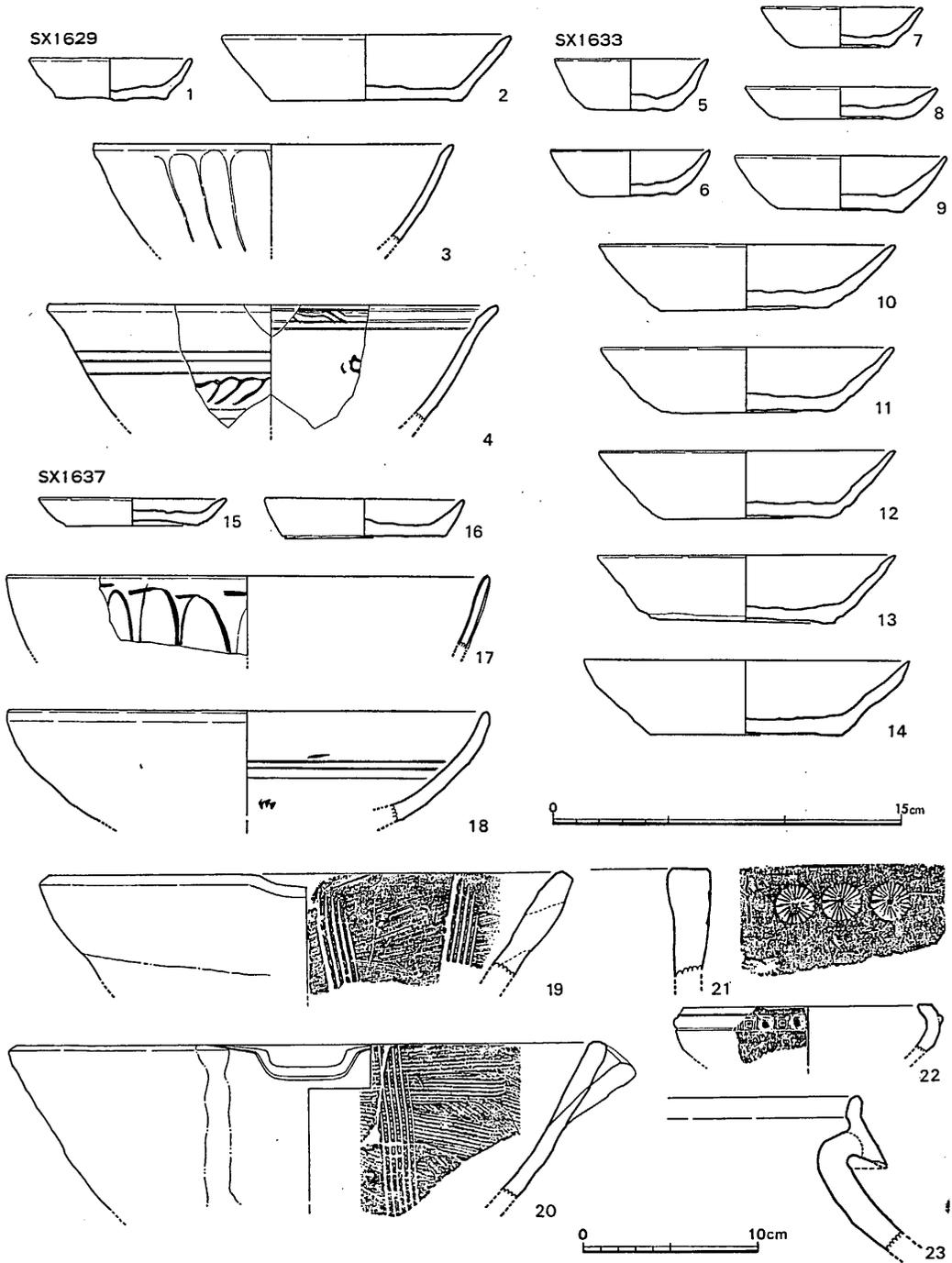
皿a(8) 口径8.1cm、底径5.8cm、器高1.3cmである。

皿b(5~7) 口径6.6cm~6.9cm、底径3.9cm、器高2.2cmである。

皿d(9) 口径9.0cm、底径5.4cm~4.1cm、器高1.7cm~2.4cmである。

杯b(10~14) 口径12.4cm~13.7cm、底径7.1cm~8.1cm、器高2.8cm~3.3cmである。14はやや大形の杯である。

S X 1637出土土器・陶磁器(第20・21図、図版27、別表)



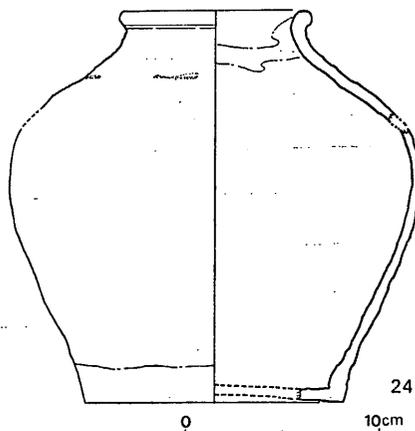
第20图 SX1629·1633·1637出土土器·陶磁器实测图

土師器

皿 a (15・16) 口径8.2cm~8.7cm、底径5.6cm~7.0cm、器高1.2cm~1.6cmである。

摺鉢(20) 胎土は精良で、砂粒は少く、焼成はやや軟質である。内面は刷毛目調整後6本単位の筋目を入れる。内面下半の器面は摩滅している。また、内面と外面には汁が垂下したと考えられる黒茶色の痕跡がある。

鉢(22) 胎土は比較的精製され、焼成はやや軟質のものである。外面の体部上位には三升文がスタンプされ、その上から1つおきに珠文を貼付している。内外面茶褐色を呈する。内面は黒化している。また内面屈曲部には爪状の痕が残っている。



第21図 S X 1637出土陶器実測図

青磁

椀(17) 龍泉窯系青磁の椀I-5・a類である。蓮弁の彫りは浅く、また厚い釉のため文様はあまり鮮明ではない。弁中央部は若干盛上がる。

高麗青磁

椀(18) 内面体部上位に白象嵌した3条の区画線と、その下に一部花文がみえる。胎土は灰白色、釉はやや空色を帯びた灰緑色を呈する。細かい貫入がある。S D 1586Aのものと接合し、その他に同一個体と思われる破片が整地層から出土している(図版27-a)。

瓦質土器

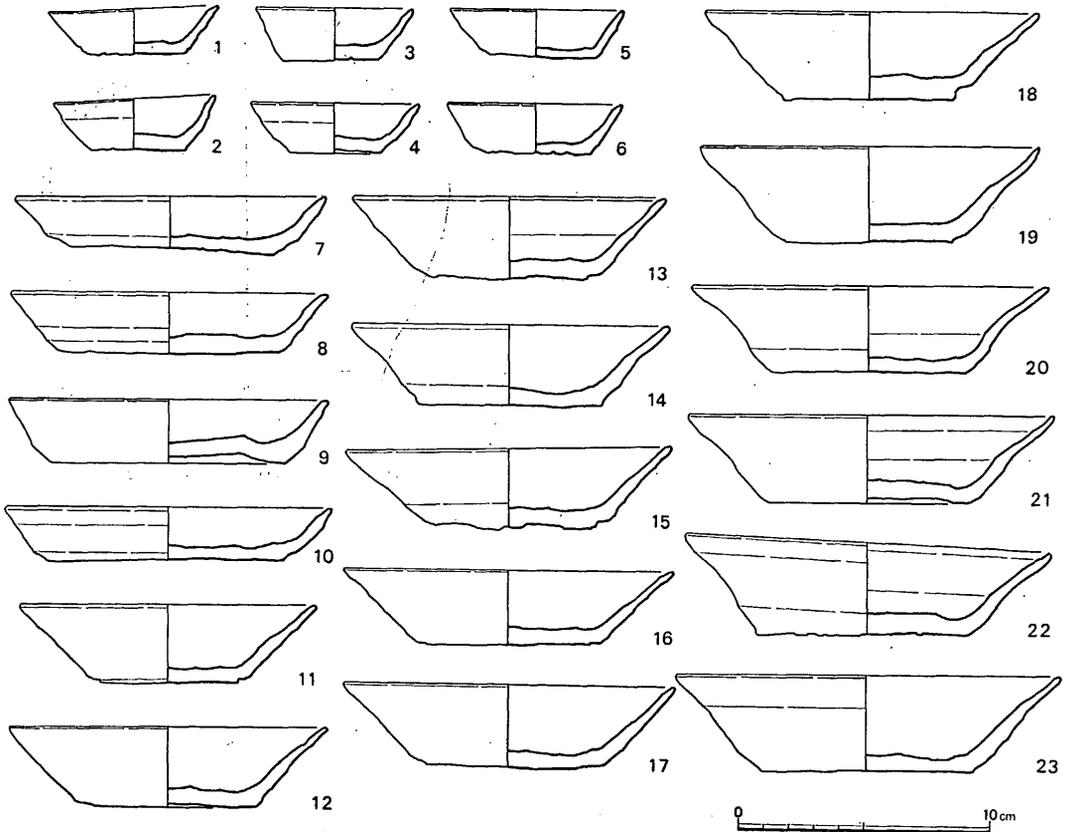
鉢(19・21) 胎土中に比較的多くの細砂粒を含む。焼成は良好である。内面は刷毛目、外面の口縁部付近はヨコナデ調整である。内面は灰白色で、外面は黒色の燻しがある。内面には一部黒茶色の部分がみられる。5本単位の筋目を入れる。21は方形のもので、体部上位22弁の菊花文をスタンプする。口縁部は肥厚し上面を平らにしている。内外面は燻されて黒色を呈する。内面は刷毛目調整である。

陶器

甕(23) 「N」字状口縁をもつ甕である。胎土は暗灰色を呈し、砂粒は比較的少なく、堅緻なものである。折り返しの幅は4cmで、内面は淡茶黒色を、外面は自然釉がふき出している。常滑産のものであろう。

青釉陶器

壺(24) 口縁部を丸く玉縁にするもので、口径10.0cmを測り、体部中位に最大径がある。復原高20.0cmのものである。口縁部および外面には茶褐色味の強い、暗緑色の釉がうすくかけられている。体部の下位および底部は露胎である。胎土は若干砂粒を含むが精良である。淡



第22図 S X 1663出土土器実測図

赤色ないし暗灰色を呈する。肩部には重焼きの目跡があり、その部分は凹んでいる。

S X 1663出土土器（第22図、図版27、別表）

土師器

皿 b（1～6） 口径6.3cm～6.9cm、底径3.8cm～4.2cm、器高1.8cm～2.1cmである。

杯 a（7～10） 口径12.2cm～12.9cm、底径8.3cm～9.2cm、器高2.3cm～2.5cmである。

杯 b（11～23） 口径11.7cm～15.2cm、底径5.5cm～8.4cm、器高2.9cm～3.8cmである。

口径に対して、底径が小さいものである。

整地層出土土器・陶磁器（第23図、図版28、別表）

土師器

皿 a（2・3） 口径8.2cm～8.4cm、底径6.0cm～6.4cm、器高1.1cm～1.3cmである。

皿 b（1） 口径7.1cm、底径4.7cm、器高1.5cmである。

杯 a（5～8） 口径12.6cm～14.0cm、底径8.7cm～9.7cm、器高2.6cm～3.2cmを測る。

7の内面には一面に炭化物が付着している。

杯 b (4) 口径12.6cm、底径7.3cm、器高2.9cmである。

摺鉢 (17) 灰白色に焼成されたもので、内面は二次的に黒化した部分があり、また口縁部下の器面ははじけている。外面は成形時の指頭痕が顕著に残っている。

瓦質土器

鉢 (18~20) 18・19は体部を外側に開き、18は16弁菊花文、19は5弁桜花文を押印している。20は体部を内弯させ、端部上面を平坦にする。体部上端近くに2条の突帯を貼付しその間に唐草文を押捺している。19の内面上端周辺には煤が付着しており、火鉢として使用されたことがうかがえる。

白磁

皿 (9) 内面に花唐草文を押捺した高台付皿である。胎土は淡灰白色を呈する。釉は淡青色で光沢を放ち、この種の陶磁としては器肉も薄く精良な造りである。斜行する高台内側部分に砂が焦げついている。これと同一個体と考えられる口縁部の小片が黒色土層から出土しており、この破片と体部のカーブから皿と知れた。なお、断面には漆が塗布されていることから、補修したものと考えられる。図版28-aは底部を欠失し、体部の一部を残存する。胎土は淡灰白色、釉は淡青白色を呈する。内面にわずかに印文らしいものが見えるが、果して印文かどうか明らかでない。両者ともに「枢府磁」であろう。

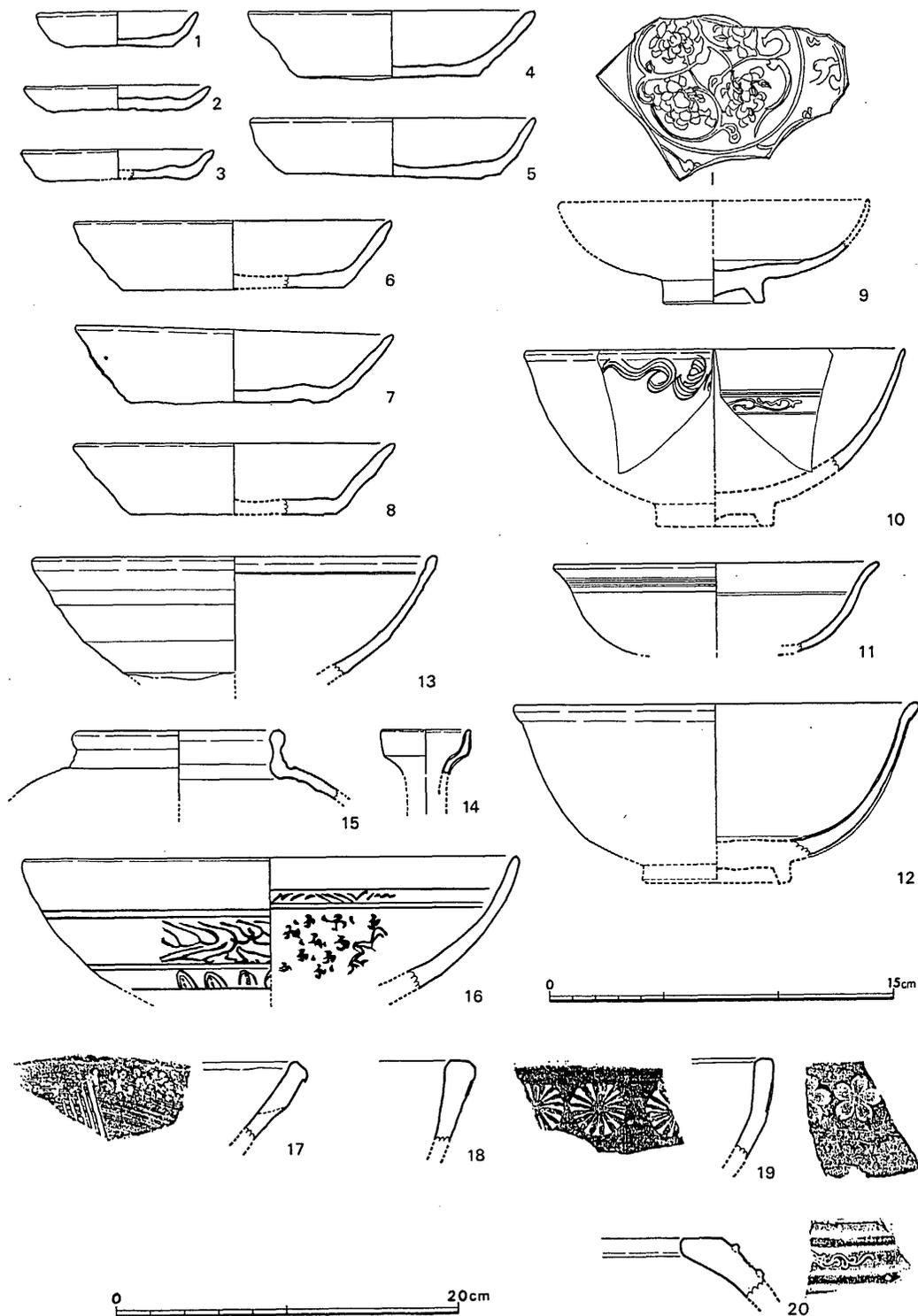
碗 (10) 内面に3条の隆帯とその間に挟まれた唐草文とが押捺され、更にその下位にも不鮮明であるが印文があるようである。そして、外面上位に4本単位からなる渦文が櫛状工具で描かれている。胎土は淡灰白色、釉は淡青白色を呈する。なお、断面には漆が塗られており、9と同様に破損後補修したものと考えられる。

青白磁

瓶 梅瓶といわれているもので底部のみが残存し、他の部分は欠失している。灰白色の胎土に青白色の釉が掛っており、この釉下に陰刻文様の一部が観察できる (図版28-b)。

青磁

碗 (11~13) 11は小片のため図示した法量はあまり正確ではない。外面は体部と口縁部との境いに櫛状工具により4本の沈線を入れて3本の隆帯をつくり、内面は1条の沈線を巡らしている。胎土は灰白色を呈し緻密であり、釉は比較的厚く、黄緑色を呈する。12は口縁部を外反させ内底周縁に1条の浅い沈線を巡らしている。胎土は暗灰色、釉は黄緑色を呈する。体部外面は口縁部直下から回転ヘラ削調整を行っている。13は内外面ともに小さな鉄斑が多数ある。暗灰色の胎土内部には砂粒は目立たないが、器肉表面には多数の砂があり、それが白い斑点として器面に浮き上がっている。これは故意に器面に砂をまぶしたものであろうか。また、外面下位に鉄絵の一部が残っている。釉は薄く、濁黄緑色を呈し、一部に貫入を伴う。



第23图 整地层出土土器·陶磁器实测图

瓶(14) 淡灰白色の胎土に、光沢のある淡青色の釉が掛けられている複合口縁の瓶口片である。

無釉陶器

壺(15) 口縁部が丸く肥厚する壺の破片である。暗灰色の胎土中には細砂粒を多く含む。

高麗青磁

碗(16) 胎土が暗灰色のため、淡黄暗灰色を呈している。内面の花文、外面の蓮弁文は白・黒の象嵌を用いているが、他は白象嵌で文様を表現している。

以上、整地層出土の土器・陶磁器の概要を報告したが、この層出土の遺物はS B 1590の背後にかさ上げして整地した部分の時期を知る手掛りとなる資料であるので、そのことについて若干述べることにする。

まず、この層から出土した遺物はS X 1630の東部の下層出土が大部分を占めているため、S X 1630に属する遺物も若干混入している可能性を指摘しておく。この可能性を有しているのは13である。13のような胎土・釉・調整のものは、これまでの調査では14世紀中頃までの遺構からは出土していない。しかし、出土した土師器のうちもっとも新期に属するものは4のタイプであり、それ以降のものは全く出土していない。そこで、一応この4がこの層位の下限を示す資料として考えることができる。4は杯bの初現期の特徴を有しており、第45次調査S X 1200新期と同じである。このS X 1200新期の土器群は大宰府編年によると14世紀中頃前後のものとして、把握している。同時に、12の青磁碗の形態のものもこのS X 1200新期としてこれまで考えられてきた。それに「枢府磁」や高麗青磁碗(16)も一般に14世紀頃と考えられ、以上のことから、この層を含む整地がなされた時期は14世紀中頃前後とすることが可能である。

腐植土層出土土器・陶磁器(第24図、図版29・44・45、別表)

土師器

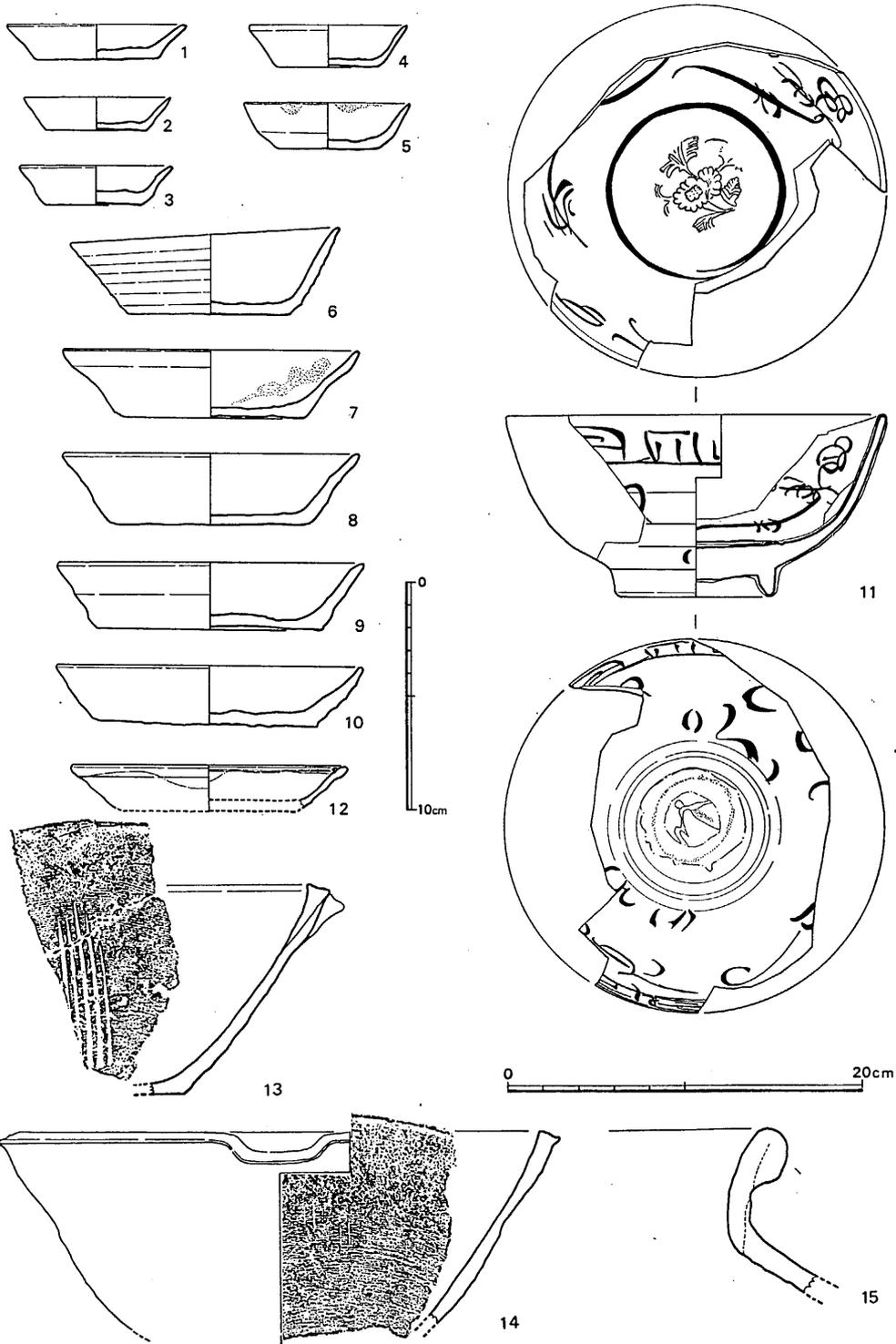
皿b(1~5) 口径6.4cm~7.2cm、底径4.2cm~5.2cm、器高1.5cm~2.0cmである。

杯a(9・10) 口径13.2cm、底径9.6cm~9.8cm、器高2.6cm~2.9cm、9の内面には煤が付着している。

杯b(6~8) 口径11.6cm~12.8cm、底径7.0cm~8.6cm、器高3.0cm~3.5cmである。6は口径が小さく、器高が高い。7には煤が付着している。

鉢(13・14) 13は片口の摺鉢片である。内側の器壁には、焦げ付き黒化した部分があり、外面には若干、煤の付着がある。口縁部はヨコナデで、内面はおよび外面下半は刷毛目、体部上位には指頭痕がある。摺ったため内面の下半は、摩滅している。筋目は5本を単位とする。14も前者と同器形のもので、内面は細かい刷毛目で、下半部はかなり摺られたらしく、摩滅が著しい。筋目については、残りがよくない。外面の下位は、煤で若干黒化している。

灰釉陶器



第24图 腐植土層出土土器・陶磁器実測図

下ろし皿(12) 口縁部内面に凸帯を貼付する小形の下ろし皿である。残存部の一部に下ろし目がみえる。灰釉は口縁部のみかかり、他は露胎である。胎土には砂粒をほとんど含まない精良なものである。

陶器

甕(15) 口縁部を折り曲げて丸くしている。胎土は灰色を呈し、内面は灰黒色、口縁部は灰被りのため、黄白色を呈している。

青磁

椀(11) 口径16.4cm、器高7.9cmのものである。外面の口縁部には雷文帯を、内面の体部には3個所に草花文の篋による片切彫りがあり、見込みには菊花文のスタンプがある。胎土は白灰色を呈し、練方が不十分なためか、断面をみると層を成している。釉は内外面に厚めに施され、粘性が強く気泡を多く含むが、比較的透明度のある淡緑青色を呈する。高台の削り出しは、2回に分けて削り出している。高台の見込みの周囲の釉をカキ取った部分は、露胎となって淡赤色を呈し、粘土と焼台の跡がある。暗灰色土層・第57次調査S X1457出土のものと同接合した。その他に、内面の体部に印花文があり、口縁部には輪花を入れ体部には幅1cm前後の間隔で縦に凹縁を入れたものがある(図版29-a)。また内面に印花文、外面体部に縦に沈線を入れた椀の小片がある(図版45-f)。

暗茶色土層出土土器・陶器(第25図、図版29・44)

土師器

鍋(4) 口縁部を外反させるもので、内外面を刷毛目調整している。刷毛目は、内面は細く、外面はやや粗いが、煤が付着しているため不明瞭である。屈曲部外面には指頭痕があり、胎土は茶灰色砂粒を少量含むが、比較的硬質のものである。

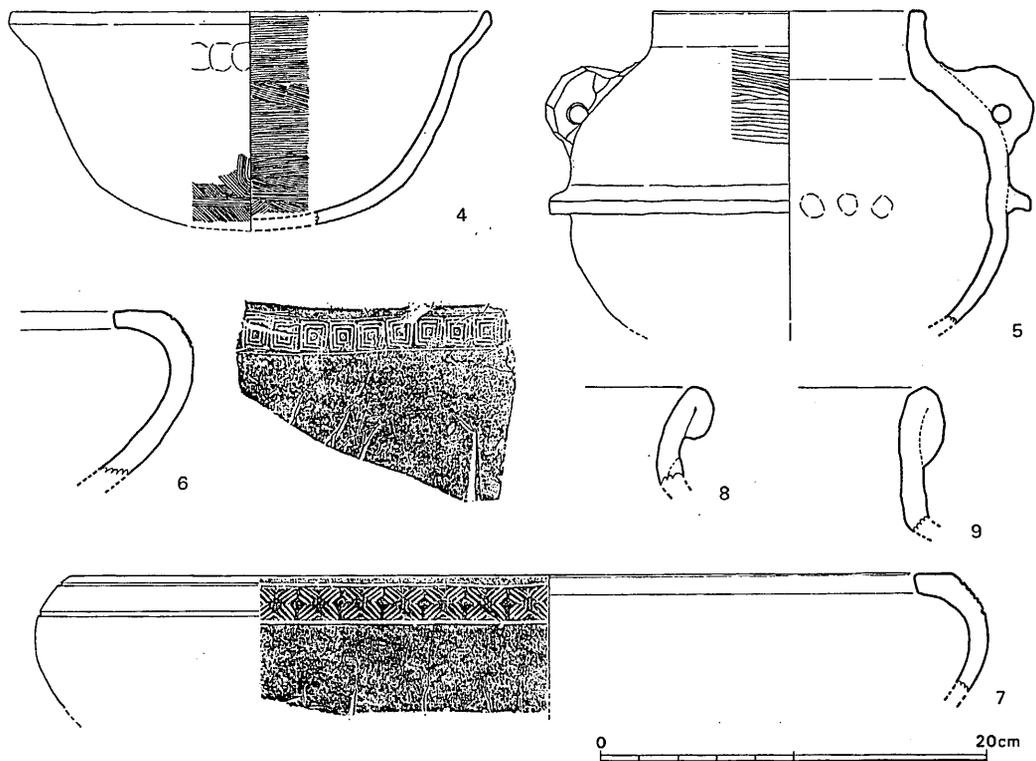
釜(5) 口縁部が直立し、体部中位に凸帯状の鐔を有する釜である。肩部には双耳を有する。内面は、炭化物付着のためか全面が黒化し、外面は茶褐色であるが、ほとんどが煤で黒変している。胎土は砂粒を含む。硬質のものである。外面の上半は、刷毛目調整の後磨研している。体部下位から底部にかけては粗い削りである。鐔貼付の内面には指頭痕がある。

瓦質土器

鉢(6・7) 体部上位が、大きく内湾する大形の鉢である。6の外面体部上位には、2条の沈線の間で四升文と一直違文を合わせたスタンプがある。胎土には細砂粒を含むが、精良なものである。外面は黒色、内面は灰黒色を呈し、口縁部付近は白灰色を呈する。7は復原内径37.2cmで、体部上位に2条の沈線とその間に三直違文をスタンプする。内外面黒色で、外面はヘラミガキを施す。内面には指頭痕がある。硬質、精良な土器である。

陶器

甕(8・9) いずれも口縁端部を折り曲げ、玉縁状に丸くするものである。8は、頸部を



第25図 暗茶色土層出土土器・陶器実測図

「く」字状に外反させるもので、胎土は赤茶色を呈し、内面は暗茶色で若干灰を被る。外面は黒褐色で、体部上位に灰被りがある。9は直立気味の頸部を有し、玉縁は前者に比べ平らたく、幅広である。胎土は淡赤褐色を呈し、内面は暗赤褐色を呈する。口縁部の外面はほとんど灰を被り、黄白色の斑点が密に浮き出ている。

澱青釉陶器

鉢 波状の突帯を貼付けた体部が出土している。内外面に茶色気味の釉がかけられ、その上に白濁し青味がかった色の釉がかかる（図版29-c）。胎土は暗褐色の粘性のある細土である。この鉢と同種の器形の口縁部が黒灰色土層から出土している（図版29-b）。

暗青灰色土層出土土器（第26図、図版30・31・45、別表）

土師器

皿 a（1～2） 口径7.3cm～7.6cm、底径4.9cm～6.4cm、器高1.0cm～1.3cmである。

皿 b（3～7） 口径5.6cm～7.8cm、底径4.0cm～4.9cm、器高1.4cm～1.8cmである。

3・4・5には煤が付着する。

皿 d（8） 口径8.8cm、底径5.4cm、器高2.4cmである。

杯 b (9~12) 口径10.4cm~12.5cm、底径5.6cm~7.1cm、器高2.4cm~2.7cmである。9には煤が付着する。

青磁

椀(13) 鎬のない蓮弁は大きく深く片切彫りされている。胎土は灰色。黄緑色の釉が若干厚目に施釉されている。その他に、口縁部に輪花があり、体部内外面に蓮弁様文様のある大形の皿と盤の口縁(断面に漆付着)(図版31-a・b)や、口縁部を外反させ、体部に隆起した蓮弁をもつ小椀がある(図版31-c)。また、口縁部を外反させ丸くし、輪花をもち内面に印花文、体部外面に縦に沈線を入れたものがあり、断面に漆が付着している(図版45-k)。

高麗青磁

椀(17・18) 17の胎土は白灰色で、釉は全面に施し、灰緑色を呈する。高台見込みは部分的に露胎となり、ヘラの木口で突き押したような跡がある。内底に焼成時の目跡がある。18は内面の体部上位には変形した唐草文および区画線と波状文を、さらにその下の空間には梅鉢状の花文様を配し、下位にも3条の区画線をそれぞれ白象嵌する。外面にも白象嵌の区画線がある。内外面は茶色気味の緑灰色を呈し、細かい貫入がある。

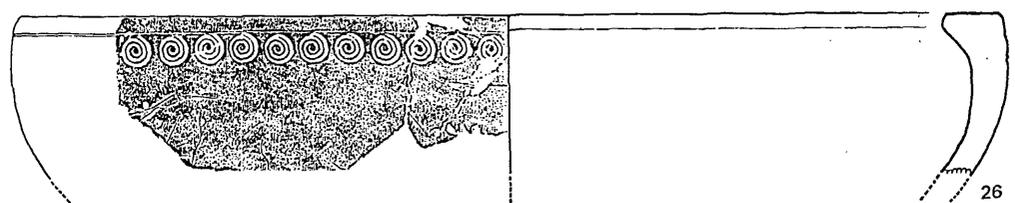
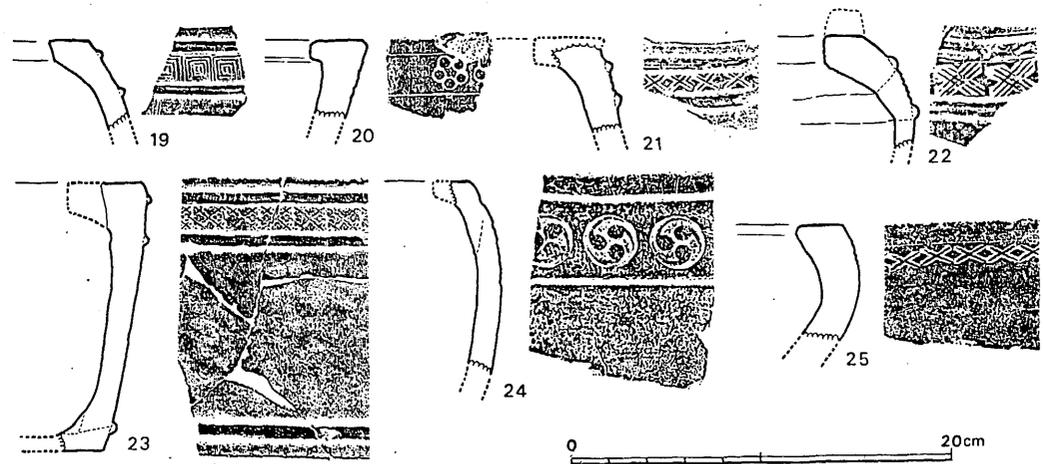
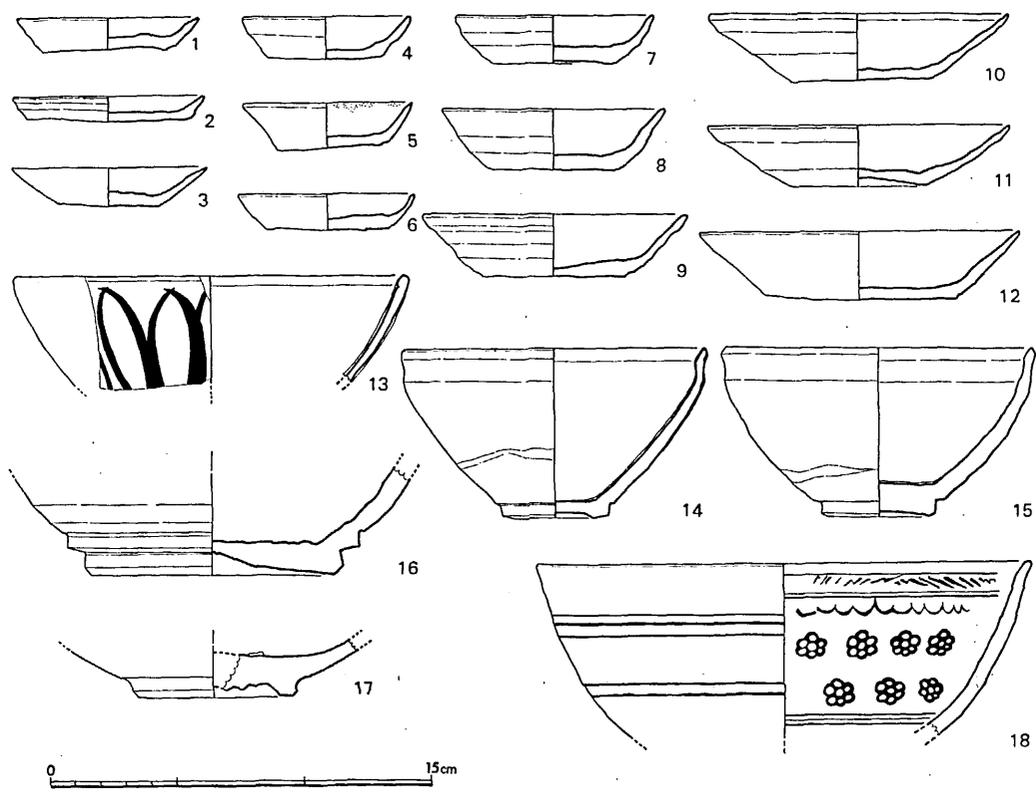
黒釉陶器

椀(14・15) 14は底部の器肉が薄い。口径にして、器高が高い。体部上位を内弯させ端部を直上に引き出す。口縁部は茶色で、他は黒褐色で、油滴状の細かい斑点が密にある。体部下半は露胎としている。割面に漆を塗布している。15は体部から口縁部にかけて直線的な椀である。やや茶色気味の黒褐色を呈し、体部下位は露胎とする。14は茶褐色砂層出土のもの、15は暗茶色土層出土のものと接合する。

鉢(16) 鉢型の底部と思われるものである。底部は上げ底風にし、底部の中心部を斜めにえぐっている。体部と底部接合部には断面三角形の凸帯を貼付け、外面はヘラ削り調整している。内面は強いヨコナデで、砂粒が黒く斑点として浮き出ている。外面には一部黒色のうすい釉を施し、底部には焼台の跡が内径6.5cm前後で環状にのこっている。黒灰色土層出土のものと接合する。

瓦質土器

鉢(19~26) 19・21・22・24~26は体部上位を内弯させるものである。19の体部上位には2条の凸帯を貼付け、雷文をスタンプする。内外面淡茶白色、内面は一部黒変している。21は2条の凸帯を貼付け一直違文をスタンプする。22は2条の凸帯を貼付けた間に三直違文をスタンプする。外面黒色で内面は暗茶色であるが、炭化物が付着し、黒化している。24は幅広の沈線の下に三巴文をスタンプする。外面は黒色、内面は茶白色である。25は1条の沈線の下に直違文をする。内外面茶灰色。26は復原内径45.0cmのもので、沈線の下に渦文をスタンプする。20と23は方形のものである。



第26图 暗青灰色土層出土土器・陶磁器実測図

20は2条の沈線との間に梅花文をスタンプする。内外面黒色。23は体部上位に2条の凸帯とそとの間に花菱文をスタンプし、体部下位に1条の凸帯をスタンプする。内外面黒色、口縁部付近は灰白色である。これらの鉢はいずれも内面を刷毛目調整する。

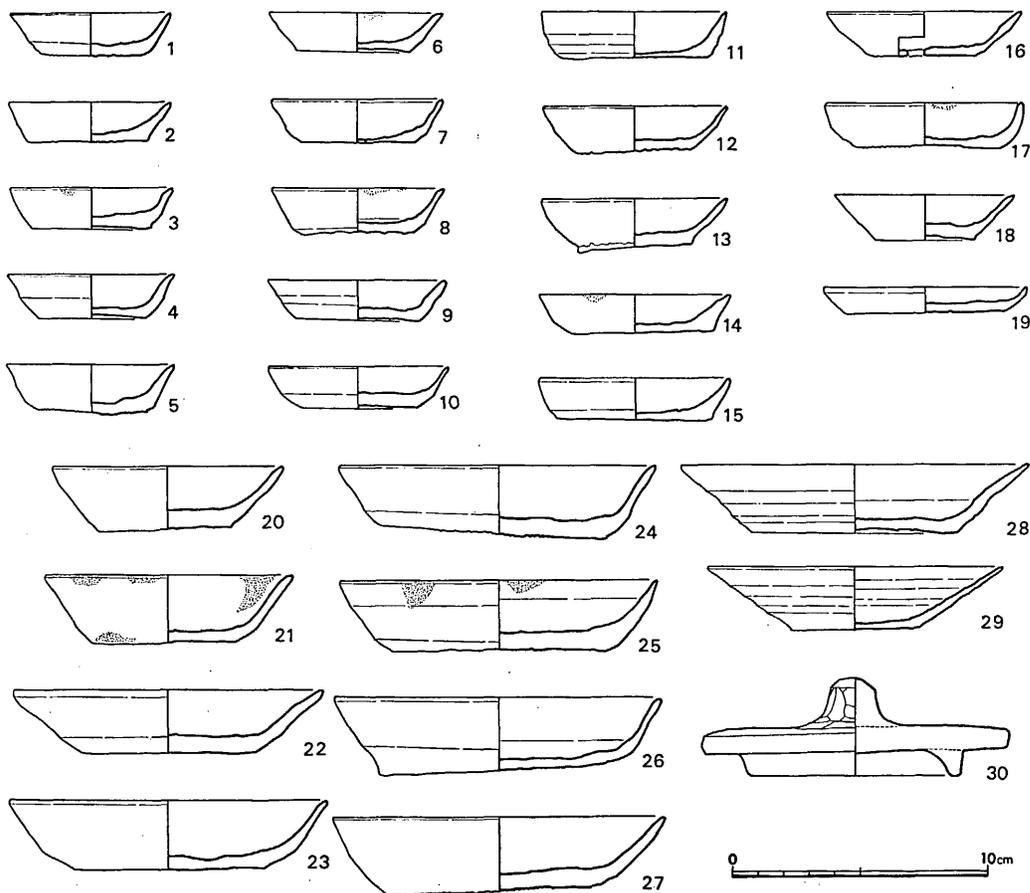
黒色土層出土土器・陶磁器（第27～29図、図版32～35・45、別表）

土師器

皿 a (19) 口径8.0cm、底径6.2cm、器高1.0cmである。

皿 b (1～18) 口径6.2cm～7.8cm、底径3.9cm～6.1cm、器高1.5cm～2.0cmである。器高の低い14・15・17があり、底径の小さい16・18がある。3・8・12・14・17には体部と口縁部に煤が付着している。

皿 d (20・21) 口径9.1cm～9.8cm、底径5.2cm～5.6cm、器高2.5cm～2.6cmである。21は内外面に煤の付着がみられる。



第27図 黒色土層出土土器・陶磁器実測図 (1)

杯 a (22~27) 口径12.1cm~13.0cm、底径6.8cm~8.9cm、器高2.5cm~2.9cmである。21には煤が付着。

杯 b (28・29) 口径11.5cm~13.5cm、底径5.0cm~8.0cm、器高2.5cm~2.7cmである。29は底径が非常に小さいものである。

壺 (33) 口縁部が直立するもので、口縁部の外面には沈線と三直違文のスタンプがある。スタンプは1個を単位としている。胎土には若干砂粒を含む。口縁部内面には炭化物が付着している。外面にも体部と口縁部に煤が付着していることから煮沸用器としても使用されたことが推知できる。

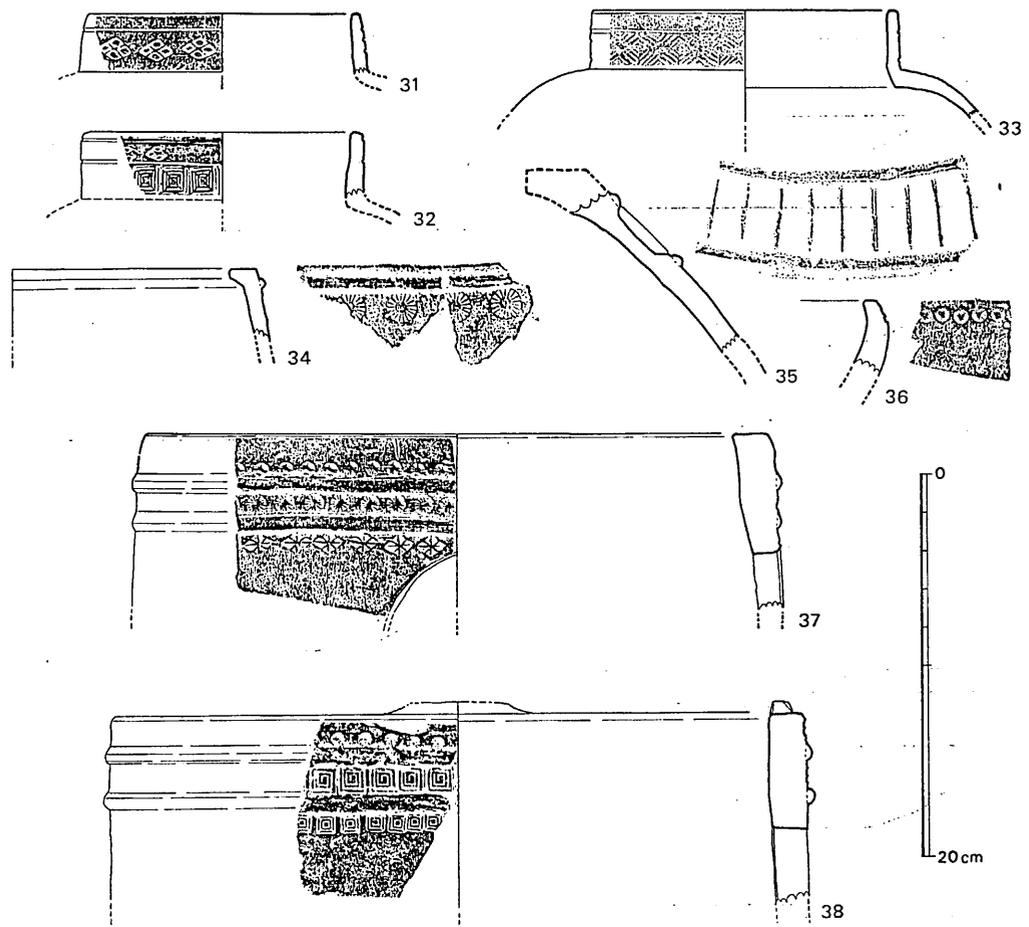
瓦質土器

蓋 (30) 撮を有する蓋である。身受け部の凸帯径8.4cm、器高3.8cmのものである。胎土中に比較的多くの細砂粒を含む。焼成は良好で器面全体は真黒色に燻されている。全面をヘラミガキし、撮部はナデの上からヘラナデにより器面を密にしている。

鉢 (31・32・34~38) 31は外面に沈線と四菱形文のスタンプ文様がある。32は外面に沈線を挟んで四菱文と雷文に直違文のある文様がスタンプされている。口縁部内面に炭化物の付着がみられる。いずれも、胎土には砂粒が若干含まれ、焼成は硬質のものである。内面は刷毛目調整である。34は口縁部の小片であるが、復原すると口径28cmを測る。口縁端部を内側に張り出したもので、上面は平らにしている。1条の凸帯を貼り付け、その下に18弁菊花文のスタンプがある。内外面ともに黒灰色を呈する。35は口縁部を欠損しているが、体部から口縁部にかけて大きく内弯した大形の鉢である。口縁部付近に2条の凸帯が貼付され、その間に連子状文がある。内外面黒灰色を呈する。36は小型のもので、小片であるため不明である。口縁部に16弁の小さい菊花文のスタンプがある。37は小片であるが復原口径32.4cmを測る。体部から口縁部にかけてわずかに内弯する大形の鉢である。口縁部外面に2条の貼り付け凸帯がある。凸帯を挟んで上から14弁菊花文、その下にやや大きめの16弁の菊花文、最下段には菱形文の中に直違文を入れた文様をスタンプしている。体部に透しの一部が残っている。内面には炭化物が付着している。外面は灰白色を呈する。38は体部から口縁部にかけて直線的で、ほぼ垂直に立つ。口縁部外面には2条の凸帯を貼り付け、それを挟んで12弁の菊花文その下に雷文、最下段に三升文をスタンプしている。口縁部上面に凸起を貼付けている。白灰色(口縁部の一部は黒灰色)を呈し、硬質のものである。いずれも内面は刷毛目調整、外面はヘラミガキが明瞭に残っている。

白磁

碗 (39) 体部の下位に丸味をもつ腰の低い碗である。口縁部は「く」字状に大きく外反する。体部下面は口縁部下までヘラ削りしている。胎土は灰白色を呈する。内外面にガラス質の透明釉がかけられ、貫入を伴う。その他に灰色をおびた濁白色の釉のかかったもの(図版34—

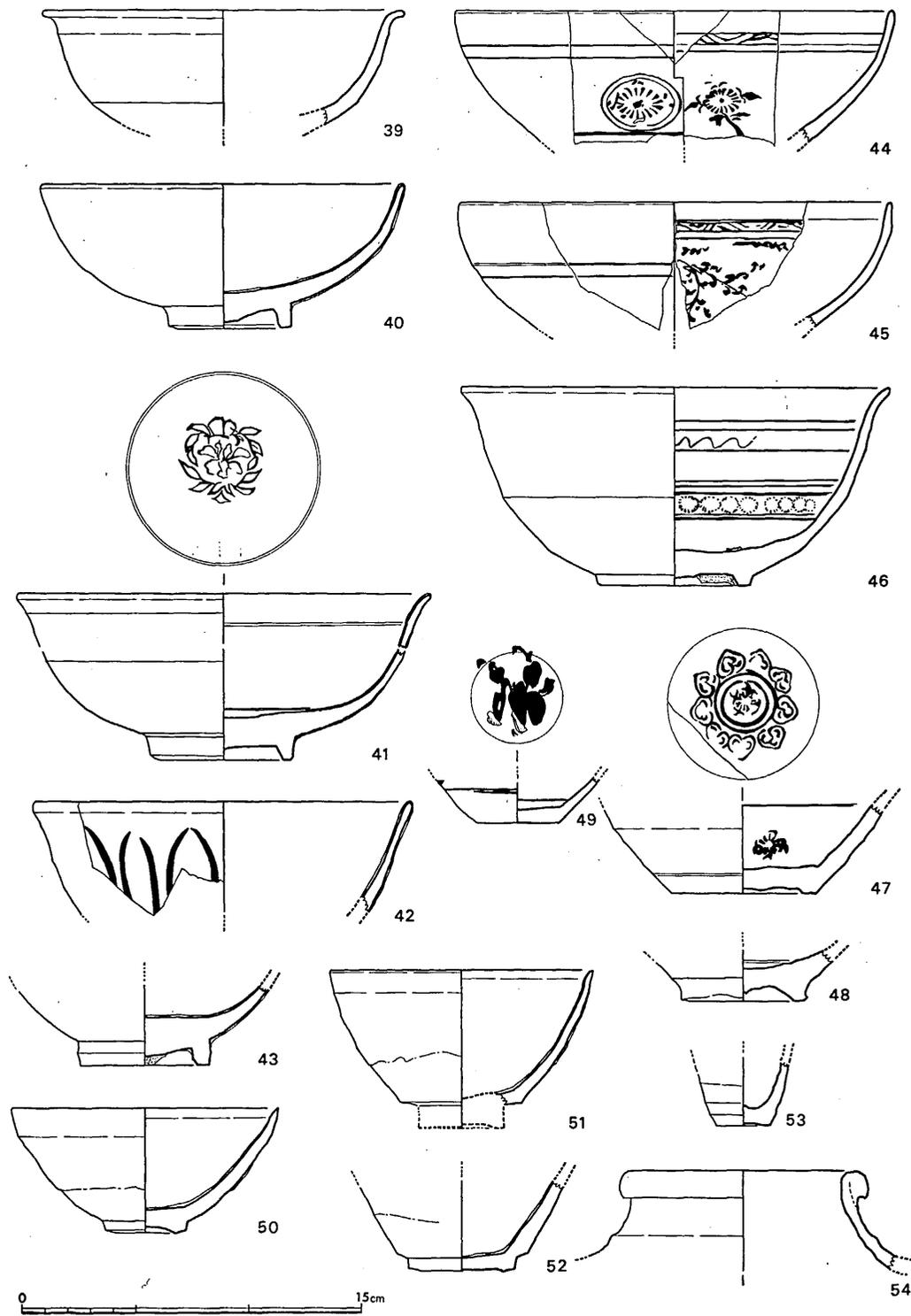


第28図 黒色土層出土土器・陶磁器実測図 (2)

a) や、黄白色釉のかかった腰折れの杯も出土している (図版34-b)。

青磁

椀 (40~43) 40は口径16.2cm、器高6.4cm、体部上位に丸味をもっている。胎土は暗灰色を呈した粗いもので、暗緑色の釉が施釉され、内外面に大きな貫入を伴う。畳付部および外底は露胎である。内底に二重の円が描かれている。41の口縁部はわずかに外反し、高台は面取され尖がっている。灰緑色の釉が薄目に施釉されている。畳付および外底は露胎となっている。内面の口縁部付近と見込みに沈線と花文のスタンプがある。同一個体である口縁部の破片が黒灰色土層から出土している (図版34-c)。42は片切彫の蓮弁を有するもので、淡緑色の釉が厚く施釉されているため蓮弁はやや明瞭さを欠いている。43の胎土は灰白色で、全体に暗緑色の釉がやや厚目に施釉されている。わずかにヘラ描きの蓮弁がみえる。外底見込みに粘土



第29图 黑色土層出土土器・陶磁器実測図 (3)

の目跡が付着している。その他に彫りの深い蓮弁が内外面にあり、暗緑色の釉が厚く施釉されたもの(図版35-b・c)や、細いヘラ描きの蓮弁のある灰色の強い釉のかかった小椀がある(図版35-a)。また、直線的な口縁部に輪花を有し、内面に印花文、体部外面に縦に沈線を入れたもの(図版45-j)、内面に印花文と隆線、さらに外面に隆線を有するもの(茶褐色土層出土)がある(図版45-i)。

高麗青磁

椀(44~48) 44・45は体部上位で丸味をもち、口縁部を直に引き出す椀である。45の胎土は白灰色を呈し、空色気味の灰緑色を呈する釉がかけられている。内面の口縁部付近には白象嵌による唐草文帯があり、その下位の空間に立菊文が白象嵌されている。外面には口縁部付近と体部下位に双線帯を白象嵌し、その間に菊文を黒・白象嵌している。45は内面の口縁部付近に唐草文帯を白象嵌し、その下に柳状文を白象嵌している。外面には双線帯を白象嵌している。胎土は淡灰色で、外面は空色気味の灰緑色を呈し、内面は茶色気味の灰緑色を呈する。内面に細かい貫入がある。その他に、内面に3条の区画線をもつもの(図版35-d)や、区画線の内に波状文(図版35-f)、口縁部に変形した唐草文(図版35-e)を白象嵌したものがある。46は体部下位が丸味をもち、口縁部を外反させる椀である。内側の底部付近に3条の区画線に挟まれた内に小菊文、体部上位には波状文の白象嵌がみられるが、きわめて不鮮明である。胎土は淡灰色のやや粗いもので、釉は薄目に全面施釉され灰緑色を呈する。残存部の内底には2箇所外底に2箇所の目跡がある。いわゆる李朝の粉青沙器といわれるものであろう。内外面に細かい貫入がある。47の底部は浅くえぐられ碁笥底風である。内底の中心に菊花文があり、その周囲に如意頭文を配した白象嵌がある。また菊花状文を配している。体部外面下位には1条の区画線が白象嵌されている。全面に施釉され全体に灰緑色を呈し、内面はやや空色気味である。内面に細かい貫入がある。底部に焼成時においた砂粒が全面に付着している。48の胎土は淡茶白色を呈し、砂粒を多く含んだ粗いもので、釉は内外面に厚目にかかり、やや緑色を帯びた灰白色を呈する。疊付部は施釉したのちに削り取ったためか無釉である。

黒釉陶器

椀(50~52) 50・51は高台見込みを若干削出している。ガラス質の釉を厚目にし、外面体部下半は露胎とする。いわゆる禾目天目といわれているものである。52の底部は平底に近いもので、外底はわずかにえぐられている。体部下半は露胎である。

茶入れ(53) 体部中位がわずかに張るものである。胎土は白灰色のやや粗い。外面はうすく鉄釉を施し、外底は露胎となる。底部には糸切り痕を残す。

壺(54) 口縁部を玉縁状にした壺である。胎土は暗赤色で、砂粒を多く含む。焼成は堅緻である。若干茶色味をおびた黒色の釉をかける。

安南陶器

49は底部と体部の一部が残存している。胎土は淡黄白色を呈す。白化粧し、透明釉はほんのり霞がかかった様でやや黄色をおびている。内底の鉄絵の文様は茶褐色をおびた薄墨色を呈している。外面の体部にも鉄絵の圈線がある。外底は鉄渋を塗り、茶褐色を呈している。

黒灰色土層出土土器・陶磁器（第30～36図、図版36～41・44・45、別表）

土師器

皿 a（9～11） 9・10と大形の11の2種類がある。前者は口径8.4・8.8cm、器高1.4・1.3cm、底径5.6・7.3cmである。後者は口径11.4cm、器高1.4cm、底径6.7cmを測る。3点ともに、外底には板状圧痕、内底にはナデがある。

皿 b（1～8） 口径6.5cm～8.1cm、器高1.5cm～2.0cm、底径3.7cm～5.6cmである。全て内底にナデ仕上げがあるが、1・7・8だけに板状圧痕があり、他はない。なお、4・8の器面には煤が付着していることから、灯火器として使用されたことが知れる。

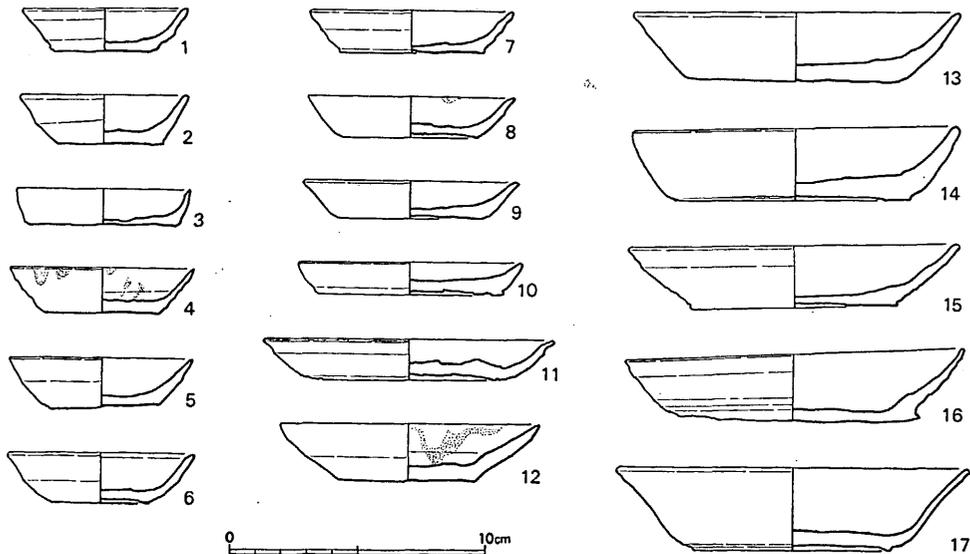
皿 d（12） 口径10.0cm、器高2.2cm、底径5.3cmを測る。器面に煤が付着し、灯火器として用いられたと推知できる。

杯 a（13・14） 口径12.7・12.8cm、器高2.7・2.8cm 底径8.2・9.3cmである。

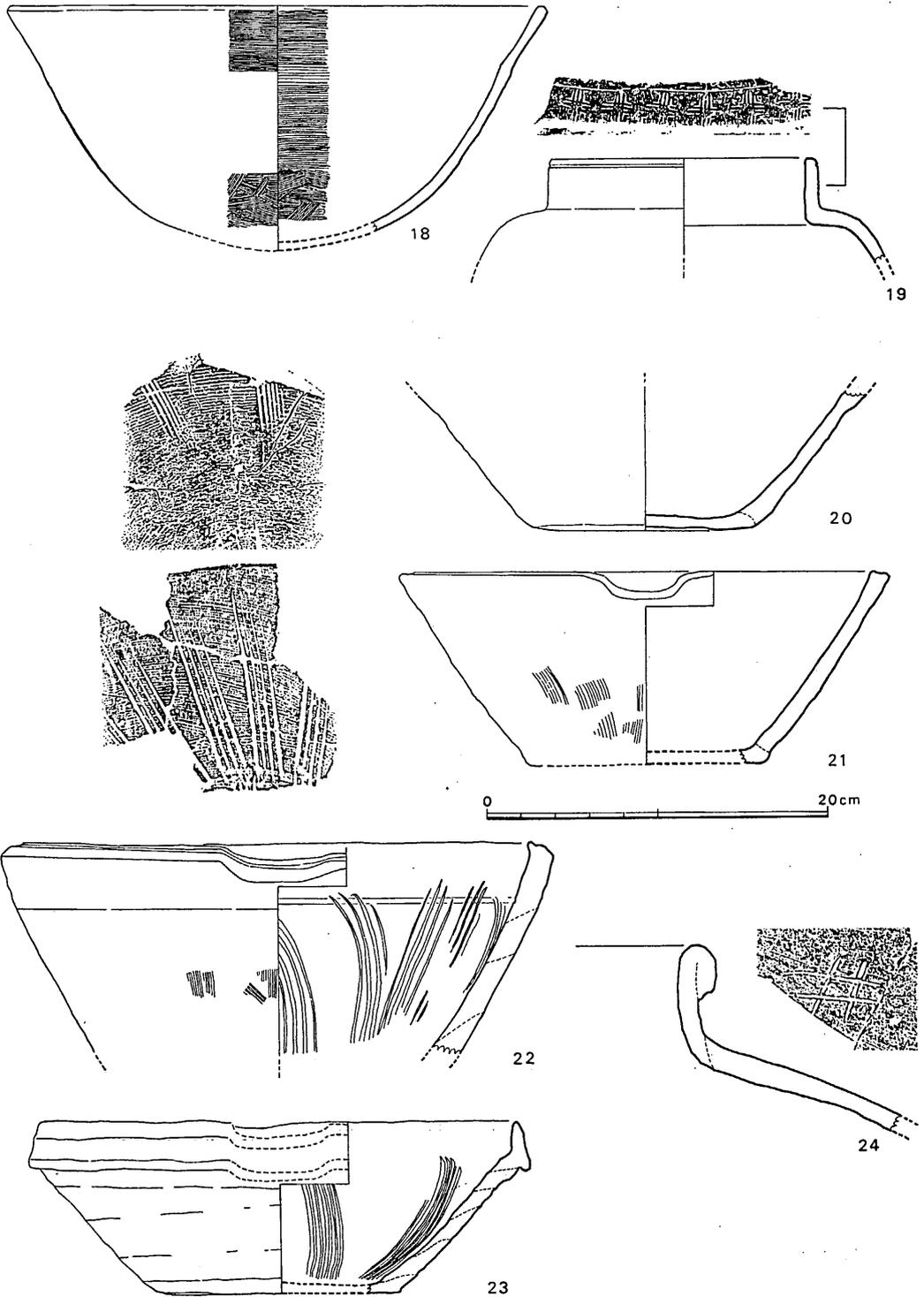
杯 b（15～17） 口径12.9cm～13.8cm、器高2.4cm～3.2cm、底径7.6cm～7.9cmである。

鍋（18） 口径31.8cmを測る大形の鍋で、内外の大部分は刷毛目調整であり、殊に底部付近は丁寧に調整を行っている。また、体部外面中位はヨコナデ・ナデ仕上げ風である。外面には煤が厚く付着している。

壺（19） 軟質で淡乳赤色を呈し若干砂礫を含むが、比較的精良な胎土を有する茶釜風のも



第30図 黒灰色土層出土土器・陶磁器実測図 (1)



第31图 黑灰色土層出土土器・陶磁器実測図 (2)

のである。口縁部には1条の沈線と直交ぎみの直違文が押印されている。

摺鉢(20・21) 20は体部上半を欠失しているが、下半および底部の約3/4を残している。残存部から判ずると6本単位の筋目を全体に11入れている。体部内面下半部は筋目および刷毛目痕を残さない程に磨滅している。外底部および体部下位に煤が付着し、また、器面の一部には火熱を受けてはじけ、かつまた、内面の一部に炭化物が付着している。このことから、この容器は磨った後か、または磨りながら火にかけ、使用した姿を想定できる。21は復原すると口径28.6cm、器高11.3cmとなる。外面は体部下半に荒い刷毛目の一部が残る他は、指頭圧痕が乱雑に残っている。内面は体部下半が若干磨れている程度で刷毛目および4本単位の筋目が明瞭に残っている。また内底面にも筋目を入れたと考えられ、その一部が残存している。内面の一部には焦げ付きが認められ、20と同様に煮沸用器として使用されたことが推知できる。

陶器

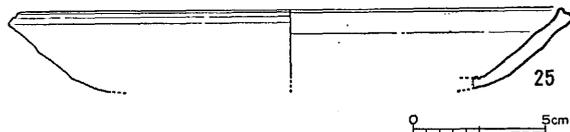
摺鉢(22・23) 22は復原口径32cmを測り、4本単位の筋目を入れ、赤褐色に焼成された摺鉢である。外面の刷毛目調整はヨコナデ・ナデにより大部分は消されている。体部上位は内外同時にヨコナデし、口縁部を造っている。体部下半はよく磨れており、刷毛目が消えかかっている。胎土中には大粒の砂礫が多く入っている。23は前回報告したもの(暗茶色土層出土)であるが、本次の調査により破片が出土し、接合した結果、体部が約1/2程になり、かなり正確に法量が知れるようになったので、再報告する。口径27.1cm、器高10.0cm、底径13.7cmを測る。粘土紐を巻き上げ、指押えおよびヨコナデだけで成形されたもので、6本単位の筋目を7・8個所入れている。体部下半はよく磨れ、ヨコナデ痕はほとんど消えている。胎土中に砂礫を多く含み、暗赤褐色に焼成されている。なお、外面口縁部下に重ね焼きの痕跡(色調の変化)が明瞭に観察できる。22・23ともに備前焼の摺鉢と考えられる。

甕(24) 粘土紐を指押えしたのち刷毛目調整、更に内面へら削り調整を行っている。口縁部は粘土を折り曲げて玉縁状にしている。胴部上位に「井」のへら記号がある。胎土は砂礫が少く比較的精良である。体部は黒色を呈し、体部上位および口縁部上面には灰を被り、黄色の斑点が浮き上がっている。備前焼であろう。図版44-aも24と同様な焼成である。

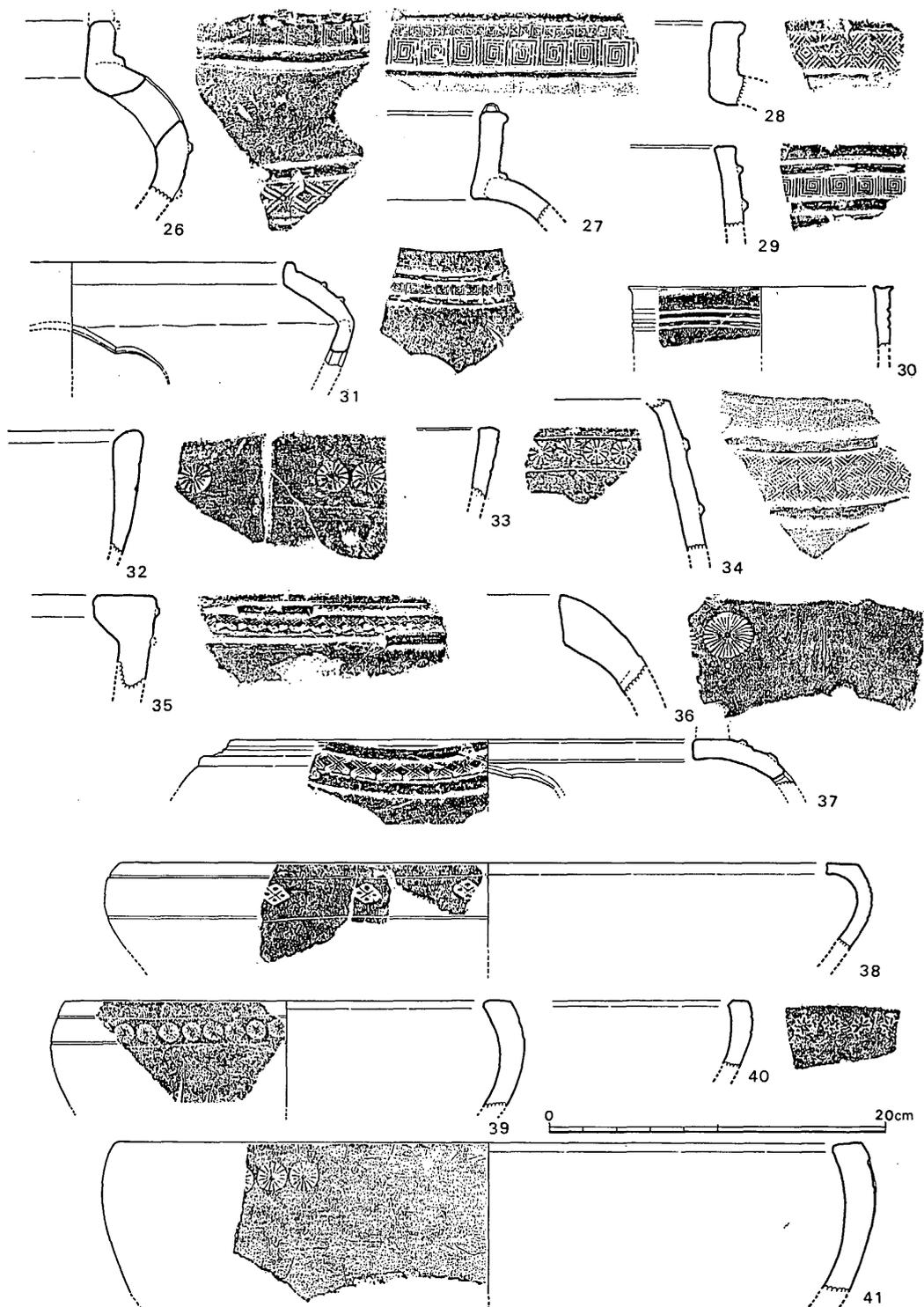
下ろし皿(25) 縦横に引かれた下ろし目の一部が残っている瀬戸の産と考えられる下ろし皿である。小片からの復原なので正確な口径は測り得ないが、略20.4cm前後と考えられる。灰白色を呈し緻密で砂礫を含まない胎土に、細い貫入の入った淡黄緑色の灰釉が残存部全面に掛けられている。

瓦質土器

鉢(26~41) 26~28の口縁部は直立する。26は体部上位に透しを入れ、口縁部に雷文、体部中位に2条



第32図 黒灰色土層出土土器・陶磁器実測図(3)



第33图 黑灰色土層出土土器・陶磁器実測図 (4)

の突帯を貼布し、その間に二直違文を押印している。27は口縁端上に小突起を貼布し、口縁部外面に升文に直違文を入れたものと、雷文を押印している。28は口縁部だけの破片で、そこに押印された文様は一見升文に見えるが、原体は直違文である。30は体部上位で屈曲し、口縁部を低く直立させ、体部屈曲部下に葉状文の透しを入れている。そして、体部屈曲部直上に2条の突帯を貼布し、その間に二升文に直違文を入れた文様を押印している。29・30・32～34は体部が若干内傾・外傾するが略直に近く立つものである。29は2条の突帯間に雷文、30は3条の沈線の下に23弁菊花文、32は16弁菊花文、33は2条の沈線間に13弁菊花文、34は直違文を上下2段にそれぞれ押印している。30は26～28のように口縁部を直立させるタイプに属するかも知れないが、小形の鉢とも考えられる。32は直立した体部に棒状のもので外部から押圧し、瓜形状としている。33は淡赤色を呈し一見土師器風であるが、一部に燻された跡が残存しており、そこで瓦質土器として判断した。35は多角形おそらくは方形になると考えられる鉢で、口縁部直下に2条の突帯とその間に二直違文を押印している。36～41は体部を内彎させる。36は体部上端近くに、32弁菊花文、37は直違文、38は四菱文、39は2条の沈線間に16弁菊花文、40は8弁菊花文、41は16弁菊花文を押印している。36・37の体部には葉状文の透しが入る。37は口縁端上に突起物の剝離した跡があり、内面には比較的厚く物が付着しており、火鉢として使用されたことが推知できる。

白磁

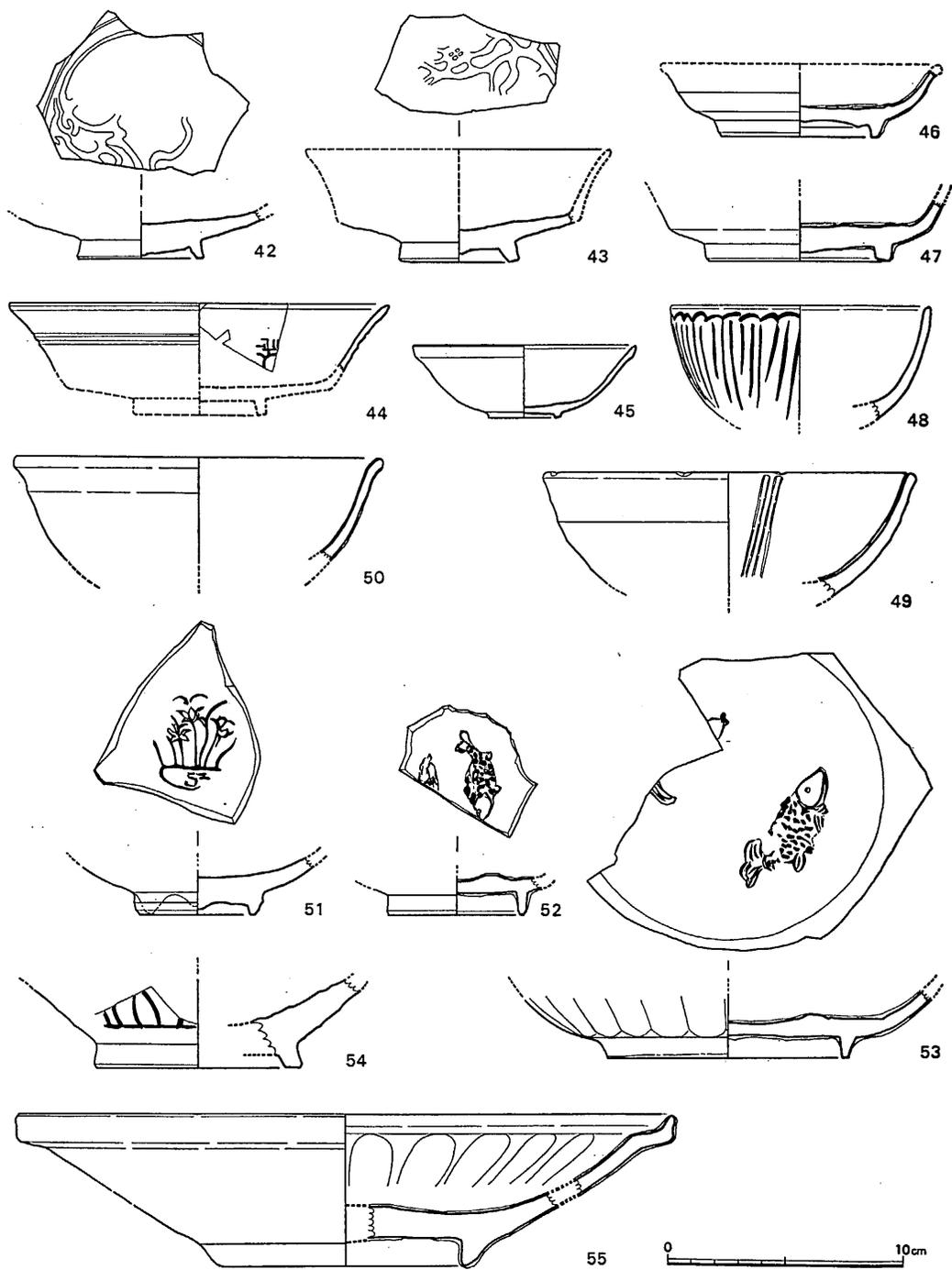
皿(42) 高台を削出す際、カンナの角度を変えているもので、高台の厚さはこの種の白磁にしては薄い。白色緻密な胎土(露胎部分は淡赤色を呈する)に若干青味を帯びた淡青白色の釉を、高台畳付以内を除いて全面に掛けている。また釉には貫入がある。この釉下に花文様の印文があるが、不透明な釉のため文様は明らかでない。高台畳付の一部、および、高台内側に砂が焼き付いている。

杯(43) 第57次調査で検出したものであるが未報告であったので、今回報告する。残存部内面端にわずかに屈曲する部分が残っていることから、復原図示したような杯形になるものと考えられる。白色緻密な胎土に粘性の強い淡青色の釉が掛けられ、そのため、見込み部分に押捺された印花文は不鮮明である。高台内側斜行する部分に砂が焼き付き、また、外底見込み中央部に高台削り出しの際に残る大きなヘソがある。この他に先述したものと同一の胎土・釉・印文からなる破片(図版38-a)が今年度の調査で出土している。

椀 器壁の厚さは底部付近で1.4cm内外を測る。鉢というべきかも知れない大形の椀の底部付近の破片が出土した。43と同一の胎土・釉である。体部内面に比較的明瞭な印花文が押捺されている(図版38-b)。

以上の白磁は一般に「枢府磁」と呼称しているものである。

壺 上下2段に分けて型造りされた後に接合し、印文を有する小壺である。白色緻密な胎土



第34图 黑灰色土層出土土器・陶磁器実測图 (5)

に若干青味をおびた透明釉が内外面に掛けられている（図版45—b）。

白磁

杯（44） 口縁部を露胎とする、いわゆる口禿げの杯で、白色緻密な胎土に青白色の釉が掛けられている。外面体部中位には上下2条の沈線、その間に挟まれた部分を隆帯状に表現した1条の帯が巡る。内面は雷文と蓮弁文を押印している。

椀（45） 口縁部および高台壘付以内を露胎とした小椀で $\frac{1}{4}$ 程度の小片であるが、復原すると口径9.5cm、器高3.1cmを測る。口縁部内側露胎部分と高台壘付部分は暗赤褐色に焦げ、また、底部見込み部分は赤褐色を呈する。胎土は白色緻密であるが、釉は失透性のある青白色を呈する。失透性の釉のため調整は不明瞭であるが、体部中位以下に回転の遅いヘラ削りが観察できる。

壺 粗い片切彫で花文様を描き出した小壺の破片である。胎土は白色緻密で、釉は濁色ぎみの青白色を呈する（図版39—a）。

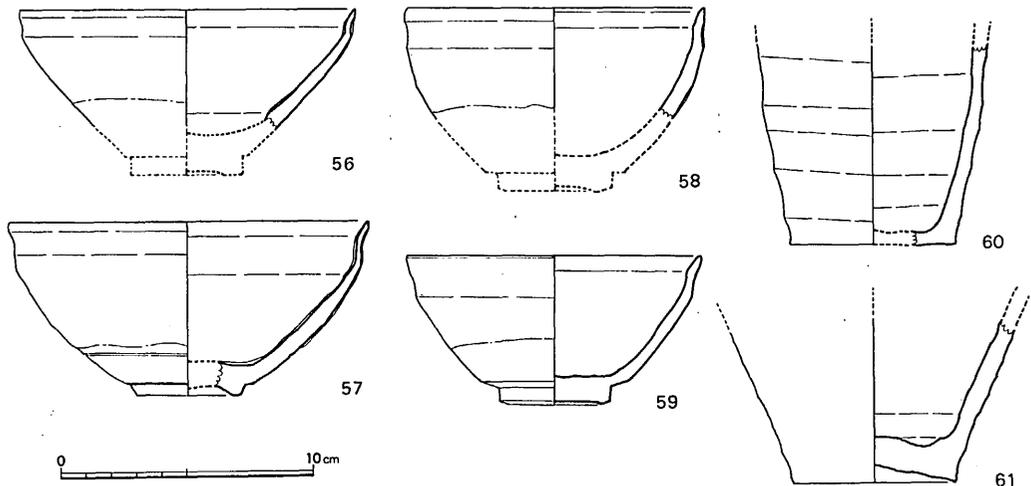
青磁

皿（46・47） 両者ともに内底中央部を円形状に釉をカキ取り露胎としたものである。46は高台削り出しの際、底部を再度削ることにより、見込み周辺に段が出来ている。また、高台端外面を回転ヘラ削りしているため壘付部分が狭くなっている。若干粗い灰色の胎土に黄緑色の釉が高台壘付部分まで掛けられている。47は、外底見込み部分にまで一部釉が掛かり、環状の焼台跡が釉に若干付着している。粗く、灰色を呈する胎土に、貫入のある淡灰青色の釉が比較的厚く施釉されている。胎土・調整・釉ともに悪く、粗製品といえるものである。第57次調査SD1428出土の破片と接合した。

杯（52） 高台壘付部分を露胎とした他は全面に青色を呈する釉を厚く掛けたもので、胎土は白灰色を呈する。内底に魚文を一對貼付している。また釉には大きな貫入を伴う。

椀（48～51） 48は復原口径11.0cmを測る小椀である。外面には2つを一単位とした山形文を入れ、その下に3本を一単位とした沈線を縦に入れてある。胎土は灰色を呈し、粗い。釉は濁黄緑色を呈し、細い貫入がある。49は内面に2本単位の沈線を入れ、口縁部に輪花を入れたものである。白灰色緻密な胎土に気泡の多い黄緑色の釉を比較的厚く掛けている。SK1655出土の破片と接合。50は口縁部を外反させ、端部を丸く肥厚させるタイプのもので、暗灰色の胎土に淡灰青色の釉が掛けられている。51は、内底に立花文をスタンプしたもので、高台は、端部外面を面取りしているため、壘付き部分は尖りぎみになっている。灰色の胎土に淡緑色の釉が薄く掛けられている。

盤（53・55） 53は52と同様に高台先端部を露胎とし、他は全面に緑青色の釉を厚く施釉されたもので、内底部に魚文が一對貼付されている。また外面に鑄蓮弁が削り出されている。胎土は白灰色を呈する。55は外底の釉を環状にカキ取り焼台受け部分を露胎としている盤で、体



第35図 黒灰色土層出土土器・陶磁器実測図 (6)

部内面に凹による蓮弁文様が描かれている。胎土は白灰色を呈する。釉は淡黄緑色を呈し、比較的厚い。

染付

碗 鉄により圈線を描き、その内にコバルトによる文様がある。胎土は灰白色、釉は乳白色を呈する（図版45-d）。

黒釉陶器

碗（56～59） 56は淡黄色の胎土で、黒色の釉は表面が荒れて粒状になり、光沢はにぶい。57は第57次調査で出土し、体部上半について報告済みであるが、本次調査で底部が出土したので再報告する。復原すると口径14.2cm、器高6.9cm、高台径4.0cmとなった。暗灰色の胎土に若干茶色をおびた黒色の釉が比較的厚く掛けられている。58は56と同様に暗灰色の胎土である。59は円盤状の高台を有し、内底はロクロ目が顕著である。胎土は淡黄色を呈する。釉面一面に小さな茶色の斑点があらわれている。外底に墨書があるが判読困難である。図版40-dは底部片である。高台は59と同様に円盤状に削り出されている。胎土は暗灰色を呈する。釉面には密に茶色の禾目があらわれている。

褐釉陶器

壺（61・63・64） 61は暗褐色の釉が薄く掛けられた小形の壺で、胎土は暗灰色ないし暗赤色を呈し、細い砂粒を比較的多く含む。63・64は同一個体と考えられる長胴大形の双耳壺である。口縁部は第57次調査 S D 1439 出土遺物として報告したが、今回この壺の破片が黒灰色土層から多数検出され、ある程度復原できた。少なくとも器高60cm以上になると推測される。内傾する口縁部に一条の突帯を巡らせ、体部との境いに細い沈線を入れている。胎土は暗灰色を呈

し、細砂粒を比較的多く含む。釉は黒茶色を呈する。破損した部分を漆で補修した痕跡がある。

黄釉陶器

盤(62)「丁」字形の口縁部を有し、平底になる盤で、暗赤褐色の胎土に薄く黄色の釉をかけている。口縁上面は施釉されず、そこに重ね焼きの目跡が残っている。

無釉陶器

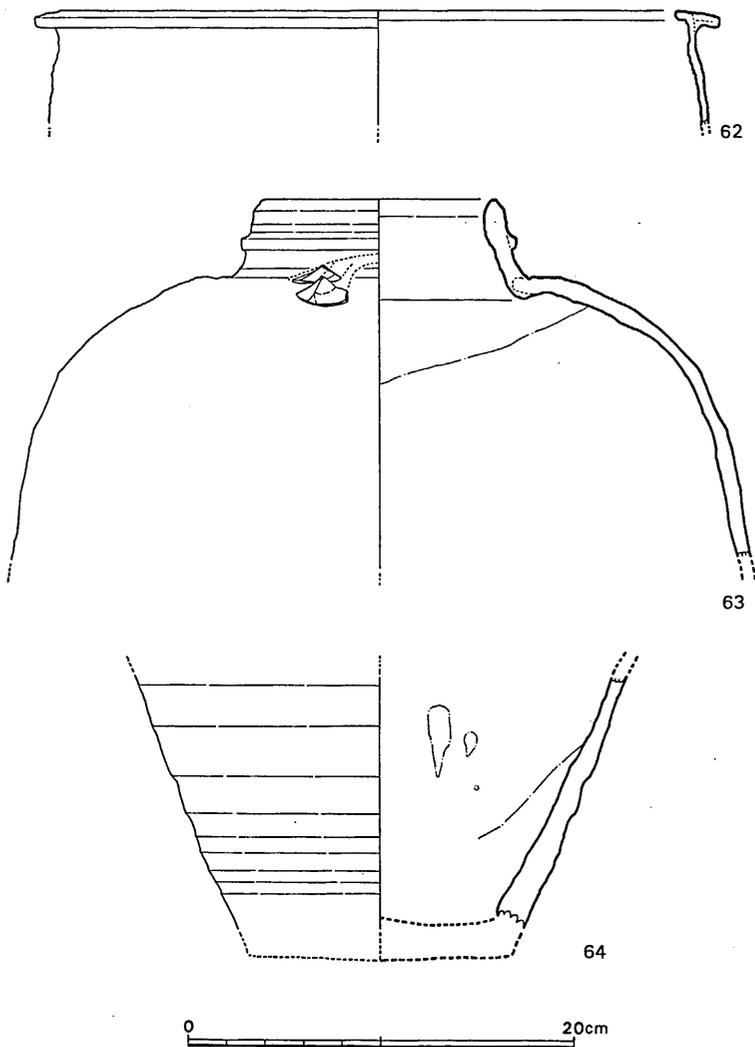
壺(60) 成形時の強いヨコナデにより、体部の凹凸が顕著なものである。外底部に不定方向のヘラ削り調整を行っており、また外底周縁部に焼台の跡が残っている。胎土は緻密で、砂粒はほとんど含まず、また焼成は堅緻である。

高麗青磁

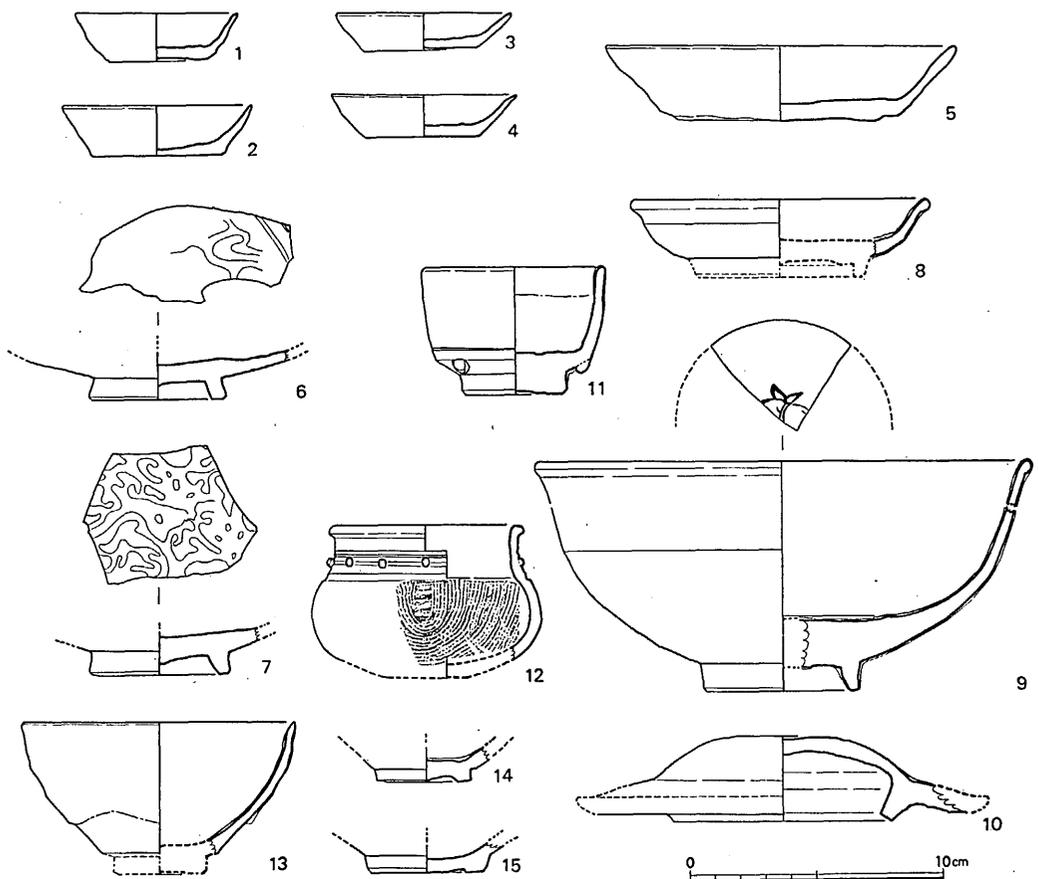
椀 SX1629出土の4、および整地層出土の16と同一の胎土・釉調・文様であることから、同一個体と考えられる(図版40-b・c)。

壺(54) 高台疊付を露胎とした以外は全面に施釉されている。白土を象嵌している。胎土は暗灰色を呈し、釉は暗灰緑色である。図版40-aは胴部片で、文様を白と黒で象嵌している。胎土・釉調ともに54と相似している。

安南陶器



第36図 黒灰色土層出土土器・陶磁器実測図(7)



第37図 暗灰色土層出土土器・陶磁器実測図 (1)

椀 口縁部を端反にするタイプのものである。灰色の胎土に、若干黄色味を帯びた透明釉が掛けられ、貫入を伴う。外反する口縁部内面の釉下に鉄で絵が、外面には一条の線が描かれている (図版45-c)。

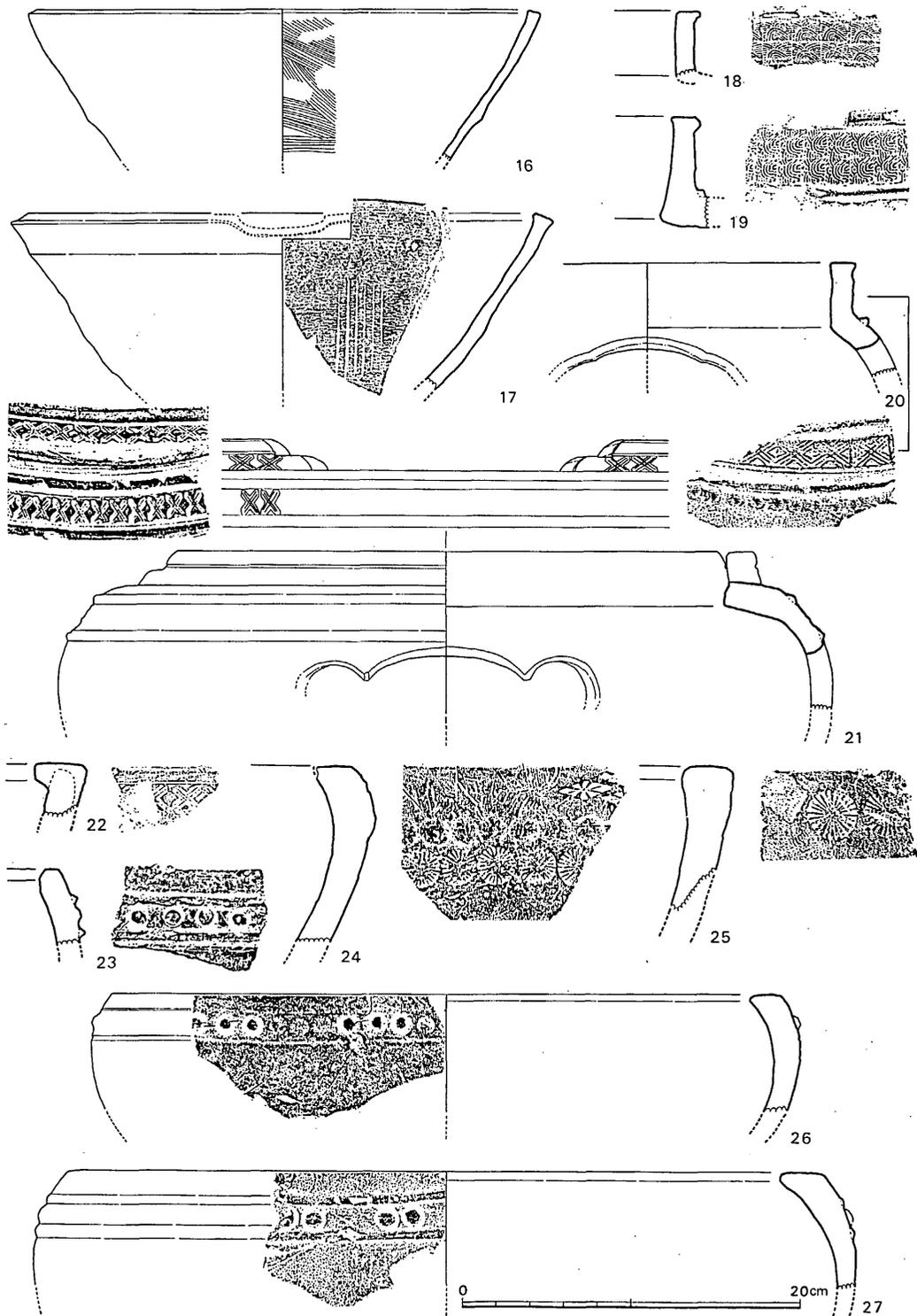
暗灰色土層出土土器・陶磁器 (第37・38図、図版42・43・45、別表)

土師器

杯 a (5) 口径13.4cm、底径8.2cm、器高3.0cmである。

皿 b (1~4) 1・2と3・4の2種類あり、前者は口径6.3・7.2cm、底径3.9・5.2cm、器高1.8・2.0cm、後者は口径6.8・7.2cm、底径4.4cm、器高1.5・1.7cmである。

鍋 (16) 17のような摺鉢の形態を有する土製の鍋で、復原口径30.0cmを測る。内面は下から上へ刷毛目調整を行っているが、外面は器面が荒れ、また厚く煤が付着しているため調整は明らかでない。胎土は暗茶色を呈し、小さな砂粒を比較的多く含む。



第38图 暗灰色土層出土土器・陶磁器実測図 (2)

摺鉢(17) 6本単位の筋目を入れたもので、復原口径31.5cmを測る。体部下半はよく摺られ、筋目が消えている。また、内面から口縁端にかけて焦げ付きが観察できる。胎土中の砂粒は比較的少く、また焼成は良好で淡灰茶色を呈する。

瓦質土器

鉢(18~24・25~27) 18~21は口縁部を直立するもので、18・19は口縁部に波状文、20は口縁部に二直違文、体部上位に15弁菊花文を1個づつ押印している。21は口縁部に2段からなる切り込みを2箇所入れ、2分割している。また20・21は体部に葉状文の透しを入れている。22・25は方形の鉢である。22は口縁部内外に粘土を貼付し、特に内側を突帯状にしたもので、体部上端近くに沈線と二直違の文様を押印している。25は体部外面上端近くに24弁菊花文を押印している。23・24・26・27は体部を内弯させるもので、23は突帯間に珠文、24は最上段に4つの単位からなる菱形文、中段に珠文、下段に25弁菊花文を押印・貼付している。26は2条の沈線間に珠文と菊花文を3個、27は突帯間に珠文と菊花文を2個づつ配している。18・20・21の内面には煤が付着している。特に21は体部内面上端近くは火熱を受け器面が著るしくはじけている。このことから少くともこの3点は火鉢として使用されていたことが知れる。

白磁

皿(6・7) いわゆる「枢府磁」「枢府窯」といわれているもので、若干青味をおびた乳濁色の釉が、高台畳付以内を除いて施釉されている。この透明度の低い釉のため、内面に押印された文様は不鮮明で、その形状はあまり明らかでない。高台内側は斜めに削り出され、高台内見込み中央部分に突起が残っている。高台畳付および高台内側斜面に砂粒が焼きついている。砂を焼台として使用したためであろう。また胎土は灰白色を呈し、緻密である。

壺蓋 陶范により製作された小壺の蓋で、天井部に16弁菊花文が施されている。白色の胎に若干黄色味をおびた透明釉を施釉している(図版45-a)。

青磁

皿(8) 体部から口縁部にかけての小片から復原したものである。口縁部は丸く肥厚し、内面の体部と底部との境いは不明瞭ながら段を有する。体部外面は回転ヘラ削りで調整されている。白色に近い胎土に、淡緑黄色の釉が施されている。器形の特徴から内底の釉をカキ取り露胎としたタイプになるものと考えられる。

椀(9) 同一個体と考えられる破片が、暗青灰色土層から出土しており、それと合わせて復原した。体部中位から下方は丁寧な回転ヘラ削り調整がなされ、内底には環状の沈線を入れ、その中に花文をスタンプしている。暗灰色の緻密な胎土に、暗緑色の釉が比較的厚く全面に施釉されている。全面に施釉された釉を高台見込部分だけは環状にカキ取っている。この露胎部は赤褐色を呈し、焼台の小さな突起の跡が残っている。

壺蓋(10) いわゆる酒会壺といわれている壺の蓋である。胎土は灰色を呈し、緻密であ

る。外面の釉は比較的厚く、暗緑色であるが、内面は薄く淡青色を呈する。また、身受け部分は施釉されず、この露胎部分は淡い赤褐色を呈する。

香炉（11） 昨年度報告したが、その後の整理によって体部の一部が接合し、切立の香炉として復原できたので、再報告する。復原すると口径7.2cm、器高5.0cm、底径3.8cmとなる。内面および底部畳付部分は施釉されず、淡黄色を呈する。比較的厚く施釉された暗緑色を呈する釉には貫入を伴う。

黒釉陶器

椀（13～15） 13は口径10.8cmに復原できる禾目天目である。胎土は白色に近い灰色を呈し、黒色の釉が釉ダマリ部分を除いて薄く施釉されるが、口縁部にはほとんど釉はない。14は黒灰色の胎土、15は黄色味をおびた白色の胎土である。

褐釉陶器

壺（12） 口縁部を丸く肥厚させ、頸部に鋳状のものを貼り付け、体部に半同心円状の文様を櫛目で描き、内面に黒褐釉、外面に鉄渋のエンゴベを施しているもので、一般に褐釉擂座柳斗文小壺といわれているものである。鋳状の雷座は透明釉が施釉され、淡黄色を呈する。残存しているのは2個であるが、等間隔に配されたとすると12～13個程になる。口縁部・内底・肩部には灰がかかり、黄色の小粒が多く付着している。胎土は黒色を呈し、緻密である。断面に黒漆が塗られていることから、破損後補修して使用されたものと考えられる。

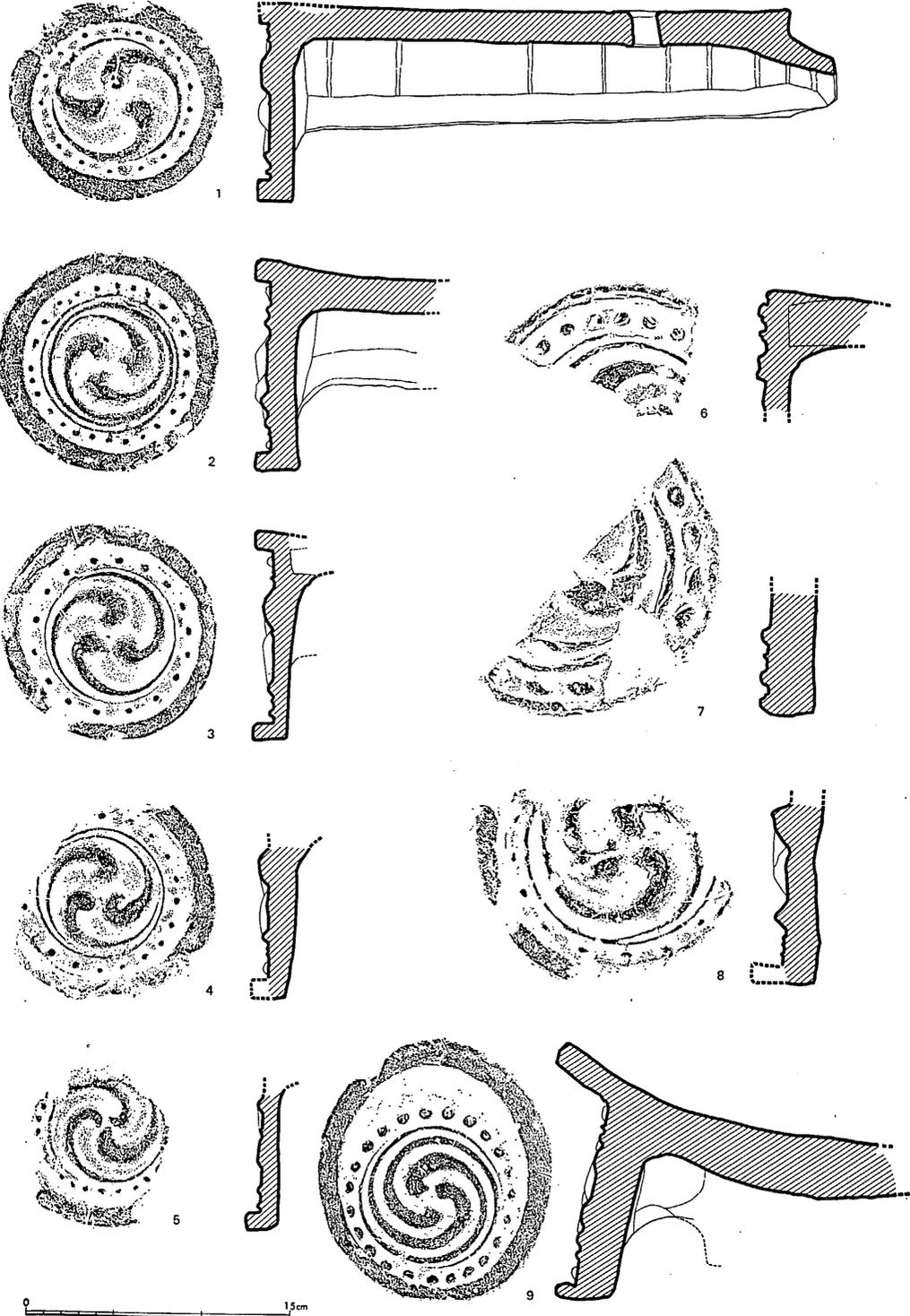
その他の層位出土土器（図版45）

床土から出土した特異な破片をここで報告する。鐙形の口縁を持つものである。小片であるため器形は明らかでない。体部内面に化粧土をかけ、その上から透明釉を施し、黄白色を呈する。内面には、暗灰色の圈線と、斜線文様がある。外面口縁部下は露胎で、体部上位には茶褐色の釉がかかる。胎土は白色を呈する（図版45-e）。

瓦類

今回の調査で出土した瓦類は軒丸瓦、軒平瓦、道具瓦、丸・平瓦がある。これらは調査区域全体に堆積した暗灰色土・黒灰色土およびS B 1590、1600の遺構上面を覆う黒色土、暗青灰色土から出土した。特にS B 1600を囲むS D 1444、1651、1653とS B 1600の北方S D 1641からは、かなりまとまった状態で出土したことは注目される。以下順を追って報告する。

軒丸瓦（第39図、図版46） 軒丸瓦は総数101点出土し、19種類に分類できる。その出土率は9と同一文様のものが全体の48%を占め、次いで1・2が16・17%で、他はわずか数点ずつである。1は瓦当径11.7cmで、内区は左巻きの三巴文である。頭部は丸味をおび、尾は1/3程廻るあたりで他の巴に接している。中心部に米粒程の珠文1を据えている。外区は小さな珠文17個を配し、周縁はやや幅広である。瓦当と丸瓦の取付けはやや高い位置で接合されており、瓦当裏面は丁寧にナデが施こされている。丸瓦はいわゆる玉縁式のもので、凸面は縦方向に丁



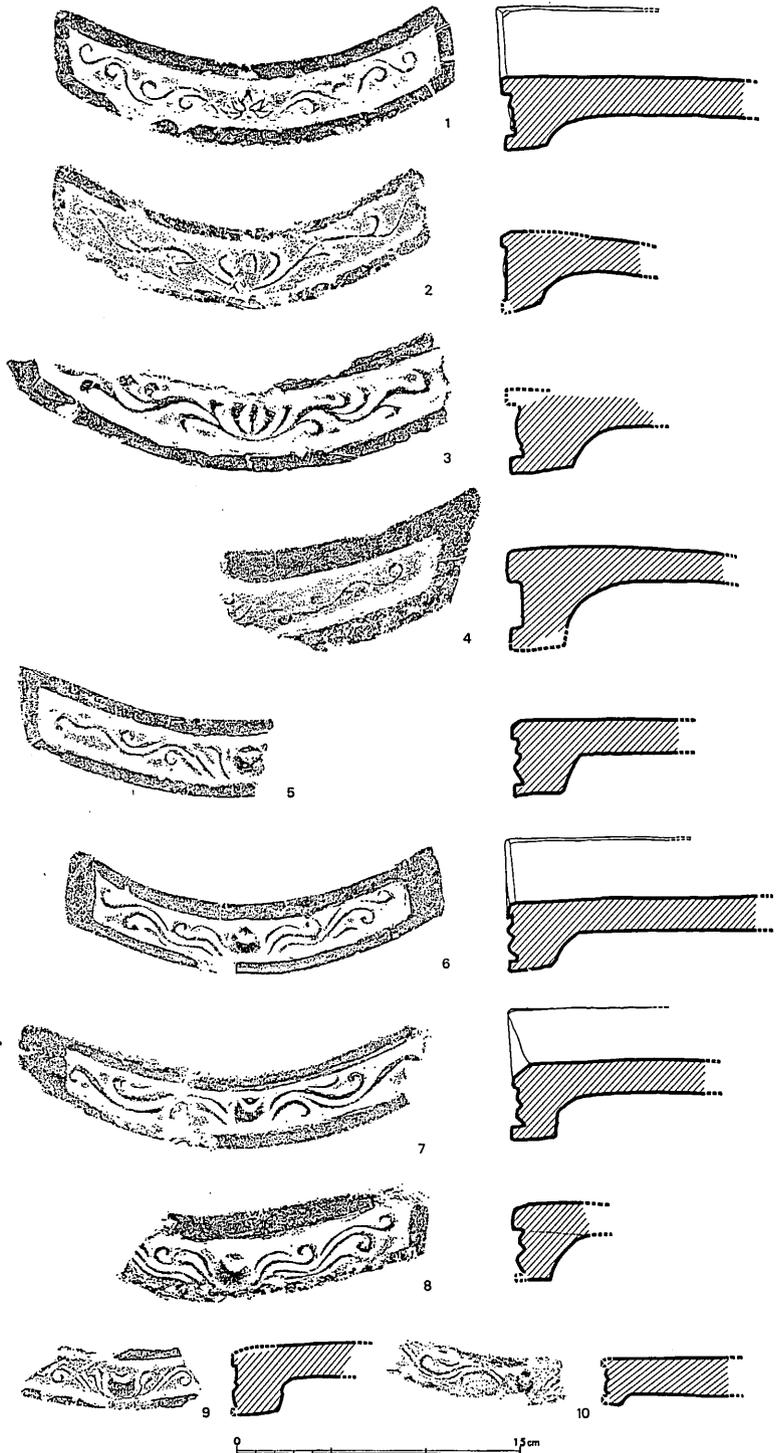
第39図 軒丸瓦拓影・実測図

寧にナデられているが、一部に縄目が残っている。凹面は細い布目で、瓦の主軸方向と直角に9～10本の紐状の痕跡が認められる。玉縁の先端から10.7cmのところの径約1.4cmの釘穴が穿たれている。2は瓦当径12.4cmで、右巻きの三巴文である。巴文の頭部は丸味をおび、尾は半周するあたりで他の巴と接続し、円周をつくっている。内区と外区は圏線で画され、外区の珠文は26個を配している。外縁は比較的高い。瓦当面に離れ砂の痕跡が認められる。3は瓦当径12.2cmで、右巻きの三巴文である。頭部は丸味をおび、中心部に米粒程の珠文1を据えている。尾は比較的長く3/4周するあたりで消失する。外区に珠文17個を配し、外縁は比較的高い。瓦当面に離れ砂の痕跡が認められる。4は右巻きの三巴文で頭部は3に類似しており、尾は半周するあたりで消失する。内区と外区は細い圏線で画され、外区には小粒の珠文を配する。周縁は高い。5は瓦当復原径約11.6cmである。頭部は尖り気味で、尾は長くのびており、古い要素を残している。他の瓦に比較してやや小ぶりである。外区に小粒の珠文を密に配し、外縁は低い。瓦当中心部で厚さ1.0cmである。6は左巻きの三巴文と思われる。観世音寺僧房跡（第43次調査）調査の出土例からみると、外側の尾部が内側の巴文の頭部よりさらに長くなっており、尾部は一周する。外区にはボタン状の比較的大きい珠文を等間隔に配し、外縁は低い。7は瓦当復原径約17.2cmである。右巻きの巴文で、頭部は接続しているものと思われる。内区と外区は太い圏線で画され、外区には隋円形状を呈した珠文を等間隔に配し、外縁の高さは内区巴文より低い。学校院跡（第38次調査）、観世音寺東辺部（第45次調査）の調査で出土している。8は左巻きの三巴文で、頭部はやや尖り気味である。尾は半周するあたりで他の巴と接続し、円周をつくっている。外区には小粒の珠文を配し外縁は比較的高い。出土例は観世音寺僧房跡（第43次調査）にある。図示しなかったが、9と同一文様を有する軒丸瓦があり、それは瓦当径14.5cmで内区は左巻き三巴文で、頭部は丸味をもち、尾は長くのびほぼ一周する。外区には珠文23個を配し、外縁は高い。今回出土した軒丸瓦の中で最も出土量が多い。

軒平瓦（第40図、図版47）

軒平瓦は、出土点数70点で、5型式10種類に分類できる。その出土率は1が全体の69%を占め、8・9が各々9%、他はわずか数点ずつである。1は内区に半載菊花状の中心飾を配し、左右に4回反転する唐草を配している。外縁はやや低い。瓦当幅20cm、瓦当厚3.8cmである。顎は曲線顎で、丁寧にヘラ削りが施こされ、平瓦凹面はナデによって調整されている。胎土は砂粒を多く含み、焼成は硬質である。2は瓦当幅19.8cm、瓦当厚4.5cmで逆U字形の中心飾を配する。唐草は左右に1本の蔓草がのび、途中上・下に各々1本の子葉が派生している。顎は曲線顎でヘラ削りを施こしている。出土例は学校院跡（第38次調査）にある。3は山字形の中心飾を配し、蔓草は中心飾から独立して、左右に二つの波形をつくり、先端は二波目で上向に巻込む。顎は曲線顎で、丁寧にナデられている。外縁は比較的高い。瓦当面に離れ砂の痕跡が認められる。4は木葉形状の中心飾を配し、蔓草は右に3回反転するが、3転目は1つの波形

をつくり、上向に深く
 巻込んでいる。外縁は
 幅広く、高い。5は内
 区に宝珠形の中心飾を
 配し、左右に唐草を配
 しているが、先端は波
 形がゆるくなり、蔓草
 は下向きに巻込んでい
 る。外縁は低い。顎は
 段顎風である。6は宝
 珠形の中心飾から左右
 に3回反転するが、2
 転目の蔓草は中心飾か
 ら派生している。瓦当
 幅20cm、瓦当厚3.7cm
 で、脇区幅が広い、顎
 は曲線顎である。出土
 例は学校院跡（第38次
 調査）にある。7は丸
 味をおびた宝珠形の中
 心飾を配し、左右に3
 回反転する均正唐草文
 である。唐草は他の軒
 平瓦に比べ蔓草が長く、
 シャープな流れを有
 ず。又脇区幅が2.7cm
 と幅広く、他に例を見
 ない。顎は曲線顎で、
 平瓦凹凸面はナデによ
 って仕上げている。8
 は6と文様構成を同じ
 くするものであるが、
 6は中心飾から脇区ま



第40図 軒丸瓦拓影・実測図

での幅8.3cm外縁幅1.8cmに対し8は9.2cm、外縁幅0.9cmとそれぞれ異っている。瓦当面に離れ砂の痕跡が認められる。9は宝珠形の中心飾の左右に二本の子葉が配されている。唐草は左右に一本の蔓草が派生し、先端は上向に巻込んでいる。瓦当厚が3.4cmで他の瓦に比較して狭小となっており、外縁の幅も狭く比較的低い。顎は曲線顎である。10は小さな宝珠形の中心飾を配する均正唐草文であるが、全体の文様構成については明らかでない。顎は曲線顎である。

丸・平瓦

今回出土した丸・平瓦は大部分が破片であり、完形品はわずか数点である。丸瓦はいわゆる玉縁式のもので、全長31.5cm前後である。凸面は縄目の叩きを丁寧にすり消しているが、所々に縄目が残っている。凹面は比較的細い布目である。丸瓦主軸方向に直角に9～10本の紐状の痕跡が認められるものがある。側面は丁寧にヘラによって整形している。平瓦は全長27.5cm、中央部幅19.8cmで比較的小形である。凹凸面ともナデによって調整され、側面はヘラ削りによって整形されている。平瓦は丸瓦に比較して胎土中に砂粒が多く含まれている例が多い。

道具瓦

道具瓦には、鬼瓦、熨斗瓦、雁振瓦がある。鬼瓦は4種類あり、このうち保存状態の良好なもの3点について報告する。

鬼瓦（第41図、図版48）

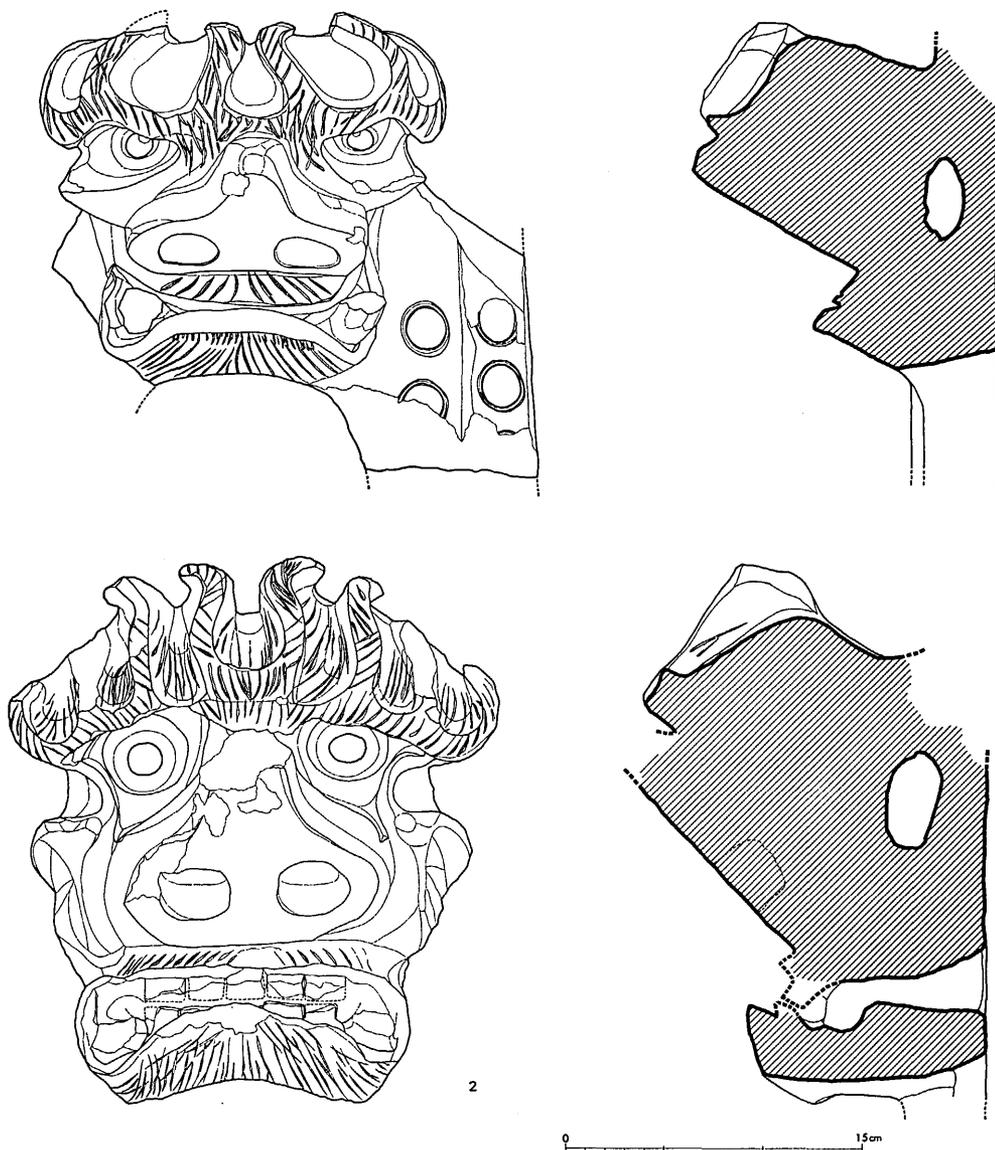
3点ある。いずれもSB1600の東北隅付近から出土したものである。鬼面部は粘土を盛り上げ、立体的につくっている。1・2は同じような形相を呈するが、まず1は眼のすぐ上から上方にのびる蕨手状の隆起帯を左右対称に3本ずつ作り、ヘラで細い線を上下方向に陰刻し、頭髪をあらわしている。眼はやや目尻が下った菱形のくぼみに円形の眼球を付している。鼻は扁平で、大きく左右に張り出した鼻翼に正面に向かって大きな鼻腔を穿っている。口は大きく耳もと近くまで裂け、下顎から上方に向かって一対の牙がある。門歯は表現されていない。上・下の顎には陰刻線を入れ、髭をあらわしている。外縁部はほとんど欠けているが、左側の脚部が一部残っており、竹管状のものによる扁平な珠文が配されている。

裏面中央部は幅約4.0cmほどを残して左右から粘土を削り、取り把手を作り出している。胎土は砂粒が比較的少く、精良である。SD1641出土。2は1よりもひとまわり大きい。外縁部はすべて欠失しており、鬼面部のみを残している。頭部は1と同様に眼のすぐ上から上方にのびる蕨手状の隆起帯を左右対称に4本ずつ作り、ヘラで細い陰刻線を入れて頭髪をあらわしている。眼は一段低くなったくぼみに直径4.0cmほどの粘土を饅頭形に盛り上げ、その中央に孔を穿って瞳をあらわしており、いわゆるどんぐり眼をなす。鼻は左右に大きく張り出した鼻翼に大きな鼻腔を穿っている。

鼻の両脇には粘土を盛り上げ、骨ばった頬をあらわしている。口は大きく裂け、上下に5本ずつの門歯がある。その両脇には下顎から上方に向いた牙があるが、どちらも欠失している。

顎には陰刻線による髭があらわされている。裏面はヘラで両脇を大きく削り取り中央部に把手を設けている。この把手の直下には直径3.0cmの孔が穿たれており、前面の口の中に貫通させている。胎土は砂粒が少く精良である。暗灰色砂層出土。

図版48-3に示したものは平面形がアーチ形をなしているが、両脚部の外側面は大きく斜めに切り落している。鬼面部は粘土を盛り上げて立体的につくっているが、表面はほとんど剝離しており、形相をうかがうことは困難である。外縁の頂部には瘤状の突起がある。鳥衾を受け



第41図 鬼瓦実測図

るためのものであろう。外縁の両側には大きな刺突痕状のくぼみがあり、一種の文様ともみられるが、この部分はすべて粘土の剝離痕が観察されるところから外縁に沿って粘土を張りつける際の接着のための痕跡と考えられる。裏面は両側を大きく隋円形状に削り取り、中央に把手を削り出している。胎土は荒い砂を含んでいるが、比較的精良である。暗灰色砂層出土。

熨斗瓦

幅7.5cmで破片である。側面は丁寧にヘラケズリを行っている。胎土に砂粒が多く含まれており、焼成は硬質である。S D 1586出土。

雁振瓦（図版48—9）

第57次調査出土に比べ出土量は極めて少ない。全長32.9cm、幅18.5cmのもので、凸面は縄目の叩きを丁寧にすり消し、凹面は丸瓦部に布目が残っているが、平瓦部はナデによって整形している。また第39図—9は鳥衾に使用されたもので、軒丸瓦部と平瓦の接するところは、半円形に削り、丁寧にナデによって調整されている。表面は縄目の叩きを丁寧にすり消し、凹面はナデによって整形している。焼成は硬質である。

木簡（図版49・50）

木簡は、腐植土層から8点、土坑S K 1595から15点、土坑S K 1615から1点の合計24点が出土した。これらを形態別に分類すると、次のとおりである。

- (1) 長方形の材の上端の左右に切り込みを入れたもの……………16点
（このうち12点は方頭、他は圭頭）
- (2) 折損のため下端は明らかでないが、これと同じ形態と推定されるもの……………1点
- (3) 折損のため断定はできないが、内容的にみてこれと同じ形態と推定されるもの…1点
- (4) 長方形の材の上端の左右に切り込みを入れ、下端は折損しているが、現状からみて本来は尖らせていたと推定されるもの……………1点
- (5) 長方形の材の上端の左右に切り込みがあるが、下端は折損のため不明のもの……………1点
- (6) 用途未詳の木片に墨痕のあるもの……………2点
- (7) 折損によって原形が判明しないもの……………2点

以下、代表的なものについて報告する。

- (1) ・「さいふいつミの

たゆふとの

ち□とのにまいる」

- ・「□三郎一と」

(又カ)

腐植土層から出土したもので、長さ13.8cm、幅3.6cm、厚さ0.3cmである。「さいふいつミのたゆふとの」は「宰府（和）泉大夫殿」の意であろうが、「さいふのいつミ」は後掲の（4）にも見える。いわゆる付札の形態であり、裏面の「と」は斗の意と解されるが、その物品は明

らかでない。また下端近くの中央に孔が見られるが、穿孔の目的などは明らかでない。

(2) ・「志を五つゝらのうち

さ□□□あんにまいる」

・「□□□□」

腐植土層から出土したもので、長さ14.0cm、幅2.4cm、厚さ0.4～0.6cmを測る。「さ□□□あん」は草庵の名称と考えられるので、これは塩五葛籠の一部をさ□□□庵に進上した際の付札であろうが、さ□□□庵については明らかでない。

(3) 「まこ□□_(つるか)

これも腐植土層から出土した。下端は折損しているが、本来は尖っていたと推定される。現存長10.2cm、幅2.9cm、最大厚さ0.7cm。まこ□□_(つるか)は人名かとも考えられるが、断定はできない。裏面に墨痕は認められない。

(4) ・さいふのいつミの□

□ □ □

・三□□□□□_(のか)

腐植土層から出土した。上下両端とも折損しており、現存長10.1cm、幅2.0cm、厚さ0.2cmを測るが、原形は不明である。また表面左端は中央部以下が割れている可能性もある。前掲(1)と同じく「さいふのいつミ」とあり、両者は関連するものであろう。宰府(和)泉大夫とすれば、大夫と称しているのが、かなりの有力者と推定されるが、おそらくは通称であろうし、現在のところこれについての所見史料は見られないようであり、後考を俟ちたい。

(5) ・□_(まか)にのをけ□

たゆふとのに□ □

・くかたとの□_(にか)

まいる」

腐植土層出土。上端部が折損しているため原形は不明であるが、裏面に「まいる」とあることからみれば、付札的なものとも考えられる。現存長は9.6cm、幅3.8cm、厚さ0.4cmである。これでも大夫殿と見え、くかた殿は人名であろうが、詳細は明らかでない。「をけ」は桶のことであろう。

(6) ・「のりつらー

□

・「□

わ□

腐植土層出土。上端の左右に切り込みがあり、付札の一種であろう。現存長7.8cm、幅2.4cm、厚さ0.3cm。のりつらは人名と推定される。

- (7) ・「十貫文 ^{とう} 四郎」
・「□」

土塚 S K 1595 から出土した。長さ 12.7cm、幅 3.2cm、厚さ 0.2cm を測る。これと同類のものは、それと推定されるもの 2 点を含めて、他に 14 点を検出したが、十貫文と漢字で記しているのはこれのみであった。また他の 14 点では裏面に墨痕を認めることはできなかったが、これには認められる。ただし判読は不能である。

- (8) 「十くわんとう四郎」

長さ 13.3cm、幅 1.9cm、厚さ 0.3cm。

- (9) 「十くわんとう四郎」

長さ 11.2cm、幅 1.9cm、厚さ 0.4cm。

- (10) 「十くわんとう四郎」『二』

長さ 13.0cm、幅 2.0cm、最大厚 0.5cm。二は異筆で、これのみに見られる。

- (11) 「十くわんとう四郎」

長さ 13.4cm、幅 2.1cm、厚さ 0.2cm。

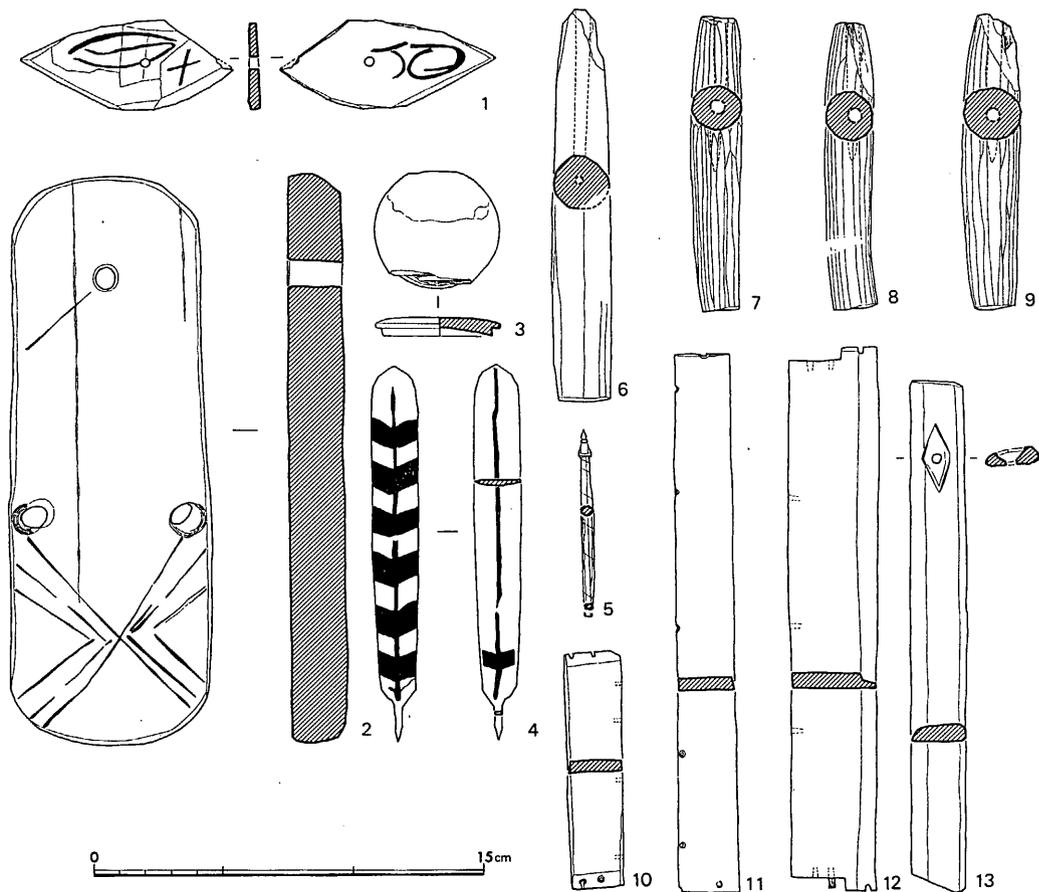
(8) ～ (11) はいずれも土塚 S K 1595 から出土したもので、この土塚からはほかに同形態で同文のものが 7 点、「『十くわ□』と「□う四郎』と判読できるものが各 1 点出土した。また土塚 S K 1615 から出土した 1 点もこれらと同形態で同文である。とう四郎は人名であり、これらは銭に付けられたものであろうが、単純にこれらの銭の額を合計すれば、140～50 貫というかなりの大金となる。それがとう四郎の所有とすれば、彼は 10 貫ずつに仕分けしているので、何らかの目的に使用しようとしたのであろうが、具体的なことは明らかでない。今回の調査では、土塚 S K 1595 から 266 枚、土塚 S K 1615 から 133 枚というように、宋銭を中心に合計 873 枚が検出されているが、これは (7) 以下の木簡の出土とも符合するものであり、とう四郎が関係した銭の一部かとも推定される。ともあれ、ここに大量の銭が集積されたのはいかなる理由ないし目的によるのかということは重要な問題であるが、現状では如何とも言いがたく、今後の課題である。

木製品

今回も比較的多数の木製品が出土した。前回の第 57 次調査で出土したものを合せると、かなりの量になる。これらは当時の生活様式を復原するうえにおいて貴重な資料といえる。これらは主に S K 1615 および S X 1630 から比較的多く出土した。以下各遺構、各層位別に報告する。

S K 1615 出土木製品 (第 42 図、図版 51・55)

木葉状木製品 (1) 厚さ 0.5cm の板材を加工したもの。片面は粗割りのままで、他面は小刀による削り痕が残る。ほぼ中央部に直径 0.4cm の円孔を穿っている。両面には墨痕が認められるが、何を表現しているのかは不明である。周縁は部分的に面取りを行っている。

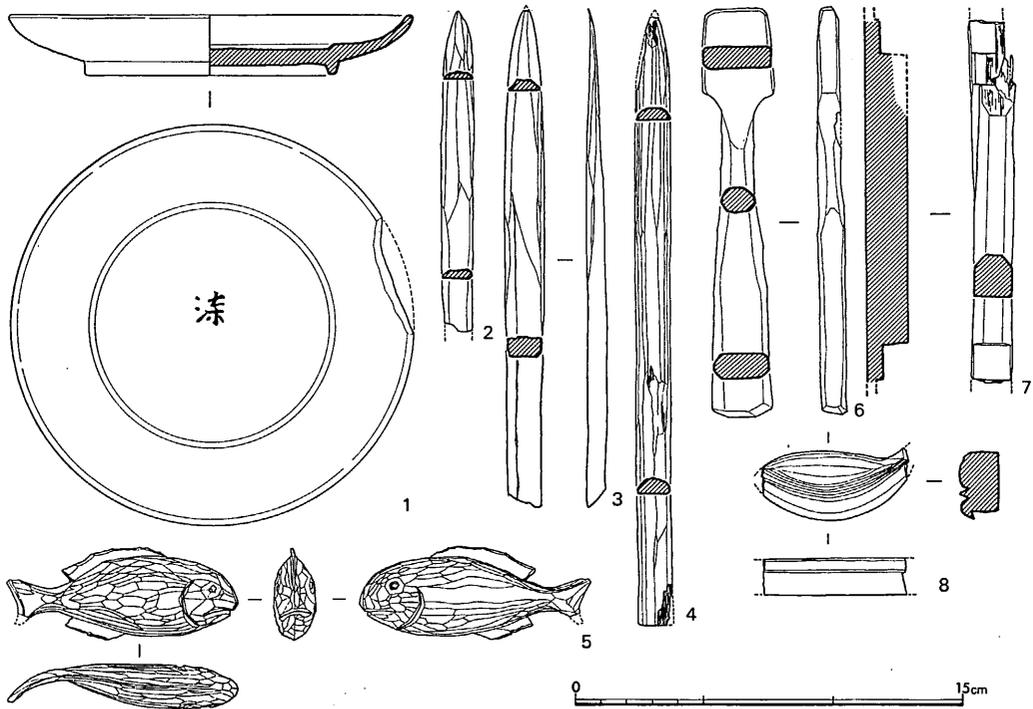


第42図 SK1615出土木製品実測図

下駄（2） 隅丸方形で、やや後幅が広い。鼻緒孔はいずれも黒く焼けており、焼火箸であけたものと考えられる。前壺は台の中心に穿たれている。台尻には手櫛掛けに焼火箸によると考えられる焼跡がある。裏面は全体が平均的に磨滅しており、歯の痕跡は見当たらない。木口は小刀で丁寧に削っている。板目材、長さ22cm、幅7.5cm、現存厚さ2.1cm。

漆蓋（3） 直径4.8cmの小形の蓋で、上面は頂部から縁部にかけてまるく削っている。下面は内挟りにし内弯させている。周縁に沿って身と合せるための段をつけている。全面に黒漆をかける。小形容器の蓋であろう。

矢羽根形木製品（4） 厚さ約0.2cmの薄い板材を矢羽根形につくる。表面は中央部をやや甲高にし、裏面は平たく削っている。下端部には先端を尖からした長さ1cmくらいの茎状のものを作り出している。両面は墨によって文様をほどこしているが、表面には、まず中央部に細い線をひいて左右を区画した後、先端部から約1cm間隔で墨の部分と白木のままの部分とを交互



第43図 整地層出土木製品実測図

に配している。裏面は中央部の縦線と下端部に一カ所墨を塗っているのみである。5の鍬形木製品と組み合うものであろう。長さ14.7cm、最大幅1.8cm、厚さ0.2cm。

鍬形木製品（5） 尖根形の鍬を模したもので、全長7.2cmの小形である。身は小さな三角形をなし、やや反っている。篋被と茎の区別はなく、中央部をやや大きくして荒く削っている。

錐柄（6～9） いずれもほぼ完形である。6はやや大形で柁目材を主軸方向に沿って削り、断面は楕円形をなす。端部は直線に切り落している。7～9は同じような形状をなしているが、木の枝を利用したものらしく、丸材の両端を切断した後、柄の軸に沿って丁寧に周囲を削って稜をつけており、断面は多面体をなしている。4本とも茎口は炭化しており、焼込んだものであろう。

組物部材（10～13） すべて厚さ0.5cmほどの柁目材を使用している。10は両端からやや内寄りに木目と直交して刃を入れ、その外側に各一対の木釘穴がある。そのうちの1個には木釘が残っている。片方の長側縁にも木釘穴が4個認められる。長さ9.2cm、幅2.0cm。11は10を長くしたもので、両端に1個ずつと片方の長側縁に沿って木釘穴が穿たれている。長さ21.0cm、幅2.0cm。12は両側の木口を切り欠き、それぞれ一対の木釘穴があり、そのうちの1個には木釘が残っている。片方の長側縁は切り欠きにし、他方は側縁に沿ってほぼ等間隔に木釘孔があ

る。長さ21.1cm、幅3.3cm。これら3個の部材は折敷の側板と考えられる。13は片面の二稜をまるく面取りし、断面をカマボコ形にしている。片方の木口は斜めに切り落としている。直線に切った方の木口から約2.5cmほどの所に菱形の彫り込みを入れ、その中央に直径0.3cmの孔を穿っている。桧扇の骨の可能性はある。

整地層出土木製品（第43図、図版53）

漆器（1） 口径15.5cmの高台付四で、口縁部がわずかに欠けているが、ほぼ完形である。外面は黒漆で底部に断面が梯形の高台を削り出している。内面は朱漆で中央部が一段低くなる。中央部に黒漆で「柒」と書かれており、少なくとも7枚以上のセットをなしていたものであろう。横木取り、柾目。

篋形木器（2～4） いずれも材の一端を剣先状にするもので、2・4は断面がカマボコ形をなす。2は下半部が欠けている。現存長12.5cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm。4は比較的丁寧に削っている。長さ23.7cm、幅1.3cm、厚さ0.6cm。3は下半部が粗割り面を残す。先端部は断面が台形をなす。末端は斜めに切り落とす。長さ19.4cm、幅1.5cm、厚さ0.7cm。

魚形木製品（5） 尾鱗の下端部を若干欠いているが、ほぼ完形で、作りはきわめて精巧である。板目の材を小刻みに削り出したもので、全面に削り痕を残している。目は周囲を円形に彫りくぼめ突出させている。背と腹の鱗は厚さ0.1cm足らずで、きわめて薄く削り出している。尾鱗をやや反らせて、いかにも泳いでいるような状況を表現している。

鋲状木器（6） 台形をなす身とやや幅の広い柄からなる。頸部は撥形にし、身近くの部分は削りを加えてやや細くし断面を円形に作っている。柾目で長さ15.8cm、厚さは身部0.8cm、柄部1.0cm。

組物部材（7） 一辺が1.5cm位の方柱状の柾目材の二稜を大きく面取りし、断面を台形にしている。両端は切り欠きを入れている。現存長14cm。

ブローチ状木製品（8） 両端をわずかに欠いているが、ほぼ完形に近い。厚さ1.5cmの板目材を木葉状に作り、表面中央部に弯曲した葉脈状の凸帯を削り出している。裏面は平面に仕上げているが、片方の側縁に沿って切り欠きを入れており、他の部材に嵌め込むようになっている。家具類の装飾品であろう。

その他の遺構出土木製品（第44図、図版52）

スタンプ状木製品（1） ややいびつな杉の角材を加工したものである。一方の木口は面を平らにした後、鋸で縦方向に4本、横方向に3本および対角線に切り目を入れている。台の上半部は斜めに削り、両側に方形の柄を削り出している。柄の上端部に取手をつけるための直径0.4cmの孔を貫通させている。S K1603出土。

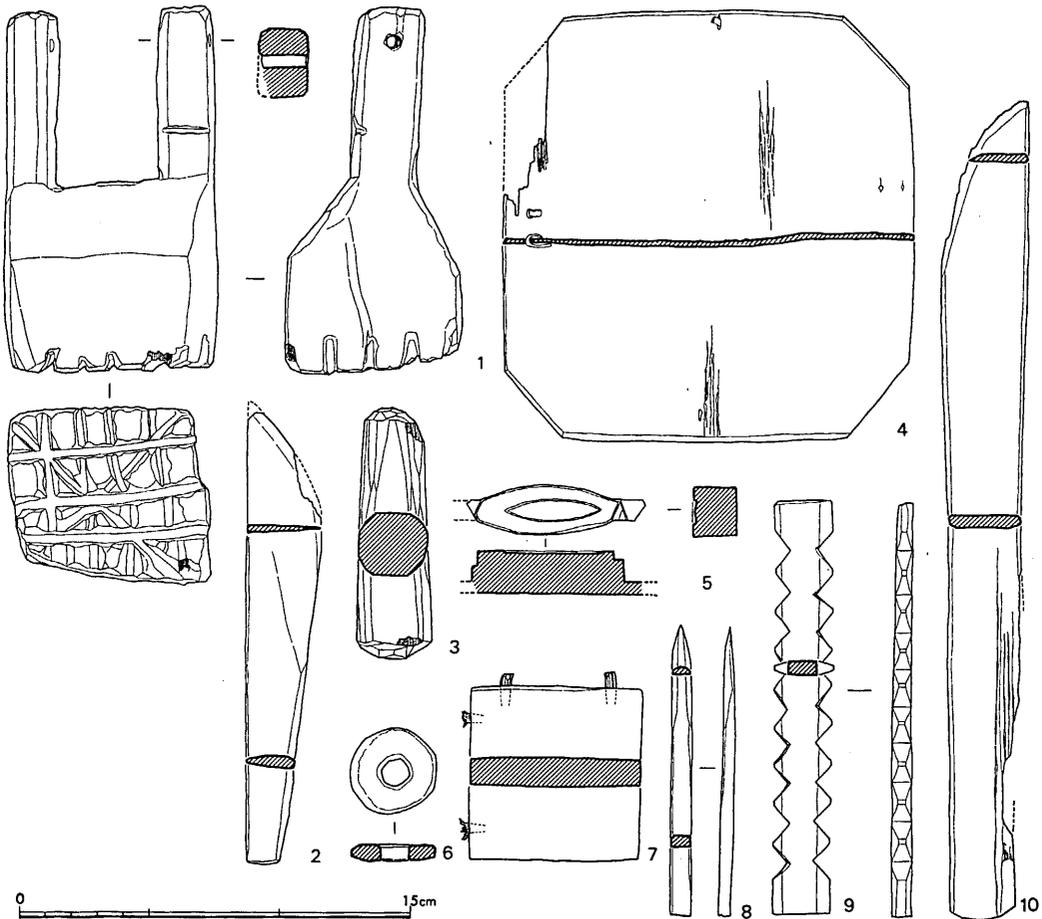
切出形木製品（2） 先端を切先状にし、刃をつけている。柄は下端部に向かってしだいに細くし、端部を直線に切っている。長さ17.2cm、厚さ0.5cm。S K1603出土。

摺子木状木製品（3） 一辺が3cm位の角材の一方をやや細くしたもので、細い方は断面が円形になるように丸く削っている。太い方は各稜を面取りし、隅丸方形に作る。両木口は丸味をもたせ、荒く削っている。長さ9.7cm、最大幅2.9cm。S D1452出土。

折敷底板（4） 一辺が15~16cmの柾目板材の四隅を切り落とし、八角形に作る。各辺はやや斜めに削っている。木目方向平行の2辺に一对のまた木目に直交する方向の辺には各1個の孔を穿っている。孔には桜皮を残すものがある。厚さ0.3cm。S D1452出土。

錐形木製品（5） 杉の角材を瓜実形につくり、下面の両端に短い突起をつける。突起は二段になっており、端部は斜めに削っている。上面は平面にした後、中心部を外縁と相似形に彫りくぼめている。家具類の飾りと考えられる。現存長6.5cm、最大幅1.9cm、厚さ1.6cm。S K1642出土。

有孔円板（6） 板目材を円形につくるが、ややいびつである。中央に直径1.0cmの孔を穿



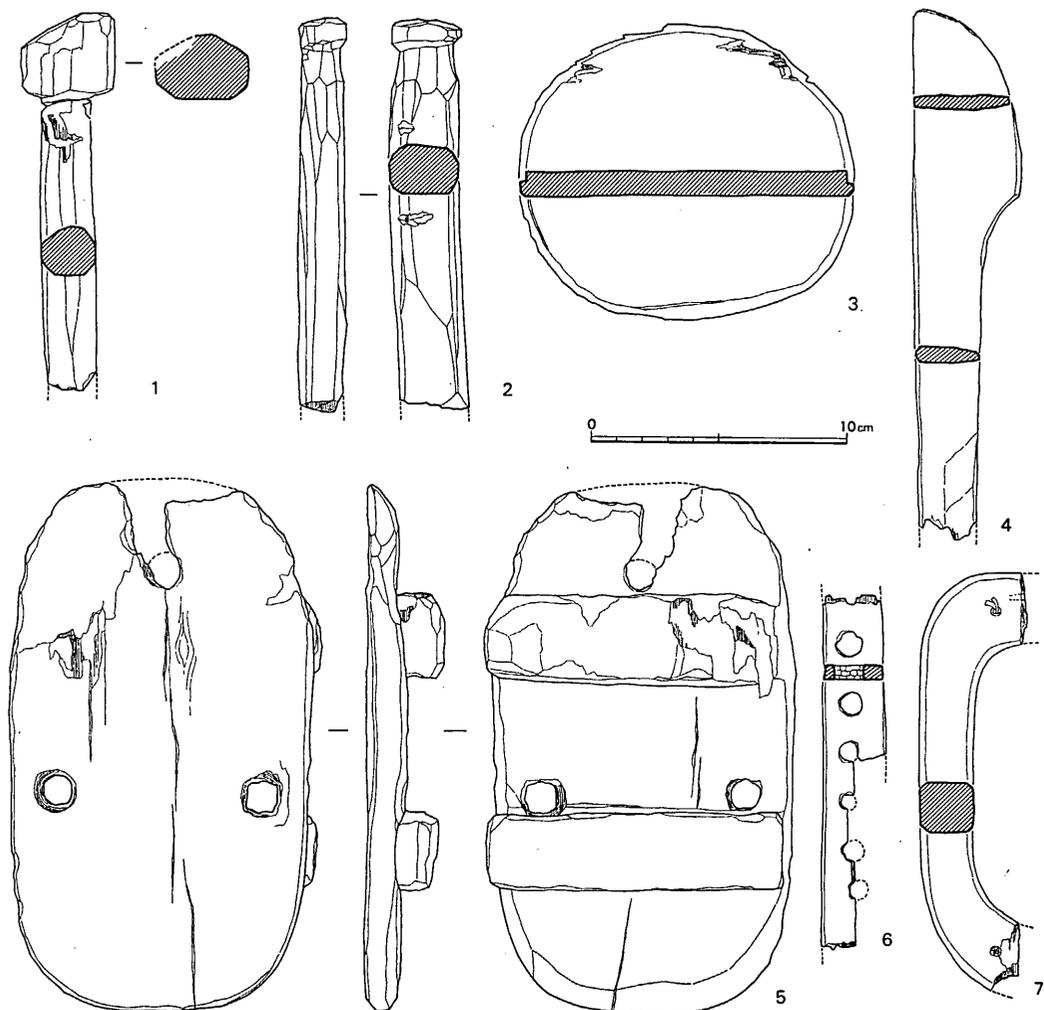
第44図 その他の遺構出土木製品実測図

っている。直径3.2cm、厚さ0.6cm、孔径1.0cm。S K1603出土。

方形木板（7） 厚さ1.1cmの柁目板材を一辺が6.5cmの正方形につくっている。隣り合う二辺には各々2個の孔をあけ、木釘をさし込んでいる。S K1605出土。

籠形木器（8） 柁目の板材を小さな方柱状に割った後、先端を剣先状に尖らせている。上面は先端から約3.0cmの所まで面取りを行う。裏面は割載面を残しているが、先端部のみは削っている。下端は三方向から小刀を入れた後、折り取っている。長さ11.3cm、幅0.8cm、厚さ0.5cm。S K1595出土。

鋸歯形木製品（9） 長さ16.0cm、幅2.2cm、厚さ0.6cmの細長い柁目の材の各稜をやや幅広く面取りし、断面を亀甲形につくる。両側は左右対称に上下から小刀を入れ、それぞれ9個



第45図 各層出土木製品実測図

ずつの鋸歯状のものをくり出している。両木口は直線に切っている。用途不明。S K1605—B 出土。

切出形木器(10) 杉の板目材を丁寧に削り、先端を切先き状につくる。刃は片側のみを削り、片刃にしている。柄は下端に向かってしだいに細くし、端部は丸く削っている。長さ31.6cm、最大幅3.2cm、厚さ0.5cm、S D1656出土。

各層出土木製品(第45図 図版54)

棒状木製品(1) 丸材を対応する二方向から削ってやや平たくし、その一端に周縁から荒く抉りを入れて頭部をつくり出している。下端部は折損しているため全長は不明である。現存長15.8cm、幅2.7cm、厚さ1.9cm。暗灰色砂質土層出土。

コケシ状木製品(2) 1と同様に広葉樹の材を削り、コケシ状につくる。柄は細く仕上げている。頭部は削りが荒く、頂部を斜めに切り落している。柄の下端部は切損している。現存長14.8cm。青灰色砂質土層出土。

蓋状木製品(3) 杉の板材を楕円形につくる。上面は周縁に沿ってまるく面取りしている。下面は周縁に沿って切り欠き、身と合せるようにしている。長径13.1cm、短径11.6cm、厚さ1.0cm。暗灰色土層出土。

切出形木製品(4) 先端を切り先状にし、鋒は一直線につくる。刃の基部から側面を弧状に抉り、柄幅を狭くしている。柄の下端部は折損している。現存長20.7cm。黒色土層出土。

下駄(5) 一木から台と歯を作り出した連歯のもので、台は小判形の隅丸方形をなし、台幅が広い。前歯は台幅の中央部に穿たれている。足ずれから左足用と考えられる。歯の磨滅が著しい。長さ21.0cm、幅11.6cm、歯厚3.0cm、現存高3.0cm。腐植土層出土。

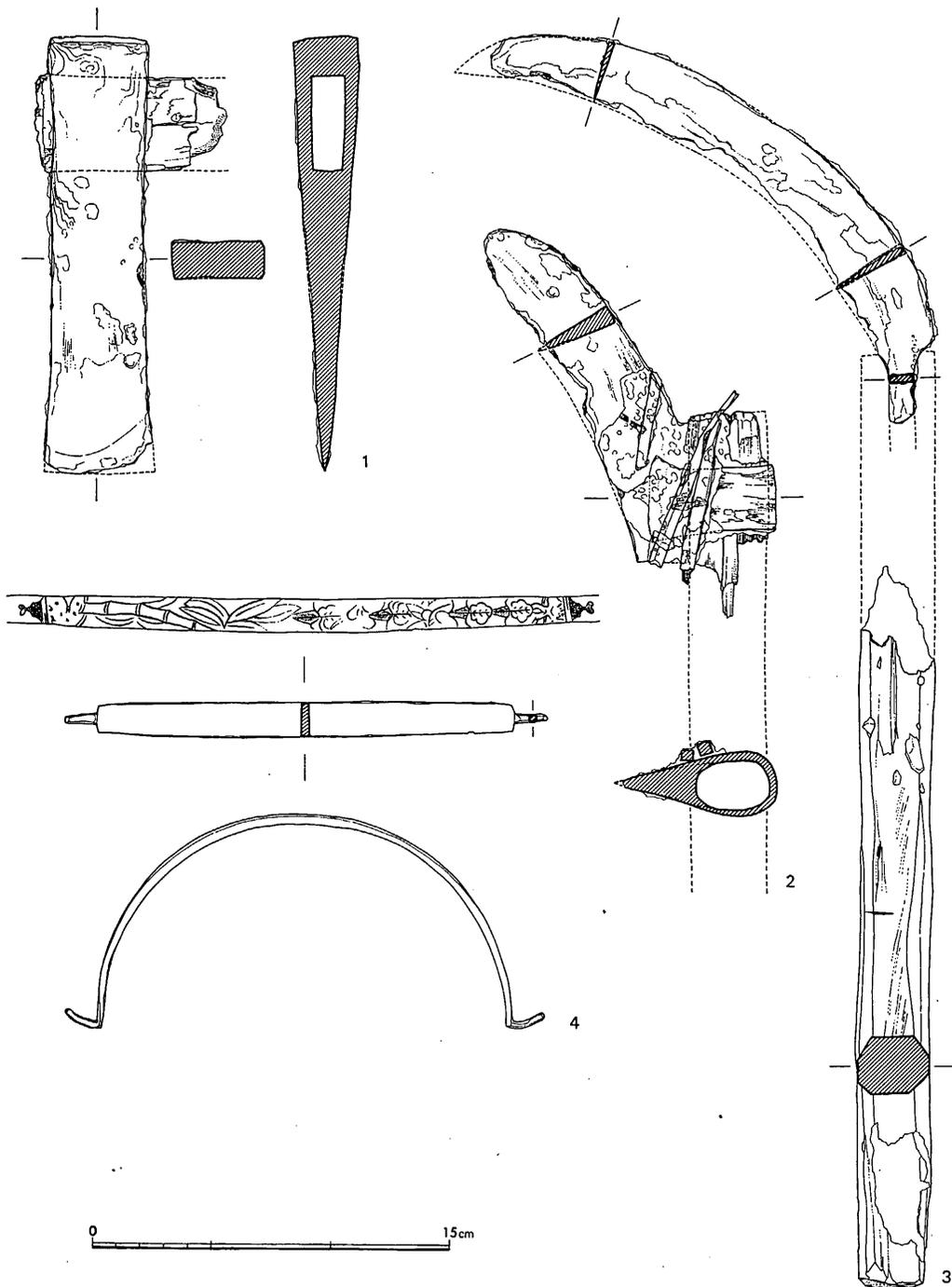
穿孔板(6) 幅2.5cm、厚さ0.5cmの板目材に約2.0cm間隔で直径1.0cm前後の孔を穿っている。穿孔は小刀様のものによたらしく、穿孔面が乱れている。両端を折損している。腐植土層出土。

取手形木製品(7) 杉の柱目材を「コ」字形に削り出しているが、両端が折損しているため全形は不明である。断面は正方形で各稜は面取りしている。両端の折損部付近に錐による穿孔があり、片方には桜皮が残っている。腐植土層出土。

S K1615出土鉄製品・銅製品(第46図1～4、図版55)

斧(1) 鉄錆が少なく保存状態は極めて良好である。全長18.3cm、上端幅4.2cm、厚さ2.8cmで、刃部になるにつれ、弓状にやや広くなり、残存最大幅4.5cmである。頭部から刃部にかけて直線的に鋭く尖っており、刃先の一部は欠損している。頭部から1.6cmのところ、1.4cm×4.0cmの長方形の秘穴が有する。柄は残存長8.0cmで、柄の頭部は秘穴よりわずか0.7cmほど突出している。

鉞鎌(2) 刃部から先端にかけて鉄錆が著しく、刃先は欠損して不明である。残存長15.2cm、



第46図 S K1615出土鉄製品・銅製品実測図

最大幅3.5cm、鋒の厚さ0.8cmでゆるく弯曲している。秘穴は幅2.7cmで逆U字形を呈し、刃部と接着する。そのつけ根は厚く2.3cmをはかる。秘穴の内径は2.1cm×3.1cmの楕円形である。柄の頭部は秘穴から2.3cmほど突出しており、幅約3.0cmで中央部は楔を打込んだためか、縦に割れが認められる。また錐3本が付着しており、左から順に残存長4.2cm、8.0cm、7.0cmで中央のものが最も長い。錐身の付け根は方0.5cmの角錐で、右端のものは茎が0.6cm残存している。

鎌(3) 出土時は完形であったが、鉄錆および柄の腐植が著しく、保存状態は良くない。刃部は残存長23.3cm、最大幅3.2cm、鋒の厚さ0.3cmで弦月形に弯曲する。茎は2.8cm残存しており、目釘穴は認められないため、さらに長くなるものと思われる。柄部は幅3.0cm、厚さ2.4cmで、断面は八角形に整え丁寧に削っている。出土時の状態から復原すると、全長約40cmである。

吊手銅製品(4) 把手中央部で幅1.5cm、厚さ0.4cmで両端にかけて次第に狭くなる。把手はアーチ形を呈し、径17.3cm、高さ9.0cmである。吊部先端の断面は径0.4cmで丸く、両側とも把手から1.4cm程突出し、やや上向に曲っている。把手上面には、両端に二葉形状を呈する中に、魚子彫りを施し、その間に1本の竹文と花文4個を縦に配列した毛彫文様である。

金属製品(第47図1~12、図版56)

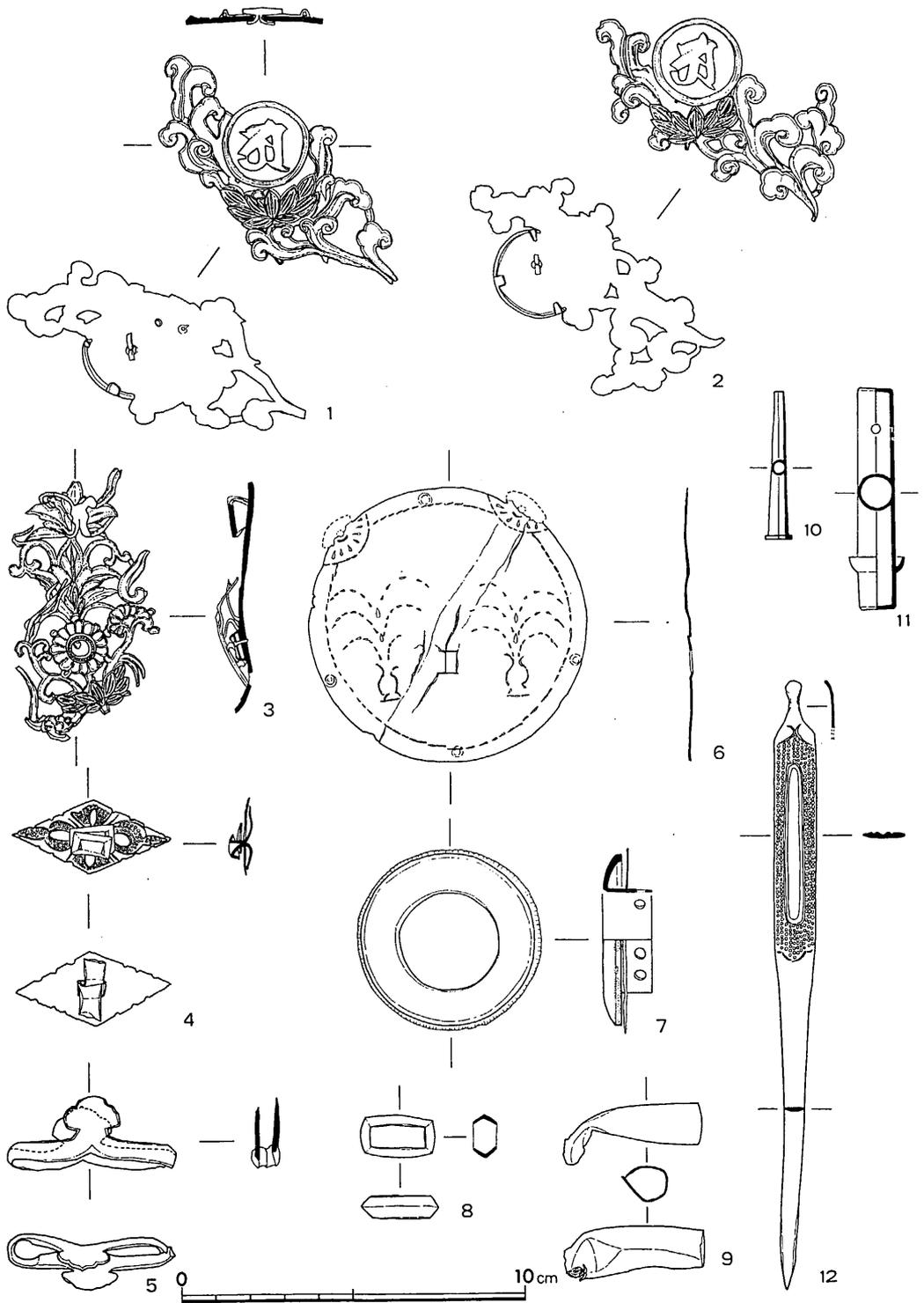
鑄銅製宝冠残欠(1・2) 今回の調査で、仏像宝冠2点が出土した。第57次調査で出土したものと同巧同類のもので合計4点である。前回報告した例からみると、中央蓮台の左側に取付くもので、**卍**種子を別に作って円板に取付け、さらに円環で周囲を追鑄して、雲文に嵌め込み、四ヶ所を裏側で止めている。**卍**字は諸仏の通種子を表現し、諸仏に通じるとされている。室町時代のものと考えられる。1、2共にSD1444出土。

銅製透彫宝相華飾金具(3) 残存長6.8cmで、上部と左部は折れ曲っている。文様は下方に蓮台を置き、その上に14弁単弁菊花文を配している。内区は地とは別に作られ、鋳で打止めされている。又菊花文の右上と左下には花芽がのびている。上方には菊葉が左右に二枚重って開き、荘厳感を感じさせる。1、2とは趣きを異にしており、図様も小ぶりである。断片で明らかでないが、華鬘の飾金具に類似している。SD1444出土。

花菱形飾金具(4) 一辺2.4cm~2.5cmの花菱形を呈し、外周には一辺3ヶ所ずつの輪花がみられる。表面は花文四弁を線刻で表現し、弁内には魚子文を打ち詰めしている。中央部は0.4cm×0.65cmの長方形の穴が穿たれており、そこに1.2cm×0.7cmの長方形の飾留金具が具っている。黒灰色土層出土。

締金具(5・8) 5は鑄造の銅製品である。幅0.5cmの円形帯で、2ヶ所に花頭形状の装飾を具える。暗青灰色土層出土。8は銅製で長さ2.2cm、幅1.3cm、高さ0.7cmの長方形の締金具と思われる。帯は「く」字形の断面を有している。SK1596出土。

銅製鏡板(6) 直径8.1cm、厚さ0.05cmの円形の鏡板である。中央部やや下方に0.3cm



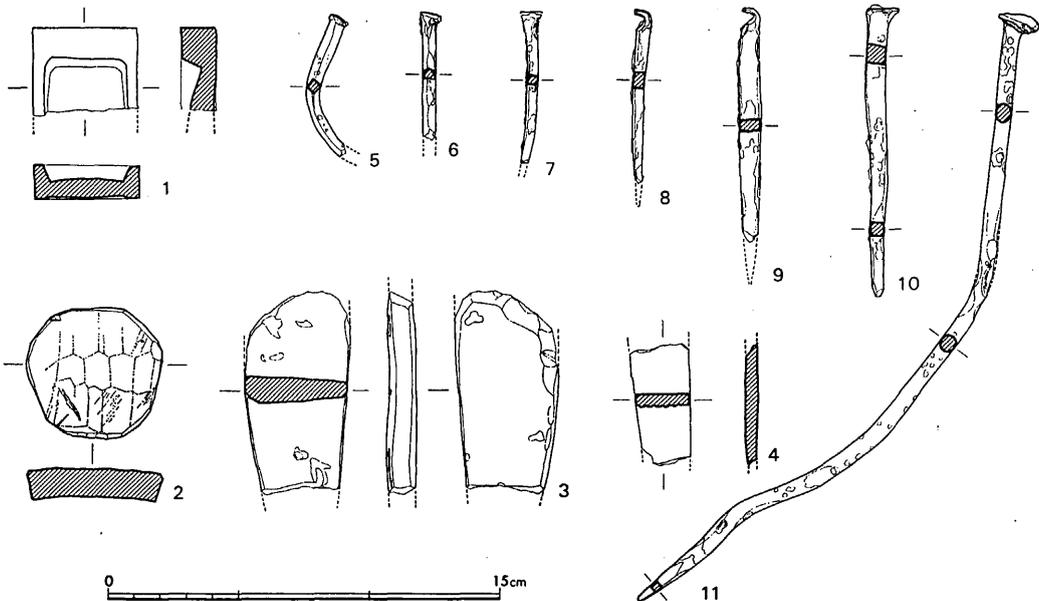
第47图 金属製品実測图

×0.6cmの長方形の切込みがあり、尊像を留める金具の穴と思われる。その左右には花瓶と蓮花を跳彫り風に打って線刻描としている。また鏡板の左右上方には吊環があり、その周囲は蓮華文を表現している。外周から内側に0.4cmで跳彫りした圏線が廻る。又外周と圏線内に裏面から鋳状のもので打った痕跡が4ヶ所認められる。第57次調査および観世音寺東辺部（第45次調査）で同類のものが出土している。黒色土層出土。

円形把手状飾金具（7） 銅製品で、内径2.9cm、外径5.0cmの丸味をもった輪状の台を有し、内側から高さ1.4cmの円筒が接続している。筒には径0.3cmの穴が2個単位で3ヶ所穿たれている。筒の外周には、外径5.3cmの極めて薄い銅板が嵌込まれており、周円には刻み目を密に配している。輪状台および銅板に、所々金箔が認められる。暗青灰色土層出土。

煙管（9） 管の直径は1.1cmで、管から先端にかけて狭くなり、管端から約3.0cmのところで、ゆるく曲っている。おそらく煙管と思われ、吸口は欠損している。銅製で火を受けた痕跡が認められる。黒灰色土層出土。

円筒金具（10・11） 10は全長4.3cm、内径上端0.2cm、下端0.5cmの円筒形で、先端にかけて狭くなっている。真鍮製で薄板を接合しており、下端は針金状のもので輪止めしている。暗灰色土層出土。11は全長6.5cm、径1.1cmの円筒形の銅製品である。筒は厚さ0.1cmの銅板を接合し、天地も同様銅板で塞いでいるため、中は空洞となる。上方より1cmのところに、径0.25cm、その反対側に径0.15cm、0.1cmの計3個の穴が穿たれている。又下方から1cmのところには幅0.4cmの鉢状のものが円筒に取付いている。火を受けた痕が認められる。黒色土層出土。



第48図 石製品・鉄釘実測図

耳搔状銅製品(12) 全長17.8cm、上端幅1.2cm、下端幅0.5cm、厚さ0.15cmである。頭部は丸味をおび匙形を呈する。ほぼ中央から下端にかけて細くなり、剣状に尖っている。表面の上方はx字、下方はu字形状を呈し、その間に長円形の毛彫りを施こしている。その毛彫りの間に魚子彫りを密に配している。黒色土層出土。

石製品・鉄釘(第48図1~11、図版57)

硯(1) 主体に暗赤褐色を呈する輝緑凝灰岩製の小形の硯である。幅4.1cm、厚さ1.9cmで長方形を呈するが、陸部は欠損している。海部の縁に墨の付着が認められる。表面は丁寧に整形されている。黒灰色土層出土。

円形石製品(2) 不正円形を呈する滑石製の石製品である。外面には煤が付着しており、石鍋を転用して作ったものであろう。SD1452出土。

砥石(3・4) 3は淡黄灰色を呈する堆石岩である。四面とも使用しており、火を受けた痕跡が認められる。SD1452出土。4は黄灰色を呈する頁岩である。一面のみ研面が認められる。

鉄釘(5~11) 5~9は黒灰色土層、暗青灰色土層、SD1452から出土した。断片で原形はとどめていない。8・9は頭部を折り曲げている。10は全長11.2cm、中央部で方0.7cmの角釘である。黒灰色土層出土。11は全長29.3cmで、横断面は丸く直径0.6cmである。頭部は強く打ちつけたためか潰れている。黒灰色土層出土。

石鍋 石鍋の出土数は極めて少なく、第57次調査で5点出土した。いずれも滑石製の小片で、復原すると口径の判るものが2点あり、約37.0cm、17.0cmである。口縁部下に鏝をもち、下位には煤の付着がみられる。口縁部から内面にかけては横方向に磨かれている。淡青灰色をしたものがほとんどである。

石塔類(第49・50図、図版58)

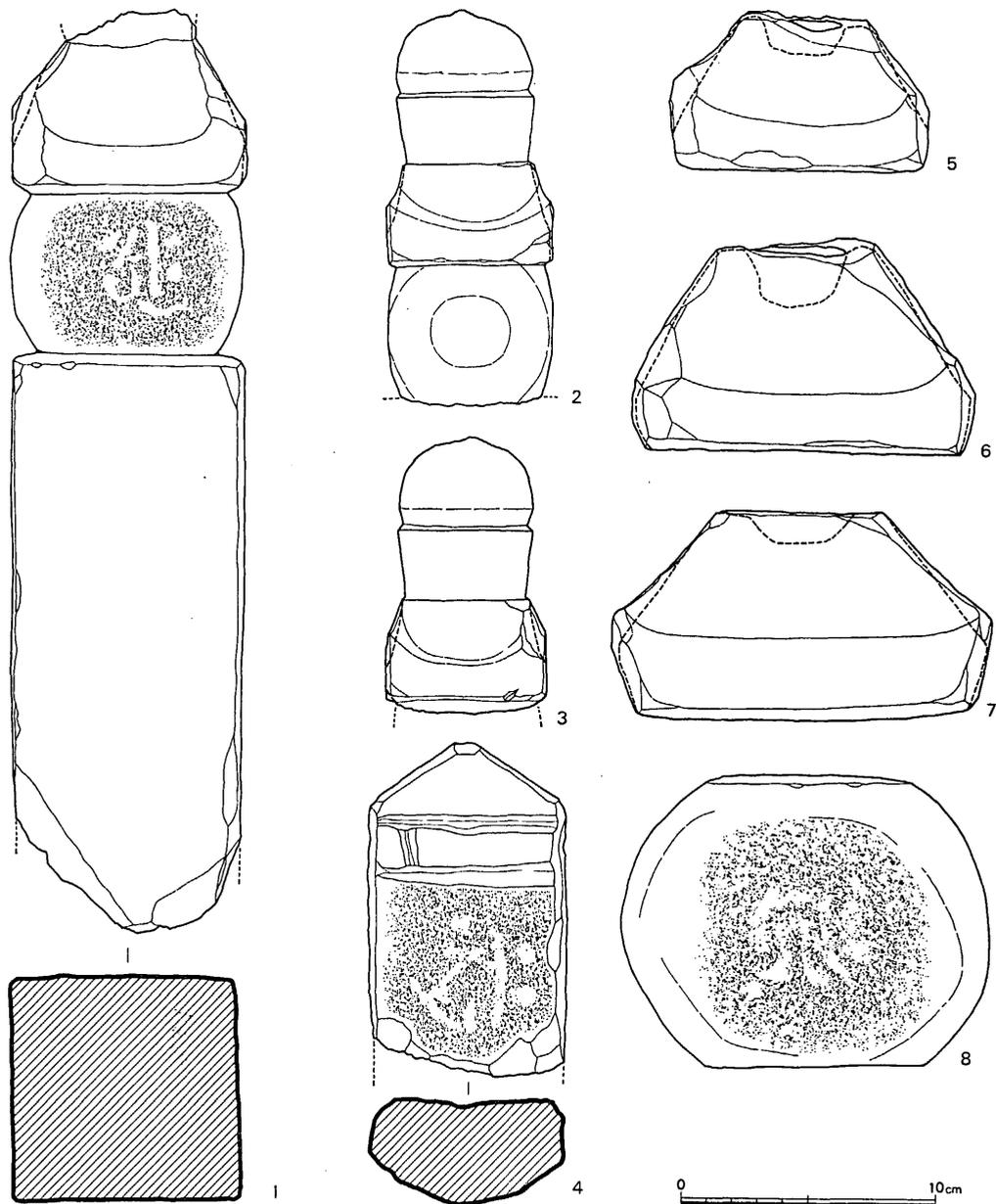
五輪塔と板碑とがある。これらは主にSB1600およびその北方にある池状遺構(SX1630)周辺から出土したが、本来の位置を保っているものはない。

1はSB1610の北側で立った状態で検出した。空・風輪が欠失し

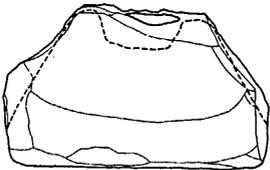
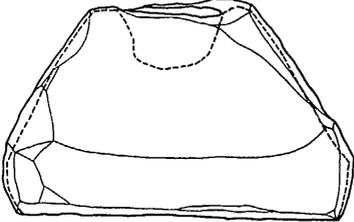


第49図 一石五輪塔梵字拓影

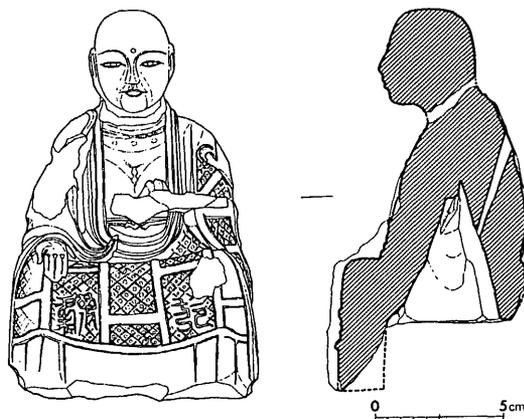
ており、また水輪と地輪との間で折れている。花崗岩の一石から全体を彫成した一石五輪塔である。火輪は軒隅がいずれも欠失しているため定かではないが、降り棟の反りはほとんど見られず直線に近い。水輪は四面に葉研彫りによる梵字があり、時計とは逆まわりに𑖀(アク) 𑖁(キリーク) 𑖂(タラーク)、𑖃(ウーン)の金剛界四仏種子を表わしている。𑖄には墨を入れ



第50図 石塔類実測図

ている。とは風化のため判然としない。地輪は方柱状にし、脚部を設けている。下端部は破載面のままで彫成しておらず、土中に埋め込んだものであろう。2・3も一石五輪塔である。灰緑色の砂岩を彫成したものでほぼ同大である。2は地輪が、3は水・地輪がそれぞれ欠

失している。いずれも空・風輪が大きく、空輪は頂部をわずかにとがらせた宝珠形をなし、風輪は円筒形をなしている。火輪は軒口を厚く垂直に切り、軒反りを大きくあらわしている。降り棟は軒先近くでわずかに反らせている。全面に左上から右下へ向けてのノミの彫成痕が認められる。4は板碑の上半部である。花崗岩を彫成したもので頭部を山形にし、その下に二本の沈線を設けている。沈線の下は葉研彫りによる梵字が認められるが、風化がはげしく𑖀(キリーク)と推定されるが、判然としない。



第51図 土製仏像実測図

裏面は中央部がやや甲高になった舟底形をなし、荒いノミの痕跡を残している。5～7は五輪塔の火輪である。いずれも花崗岩を彫成したものであるが、風化が激しい。5は小形で軒口を垂直に切り、軒反りが大きい。6は軒口がやや薄く、降り棟の反りは少く直線に近い。7は軒口をやや厚くつくり、軒先上辺が下辺より外方に出ているため内側へ傾斜している。降り棟は軒先近くでわずかに反りを加えている。いずれも頂部に隅丸方形の柄穴を穿っている。8は花崗岩の五輪塔水輪である。上・下は重ね合せのため水平に切っているが、ほぼ球形をなしている。葉研彫りによる梵字が一字あるが、風化のため判然としない。

土製仏像(地蔵菩薩座像) (第51図 図版59)

SD1444から土製仏像の胴部が出土したが、これは第57次調査出土の脚部と同一個体であることが判明した。なお仏像頭部は前回出土したもので、胴体とは直接に接合しないが、仏の全容を想察するため、合せて報告する。

頭部は頭を丸め、眉間に白毫^{びやくごう}を据え、目はやや切長で、眉は長くのびている。下唇は厚く、頬はややふっくらとした顔立ちである。耳は頸部ぐらいまでのびている。胸部は肩より一段盛上り、左手は胸のところで宝珠を持ち、右手は右膝の上に掌を上向に据えている。身に斜格子文様の衲衣^{のうえ}を着装し、左肩から袈裟^{けさ}をまとう僧形で、右腹部から右手を覆うように条帛^{じょうはく}がたれている。頸部には胸飾が認められる。脚部は両膝に「□萬寺印」と印刻され、最初の文字は「庸」又は「庚」と読めるが、明らかでない。背面はやや背を丸くし、左肩から袈裟がまっすぐたれる。背のやや上方には直径0.4cmの穴が穿たれており、光背を取付けるものであろう。座部底面は心木を立てるため、径6.7cm×3.7cm、高さ5.4cmの歪んだ円錐形をヘラで彫りだしている。胎土には砂粒を若干含み、全体に暗赤灰色を呈し、焼成は硬質である。

銅銭 (第52図、第1表)

第1表 銅銭出土遺構・層位表

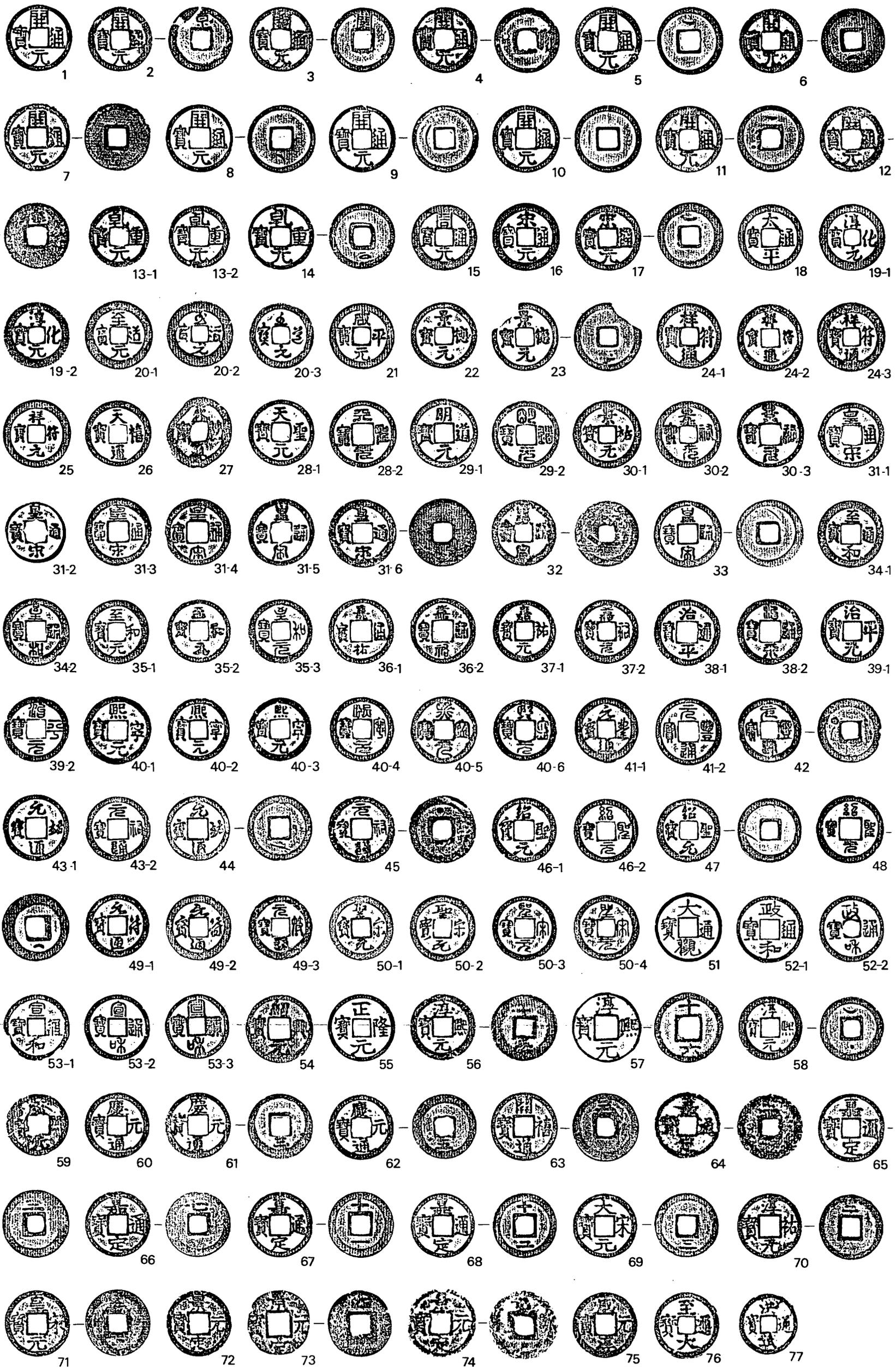
別図番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
銭名	開元通寶	開元通寶	開元通寶	開元通寶	開元通寶	開元通寶	開元通寶	開元通寶	開元通寶	開元通寶	開元通寶	開元通寶	開元通寶	開元通寶	開元通寶	開元通寶
出土遺構 備考 層位		背上に「京」	背上に「潤」	背右に「荊」	背上に月文	背下に月文	背下に横月文	背下に横月文	背左に横月文	背左に「一」	背上に月文	背左下に星文	背に不明文字		背下に月文	
SB1590-2c																
SB1590-1b																
SB1590-1f																
SB1590-3b																
SB1590-2d																
SB1600																
SD1586B																
SK1595	16			1	1	1		1	1	1		1	2	1		
SK1598																
SK1603																
SK1605A																
SK1605B	6				2		1						2			
SK1613				1												
SK1615	8				2	1							1		1	1
SK1618	1															
SK1619	2	1			1											
SK1623																
SK1625	7				2			1								
SK1635	4		1		3								1			
SK1655																
SX1638																
SX1641																
暗灰色砂	1										1					
黒灰色土																
黒色土	1															
暗青灰色土	1															
暗茶色土																
腐植土																
その他					1											
計	47	1	1	2	12	2	1	2	1	1	1	1	6	1	1	1

別図番号	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
銭名	宋元通寶	太平通寶	淳化元寶	至道元寶	咸平元寶	景德元寶	景德元寶	祥符通寶	祥符元寶	天禧通寶	天禧通寶	天聖元寶	明道元寶	景祐元寶	皇宋通寶	皇宋通寶
出土遺構 備考 層位	背上に月文						背下に月文				私鑄銭か					背左下に「\」
SB1590-2c																1
SB1590-1b																1
SB1590-1f																
SB1590-3b																
SB1590-2d																
SB1600				1												
SDI586B																
SK1595	1	2	2	8	7	3		4	5	9		9	2	1	33	
SK1598																
SK1603																
SK1605A						1										
SK1605B		2			1	1			5	1	1	4	2	1	16	1
SK1613			1									2		1		
SK1615			1		1	5	1	1	4	6		3	3	1	25	
SK1618				1	1				1			2		1	2	
SK1619				1		3			1	1		4		1	7	
SK1623																
SK1625		2		1	2	2			1	2		8	1	2	9	
SK1635				1		3		2	4	2		1		1	10	
SK1655								1		1						
SX1638																
SX1641														1		
暗灰色砂												2				
黒灰色土																
黒色土									1						2	
暗青灰色土		1				1								2	1	
暗茶色土																
腐植土																
その他		1													1	
計	1	8	4	13	12	19	1	8	22	22	1	35	8	12	108	1

別図番号	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48
銭名	皇宋通寶	至和通寶	至和元寶	嘉祐通寶	嘉祐元寶	治平通寶	治平元寶	熙寧元寶	元豐通寶	元豐通寶	元祐通寶	元祐通寶	元祐通寶	紹聖元寶	紹聖元寶	紹聖元寶
出土遺構 層位	備考 背右上に斜月文									背左に星文と月文		背下に斜線	背上に星文		背左下に斜線	背下に月文
SB1590-2c							1	1								
SB1590-1b																
SB1590-1f									1							
SB1590-3b																
SB1590-2d		1												1		
SB1600																
SD1586B																
SK1595		2	3	4	2	1	6	30	25		27			9		
SK1598														1		
SK1603																
SK1605A											1					
SK1605B	1		1	1	2			13	20		8	1		10		
SK1613			1	1			1	6	1		1		1			
SK1615		3	2	2	2		1	11	15		9			5	1	
SK1618								6	2		1			2		
SK1619				1	1		2	12	7		4					
SK1623																
SK1625		1		2	1		2	9	14		15			4		1
SK1635			2	1			2	4	10	1	8			3		
SK1655									1		1					
SX1638																
SX1641																
暗灰色砂		1						1	1							
黒灰色土					1		1									
黒色土						1		3								
暗青灰色土											3			1		
暗茶色土								1								
腐植土																
その他								1	1		1					
計	1	8	9	12	9	2	16	98	98	1	79	1	1	36	1	1

別図番号	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64
銭名	元符通寶	聖宋元寶	大觀通寶	政和通寶	宣和通寶	紹興元寶	正隆元寶	淳熙元寶	淳熙元寶	淳熙元寶	紹興元寶	慶元通寶	慶元通寶	慶元通寶	開禧通寶	嘉定通寶
出土遺構 備考 層位								背上下に「十」「三」	背上下に「十」「六」	背上下に月文 下に星文			背下に「三」	背下に「五」	背上に「三」	背上に「二」
SB1590-2c																
SB1590-1b																
SB1590-1f																
SB1590-3b																
SB1590-2d																
SB1600																
SD1586B	1															
SK1595	4	12	6	7	3	1				1	1			1		
SK1598																
SK1603																
SK1605A																
SK1605B		4		5			1									
SK1613		1		1												
SK1615	1	6	1	4			1					1	1			
SK1618		3														
SK1619	1	3	1						1							
SK1623				1												
SK1625	2	3		8											1	
SK1635		2		2	1		1									
SK1655	1															
SX1638		1														
SX1641																
暗灰色砂		1														
黒灰色土								1								
黒色土				1												
暗青灰色土	1			1												1
暗茶色土																
腐植土																
その他																
計	11	36	8	30	4	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1

別図番号	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77			
銭名	嘉定通寶	嘉定通寶	嘉定通寶	嘉定通寶	大宋元寶	淳祐元寶	皇宋元寶	景定元寶	景定元寶	景定元寶	咸淳元寶	至大通寶	洪武通寶	その他		計
出土遺構 備考 層位	背上に「三」	背上に「七」	背上に「十」 下に「一」	背上に「十」 下に「二」	背下に「三」	背上に「二」	背上に「五」		背上に「四」	背に不明文字						
SB1590-2c																3
SB1590-1b																1
SB1590-1f																1
SB1590-3b														1		1
SB1590-2d																2
SB1600																1
SD1586B																1
SK1595		1	1	1	1						1	1		3		266
SK1598																1
SK1603														1		1
SK1605A							1									2
SK1605B														3		117
SK1613																19
SK1615								1						1		133
SK1618																23
SK1619														1		56
SK1623														1		2
SK1625				1		1			1				1	2		109
SK1635	2											1		5		78
SK1655																5
SX1638																1
SX1641																1
暗灰色砂														1		9
黒灰色土								1						1		5
黒色土														1		10
暗青灰色土														3		16
暗茶色土																1
腐植土														1		1
その他										1						7
計	2	1	1	2	1	1	1	2	1	1	1	2	1	25		873



第52圖 銅錢拓影

開元通寶から洪武通寶まで46種、873点が出土した。出土木簡に「十くわんとう四郎」と判読されるものが含まれており、両者の関連が注目される。

出土銅銭の銭種、出土遺構・層位および各遺構・層位別の出土点数などについては第1表に示した。その排列は初鑄年代順である。その他とした25点は破損などのために判別不能のものおよび断定できないものである。また各銭種1点ずつ拓影を第52図にかかげたが、同一銭種でも背面に文字ないし記号が見られるものおよび銭名字形の異なるものについてもそれぞれかかげた。しかし、表では背面に文字ないし記号の見られるものは独立項を設定したが、字形の異なるものについては無背のものとして一括した。なお表のS B 1590についてはそれぞれ第5図に示す位置にあたる。

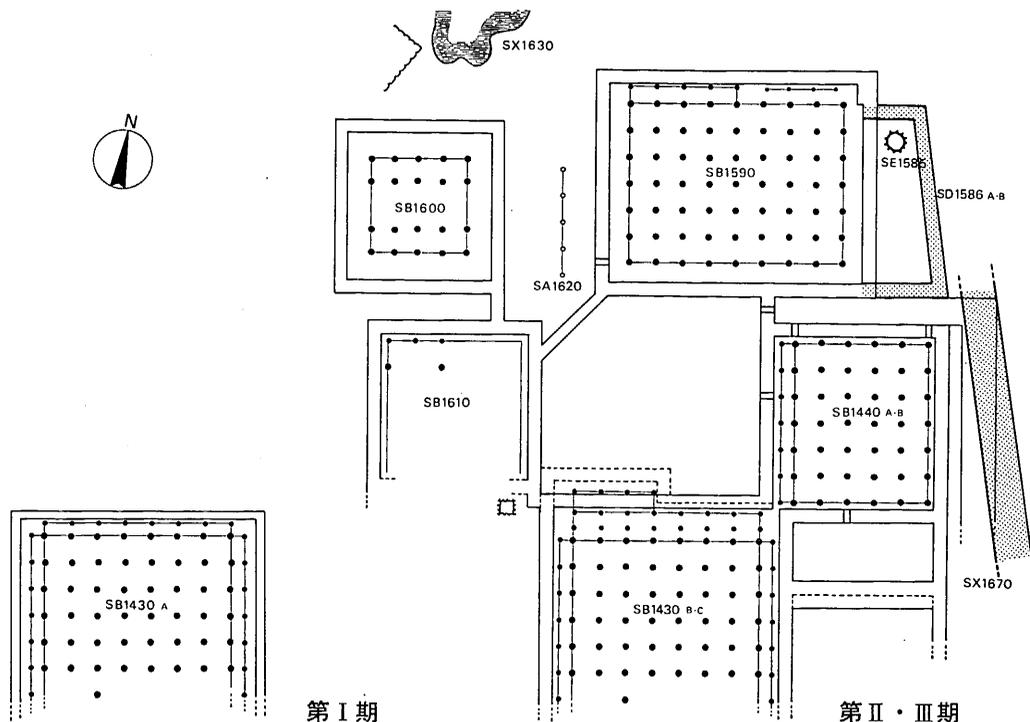
小 結

本年度の検出遺構と遺物については、これまでに述べたとおりであるが、さらに前回の調査の所見を含め、ここで整理し、いくつかの疑問点なりを記して結びとしたい。

前回の調査結果については既に報告しているが、記述の都合上その概略を記すと、礎石建物2棟およびその周囲を巡る石組の排水溝等を検出した。これらの遺構は建物の建て替えおよび溝の造り替えなどから大きく3期に分けられた。即ち第I期の遺構は礎石建物S B 1430Aであり、第II期はS B 1430B、S B 1440Aの建物が存在し、雨落溝および排水溝が巡る。この地域が整備拡充された時期である。第III期にはS B 1440Aがほぼ同位置でS B 1440B^(註8)に建て替えられ、溝等も造り替えられている。各期の年代については、第I期は13世紀後半頃、第II期の下限は14世紀後半～15世紀初頭^(註9)、第III期の下限は15世紀後半から16世紀前半という大まかな年代が与えられ、この地域の遺構の存続年代が13世紀後半から16世紀前半代に及ぶとの結論を得た。^(註10)

今回の調査で検出した建物および溝は前回の調査で検出した建物や溝と同一の方位をとり、さらに連続性をもっていることからすると、同一の計画性のもとに建造されたものと考えられるが、礎石建物S B 1590・S B 1600・S B 1610には前回の時期区分のどの期に属するか必ずしも明確でないものもある。

3棟の礎石建物のうちS B 1590については遺構の残存状況が比較的良好で、層位および出土遺物が豊富であった点からその年代をある程度推定できた。この建物は今回検出した建物では最も規模の大きいもので、他の建物の時期を考える上で基準となるものである。S B 1590の年代推定の手掛りとなるのは整地層出土の土師器である。この整地層はS B 1590の後方の一段高くなった部分の整地地業であり、S B 1590より地業として後のものである。この整地層出土の土師器は前述したように14世紀中頃のものであることから、S B 1590の成立の下限はそれを降らない頃に求める事が可能である。さらに、S B 1590の周囲の溝は前回第II期とした溝と連続する一連の流れをもっていることなどを考え合せると、第II期には確実に存在していたといえ



第53図 期別遺構配置概念図

る。第Ⅱ期の下限の年代を示す腐植土層は今回もSB1440Aの東側の溝SD1452A上で検出した土師器も前回と同様に14世紀後半から15世紀初頭に比定されるものである。

SB1590が第Ⅲ期まで存在したかどうかについては定かでないが、SB1590礎石掘方を覆う暗青灰色土層出土の土器は15世紀後半～16世紀前半の時期のものを含んでおり、これはSB1590の廃絶の年代を示すものであろう。しかしながら、SB1590の北方には池状遺構SX1630、東側には新期の溝SD1586Aが造られ、その溝よりやや遅れた時期に井戸SE1585が構築されている。そしてSE1585の構築の際SB1590の雨落溝SD1591は埋められ、その機能を失ってしまっている。またSD1586Bは最も新しい時期の遺構である。これらは第Ⅲ期の遺構であり、遺構全体を覆う黒色土層・黒灰色土層の出土遺物から、その下限は16世紀前半から中頃のものと考えられる。

次にSB1600およびSB1610は出土遺物の点からやや年代決定に不安があるが、建物の方向性、さらに、溝等の計画性から考えるとやはり第Ⅱ期にその成立を求めるのが妥当であろう。特にSB1600の礎石配置は他の4棟と異なり特異なものである。この周囲からは多量の瓦が出土していることから瓦葺であり、寄棟造ないし入母屋造のものであった事を示している。これ

らの瓦は14世紀前半に考えられるものが量的に最も多い事などを考慮すると第Ⅱ期の始めに存在していた可能性が強い。なおS B 1610の北側にはS B 1600の瓦が散乱しており、S B 1610がS B 1600に先立って廃絶したことがうかがえた。

最後に出土遺物（土器の年代等については前記したので、ここでは省略する）について若干記したい。

まず、瓦類では、セット関係が知れるものとして前回は報告したのであるが、今回の調査結果からも、出土状況および出土量などからみて第39図9と同一文様の軒丸瓦（以下9と記す）と第40図1はセットと考えて大過ないようである。また、学校院跡（第38次調査）において第40図2・6と同種のもので発見されており、特に2は礎石建物S B 800周辺から出土したことから軒丸瓦9とのセット関係が考えられている。この組み合わせを考えた瓦はS B 800 礎石建物下層出土土器から14世紀前半頃と推定されている。そして、今回検出した礎石建物S B 1600（註11）の周辺から出土した瓦のなかで、出土状況や出土量の多さなどから軒丸瓦9と軒平瓦1・2はこの建物の最初期に使用されたと考えられ、以上述べた9と1・2の年代観からすると、S B 1600は14世紀前半には存在していたとみる事が可能である。次に第40図5～10は中心飾に宝珠形を配する形態で5種類に分類できる。10は全体に小ぶりでの他の瓦と趣きを異にしており、用途としては限られたものであろう。このうち6・8は学校院跡S K 805 出土のものと同種の文様を有しており、また観世音寺東辺部（第45次調査）において「元□二年」（徳力）（1330）の紀年銘を有する卒塔婆と宝珠形を配する軒平瓦が伴出している（註12）。これらを比較検討すると文様にやや違いがみられるものの、その文様構成は同一系統での変化とみることが出来る。したがって、これらを14世紀中頃から後半頃としても過言ではなからう。

今回検出のS B 1600と学校院跡検出のS B 800の礎石建物には、軒丸瓦9と軒平瓦2・6にみられるように相互の関連性も窺われる。観世音寺子院については未だ不明な点が多いが、この事は子院を究明する上で興味深い資料といえよう。

土器や瓦類の他に多量の木製品、それに金属製品、土製品が出土している。金属製品の中には前回同様仏教関係の遺物もみられ、特に銅銭の出土量は顕著である。また木簡や斧、鎌、鉞鎌等の鉄製品の出土も特筆される。

斧、鎌、鉞鎌等の鉄製品と青磁盤や木製品などが一括して出土したS K 1615については先にも述べたように、木製品の中に地鎮ないし上棟に使用した祭祀具がみられるものの類例がなく（註13）現段階では断定し難いが、注目すべき出土遺物の一つであろう。

以上、今回検出した遺構と前回3期に時期区分したものと対比検討した。その結果、第Ⅰ期については13世紀後半頃、第Ⅱ期の成立の下限年代については14世紀中頃前後を下らない頃で、その下限は14世紀後半から15世紀初頭の年代が求められ、第Ⅲ期についてはその下限を黒色土層および黒灰色土層出土の土器から16世紀前半から中頃のものとする結論を得るに至った。

遺構の性格等については、子院に関する発掘調査例が乏しく、判断し難い部分も少なくない。調査の結果、検出した遺構、遺物から従来考えられた子院跡の性格と新たに居館跡の性格のものが考えられるようになった。従来の金光寺跡とする根拠の一つは字名に「今光寺」の名を残していることである。後者の場合は、今回検出した木簡に武士の人名がいくつかみられることである。子院と考えた場合、その規模の大きさからこれらの遺構が単一の子院であるのか、もしくは複数の子院の集合体であるのかという問題もでてきた。

今回は問題を提起するに止め、今後他の子院推定地の発掘調査を進めていくなかで、その性格等についても明らかにしていきたい。

註1 九州歴史資料館『大宰府史跡—昭和53年度発掘調査概報—』1979

註2 鏡山猛『北九州の古代遺跡』1956

註3 韓国国立中央博物館『新安海底文物』1977

註4 浙江省軽工業庁・浙江省文物管理委員会・故宮博物院『龍泉青瓷』1966

註5 『英国デヴィッド・コレクション中国陶磁展』1980

註6 鄭良謨「新安海底中国陶磁器の種類」『考古美術』138・139 1978

註7 李徳金・蔣忠義・関甲埜「朝鮮新安海底沈船中の中国瓷器」『考古学報』1979 第2期

註8 S B1430Aの縁が造り替えられ、その周囲の溝も同時に造り替えられている。

註9 S B1430CはS B1430Bの北側の縁をさらに1間分拡張したもので、それに伴って溝も造り替えられている(第53図の第Ⅱ・Ⅲ期の破線にした溝)。S B1430Cが第Ⅱ期であるのか、それとも第Ⅲ期になるものかは遺構の上からは判断できない。

註10 第Ⅱ期の下限年代は腐植土層出土の土師器によって求められるが、前回の報告ではその上限を知る手掛りとして、第Ⅱ期整地層から出土した「洪武通宝」(1368)をもって、その上限の年代を14世紀後半から15世紀初頭と記したが、出土の状況や今回の出土土器からみると、この「洪武通宝」は腐植土層出土の蓋然性が高いので、ここで訂正しておきたい。

註11 九州歴史資料館『大宰府史跡—昭和51年度発掘調査概報—』1977

註12 九州歴史資料館『大宰府史跡—昭和52年度発掘調査概報—』1978

註13 伊藤平左衛門『建築の儀式』彰国社1978

3. 第72次調査

本次調査は昭和48年度に実施した第31次調査の北側に接した地域で、約360m²について発掘調査を実施した。第31次調査では掘立柱建物3棟、柵2条、溝および土壇を検出している。今回の調査では、先の第31次調査でS B 580として復原した掘立柱建物の再検討とS D 587が北方にどのように延びているのかを主たる目的とすると共に、この地域に配されたであろう建物群の検出を目的として調査を開始した。地番は筑紫郡太宰府町大字観世音寺字月山557番地である。発掘調査は昭和55年9月16日に開始し、補足調査を含めて、同年の11月5日に全ての調査を終了した。

検出遺構

調査の結果、検出した主要な遺構は、建物3棟、柵1条、溝3条、土壇4、それに小ピット群である。この地域では少なくとも3時期にわたる遺構の重複がある。掘立柱建物ないし礎石建物群（S B 580、1885、1900）と溝（S D 587）、および小ピット群の時期である。

土層の関係

発掘区の北側では表土および床土を除去すると、薄い茶褐色土層があらわれ、すぐに地山面となり遺構面に達する。遺構面は北側から南側に傾斜しており、その傾斜はゆるやかである。

この地域では3時期の遺構の重複がみられることは先述したが、それは、各遺構の切り合いの関係により、先後関係が確認でき、出土遺物により大まかな時間差を知りうる。例えばS B 580、1885、1900はいずれもS D 587 A・Bによって切られている。S D 587は新・古2時期の溝が確認されたが、当初、プランで明確にし得なかったため、出土遺物についてはやや混在が認められるものの、それには余り時間差はないと考えられる。したがってS B 580、1885、1900は11世紀後半には廃絶していたと考えられる。またS D 587-2 A・Bの東側に集中して在る小ピット群の多くはS D 587 A・BおよびS D 570、それにS K 1886の埋没後に掘られたものである。さらに発掘区東端部で検出した南北方向の溝S D 554は茶褐色土層に切りこむ溝で、ここでは最も新期の遺構で中世末ないし近世以降のものである。

掘立柱建物

S B 580 これは、前回の第31次調査で、梁行2間、桁行7間の東西棟の建物として復原していたものである。このときの見解は、南側の柱穴が溝等によって明確に検出できなかったことから、建物としてのまとめかたに疑問があるとして、後の調査に期待していたもので、この建物の確認が今回の調査の目的の一つでもあった。

今回の調査により、前回検出した柱列と対になる柱穴を検出したことから、これは北側に2間の梁行をのばした東西棟の建物であることがわかった。桁行については、5間分を検出した

が、さらに西方に延びる可能性がある。柱間寸法は梁行7尺、桁行9尺の等間のものである。柱の掘方は0.9m前後の方形に近いもので、柱の痕跡はない。建物の方位はほぼ真東西方向のものである。

S B 1885 この建物は柱の掘方が、S B 580の掘方を切っており、S B 580より後出の建物であることが知れる。この東西棟の建物はS B 580の方位よりやや南に偏している。梁行2間、桁行については4間分を検出した。柱間は梁行9尺、桁行6.5尺等間のものである。

しかしながら、この建物については、梁行に比較して桁行の柱間が狭いこと、さらに柱の掘方が不揃いであることなどから、建物としてのまとめかたに多少の疑問が残る。

S B 1900 前記の建物の東側に位置する南北棟の建物である。S B 580の主軸と直交する。これは、前回の調査で検出した柱穴を含めて、梁行2間、桁行7間で、南側と北側に1間分の間仕切りがある。この建物の柱の掘方には1個も柱根痕がみられないこと、またそのうちの1個の掘方上に根石状のものがあったことなどから、礎石を使用した可能性も考えられる。

柵

S A 1905 S D 570の東側で検出した南北方向の柵で、6間分を検出した。前回の調査ではこれに連続する柱穴を検出していないので、今回検出分で南端を知れる。北方についてはさらに延びるものであるかは不明である。柱間は7尺等間であるが、南側の1間分は5尺で、やや狭くなっている。

溝

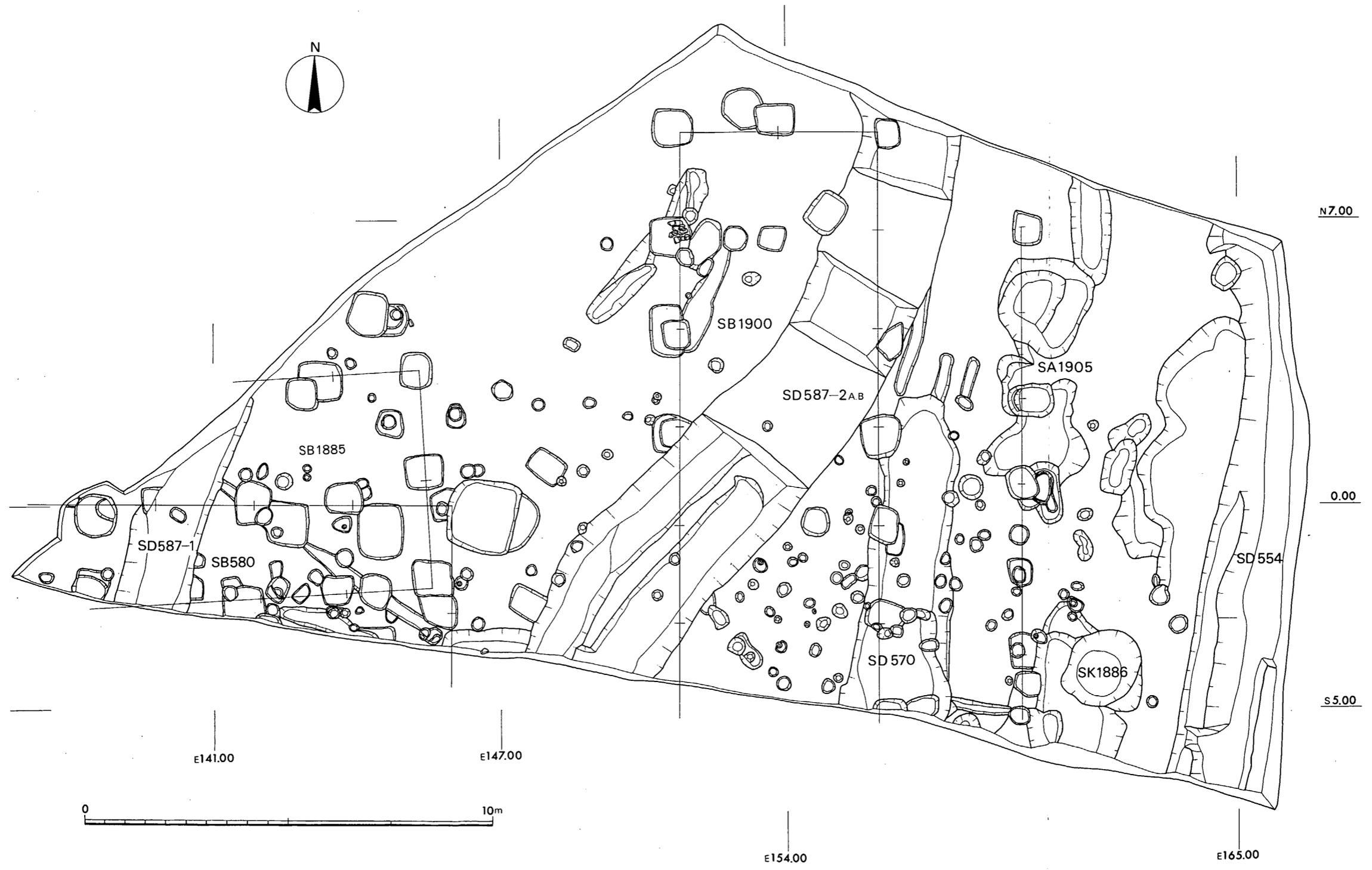
S D 554 今回検出した遺構の中で最も新しい時期のものである。現在これとほぼ同じ位置に水路があり、これと何らかの関係があるものと考えられる。これは、出土遺物から中世末から近世にかけての水路であったと思われる。

S D 570 前回の調査で検出した「L」字形を呈する素掘りの溝の延長である。これはS D 587と接する付近で北方へいくにつれ、溝底が高くなり消滅する。溝の南端部で幅3.0m、深さ0.4mを測る。

S D 587 発掘区の西端部および中央部に位置する二条の溝で、これは前回の調査で検出した「コ」字形を呈する一連の溝の延長である。記述の便宜上西端部のものをS D 587-1、中央部のものをS D 587-2とする。またS D 587-2については新・旧2時期あることから、旧期のものを587-2 Aとし、新期を587-2 Bとした。

S D 587-1は幅3.3m、深さ0.7m前後のもので、長さ5mについて検出した。これはさらに北方に延びている。

S D 587-2は調査区南端部では幅3.2m、深さ0.5mのもので、わずかにカーブしながら北方に延びている。北方にいくにしたがい、幅は狭くなり、溝底は上がっている。北端部では幅約2.4m、深さ0.6mを測る。



第54図 第72次調査遺構配置図

587-1・2からは多量の土師器が出土した。

出土遺物

出土した遺物は土器、陶磁器、瓦類、鉄製品、鉄鏝等である。これらの遺物のうち土器が最も多く、陶磁器、瓦類はごくわずかである。鉄製品についても、わずかに釘状のものがいくつかみられるだけで、いずれも錆化が著しいものである。

遺物の多くはSD587-1・2より出土したもので、特に土師器の量は顕著である。

SD570出土土器（第55図、図版60、別表）

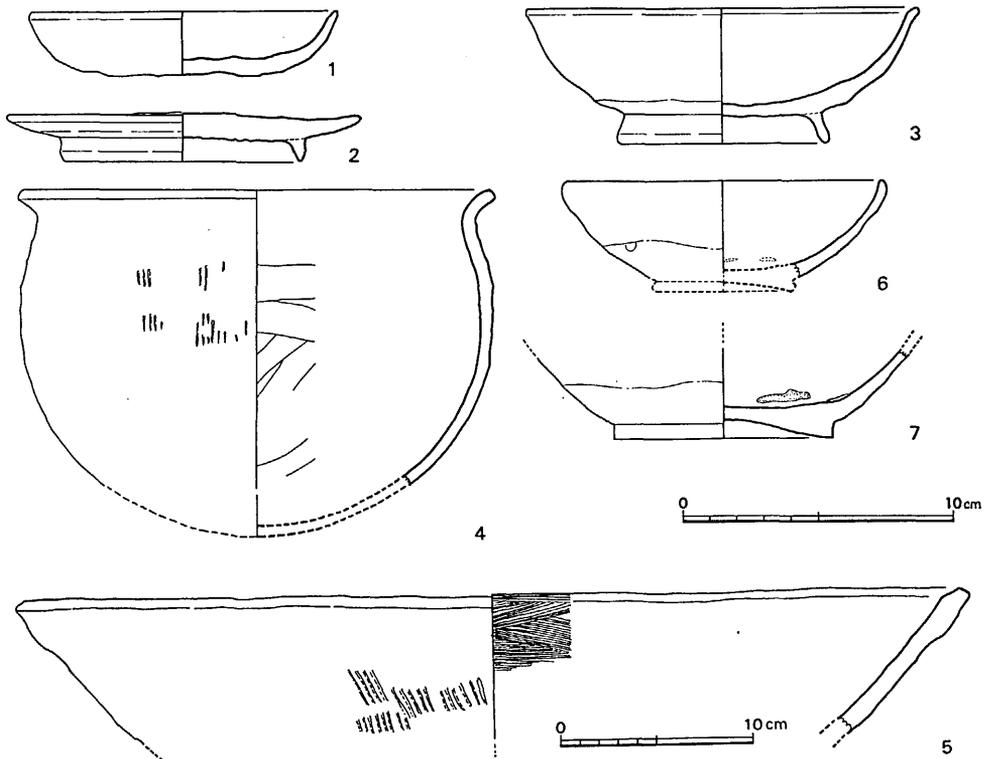
出土量は少ないが、土師器、陶磁器が出土した。

土師器

皿c（2） 口径13.2cm、器高1.7cm。

杯a（1） 口径11.5cm、器高2.4cm。底部はヘラ切りで、板状圧痕がある。

碗（3） 口径14.4cm、器高5.1cm。口縁部をわずかに外反させるものである。軟質で器面風化が著しいため、調整については不明である。



第55図 SD570出土土器・陶磁器実測図

甕(4) 小片であるが、復原すると口径24.6cmのものである。口縁部は「く」字状に屈曲し、胴部は丸く張っている。胎土には砂粒を比較的多く含んでいる。胴部外面には一部縦方向の叩き目が残っており、内面はへら削り調整を行っている。また外面には口縁部まで煤が付着している。

鉢(5) 小片であるが、復原口径49.6cmを測る、大形の鉢である。体部から口縁部まで直線的にのび、口縁部をわずかに肥厚させる。胎土には細砂粒を含むが、大形品としては比較的精良のものである。外面には平行の叩き目があり、内面は刷毛目調整を施している。外面は口縁部まで煤が付着している。

陶磁器

越州窯系青磁碗Ⅱ類が3点ある。

碗(6・7) ^(BE 2) 6は越州窯系青磁碗Ⅱ-2・d類のものである。胎土は暗灰色を呈し、体部中位以上に黄緑色の釉がかかる。細かい貫入があり、また内底に重ね焼きの痕跡を残す。7は口縁部を欠失しているが、越州窯系青磁碗Ⅱ-2・c類のものである。外底と内底に焼成時の重ね焼きの痕跡を残す。その他に碗Ⅱ-3類が1点ある。

S D 587-1 出土土器 (第56・57図、図版60、別表)

土師器

皿a(1~6) 口径9.6cm~10.2cm、器高1.0cm~1.5cmである。いずれもへら切りであり、板状圧痕をもつものが多い。

丸底の杯(7~44) 口径13.9cm~17.3cm、器高3.0cm~4.2cmである。最も出土量の多いものである。いずれも胎土は精良で、内面はヨコナデ後へらミガキを施し、器面を密にしている。7・35には成形時の工具の痕跡がみられる。また8・9・12・15・21・30・33には底部を丸く押し出した時の指頭圧痕がみられる。また12のように口縁部に煤が付着している例が若干みられる。

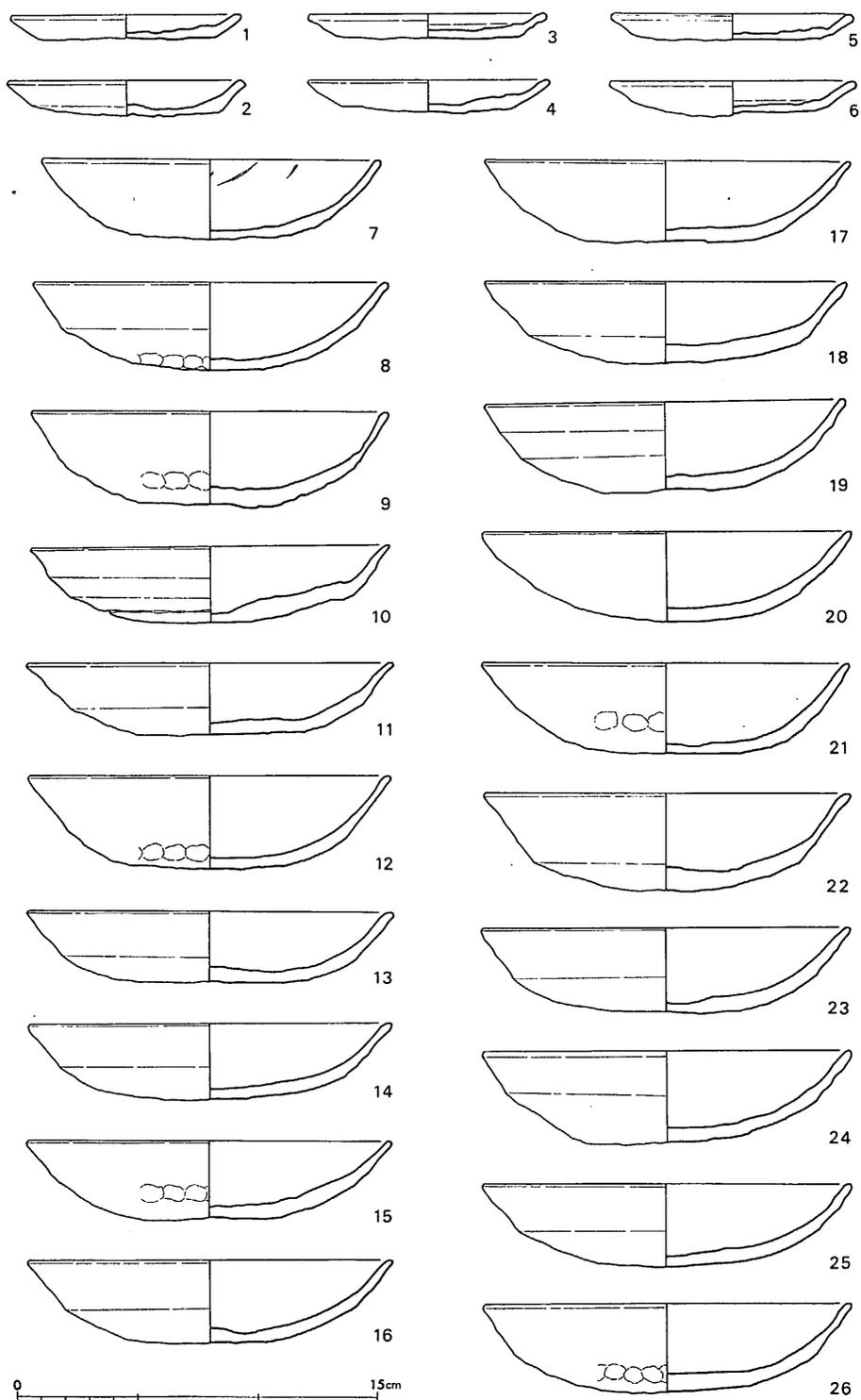
丸底の杯c(45・46) 丸底の杯に高台を貼付したものである。口径13.6cm~14.0cm、器高4.0cm~4.3cmのものである。内面は杯と同じくへらミガキを施し、器面を密にしている。

碗(47) 口径16.3cm、器高5.5cmのものである。高台は低く、口縁部を肥厚させる。内面をへらミガキし器面を密にする。

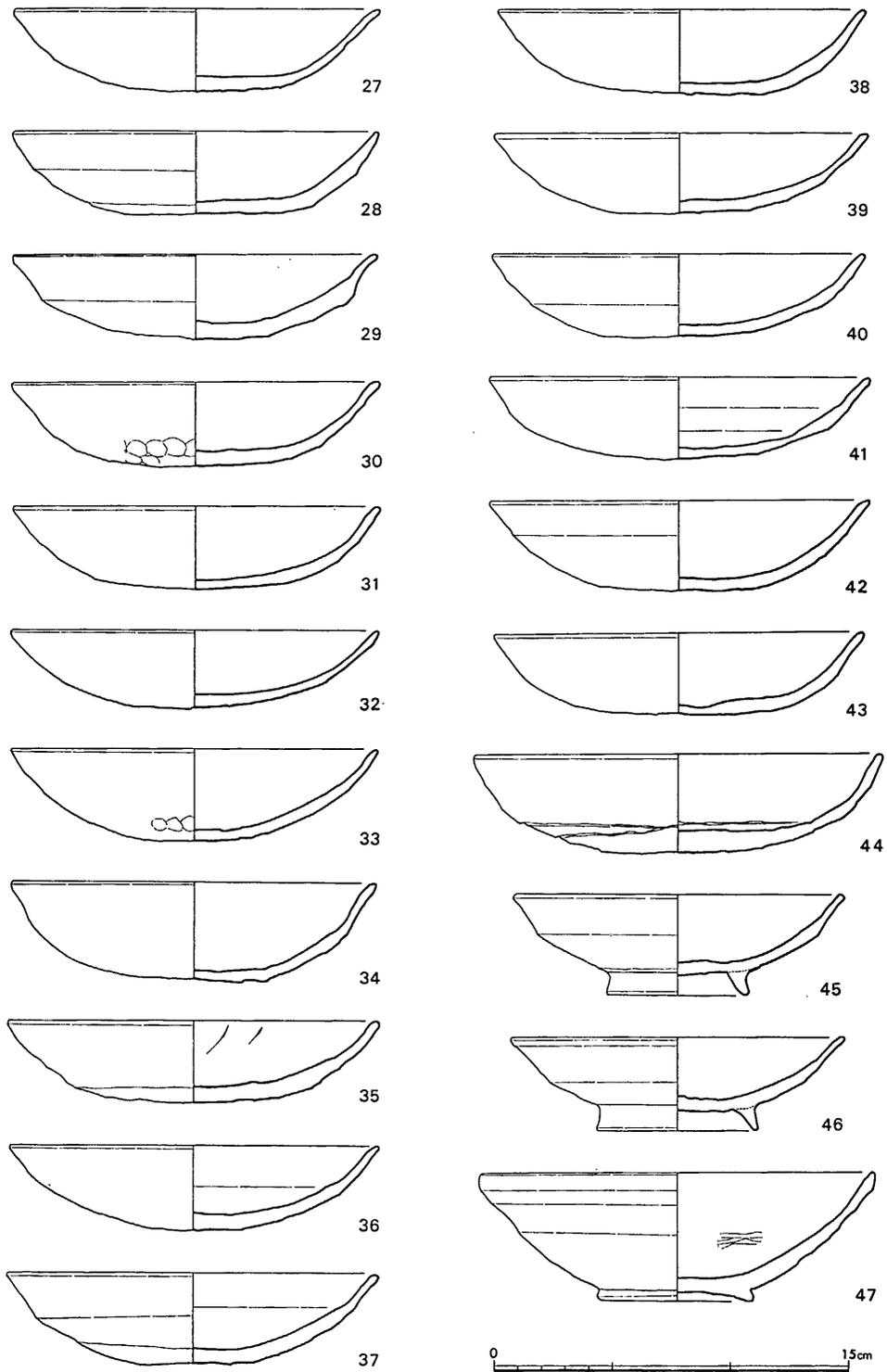
その他に土師器の甕、黒色土器碗があり、また、陶磁器として白磁碗Ⅴ類1点と越州窯系青磁碗Ⅱ類が2点あるが、いずれも小片である。

S D 587-2 下層出土土器 (第58・59図、図版61、別表)

新期の溝(587-2 B)の土器の混入が少なく、古期の溝(587-2 A)の時期を示す土器群である。ここから出土した土器には、土師器(皿a、丸底の杯、碗)、黒色土器(碗)、瓦器(碗)、陶磁器がある。



第56图 S D587-1出土土器实测图(1)



第57图 S D587-1出土土器实测图(2)

土師器

皿 a (1~15) 口径8.7cm~10.1cm、器高1.1cm~1.6cmのものである。全てヘラ切りである。外底に板状圧痕を有するものが多い。

丸底の杯 (16~25) 16~25は口径13.9cm~18.0cm、器高2.9cm~4.6cmのものである。いずれも内面をヘラミガキし、器面を密にしている。内面に成形時の工具痕が放射状に残っているものや、また24のように外面に指頭痕が明確に認められるものがある。

丸底の杯 c (26~29) 丸底の杯に高台を貼付したもので、調整等は丸底の杯と同じである。口径13.5cm~14.4cm、器高4.2cm~4.5cmを測る。29には内面に工具痕と指頭痕がみられる。高台を付したものは全体の出土量からみると僅少である。

椀 (30) 口径15.4cm、器高6.5cmで、体部中位に比較的明瞭な稜をもつ椀である。軟質である。内面に部分的にヘラミガキが残っている。

鉢 (38) 復原口径37.4cm、器高8.0cmの大形のもので、底部は平底である。胎土には比較的砂粒を多く含み、焼成は良好である。体部には粘土紐の痕跡がみられる。体部下位はナデ、他はヨコナデ調整である。内面は淡赤茶色を呈し、外面には煤の付着がみられる。

鍋 (39) 底部を欠失するが、底の浅い鍋と思われる。口縁部は外反肥厚し、端部は丸く仕上げている。体部には粘土紐の痕跡がある。口縁部はヨコナデで、外面体部には一部刷毛目が見られる。外面には煤の付着が著しい。

黒色土器

椀 (31~34) 31は内面のみを黒色に燻したいわゆる黒色土器A類の椀で、30と同じく体部中位に稜をもっている。軟質のため器面が剝離し、調整は不明である。32~34は内外面を燻した黒色土器B類である。いずれも内外面に粗いヘラミガキを施している。

瓦器

椀 (35~37) 35は不明瞭であるが、内外面に粗いヘラミガキを施している。器肉が厚く、口径16.6cm、器高5.2cmを測る。36・37は前者と調整、手法等に明らかに相違がみられる。口縁部内面に沈線を有し、内外面には密にヘラミガキを施している。胎土には若干砂粒を含むが、精良な土である。出土点数の非常に少ないもので、畿内に多いタイプである。

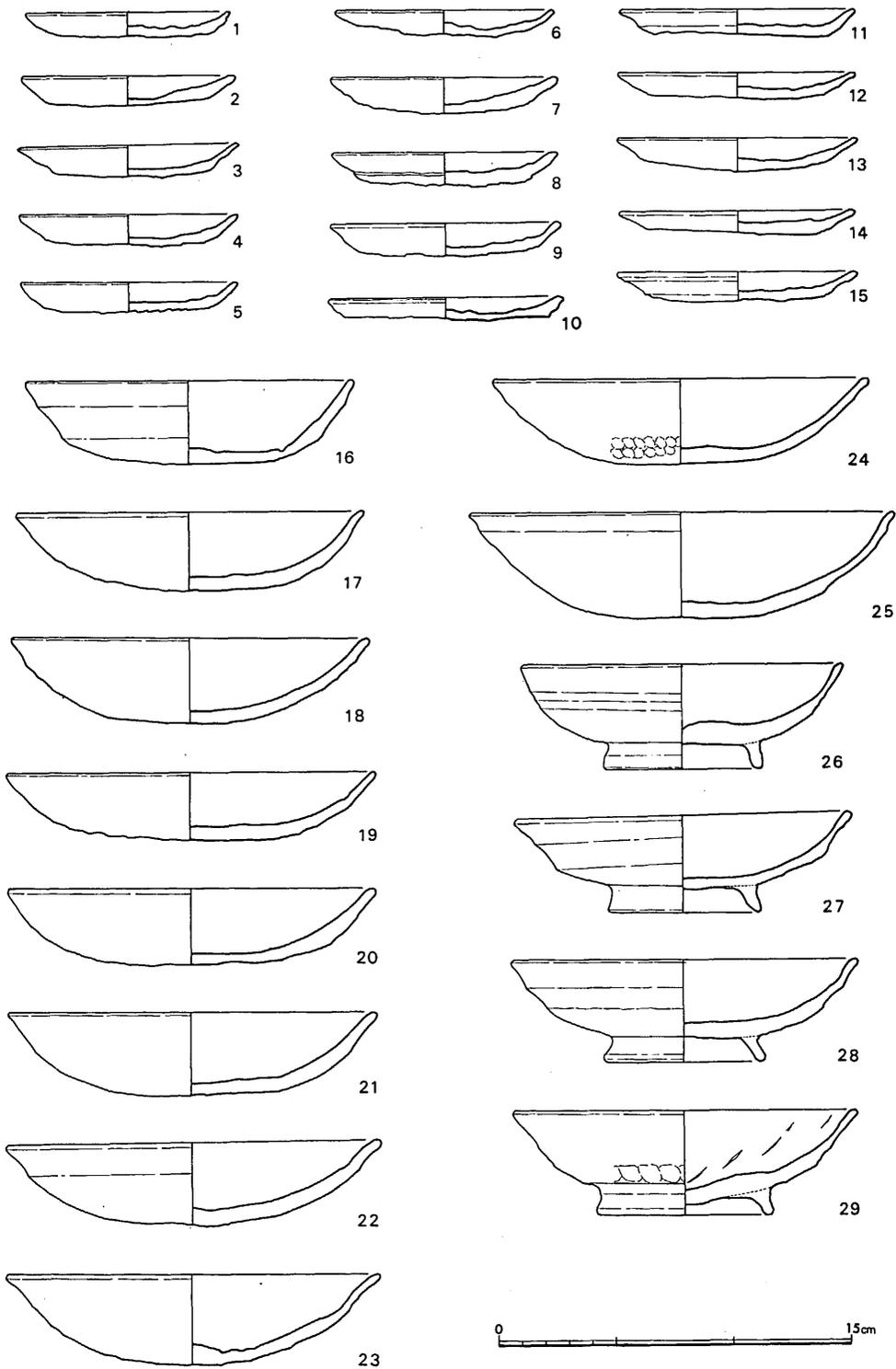
陶磁器

白磁および越州窯系青磁が出土した。白磁皿IV類1点、椀IV類4点、水注1点、それに、越州窯系青磁椀II類1点がある。

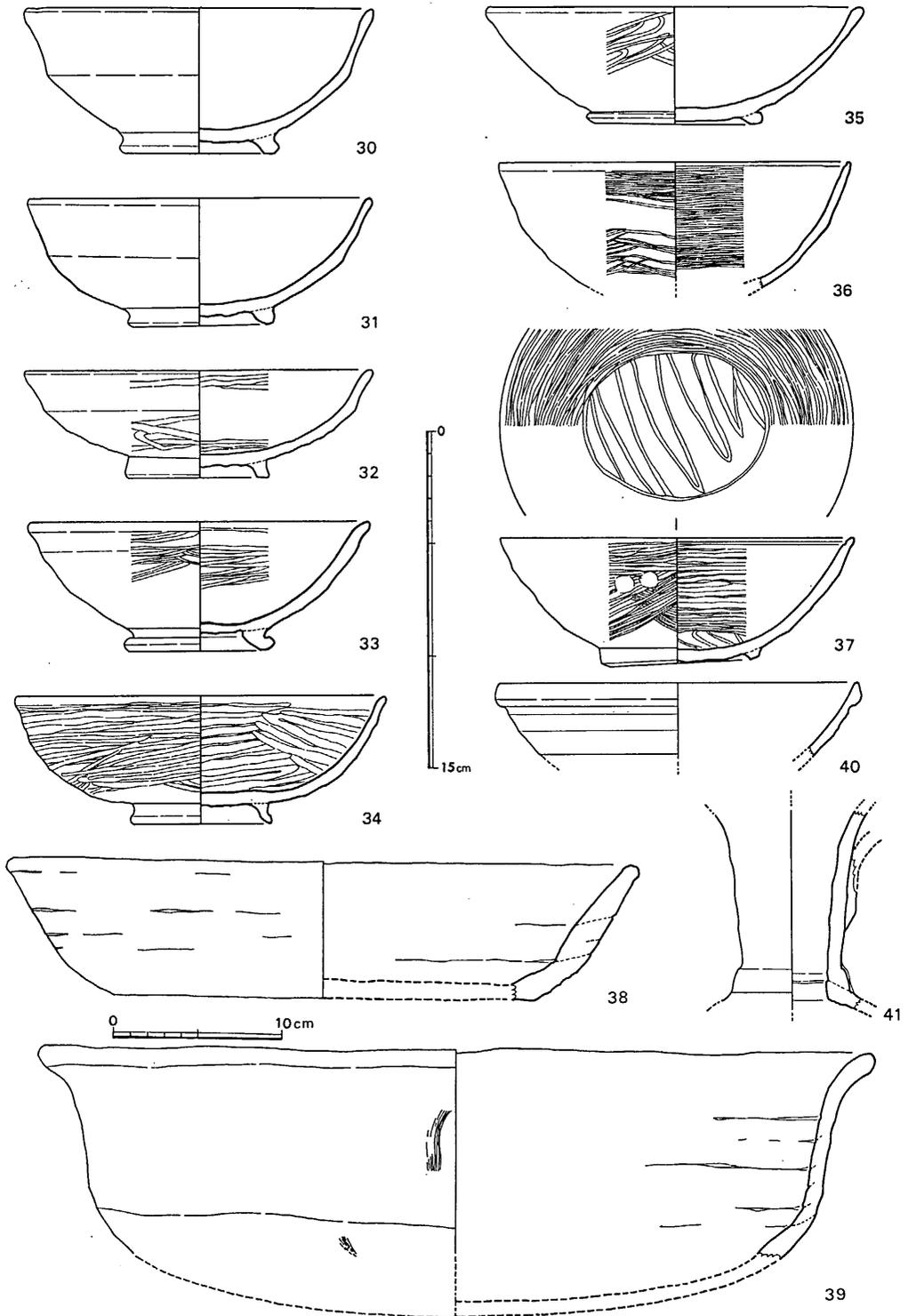
白磁

椀 (40) 小片であるが、白磁椀IV類である。復原口径15.6cmのものである。

水注 (41) 頸部の中位に把手の一部が残存していることから、水注であることが知れる。断面観察から肩部の上に口頸部をのせて接合していることがわかる。胎土は濁白色で、釉はう



第58图 S D587-2下層出土土器・陶磁器実測図(1)



第59图 S D587-2下層出土土器・陶磁器実測图 (2)

す目に施釉され釉下に小さな鉄斑が多く認められる。

黄釉陶器

盤 底部の小片である。胎土の粗いもので、内面に鉄絵がみられ、外面は露胎である。出土層位にやや疑問があり、新期溝の可能性もある。

その他、新期溝からの混入の可能性が強い地区から出土した陶磁器として、白磁皿Ⅳ類2点、椀Ⅳ類7点、Ⅱ類1点、Ⅴ類1点、画花をもつ白磁1点、不明白磁7点、それに越州窯系青磁椀Ⅱ類2点がある。

SD587-2 上層出土土器 (第60・61図、図版62、別表)

土師器

皿 a (1~15) 口径8.6cm~10.8cm、器高0.8cm~1.8cmである。いずれもヘラ切りで、内底はナデ、外底は板状圧痕を有するものが多い。

丸底の杯 (16~30) 口径14.7cm~16.1cm、器高3.2cm~4.7cmである。内面はいずれもヘラミガキを施し、器面を密にして、27と30には内面に成形時の工具痕がある。17・28・30の外面には成形時の指頭圧痕がみられる。

椀 (31) 復原口径15.5cm、器高6.0cmのものである。体部は丸味をもち、口縁部を若干外反させる。不明瞭であるが、内外面にヘラミガキを施している。外面の体部下半はヘラケズリである。

鉢 (34) 復原口径24.0cmを測る片口の鉢である。胎土には少量の砂粒を含むが、比較的精良なものである。外面の一部が黒化しているので、煮沸具として使用したことがわかる。

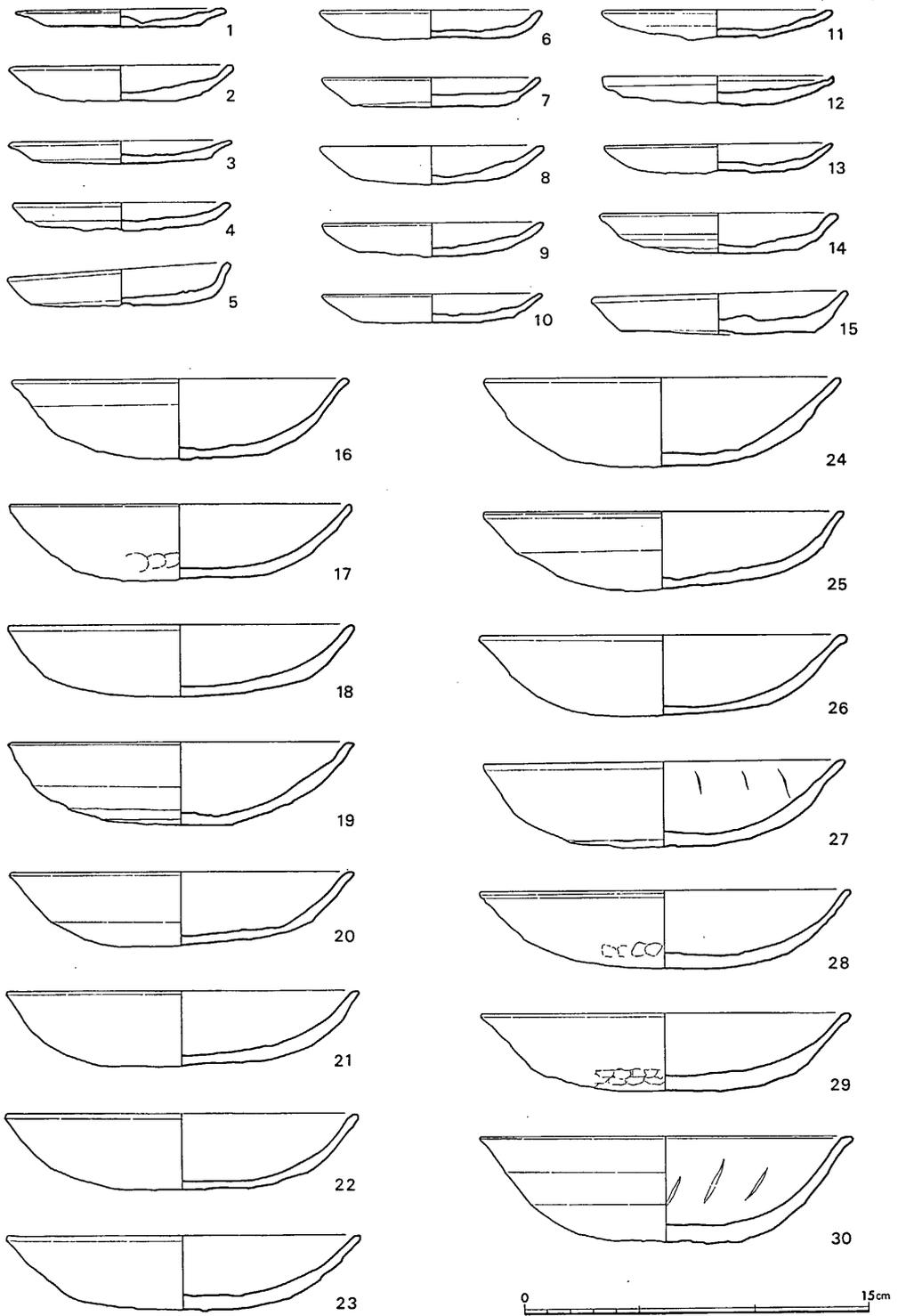
陶磁器

白磁および越州窯系青磁が出土した。白磁皿Ⅳ類2点、椀Ⅳ類10点、椀Ⅱ類4点、椀Ⅴ-2類2点、Ⅴ-3類1点、Ⅴ-1類1点、それに越州窯系青磁椀Ⅱ-3類1点がある。これらの点数は新期溝 (SD587-2 B) のものと混在の可能性の多い地区から出土したものを含んでいる。

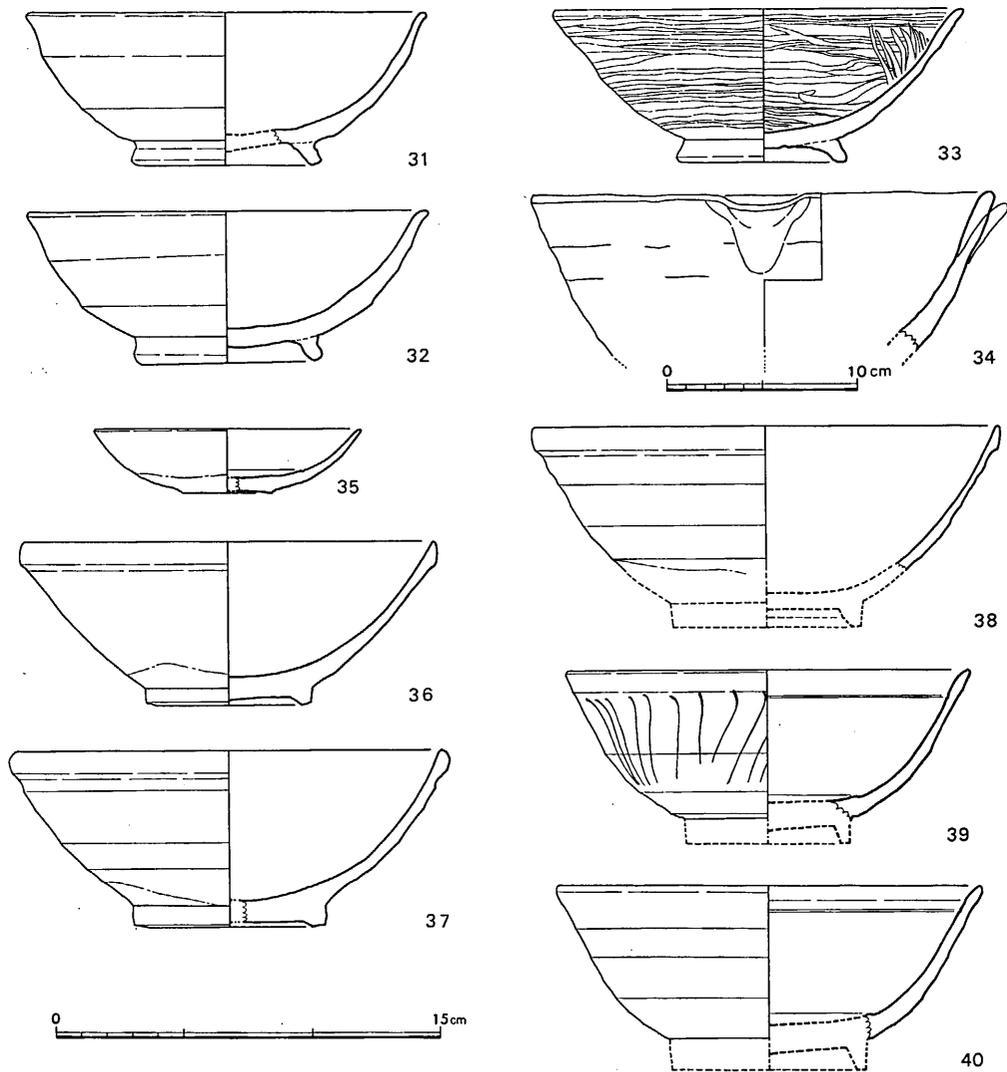
白磁

皿 (35) 口径10.4cm、器高2.5cm、底径1.7cmである。胎土は灰色、釉は青味をおびた灰色を呈する。Ⅳ-1・b類である。

椀 (36~40) 36・37はⅣ-1・a類で、口径15.9cm~16.4cm、器高6.4cm~6.9cmである。胎土は濁白色を呈し、また小さな黒い粒子を含む。釉はやや灰色味を帯びた白色のもので、外面体部下位は露胎となる。38は高台部を欠失しているが、黄白色を呈する。体部下位がやや丸くなっていることから、Ⅱ-1類の椀であることが判る。復原口径15.4cmである。40は底部を欠失しているが、内面体部上位と内底に沈線を有する。Ⅴ-1類である。復原口径16.3cmである。



第60图 S D587-2出土土器・陶磁器实测图(1)



第61図 S D 587-2上層出土土器・陶磁器実測図(2)

S K 1886出土土器

須恵質土器

椀 出土点数のきわめて少ない特異な土器である。胎土は精良で、焼成は硬質であり、色調等から一見須恵器を思わせるが、高台の形態および、内面をヘラミガキする調整方法には須恵器と異なった手法がみられることからここでは須恵質土器としてとりあげた。第35次調査で出土した椀と同種のものである(図版60-a)。

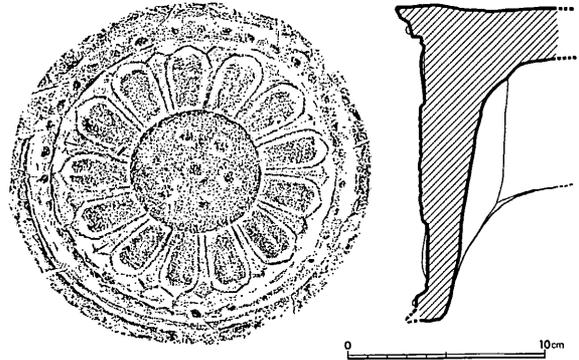
陶磁器

図示しなかったが、ここからは、白磁Ⅱ類が1点、越州窯系青磁椀Ⅰ-2類が1点、Ⅱ-2

・ b類が1点、分類不明なものが4点出土した。

瓦類（第62図）

この調査で出土した瓦類は、きわめて少く、主なものは軒丸瓦7点、軒平瓦7点、文字瓦17点などである。これらは大部分が小片で主に S D587 および遺構面を覆う茶褐色土層から出土した。



第62図 軒丸瓦拓影・実測図

軒丸瓦は4型式に分類できる。第62図に示したものは単弁13弁で中房の大きい点が特徴で政庁回廊西南隅から比較的多く出土している。

軒平瓦は6型式に分類できるがいずれも小片である。

文字瓦は「佐」、「賀」、「平井」、「賀茂」、「平井瓦屋」の銘のものがある。特に記すべき特徴は認められない。

小結

調査の結果この地域では掘立柱建物3棟（うち1棟は礎石建物の可能性も考えられる）、柵1条、溝3条、土壇1、それに小ピット群を検出した。これらの遺構は相互の切り合い関係や、出土した遺物から勘察すると3時期の重複があることは先述したとおりであるが、再びここで整理しまとめてみたい。

まず3棟の建物および柵についてみると、柱穴掘方の切り合い関係から、S B580はS B1885より古いことが判明した。またS B580・1900、S A1905は方位を同じくし、ほぼ真南北方向をとっている。

以上のことから考慮すると、S B580、1900、S A1905は、ほぼ時期を同じくして存在していたと推知される。その後S B580はS B1885に建て替えられているのであるが、このことは、S B580・1900、S A1905が同時に廃絶した後であるのか、もしくはS B580のみ建て替えられたものであるのか判然としない。

次に、出土遺物を含めて遺構の存続年代について若干ふれたいと思う。

S B580・1885・1900の建物の存続年代については柱穴掘方からの出土遺物がないため、直接的にはその時期を知ることは出来ないが、この3棟の建物は、いずれもS D587-1・2 A Bによって切られていることから、この溝の埋没年代によって、この3棟の建物の存続期間の下限を知ることが可能である。

先述したように、S D587には新古2時期があるが、遺構としてプランでは明確におさえられなかったことから、新・古の遺物の混在は免れないが、比較的遺物の混在が少ないS D587-2下層出土の土器は古期溝(S D587-2 A)の年代を示すものと考えてよからう。

S D587-2下層出土の皿a類についてみると、11世紀の中頃～後半に位置付けたS K802のものに相当することから、古期溝の埋没はほぼこの年代に求めることが出来る。また新时期(S D587-2 B)の遺物を含んでいると思われるS D587-2上層出土の遺物についてみると、やや時期的に降るかと思われるものを含んでいるが、多くはS K802段階に相当するものである。これらのことから判断すると、この新・古2時期の溝はあまり時間的隔りを持たず、相前後して存在したもので、その埋没年代はほぼ11世紀後半代頃である。^(註3)

以上のことから、この官衙的な建物および柵は、遅くとも11世紀中頃から後半頃には完全に廃絶し、その役割を失ったものといえよう。さらにこの地域ではS D587に伴う時期の遺構はなく、その埋没後に、中世の遺構である小ピット群が存在するのみである。

最後に、月山丘陵の南側で実施した第31・35次調査の結果を含め、いくつかの問題点を提起し、結びとしたい。

第31・34・35次調査によって、S A560・670(東西幅112.10m、南北幅約70.8m)を検出した。これらの柵は、政庁地区や学校院地区を区画するといった性格のものではなく、何らかのまとまりをもった一つの官衙を区画するのではないかということが指摘され、そして、この内部には2棟の建物が存在することが判明していた。今回の調査で既に確認されていた2棟の建物のうち1棟であるS B580については再検討の結果、北側へわずかにずれることが明らかとなり、新たに、建物2棟と柵1条が検出された事になる。これらの建物群が、いかなる性格のものであり、どのような機能をもったものであるかは未だ詳らかでないが、この一画が一つの官衙的役割をもったものであることが、更に強くなったと言える。

昨年実施した蔵司前面の調査結果からその地域では官衙的建物が廃絶するのは11世紀前後と言う結論を得た。今回の調査結果では、やや消極的ではあるが、S B1900が、11世紀前半にはすでに掘削されていたと推測される溝S D570(出土遺物が少なく、断定できない)によって切られていることからすると、廃絶の時期がやや遡る可能性を有している。また蔵司地区官衙と廃絶の時期が近似していることは興味深い。

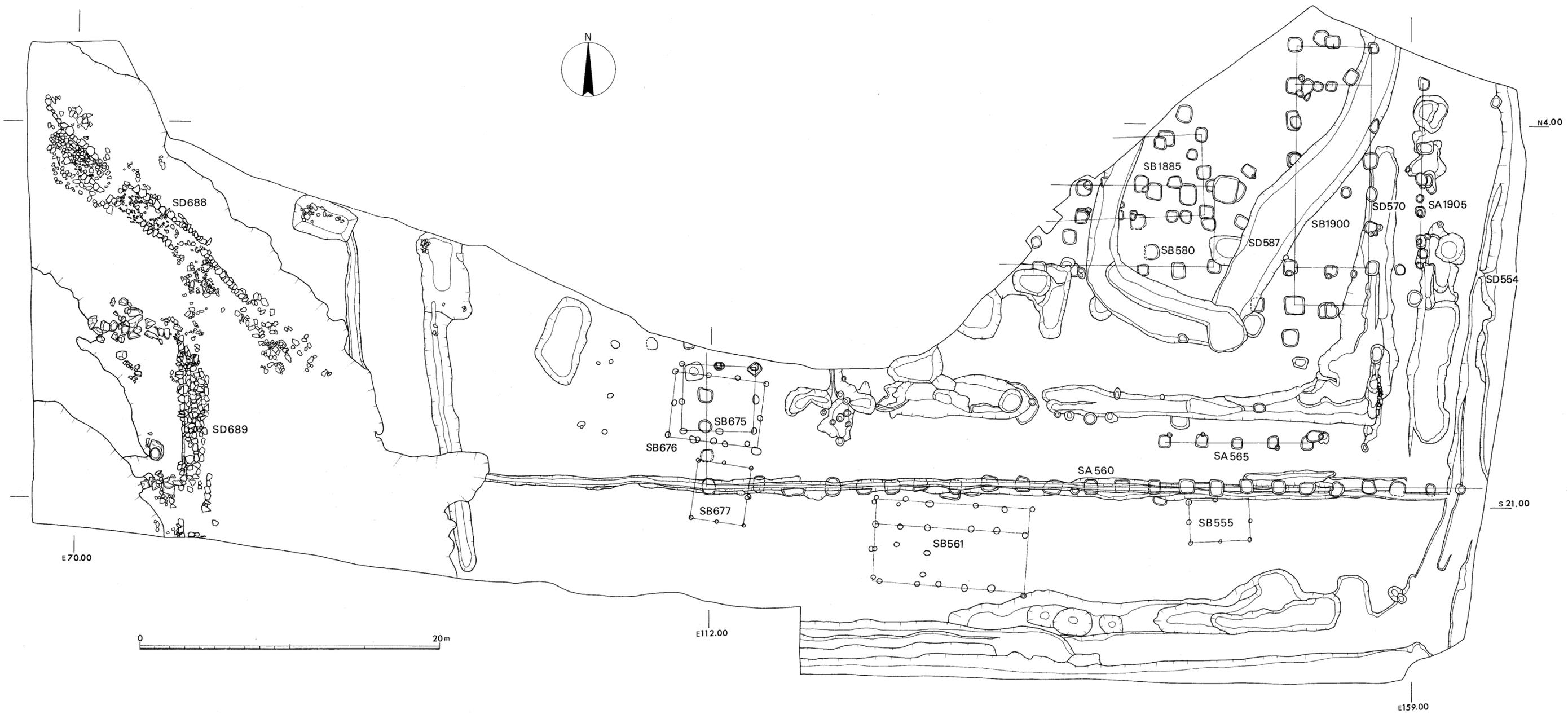
註1 九州歴史資料館『大宰府史跡—第30・31・32次発掘調査概報—』1974

九州歴史資料館『大宰府史跡—昭和49年度発掘調査概報—』1975

註2 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁について」『九州歴史資料館論集4』1978
分類はこの論文による。

註3 註2に同じ。

註4 九州歴史資料館『大宰府史跡—昭和54年度発掘調査概報—』1980



第63図 第31・35・72次調査遺構配置図

4. 第73次調査

大宰府政庁跡の前面を東西に走る県道山家一関屋線の南側は従来庁域外と考えられ特別史跡の指定から除外されているが、字名を不丁と呼び府庁に通じるところから関心がもたれていた。事実、県道南側で実施した第17次調査（蔵司前面）で礎石建物1棟、第32次調査（月山東官衙前面）で掘立柱建物2棟をそれぞれ検出しており、現在では官衙地区として考えている。^(註1)^(註2)したがって政庁とそれらの周囲に配置された諸官衙とからなる庁域の範囲は従来よりも広く考えられるにいたっている。そこから大宰府条坊内における庁域の範囲の画定、あるいは条坊そのものの究明が要求されてくるが、まだ発掘調査の機会も少なく、それらを考えるには資料が不足している。そうした中で条坊を左郭・右郭に区画する推定朱雀大路の実態を具体的に解明する必要性が大となっており、昭和53年に第58次調査を実施した。^(註3)^(註4)

第58次調査は県道南側の水田一枚を隔てた政庁南門から約130mの地点を対象地とした。しかし攪乱などもあって朱雀大路に関係する遺構はまったく確認されず、むしろこの地点における朱雀大路の存在そのものに疑問が提出されるにいたった。そこで県道前面に計画されている太宰府町の土地区画整理事業の進展にともない、第58次調査地と五条大路に推定されている県道との間の水田約980m²を調査の対象地として朱雀大路の所在問題に解決をうることとした。地番は太宰府町大字観世音寺字不丁272-1番地で、条坊復原案の主として左郭五条一坊に相当する。

調査は昭和55年12月1日に着手した。同11日には早くも遺構の検出にいたったが、顕著な遺構・遺物もなく翌昭和56年1月7日には一応の調査を終了した。その後、写真撮影・遺構実測などを行なって14日に調査を完了し、直ちに埋め戻しを行ない水田を原状に復した。

検出遺構

調査地は第58次調査区にくらべ一段（約20cm）高く、遺構の残存が期待された。調査の結果、調査区の北西部では床土直下に地山の黄色粘質土層が拡がっており、東に向かうにしたがってゆるやかに傾斜していた。南東部では床土の下に5cm前後の厚さで淡黄色土層、さらにその下に厚いところで約60cmほどの茶褐色土層が地山の上に堆積していた。地山と茶褐色土層の間には部分的に暗紫黒色粘土が堆積しており、そのブロックは少量の瓦・土器片とともに茶褐色土層中に混入していた。第64図に図示したように調査区の東半では多くの土塚状掘り込みが認められているが、それらのうちのいくつかは明らかに暗紫黒色粘土の採取にともなう掘り込みであった。本調査区あるいは第58次調査区で認められた攪乱の多くは粘土の採取にともなうものであろう。こうした性格を与えうる土塚状掘り込みを除けばほとんど顕著な遺構を認めることはできなかった。

溝

SD1490 調査区の南東隅で東西方向から南北方向へと傾斜する幅0.7m~1.0m、深さ約0.2mの溝1条を検出した。溝中の一部に少量の瓦が包含されていた。溝の東端は上部からの掘り込みによって切断されている。南北方向については第58次調査で確認しており、ゆるやかに蛇行しつつ調査区外南へ流れる。時期を示す遺物の出土は得られなかった。

土坑

SK1910 調査区の東側ほぼ中央付近で茶褐色土層を切り込むようにして赤褐色粘質土からなる南北方向に長い不整形の土坑が検出された。坑中からは完形の老司Ⅱ式軒平瓦を含め軒平瓦6点、面戸瓦5点、熨斗瓦、丸瓦、平瓦など比較的多量の瓦が出土した。室町時代ないしそれ以降に考えられる茶褐色土層よりも古期に属する瓦のみであり、したがって近世に他から運び込まれた遺物であろう。

SK1915 調査区の西側壁沿いで検出された円形土坑で、上端径約85cm、底径約60cm、深さ約45cmをはかる。坑中には土製鑄型片、炉壁片、鉄鏝が多量の炭、灰、炭化材、焼土などに混在して埋められていた。同様の埋土をもつ遺構にSK1915の東約7mで検出したH字状を呈する遺構SX1914、さらにその東約5mにみられた楕円形状を呈する遺構SX1911がある。これらが一連のかつまた製銅・製鉄に関する遺構であるとするならばSX1911が茶褐色土層の上面に位置することからみて、室町時代ないしそれ以降の時期に考えられる。

出土遺物

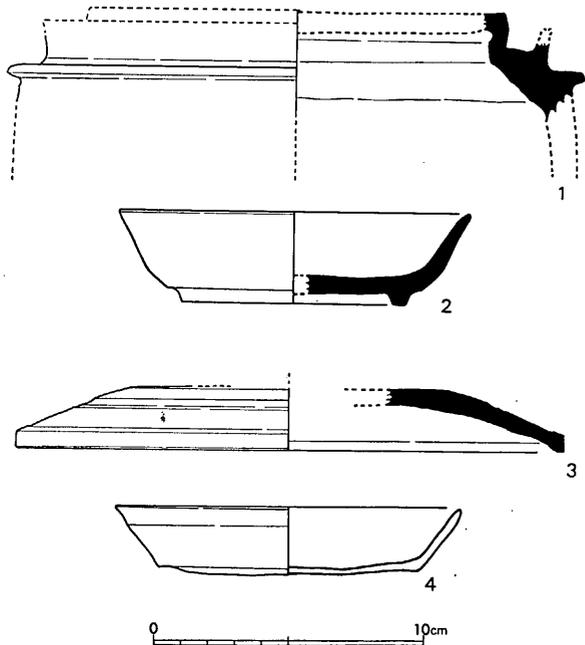
遺物は床土・茶褐色土層から土師器・須恵器・陶磁器・瓦類・鑄型などの鑄造関係品が出土したが、出土点数は少なく、細片化した上に時期的にも混在していた。

土器 (第65図)

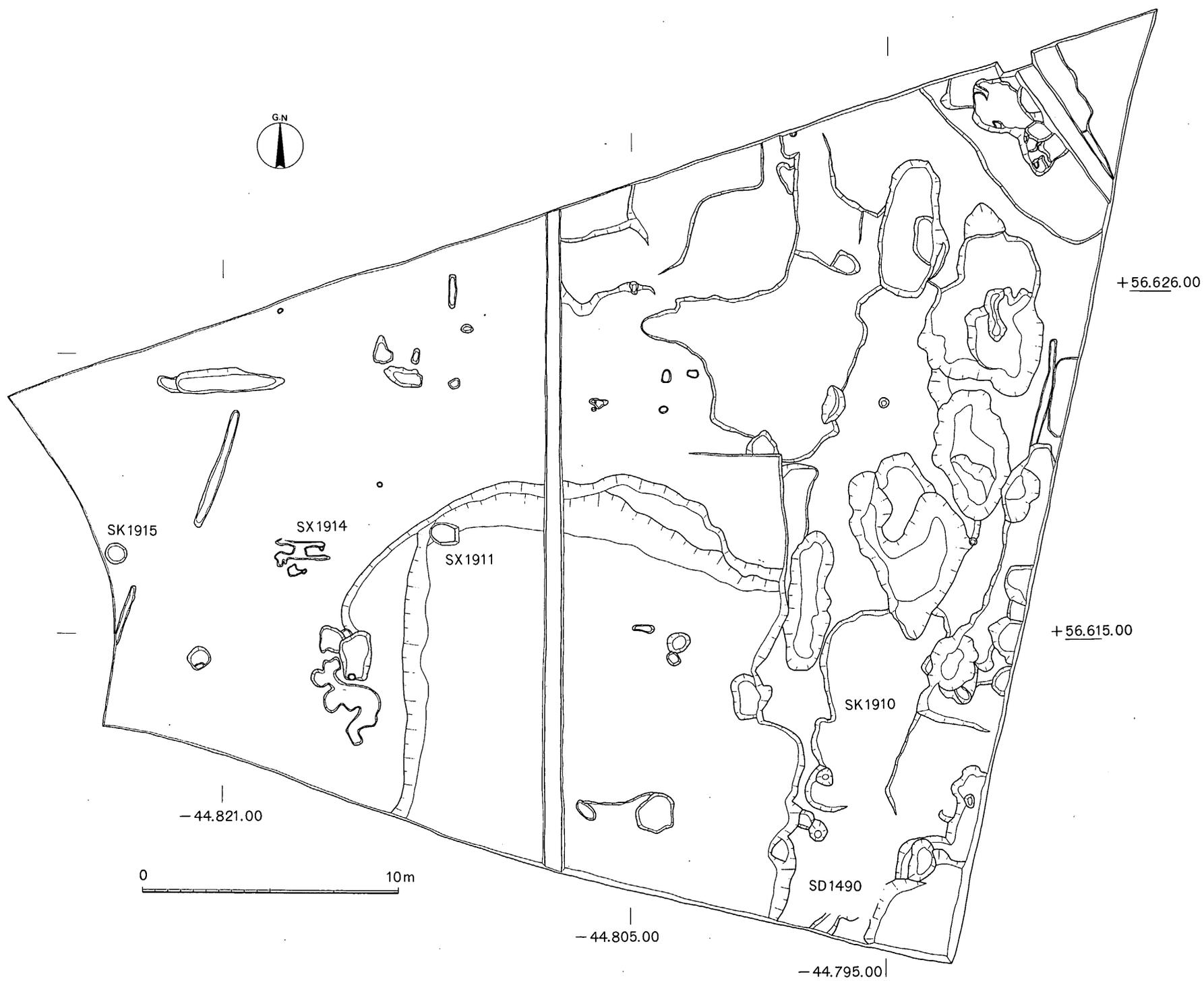
須恵器

杯蓋(3) 口径20.4cm、器高2.3cmほどに復原される蓋で、口径端部を断面三角形状に小さくつまみ出している。灰白色を呈し、やや軟質の焼成。内面に墨が付着しており、硯への転用がうかがえる。茶褐色土層出土。

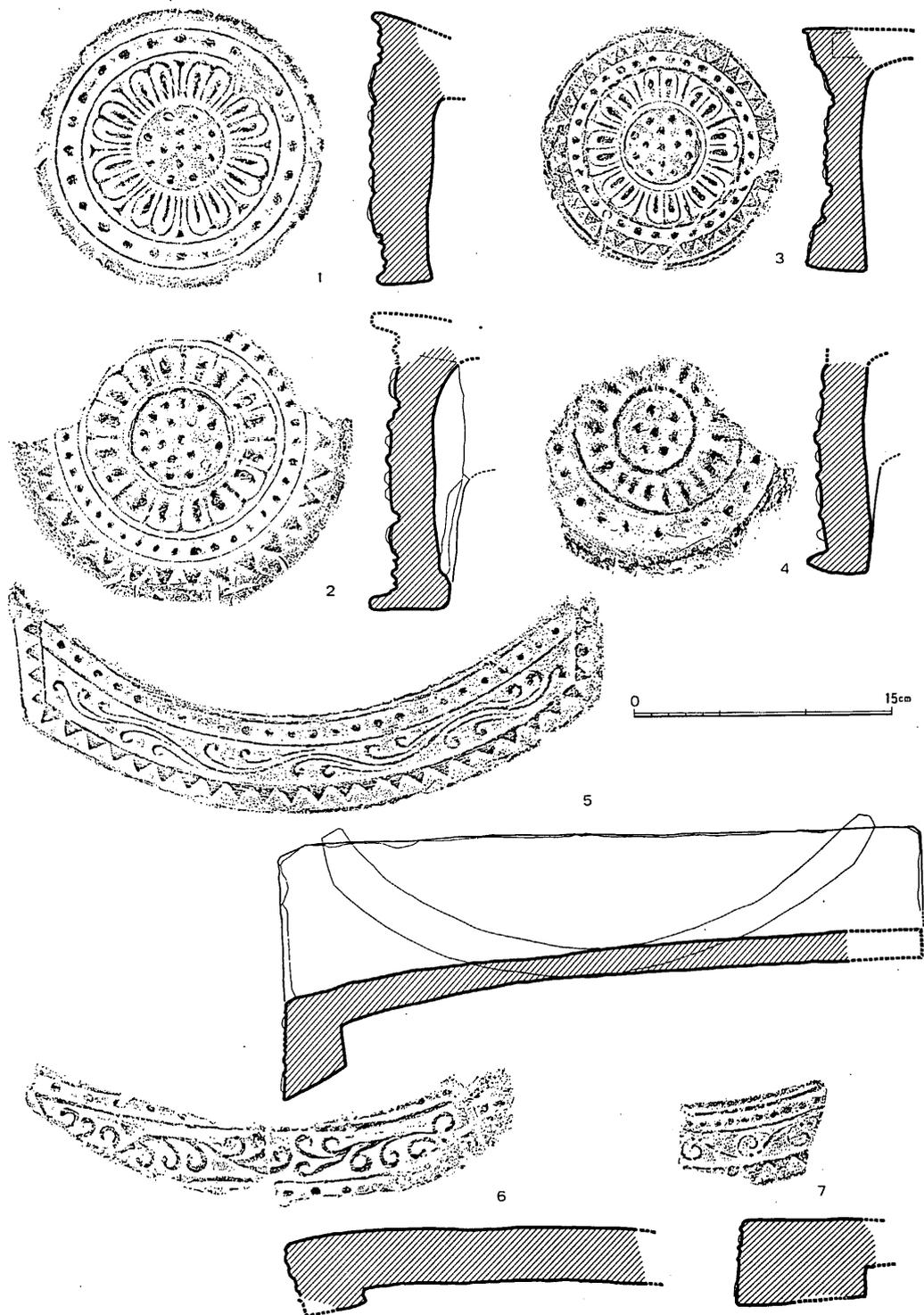
杯身(2) 底部に断面逆台形の低



第65図 茶褐色土層出土土器・硯実測図



第64図 第73次調査遺構配置図



第66图 軒先瓦拓影·实测图

い高台を有する杯身で、口径13.1cm、高台径8.3cm、器高3.5cmに復原される。体部は底部から外傾しつつほぼ直線的に立ち上がるが、口縁端部をわずかに外反させるために全体に丸味を感じさせる。高台は底部外端よりもやや内側に付けられている。茶褐色土層出土。

硯(1) 円面硯の小破片が茶褐色土層から2点出土した。1は台部の一部を残しており、陸部外端径を15.4cm、海部の外側をめぐる鏝部の径を21.5cmほどに復原しうる。他の一例もほぼ同様の器形をなす。

土師器

杯a(4) ほぼ完形で、口径12.8cm、底径9.6cm、器高2.6cmをはかる。器壁は薄くつくられており、口径に対して器高が低くなっている。体部の内外・内底は横ナデ・ナデによって調整される。糸切り離された外底には板状圧痕がみられる。精選された胎土を用いているが、軟質の焼成のために器表の残りは良くない。茶褐色土層出土。

以上大き目の破片数点について報告したが、他に器表に三彩を施した壺の胴部小片が出土している。須恵質に焼成された器壁の外表面に緑、茶褐・白の三色の釉を施している。器表には縦方向の凹線が瓜形状に認められる。床土からの出土で、時期の限定はできない。

瓦類

この調査で出土した瓦類は比較的少く、丸瓦・平瓦・軒瓦のほか若干の面戸瓦・熨斗瓦がある。これらは主に調査区の東側で検出したS K 1910および茶褐色土層から出土した。

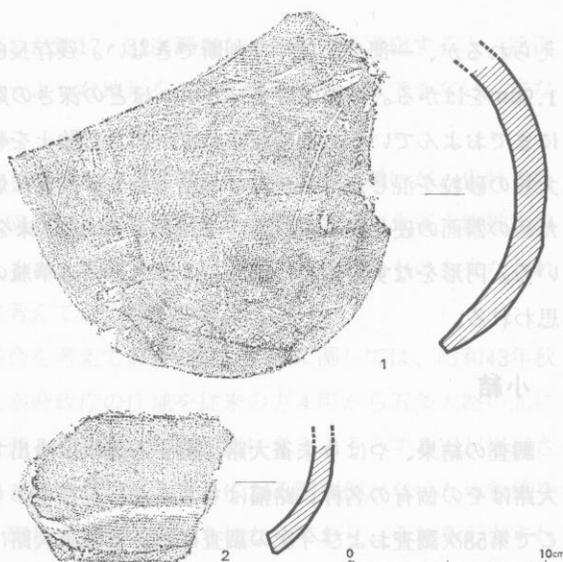
軒丸瓦(第66図、図版63)

出土点数21点で7型式に分類できる。いずれも1点または3～5点ずつで特にまとまりはない。このうち第66図-1はいわゆる鴻臚館式である。2は圏線で囲こまれた一段高い中房に1+6+12の蓮子を配する。弁は横幅が広く肉盛りが厚い。外区は珠文と凸鋸歯文を配している。瓦当裏面は下半の周縁に沿って2.0cmほどの幅で一段高くなっている。丸瓦の取付け位置は高く外区内縁付近にくる。3はやや小振り、圏線で囲こまれた一段高い中房に1+4+8の蓮子を配している。外区は内縁に珠文を外縁に凸鋸歯文を配するが外縁の立上りがなく珠文と鋸歯文は同一面にある。全体的に丁寧に仕上げられている。4は肉太の圏線で囲こまれた中房に1+6の蓮子を配する。弁の乱れが大きく形状は定かでない。外区は内縁に珠文を配するが、外縁は素文である。胎土に砂粒を多く含み、仕上げは粗雑である。

軒平瓦(第66図、図版63)

出土点数29点で4型式に分類できる。このうち第66図-5のいわゆる老司Ⅱ式が圧倒的に多く25点ある。この老司Ⅱ式は内区の扁行唐草文と外区の下縁および両脇区の凸鋸歯文、上縁の珠文とによって構成されているが、今回出土したものの中には外区上縁の珠文に大・小の二種類が認められる。しかしながら他の唐草文や鋸歯文には全くと云って良いほど形状の変化はなく、また各文様相互の位置関係にも変化は認められない。これは范型のちがいが、あるいは彫り直

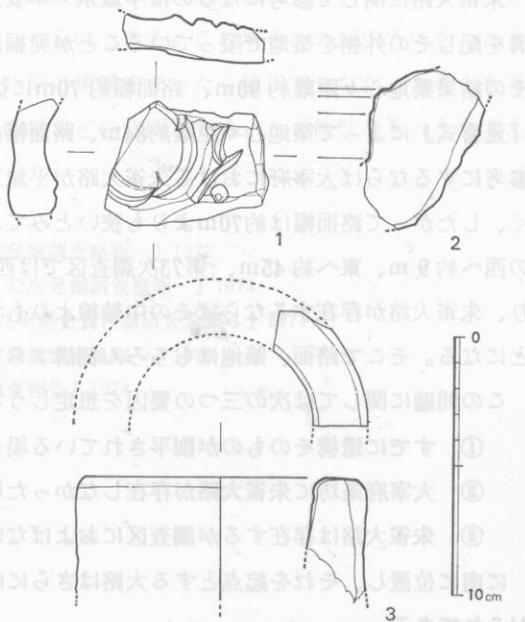
しのふたつが考えられるが、現在の段階ではいずれとも決しがたい。なお珠文の大きな方には瓦当面向って右側の唐草文の一部に横方向の範割れのあるものがある。6は両脇から中心に向って唐草文がのびる均正唐草文である。唐草文は肉太でやや粗雑である。外区は上・下縁および脇区ともに珠文を配する。顎は段顎で顎部にも縦方向の縄目の叩きが認められる。7は繊細な唐草の一部に小さな珠文を2個ずつ配している。外区上縁は小さな珠文を密に配し、下縁は正三角形に近い凸鋸歯文を配している。文様の彫りは浅い。顎は段顎である。胎土に砂粒を多く含む。



第67図 道具瓦拓影・実測図

道具瓦 (第67図、図版63)

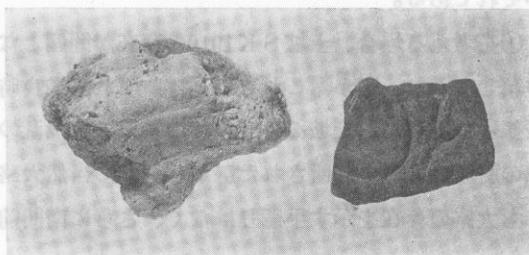
面戸瓦7点がある。いずれも丸瓦製作後、生乾きの段階で面戸瓦にした、いわゆる蟹面戸である。大・小の二種類があり、また中央の舌状部の先端を丸く作り出すものと直線に作り出すものがある。凸面の縄叩き目は磨り消している。凹面縁部はすべて面取りしている。



铸造関係遺物 (第68図)

今次の調査ではS X 1914・S K 1915あるいは床土・茶褐色土層から铸型・鞆羽口・鉄鋅・銅鋅・炉壁片などの铸造に関する遺物が出土した。このうち铸型について紹介しておく。

■铸型 (1~3) いずれもS K 1915から焼土・炭化材・炉壁片・鉄鋅などとともに検出された。1は仏像光背の火炎あるいは錫杖の錫頭などの仏具の一部と考



第68図 铸型実測図・写真

えられるが、一部分の破片で判断できない。残存長6.3cm、同幅4.8cm、もっとも厚い部分で1.9cmをはかる。范面には3～6mmほどの深さの彫りがみられる。熱作用による黒変が裏面にまでおよんでいる。細砂粒をわずかに含む胎土を軟質に焼成している。これに対し2・3は大粒の砂粒を混じえたスサ入りの胎土をやや硬質に焼成した鑄型で、いずれも内面に熱作用のための器面の硬化がみられる。3は約3cmの厚味をもつが、その3分の2ほどまで黒変している。円形をなす器物の一部で、3はあるいは華瓶の口頸部ないしは脚部の一部であろうかと思われる。

小結

調査の結果、やはり朱雀大路に関する遺構は検出できなかった。大宰府条坊制における朱雀大路はその個有の名称、路幅はもちろん、存在そのものについてすら資料を欠いている。そこで第58次調査および今次の調査において朱雀大路に関する遺構を検出できなかったことの意味を考えておきたい。

朱雀大路に関して参考になるのは平城京・平安京の例である。平城京では大路路面の両側に溝を配しその外側を築地で限っていることが発掘調査によって確認あるいは推定されており、その結果築地心々距離約90m、路面幅約70mに復原されている。一方、平安京の朱雀大路(註5)は『延喜式』によって築地心々距離約84m、路面幅約70mであることが知られている。これらを参考にするならば大宰府における朱雀大路が平城京・平安京よりも大規模であったとは考え難く、したがって路面幅は約70mよりも狭いとみてよかろう。第58次調査区では政庁推定中軸線の西へ約9m、東へ約45m、第73次調査区では西へ約8m、東へ約37mの範囲を調査しており、朱雀大路が存在するならばその中軸線よりもすくなくとも東半分は調査区内に位置することになる。そこで路面、築地はもちろん側溝すらも検出できなかったのである。

この問題に関しては次の三つの要因を想定しうる。

- ① すでに遺構そのものが削平されている場合。
- ② 大宰府条坊に朱雀大路が存在しなかった場合。
- ③ 朱雀大路は存在するが調査区におよばない場合。すなわち朱雀門が調査区よりもさらに南に位置し、それを起点とする大路はさらに南から始まっていたと考える場合。

がそれである。

①を考える場合、土壇SK1910の存在が問題となる。SK1910にはおおよそ南北方向に瓦が堆積しており、しかもこれらの瓦はいずれも奈良時代に属するものであった。そこで当初注目を払っていたが、土壇そのものが中世以降の擾乱のみられる茶褐色土層に切り込んでおり、偶然の所産であると判断された。したがって当然大路に沿う築地に関する遺構ではない。その他にも大路の存在を示す手懸りはなく、さらに南門前面で外堀遺構を確認した第2次調査、ある

いは先述した礎石建物・掘立柱建物を検出した第17・32次調査などの成果を考慮すると、路面はともかくとして側溝までも削平してしまうような地形をここに考えることはできない。すなわち①の場合を想定するには無理が生ずる。

②については条坊地域の発掘調査が進行していない現状では何とも判断し難いが、史料で条坊に左郭・右郭の区分のみられること、太宰府町・筑紫野市において大字界が朱雀大路推定線を境にする傾向のみられることなどを考えると、現状では一部を除いて道そのものも失なわれているが、かつて大路の存在した可能性は考えておく必要がある。

①・②の想定に無理がある以上、③の場合を考えておきたい。これに関しては、昭和43年秋以来の大宰府史跡発掘調査の結果から、大宰府政庁の庁域を従来の方4町から五条大路の北に東西8町×南北4町、さらに大路の南に東西3町×南北1町程度に考えようとする案が提出されている。このうち大路南の南北長についてはまだ根拠とするにたる調査例がないため数値を示されていないが、^(註6)地形的に東側部分が1町ほどで急な段落ちになっており、それを考慮すれば3町×1町程度に考えられる。このように近年の調査の結果では庁域は県道の南側に張り出している可能性が強く、そうであれば朱雀門を調査区のさらに南に想定することができ、朱雀大路を痕跡すら検出できなかった事実も解釈しうるのである。この場合、大路以外にも、たとえば建物跡などの政庁の存続期間に併行する時期の遺構をまったく検出できなかったことを考慮すれば、政庁前面の南門と朱雀門との間は広場などの空間地であった可能性がもっとも考えやすい。

註1 九州歴史資料館『大宰府史跡—昭和46年度発掘調査略報—』1972

註2 九州歴史資料館『大宰府史跡—第30・31・32次発掘調査概報—』1974

註3 石松好雄「大宰府政庁の庁域について」『九州歴史資料館研究論集3』1977

註4 九州歴史資料館『大宰府史跡—昭和53年度発掘調査概報—』1979

註5 奈良市教育委員会『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974

註6 註3に同じ

別 表

番号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状痕圧の有無
					ヘ	ラ		
S B 1590(第67次調査)								
Ⅲ a								
1	2	8.3	5.25	1.5		○	○	○
Ⅲ b								
1	1	6.7	4.0	1.8		○	○	○
S D 1452								
Ⅲ b								
1	2	6.6	4.2	1.9		○	○	○
2	1	7.3	4.7	1.6		○	○	○
杯 a								
1	4	12.2	7.7	2.5		○	○	
杯 b								
1	3	12.1	7.0	2.8		○	○	○
2	5	12.8	7.7	2.5		○	○	
3	6	12.9	7.7	2.3		○	○	○
S D 1586								
Ⅲ a								
1	3	7.9	6.8	1.1		○	○	○
Ⅲ b								
1	1	6.8	4.4	1.8		○	○	○
2	2	7.5	5.8	1.6		○	○	○
杯 a								
1	4	12.0	2.5	8.4		○	○	
杯 b								
1	5	11.3	4.5	2.4		○	○	○
S D 1587								
Ⅲ b								
1	4	6.9	4.3	2.1		○	○	○
S D 1641								
Ⅲ b								
1	8	6.6	5.3	1.4		○		
S D 1651								
Ⅲ b								
1	9	6.7	4.7	1.5		○	○	○
S D 1656								
Ⅲ b								
1	11	6.9	4.0	1.9		○		

番 号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切 り 離 し		内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無
					へ	ラ		
S D 1657								
杯 a								
1	12	12.0	7.8	2.9		○	○	
S D 1659								
皿 b								
1	14	7.4	4.6	2.1		○	○	
S K 1588								
杯 a								
1	1	12.3	8.2	2.6		○	○	
2	3	12.9	8.1	2.5		○		
杯 b								
1	2	12.8	8.0	3.0		○	○	○
S K 1603								
皿 b								
1	1	6.9	3.9	1.9		○	○	○
2	2	7.5	4.9	2.2		○	○	○
杯 a								
1	3	13.2	8.95	3.2		○	○	○
S K 1604								
皿 b								
1	6	6.7	3.9	2.1		○	○	○
2	7	6.8	4.2	1.9		○	○	○
3	8	6.8	4.2	2.0		○	○	○
4	9	6.8	4.3	2.0		○	○	○
5	10	6.8	4.3	2.0		○	○	○
6	11	6.8	4.5	2.0		○	○	
7	12	6.9	4.2	2.0		○	○	○
8	13	7.0	4.6	1.9		○	○	○
9	14	7.8	5.3	1.8		○	○	○
杯 b								
1	15	12.5	6.8	2.7		○	○	○
2	16	12.7	7.4	3.1		○	○	
3	17	12.8	7.1	3.1		○	○	○
4	18	12.8	7.3	3.3		○	○	○
5	19	12.8	7.3	3.3		○	○	○
6	20	12.9	7.1	3.0		○	○	○
7	21	12.9	7.3	3.3		○	○	
8	23	13.0	7.0	3.1		○	○	○
9	22	13.0	7.3	3.5		○	○	○
10	24	13.1	7.3	2.9		○	○	○
11	25	13.2	7.2	3.2		○	○	○

番 号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切 り 離 し		内 底 部 の ナデの有無	板 状 圧 痕 の 有 無
					へ	ラ 糸		
S K 1609								
Ⅲ b								
1	26	6.1	3.9	1.8		○	○	○
2	27	6.2	3.4	2.1		○	○	○
3	30	6.3	3.7	2.0		○	○	○
4	28	6.3	4.0	1.8		○	○	○
5	29	6.3	4.0	1.9		○	○	○
6	31	6.5	3.8	1.8		○	○	○
7	33	6.5	3.9	1.9		○	○	○
8	34	6.5	3.9	2.0		○	○	○
9	32	6.5	4.7	1.8		○	○	
10	35	6.6	3.8	1.9		○	○	○
11	36	6.75	4.3	1.7		○	○	○
12	37	7.0	4.6	1.7		○	○	○
S K 1611								
Ⅲ b								
1	39	7.5	3.9	2.0		○	○	○
S K 1635								
Ⅲ b								
1	38	7.4	4.3	1.8		○	○	
S K 1655								
Ⅲ b								
1	1	7.25	4.3	2.0		○	○	○
杯 a								
1	2	13.5	9.6	(2.9)		○	○	○
杯 b								
1	3	12.9	7.5	3.5		○	○	
2	4	13.8	8.8	(3.4)		○	○	
S X 1629								
Ⅲ b								
1	1	7.0	4.8	2.3		○	○	
杯 a								
1	2	12.4	8.2	2.9		○	○	
S X 1633								
Ⅲ a								
1	8	8.1	5.8	1.3		○	○	○
Ⅲ b								
1	5	6.6	3.9	2.2		○	○	
2	7	6.8	3.8	1.7		○	○	
3	6	6.9	4.1	2.0		○	○	○

番 号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切 り 離 し		内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無
					へ	ラ		
杯 b								
1	10	12.4	7.2	2.9		○	○	○
2	12	12.6	7.1	2.9		○	○	
3	11	12.6	7.2	2.8		○	○	○
4	13	12.8	7.5	3.0		○	○	○
5	14	13.7	8.1	3.3		○	○	○
皿 d								
1	9	9.0	5.4	2.4		○	○	○
S X 1637								
皿 a								
1	15	8.15	5.55	1.2		○	○	
2	16	8.65	7.0	1.6		○	○	
S X 1663								
皿 b								
1	1	6.3	3.9	1.8		○	○	○
2	2	6.4	3.75	2.0		○	○	○
3	3	6.4	3.9	2.1			○	○
4	4	6.7	3.6	2.0		○	○	○
5	5	6.9	4.2	1.9		○	○	○
6	6	6.9	4.2	1.95		○	○	○
杯 a								
1	7	12.2	8.3	2.3		○	○	○
2	8	12.5	8.8	2.5		○	○	○
3	9	12.6	9.2	2.5		○	○	○
4	10	12.9	9.0	2.1		○	○	○
杯 b								
1	11	11.7	5.5	3.15		○	○	○
2	12	12.5	7.2	3.2		○	○	○
3	13	12.6	6.3	3.1		○	○	○
4	14	12.6	7.2	3.2		○		○
5	15	12.8	7.3	3.2		○	○	○
6	17	13.0	7.0	3.3		○	○	○
7	16	13.0	7.3	2.9		○	○	○
8	18	13.1	6.6	3.5		○	○	
9	19	13.3	6.7	3.8		○	○	○
10	20	14.0	7.6	3.5		○	○	○
11	21	14.4	7.9	3.5		○	○	○
12	22	14.4	8.1	3.7		○	○	○
13	23	15.2	8.4	3.8		○	○	○
整 地 層								
皿 a								
1	2	8.2	6.0	1.1		○	○	○
2	3	8.4	6.4	(1.3)		○	○	

番号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無
					へ	ラ		
皿 b								
1	1	7.1	4.7	1.5		○	○	○
杯 a								
1	5	12.6	9.1	2.6		○	○	○
2	7	13.9	8.7	3.2		○	○	○
3	6	13.9	9.7	(3.0)		○	○	○
4	8	14.0	8.9	(3.1)				
杯 b								
1	4	12.6	7.3	2.9		○	○	
腐植土層								
皿 b								
1	2	6.4	4.2	1.5		○	○	
2	3	6.6	4.2	1.7		○	○	
3	4	6.8	4.2	2.0		○	○	
4	5	7.2	4.4	1.5		○	○	
5	1	7.9	5.2	1.5		○	○	
杯 a								
1	10	13.2	9.6	2.6		○	○	○
2	9	13.2	9.8	2.9		○	○	○
杯 b								
1	6	11.6	7.0	3.5		○	○	
2	7	12.8	7.7	3.0		○	○	
3	8	12.8	8.6	3.1		○	○	
黒色土層								
皿 a								
1	19	8.0	6.2	1.0		○	○	○
皿 b								
1	1	6.2	4.0	1.7		○	○	○
2	3	6.4	4.7	1.6		○	○	
3	2	6.4	4.8	1.5		○	○	○
4	4	6.6	4.2	1.7		○	○	
5	5	6.6	4.2	1.8		○	○	○
6	8	6.8	4.2	1.7		○	○	○
7	6	6.8	4.3	1.5		○	○	
8	7	6.8	4.4	1.7		○	○	
9	18	6.9	3.9	1.8				
10	9	7.0	4.8	1.6				
11	10	7.1	4.5	1.6				
12	11	7.2	5.8	(1.8)		○	○	
13	12	7.4	4.4	1.7		○	○	○
14	13	7.4	4.4	2.0		○	○	
15	14	7.5	5.6	1.5		○	○	○
16	15	7.5	6.1	1.7		○	○	
17	16	7.6	4.0	1.7		○	○	
18	17	7.8	5.6	1.7		○		○

番 号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切 り 離 し		内底部の ナデの有無	板状庄痕 の有無
					へ	ラ		
皿 d								
1	20	9.1	5.2	2.5		○	○	○
2	21	9.8	5.6	2.6		○	○	
杯 a								
1	22	12.1	6.8	2.5		○	○	
2	23	12.4	7.4	2.7		○	○	○
3	25	12.4	8.4	2.8		○	○	○
4	24	12.4	8.9	2.9		○	○	○
5	26	12.8	8.8	2.7		○	○	○
6	27	13.0	8.3	2.9		○	○	○
杯 b								
1	29	11.5	5.0	(2.5)		○	○	
2	28	13.5	8.0	(2.7)		○		○
暗青灰色土層								
皿 a								
1	2	7.3	6.4	1.0		○	○	
2	1	7.6	4.9	1.3		○	○	
皿 b								
1	4	5.6	4.5	1.7		○	○	○
2	5	6.6	4.3	1.8		○	○	
3	6	6.8	4.9	1.4		○	○	
4	3	7.6	4.0	1.5			○	
5	7	7.8	4.9	1.8		○	○	
皿 d								
1	8	8.8	5.4	2.4		○	○	
杯 b								
1	9	10.4	5.6	2.4		○	○	
2	10	11.7	5.2	2.6		○	○	
3	11	11.8	5.2	2.4		○	○	
4	12	12.5	7.1	2.7			○	
黒灰色土層								
皿 a								
1	9	8.4	5.6	1.4		○	○	○
2	10	8.8	7.3	1.3		○	○	○
3	11	11.4	6.7	1.4		○	○	○
皿 d								
1	12	10.0	5.3	2.2		○	○	
杯 a								
1	13	12.7	8.2	2.7		○	○	
2	14	12.8	9.3	2.8		○	○	
杯 b								
1	15	12.9	7.9	2.4		○	○	○
2	16	13.2	7.8	2.6		○	○	○
3	17	13.8	7.6	3.2		○	○	○

番 号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切 り 離 し		内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無
					へ	ラ		
暗灰色土層								
皿 b								
1	1	6.3	3.9	1.8		○	○	
2	3	6.8	4.4	1.5		○	○	○
3	4	7.2	4.4	1.7		○	○	○
4	2	7.2	5.2	2.0		○	○	○
杯 a								
1	5	13.4	8.2	3.0		○	○	○
SD 570(第72次調査)								
皿 c								
1	2	13.2		1.7	○			○
杯 a								
1	1	11.5	7.2	2.4				○
椀								
1	3	14.4		5.1				
甕								
1	4	24.6						
鉢								
	5	49.0						
SD 587-1								
皿 a								
1		9.1	7.0	1.5	○		○	
2		9.2	7.2	1.6	○			
3		9.5	7.6	1.6	○			
4	1	9.6	7.0	1.0	○		○	○
5		9.6	7.3	1.2	○			
6	2	9.8	7.9	1.5	○			○
7	3	9.8	7.6	1.1	○		○	○
8	4	9.95	7.0	1.3	○			○
9	5	10.0	8.4	1.1	○		○	○
10	6	10.2	7.3	1.5	○		○	
11		10.2	8.0	1.1	○			○
12		10.4	7.7	1.7	○		○	○
13		10.4	7.9	2.0	○		○	
14		10.7	8.1	1.8	○			○
丸底の杯								
1	7	13.9		3.4		○		
2		14.1		3.2	○			
3		14.5		3.6	○			
4	8	14.6		3.7				
5	9	14.65		3.9	○			
6		14.7		3.6	○			
7	10	14.8		3.2	○			
8		14.8		3.4	○			○

番 号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切 り 離 し		内 底 部 の ナデの有無	板 状 圧 痕 の 有 無
					へ	ラ		
9		14.8		3.6	○			
10		14.8		3.9	○			
11		14.8		4.0	○			
12	11	14.9		3.0	○			
13		14.9		3.6	○			○
14		14.9		3.8	○			
15	12	14.9		3.9	○			○
16		14.9		3.9	○			○
17		14.9		4.0	○			○
18	13	15.0		3.0	○			○
19	14	15.0		3.2	○			○
20	15	15.0		3.3	○			
21		15.0		3.4	○			
22	16	15.0		3.5				○
23	17	15.0		3.5				○
24	18	15.0		3.5	○			
25		15.0		3.7	○			○
26		15.0		3.7	○			○
27	19	15.0		3.8				
28		15.0		3.8	○			
29		15.0		3.8	○			
30		15.0		4.1	○			
31		15.0		4.2	○			
32		15.1		3.6	○			
33		15.1		3.6	○			
34		15.1		3.7	○			
35	21	15.1		3.8				
36		15.1		3.9	○			
37		15.1		3.9	○			
38	22	15.1		4.1	○			
39	20	15.15		3.8	○			
40	23	15.2		3.5				○
41		15.2		3.7	○			
42		15.2		3.7	○			
43		15.2		3.7	○			
44		15.2		3.8	○			
45	24	15.2		3.9	○			○
46		15.2		4.4	○			
47	25	15.25		3.5	○			
48	26	15.25		3.7				
49	27	15.3		3.5	○			○
50	28	15.3		3.5				
51		15.3		3.5	○			○
52	29	15.3		3.6	○			
53		15.3		3.7	○			○
54		15.3		3.8	○			○
55		15.3		4.4	○			○

番 号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切 り 離 し		内 底 部 の ナデの有無	板 状 圧 痕 の 有 無
					へ ら	糸		
56	31	15.35		3.5				○
57	30	15.35		3.6				
58		15.4		3.2	○			○
59	32	15.4		3.3				○
60		15.4		3.5	○			
61		15.4		3.7	○			
62		15.4		3.8	○			○
63	33	15.4		3.9				
64		15.4		3.9	○			○
65		15.4		4.1	○			
66	34	15.4		4.2	○			○
67		15.4		4.2	○			
68		15.4		4.4	○			
69	35	15.5		3.5	○			○
70	36	15.5		3.6				○
71		15.5		3.6	○			
72		15.5		3.6	○			
73	37	15.5		3.8				
74		15.5		4.0				
75		15.5		4.2	○			
76		15.6		3.5	○			
77	38	15.6		3.6				
78		15.6		3.6	○			
79		15.6		3.6	○			○
80		15.6		3.7	○			○
81		15.6		3.9	○			
82		15.6		3.9	○			
83	39	15.7		3.4	○			○
84		15.7		3.7	○			○
85		15.7		3.7	○			○
86		15.7		3.7	○			
87		15.7		3.8	○			○
88		15.7		3.9	○			
89		15.7		4.3	○			○
90		15.7		4.9	○			○
91		15.8		2.9	○			○
92		15.8		3.0	○			○
93	41	15.8		3.5				○
94		15.8		3.9	○			○
95		15.8		4.1	○			○
96		15.8		4.3	○			○
97	40	15.85		3.5				
98		15.9		3.7	○			○
99		15.9		3.7	○			
100		15.9		3.8	○			
101	42	16.0		3.8				○
102	43	16.5		3.5				

番 号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切 り 離 し		内 底 部 の ナデの有無	板 状 圧 痕 の 有 無
					へ	ラ		
103		17.5		4.3	○			○
104		18.1		4.2	○			○
杯 c								
1	45	13.6		4.3				
2	46	14.0		4.0	○			
椀								
1		14.9		4.7	○			
2	47	16.3		5.5				
S D 587— 2 下層								
皿 a								
1	1	8.7	6.85	1.1	○		○	○
2		8.8	7.6	1.6	○			○
3		8.9	7.6	1.6	○			○
4	2	9.0	6.8	1.3	○			○
5	3	9.05	6.7	1.35	○			
6		9.1	7.0	1.4	○		○	
7	4	9.15	6.65	1.4	○		○	○
8		9.2	7.2	1.3	○		○	○
9	5	9.2	7.55	1.3	○		○	○
10		9.3	6.7	1.7	○		○	○
11		9.3	6.8	1.2	○		○	○
12		9.3	7.1	1.7	○		○	○
13	6	9.3	7.4	1.1	○			○
14		9.5	6.7	1.5	○			
15		9.5	7.8	1.6	○			○
16		9.6	7.0	1.4	○		○	○
17		9.6	7.5	1.2	○			○
18	7	9.6	7.55	1.6	○		○	○
19		9.7	7.0	1.8	○		○	
20		9.7	7.7	1.3	○			○
21	8	9.75	7.7	1.5	○		○	○
22		9.8	7.3	1.7	○			○
23	9	9.8	7.6	1.4	○		○	○
24		9.8	7.7	1.6	○		○	○
25		9.9	7.3	1.8	○			
26		9.9	7.9	1.9	○			
27	10	9.95	8.6	0.9	○		○	○
28	12	10.0	7.2	1.2	○		○	
29		10.0	7.5	1.7	○			○
30	11	10.0	7.7	1.2	○		○	
31	14	10.0	7.85	1.1	○		○	○
32		10.0	8.1	1.6	○		○	○
33	13	10.05	7.8	1.4				○
34		10.1	7.6	1.5	○		○	○
35	15	10.1	7.65	1.3	○		○	
36		10.1	7.7	1.6	○			○

番 号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切 り 離 し		内 底 部 の ナデの有無	板 状 圧 痕 の 有 無
					へ	ラ		
37		10.2	7.4	1.8	○			
38		10.2	7.9	2.1	○			○
39		10.3	8.3	1.5	○		○	○
40		10.4	8.1	1.4	○		○	○
41		10.6	7.9	1.5	○			○
丸底の杯								
1	16	13.9		3.6	○			○
2		14.0		3.4	○			○
3		14.5		3.9	○			○
4		14.7		3.8	○			○
5		14.7		3.9	○			
6	17	14.75		3.4	○			
7		14.8		3.6	○			
8		14.9		3.8	○			○
9		15.0		3.6	○			○
10		15.0		4.0	○			
11		15.1		3.5	○			○
12		15.1		3.6	○			○
13		15.1		3.7	○			
14		15.1		3.7	○			○
15		15.1		3.8	○			○
16		15.1		3.8	○			
17		15.1		3.9	○			○
18	18	15.15		3.7	○			
19		15.2		3.8	○			○
20		15.2		3.8	○			
21		15.2		4.3	○			○
22		15.3		3.5	○			○
23		15.3		4.2	○			○
24		15.3		4.3	○			○
25	19	15.35		2.9	○			
26	20	15.35		3.3	○			
27		15.4		3.9	○			
28	21	15.5		3.6				
29		15.5		3.7	○			○
30		15.5		3.8	○			
31		15.5		4.2	○			
32	22	15.6		3.5	○			○
33		15.6		3.6	○			○
34		15.6		3.7	○			○
35		15.6		4.4	○			○
36		15.7		3.6	○			○
37		15.7		3.8	○			○
38		15.7		3.9	○			○
39	23	15.8		3.9	○			
40	24	15.95		3.7				
41		16.0		4.1	○			

番 号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切 り 離 し		内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無
					へ	ラ		
42		16.0		4.2	○			
43		16.1		3.6	○			
44		16.5		4.5	○			
45		16.9		4.4	○			
46		17.5		5.0	○			○
47	25	18.0		4.6	○			○
杯 c								
1	26	13.5		4.5	○			
2	27	13.9		4.15				
3	28	14.4		4.4	○			
4	29	14.4		4.5				
椀								
1		15.2		5.8				
2	30	15.4		6.5				○
黒色土器 A 椀								
1	31	15.0		5.7				
黒色土器 B 椀								
1	33	15.0		5.7				
2	32	15.15		4.7				
3	34	16.2		5.6				
瓦器 椀								
1	37	15.4		5.4				
2	36	15.4						
3	35	16.6		5.2				
鉢・鍋								
1	38	37.4		7.95				
2	39	49.4						
SD 587-2 上層								
III a								
1	1	8.55	6.8	0.8	○		○	
2		9.0	6.6	1.4	○			○
3		9.1	6.0	1.3	○			○
4		9.1	7.0	1.2	○		○	○
5		9.2	6.8	1.3	○			○
6		9.2	7.1	1.5	○			○
7		9.3	6.7	1.4	○		○	○
8		9.3	6.8	1.2	○			○
9		9.3	7.1	1.5	○			○
10		9.3	7.3	1.2	○		○	○
11	2	9.35	6.1	1.5	○		○	○
12	3	9.4	7.3	1.0	○			○
13	4	9.4	7.1	1.2	○		○	○
14	6	9.4	5.5	1.3	○		○	○
15		9.4	6.8	1.5	○			○
16		9.4	7.4	1.5	○			○
17	5	9.4	7.9	1.6	○			○

番 号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切 り 離 し		内 底 部 の ナデの有無	板 状 圧 痕 の 有 無
					へ	ラ		
18		9.4	7.1	1.6	○			
19		9.4	7.2	1.9	○			○
20	7	9.5	6.9	1.3	○		○	○
21		9.5	6.9	1.5	○		○	○
22		9.5	7.0	1.4	○		○	○
23		9.5	7.6	1.6	○		○	○
24		9.5	7.7	1.7	○			○
25	8	9.55	6.0	1.7	○			
26	9	9.55	6.85	1.5	○		○	○
27		9.6	6.8	1.5	○			○
28		9.6	7.6	1.5	○			○
29		9.6	7.7	1.6	○			
30	10	9.65	7.05	1.3				
31		9.7	7.1	1.4	○			○
32		9.8	7.1	1.5	○			
33		9.8	7.4	1.6	○			○
34		9.8	8.1	1.0	○		○	○
35	11	9.9	4.5	1.2	○			○
36	12	9.9	5.4	1.3	○		○	○
37		9.9	8.1	1.8	○			
38		9.9	8.3	1.6	○		○	○
39	13	9.95	7.55	1.3	○		○	○
40		10.0	6.9	1.6	○		○	○
41		10.0	7.9	1.7	○		○	○
42		10.0	8.2	1.4	○			○
43		10.1	7.6	1.4	○			○
44	14	10.2	7.1	1.8	○		○	○
45		10.2	7.4	1.7	○		○	○
46		10.2	7.9	1.6	○		○	○
47		10.4	8.3	1.2	○		○	○
48	15	10.8	8.4	1.7				
49		10.8	7.5	1.8	○			
丸底の杯								
1		11.4		2.2	○			○
2		13.4		3.6	○			
3		13.5		3.2	○			
4		14.1		3.7	○			○
5		14.2		3.8	○			○
6		14.4		3.3	○			
7	16	14.7		3.6				○
8	17	14.75		3.4	○			○
9		14.8		4.0	○			
10	18	14.9		3.2	○			
11		14.9		3.5	○			○
12	19	14.9		3.7	○			○
13		14.9		3.7	○			
14	20	14.95		3.3	○			○

番 号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切 り 離 し		内 底 部 の ナデの有無	板 状 圧 痕 の 有 無
					へ	ラ		
15		15.0		3.6	○			
16		15.1		3.1	○			○
17		15.2		3.2	○			
18	21	15.2		3.3	○			
19	22	15.2		3.4	○			○
20		15.2		3.4	○			○
21		15.2		3.4	○			○
22		15.2		3.8	○			○
23		15.2		3.9	○			○
24	23	15.3		3.3	○			○
25		15.3		3.5	○			○
26		15.3		3.7	○			○
27	24	15.3		3.9				
28		15.4		3.4	○			○
29	25	15.4		3.5	○			
30		15.4		4.1	○			
31		15.4		4.2	○			○
32		15.5		3.5	○			○
33		15.5		4.0	○			
34	26	15.6		3.55	○			○
35		15.6		3.6	○			○
36		15.6		3.8	○			○
37		15.6		4.0	○			○
38	27	15.65		3.8	○			
39		15.7		3.6	○			
40		15.8		3.6	○			○
41		15.8		3.6	○			
42		15.9		3.9	○			
43	28	15.95		3.4	○			
44	29	16.0		3.4	○			○
45		16.0		3.4	○			○
46		16.0		3.6	○			
47		16.1		3.6	○			○
48	30	16.1		4.7	○			○
椀								
1	31	15.5		6.0				
黒色土器B椀								
1	32	15.6		5.9				
2	33	15.8		6.0				
鉢								
1	34	24.0						

圖 版

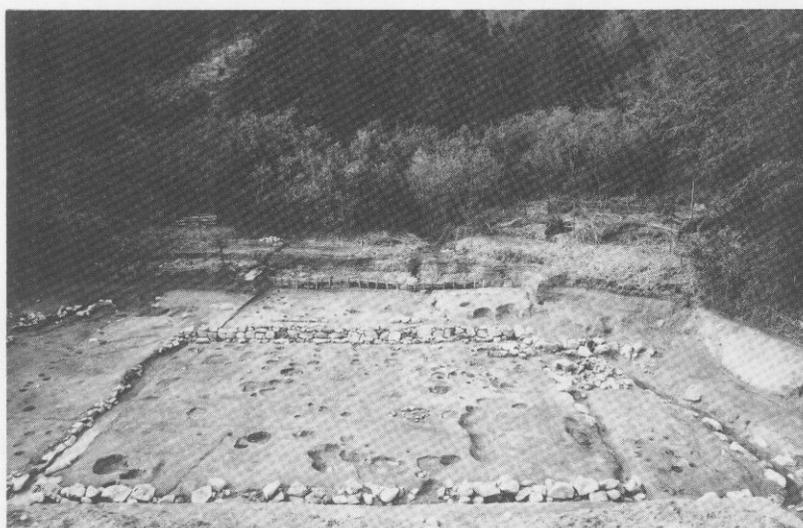
第67次調査

推定金光寺跡の
検出建物

礎石建物SB
1430(上方)と礎石
建物SB 1440(左)
……第57次調査



礎石建物
SB 1590全景
……第67次調査

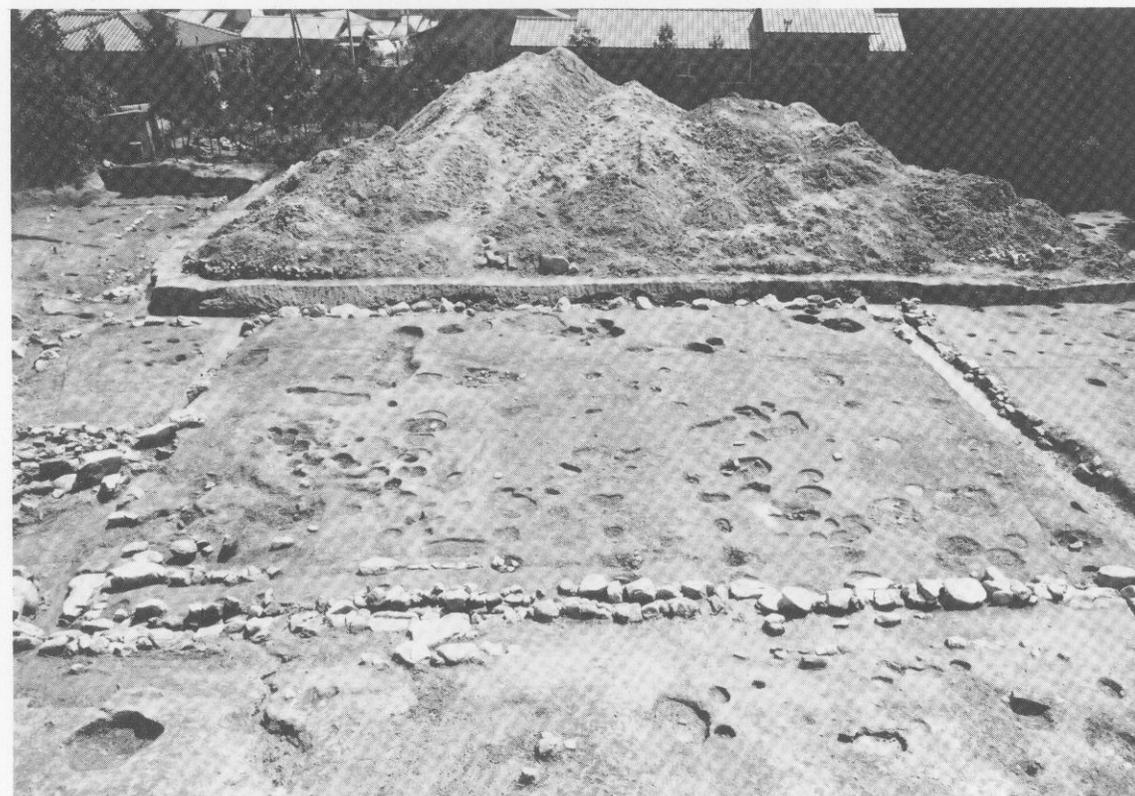


礎石建物
SB 1600全景
……第67次調査





礎石建物SBI590(南から)



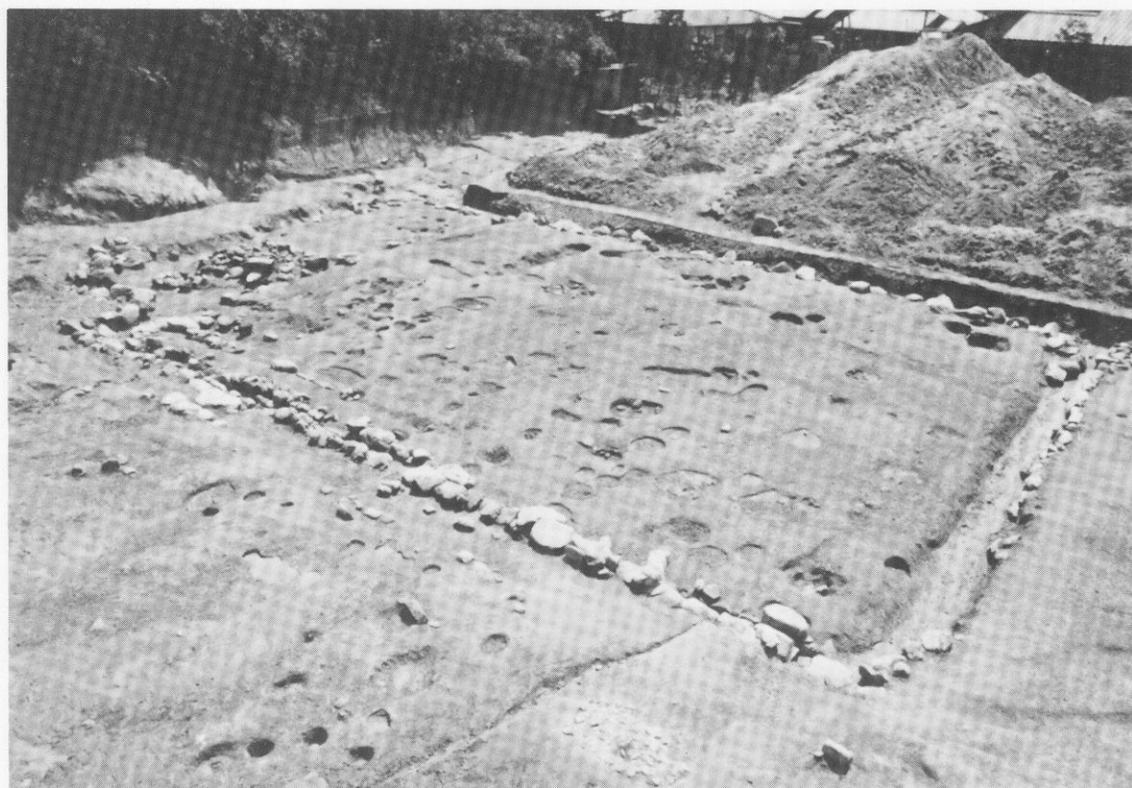
礎石建物SBI590(北から)



礎石建物SB1590(東から)と井戸SE1585



礎石建物SB1590(西から)



礎石建物SB I 590(北西から)



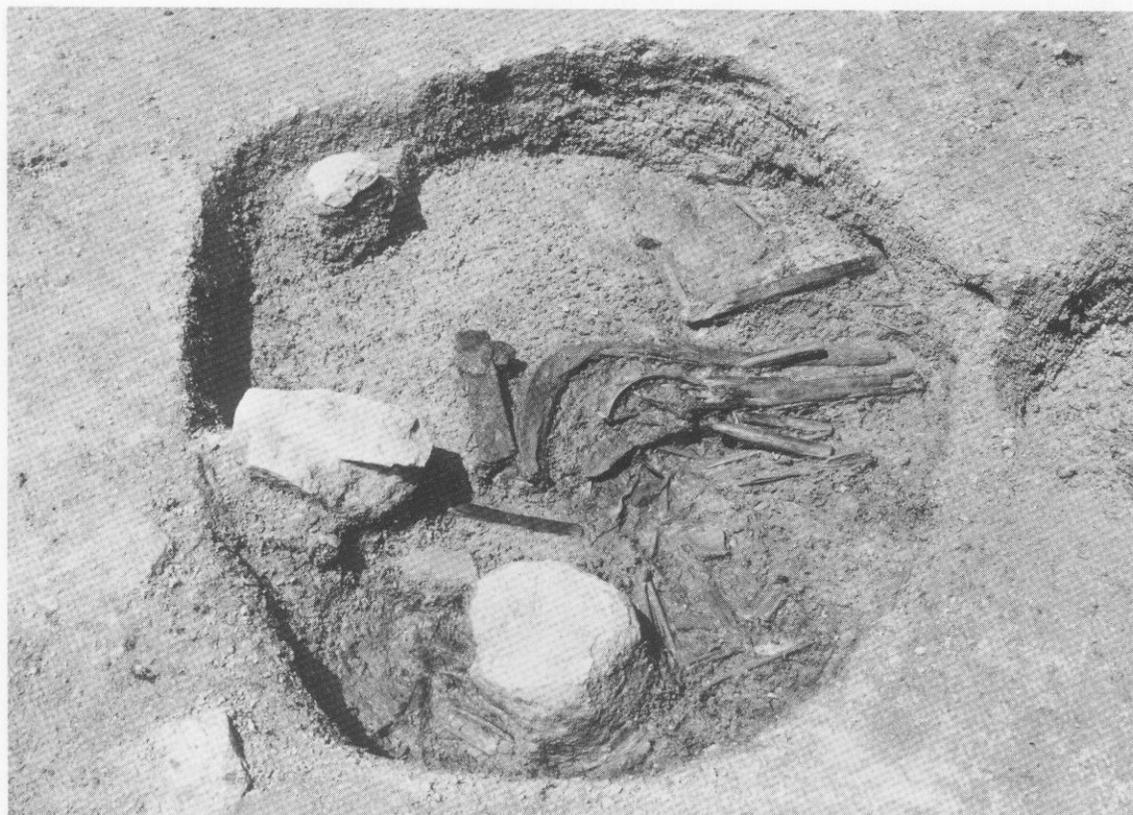
礎石建物SB I 590(北東から)と井戸SE I 585



礎石建物SBI1590(南東から)と溝SDI586A・井戸SEI585



溝SDI1592(南東から)



土壇SK1615

(上) 斧・鎌・鉞鎌・錐などの
出土状態

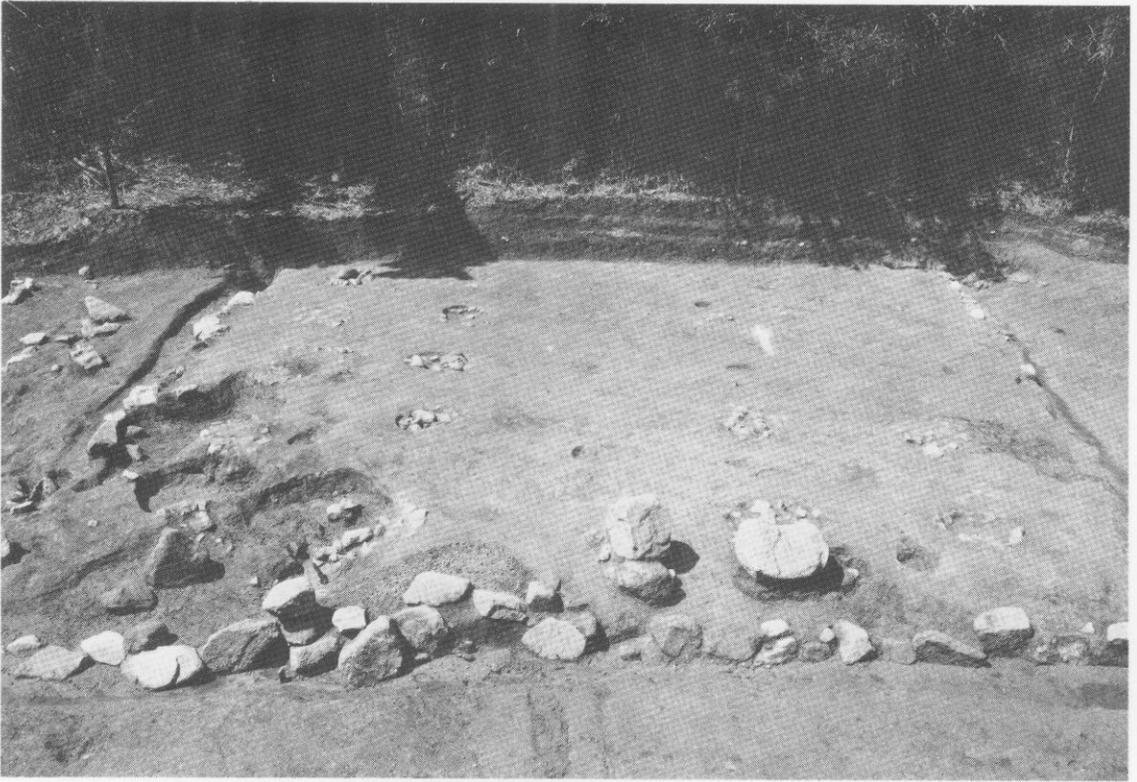
(左) 同上拡大



土壇1615、青磁盤・下駄などの出土状態



土壇1615(下)と土壇1595(上左)



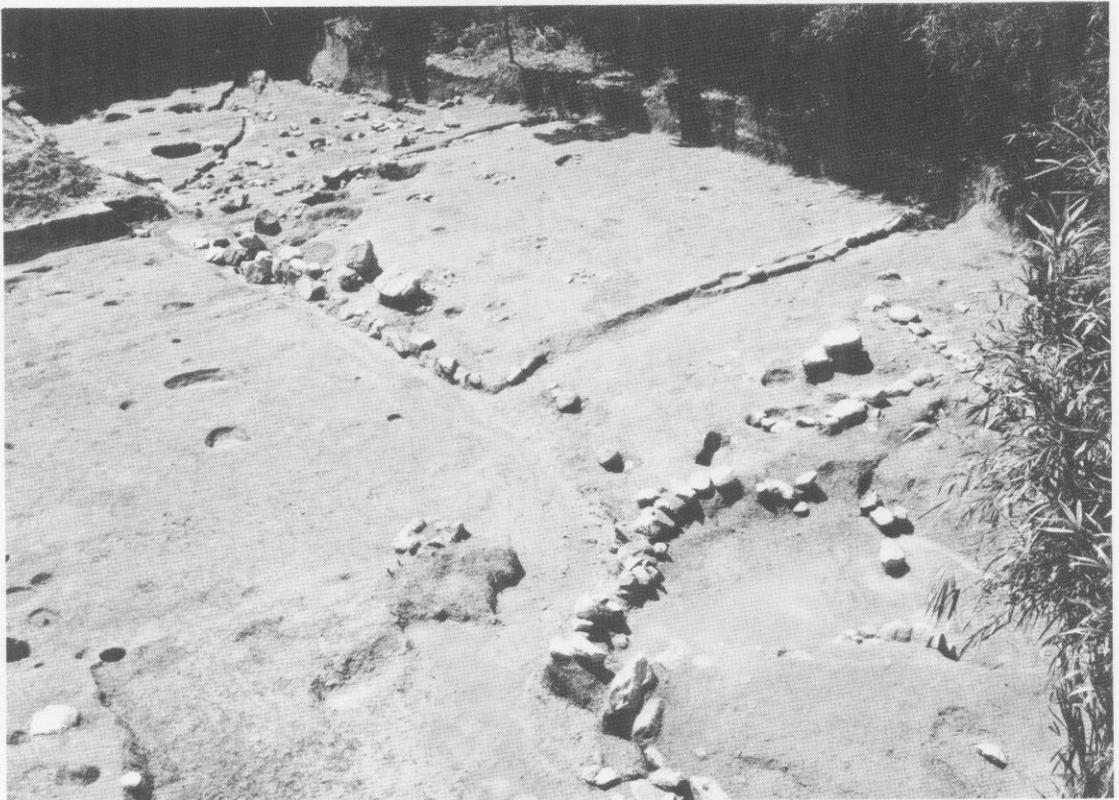
礎石建物SB1600(東から)



礎石建物SB1600(南から)



礎石建物SB1600(南東から)



礎石建物SB1600(北東から)と池状遺構SX1630



礎石建物SB1600雨落・排水溝

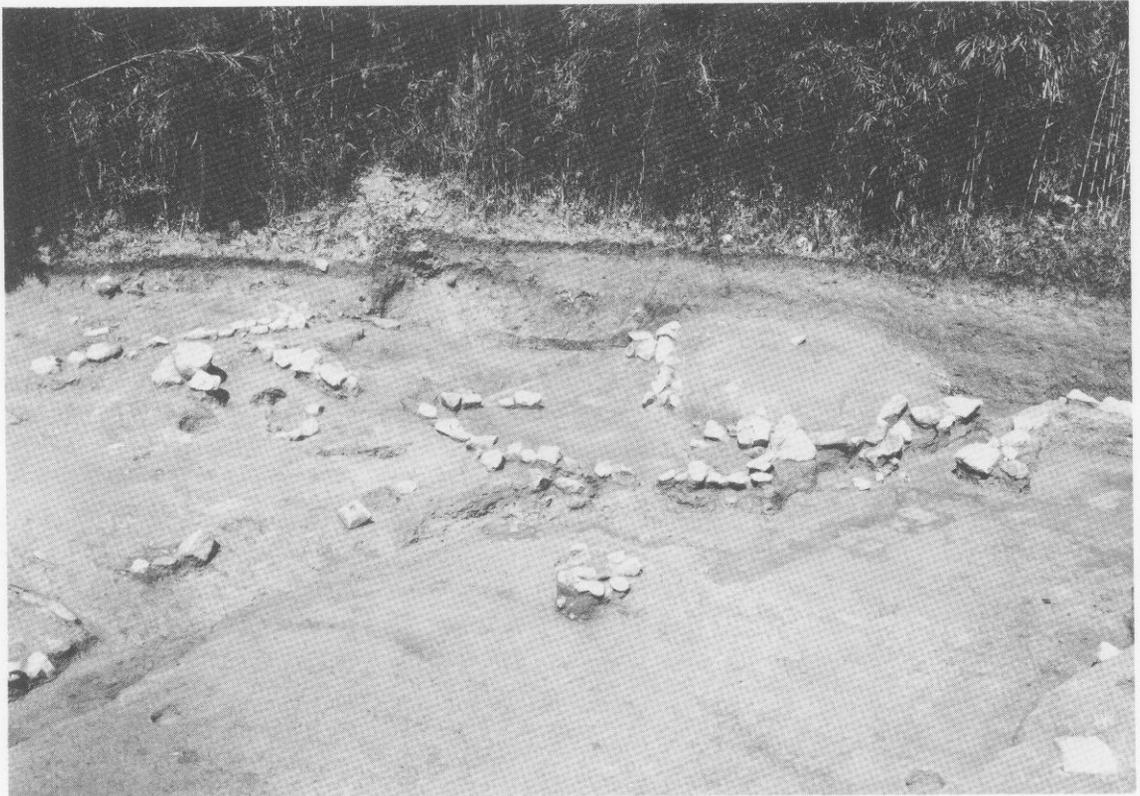
(上) SD1651・1652の
屈曲部

(左) SD1652





礎石建物SB 1590(右)と礎石建物SB 1600(左)を隔てる柵SA 1620



池状遺構SX 1630(中央)と石組遺構 SX 1640 (左端)

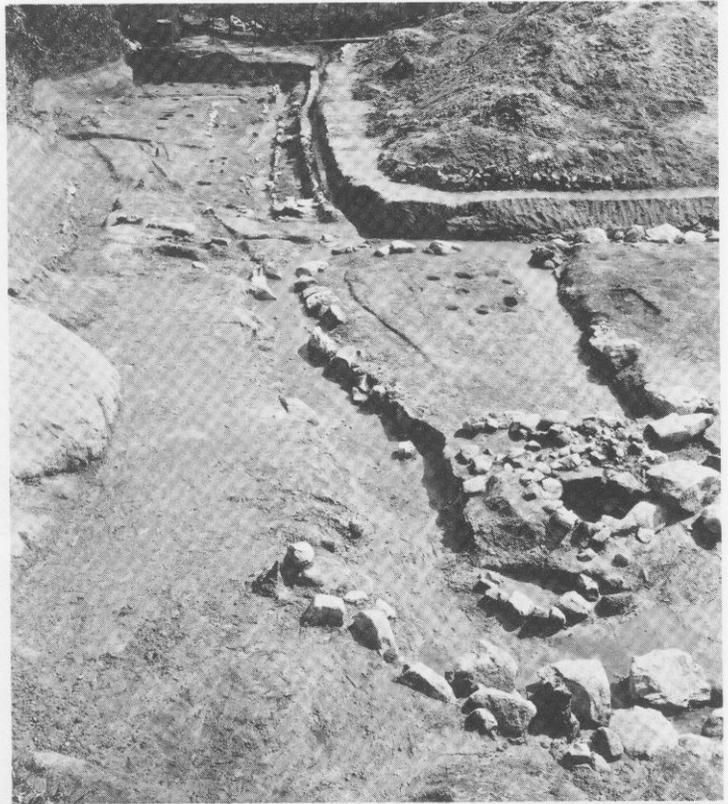


礎石建物SBI610(北から)



礎石建物SBI610(東から)

(右) 道路状遺構SX1670
全景(北から)



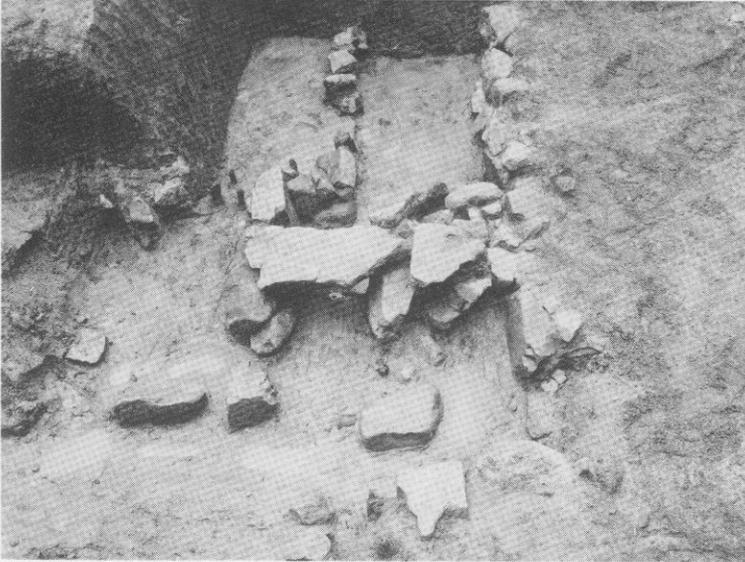
(下) 溝SD1452と道路
状遺構SX1670



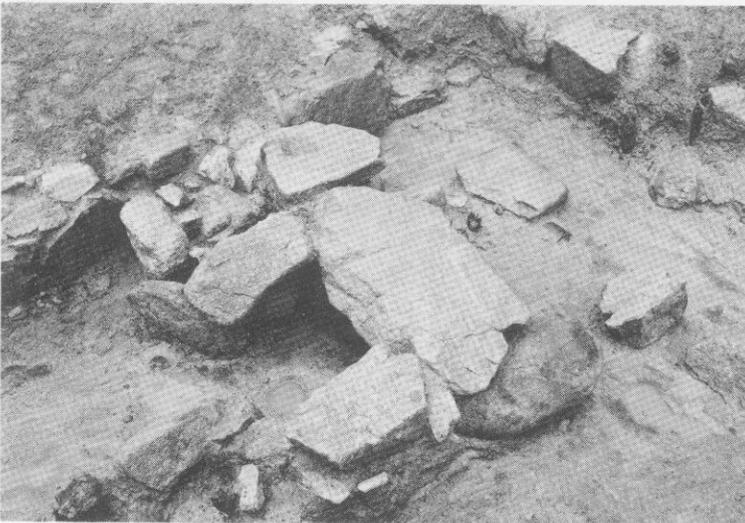


渡り石SX1675全景
溝SD1437に架設

西から

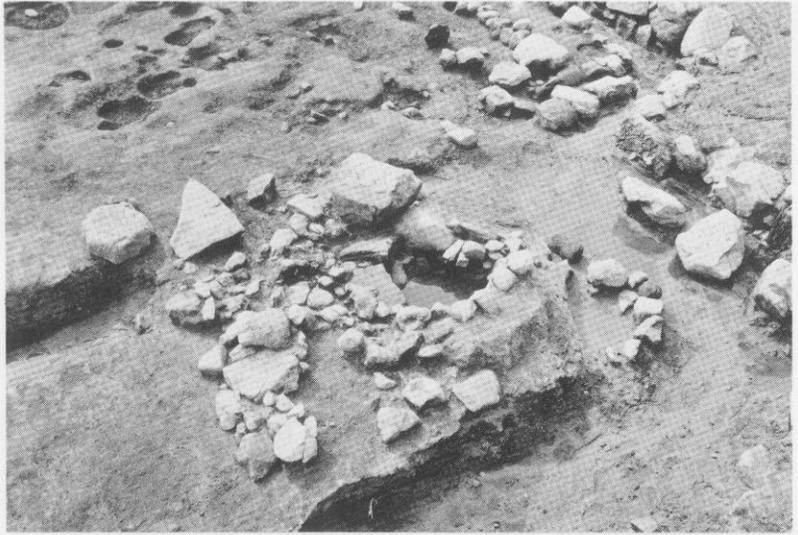


東から



南西から

井戸SE1585全景



南東から



南から



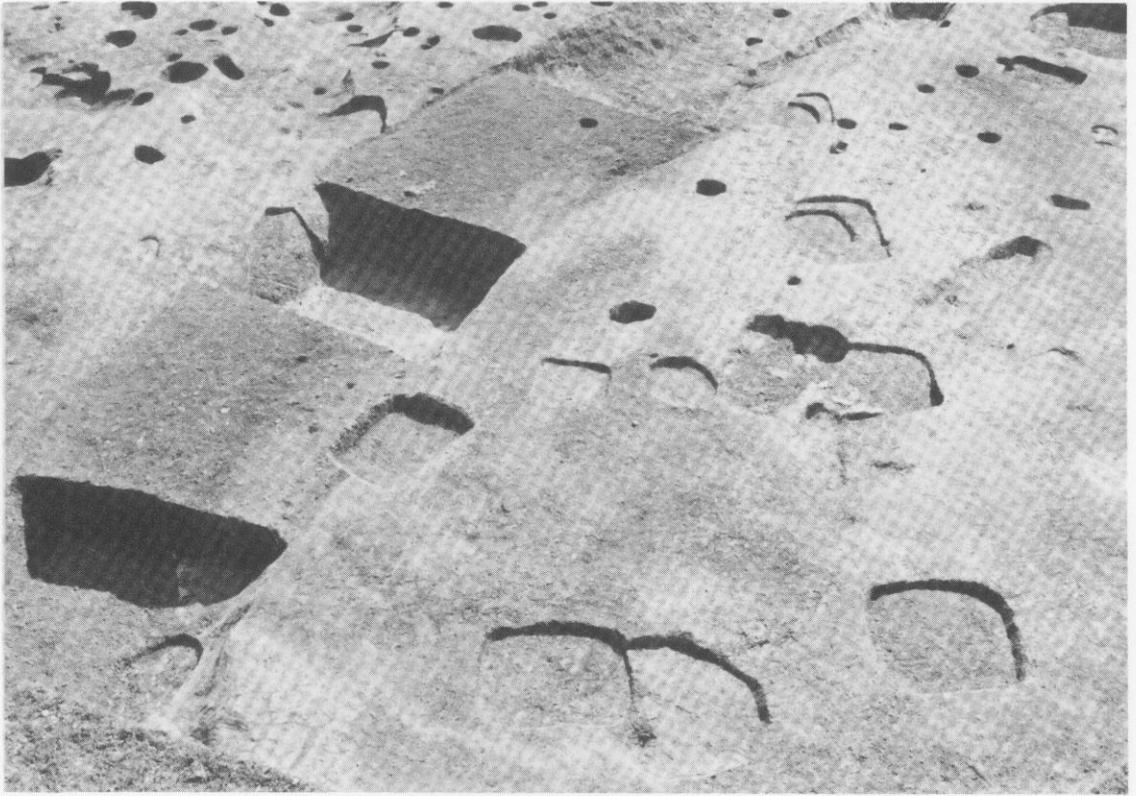
南から



第72次調査区全景(東から)



第72次調査区全景(北西から)



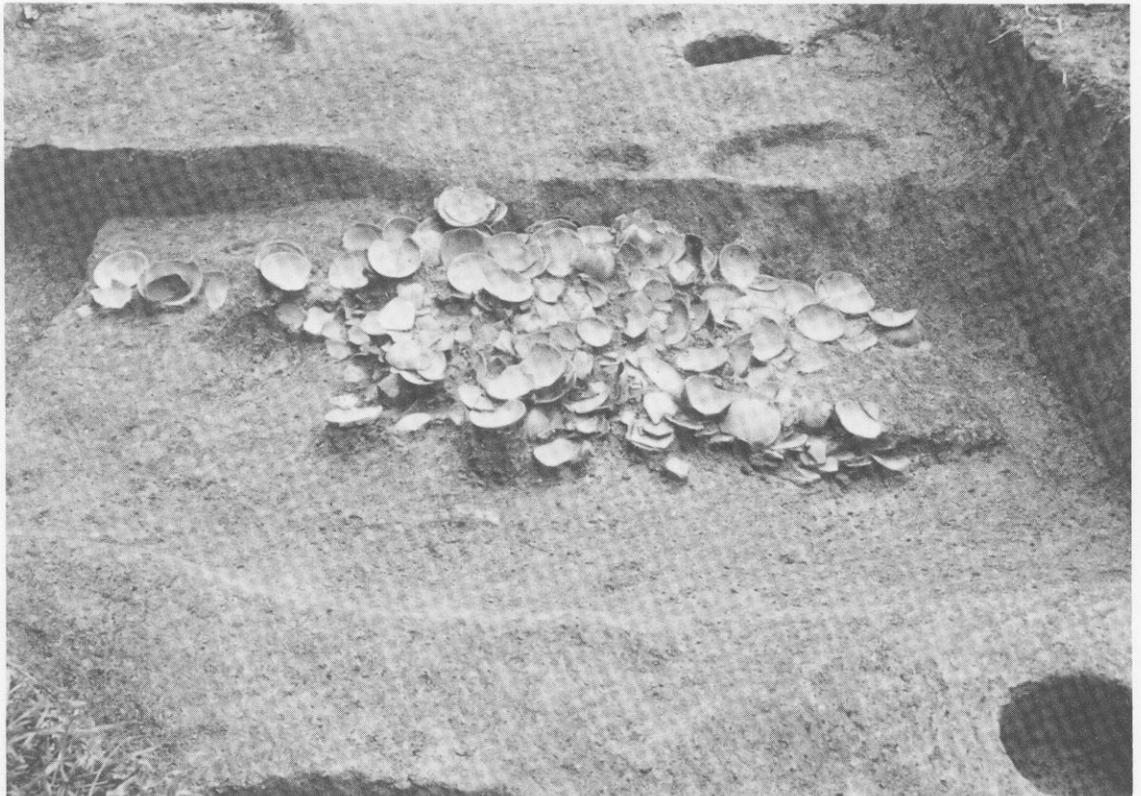
掘立柱建物SB1900と溝SD587-2(南から)



掘立柱建物SB1900と溝SD587-2(北から)



掘立柱建物SB580・1885(東から)



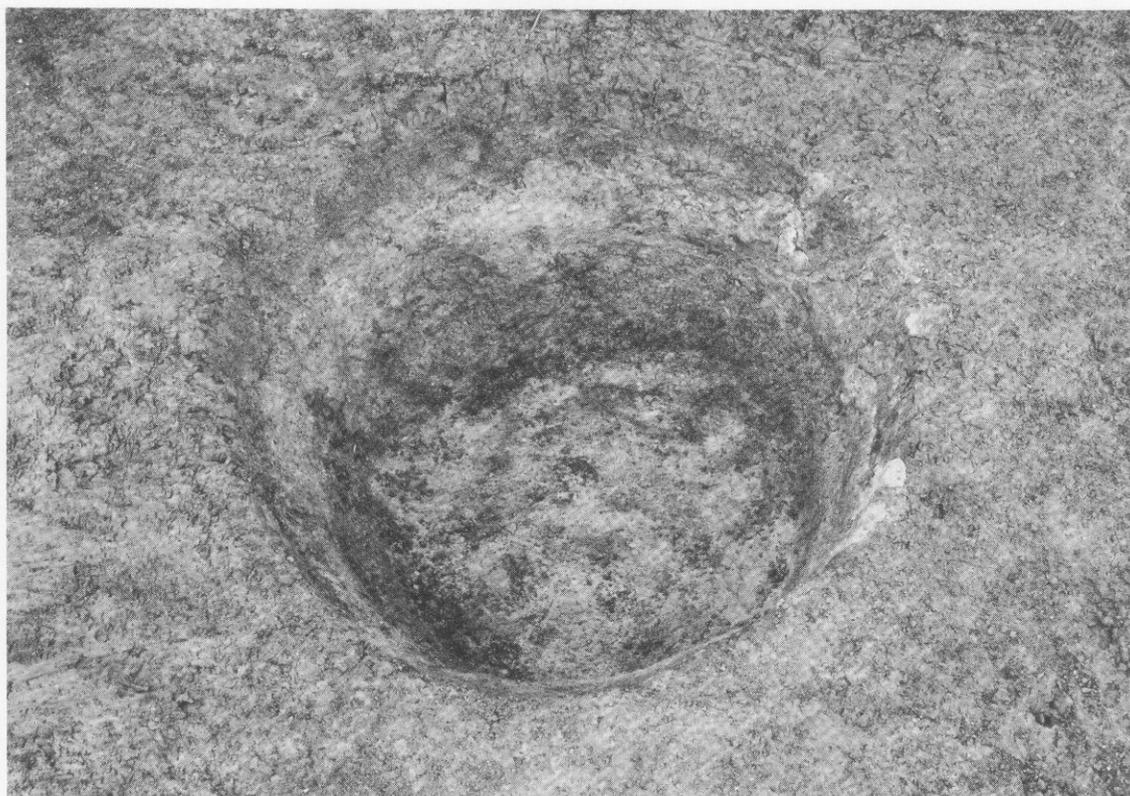
溝SD587-1の土師器出土状態(東から)



第73次調査区全景(北東から)



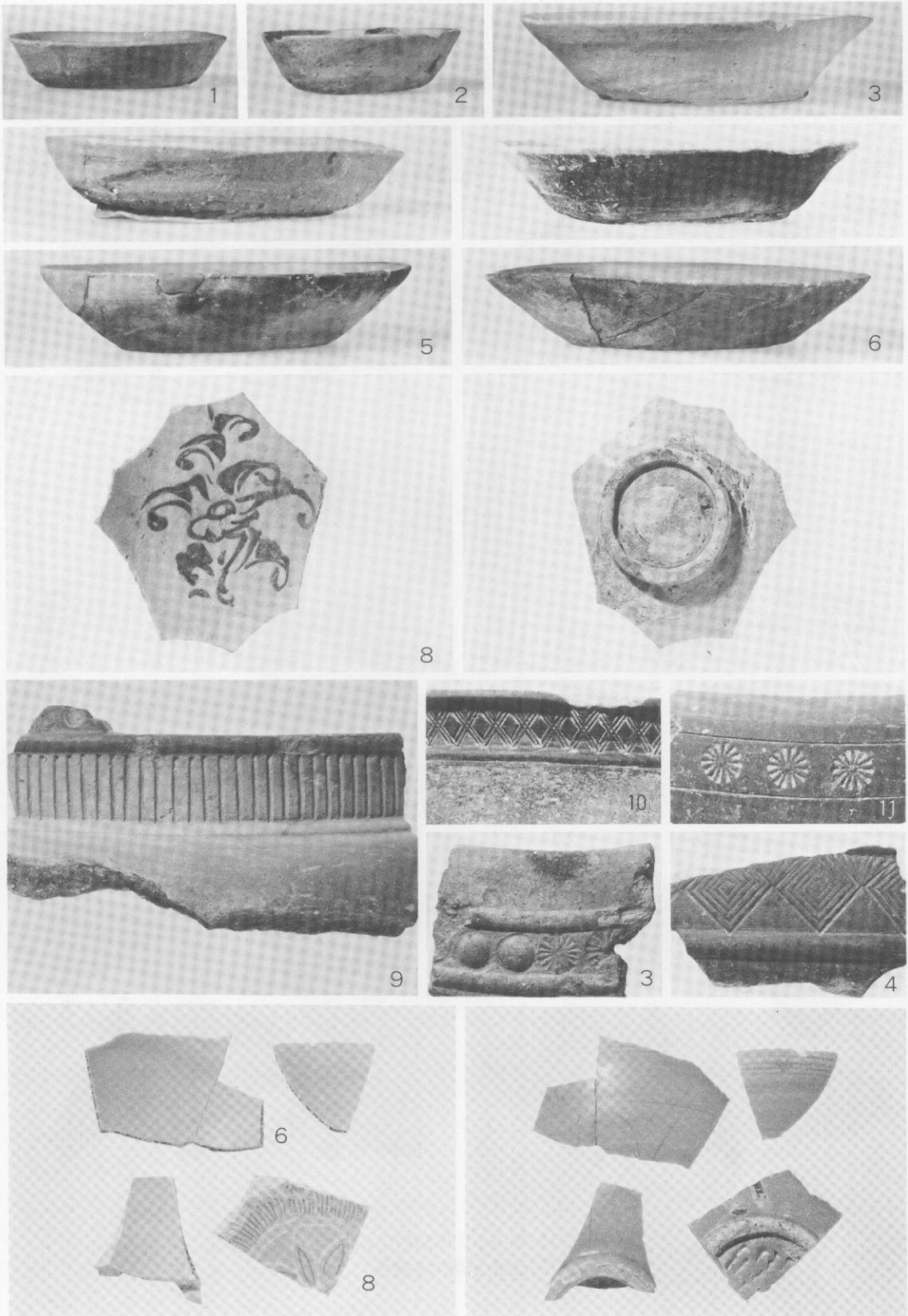
第73次調査区全景(南西から)

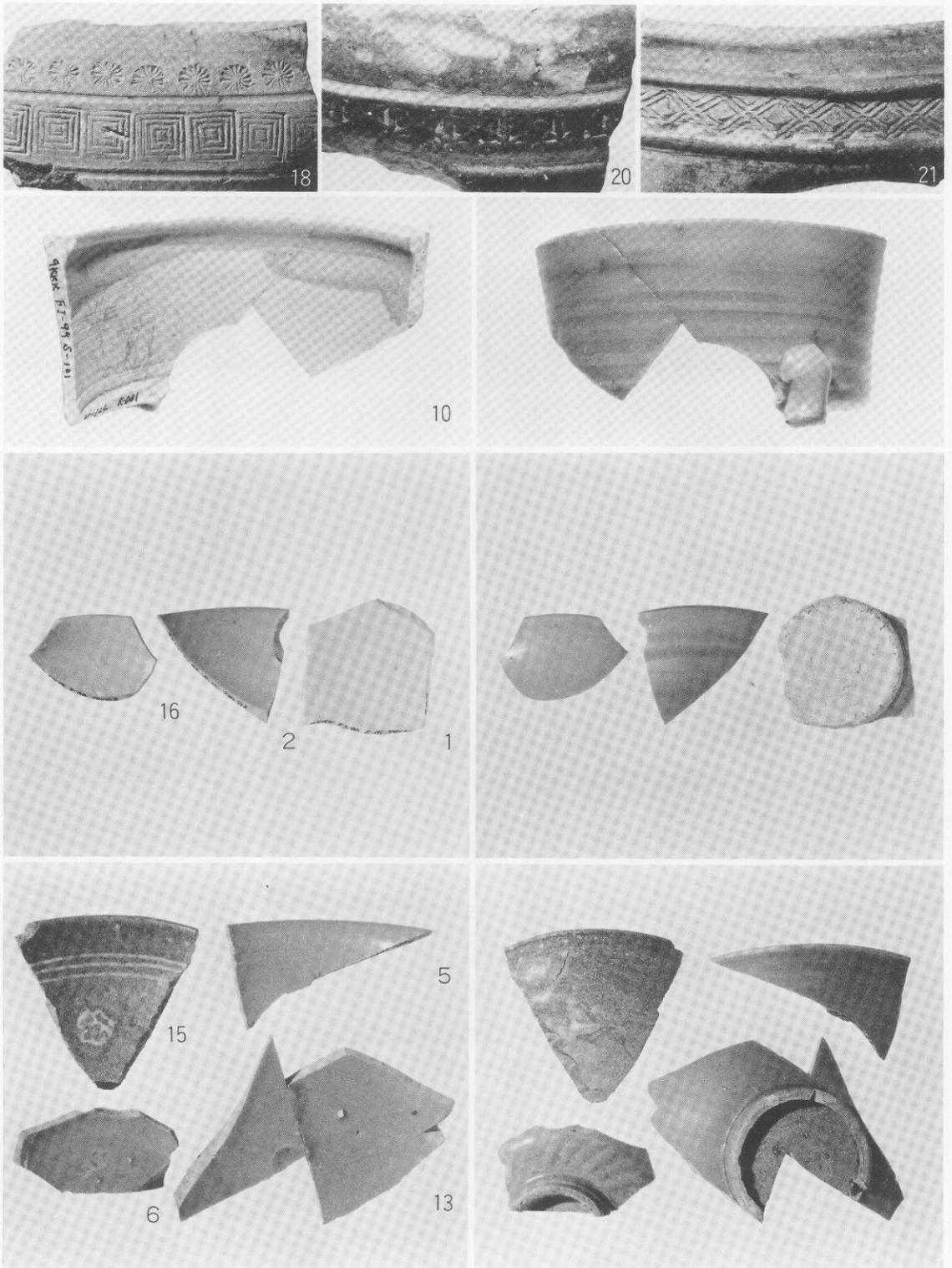


(上) 土壇SK1915

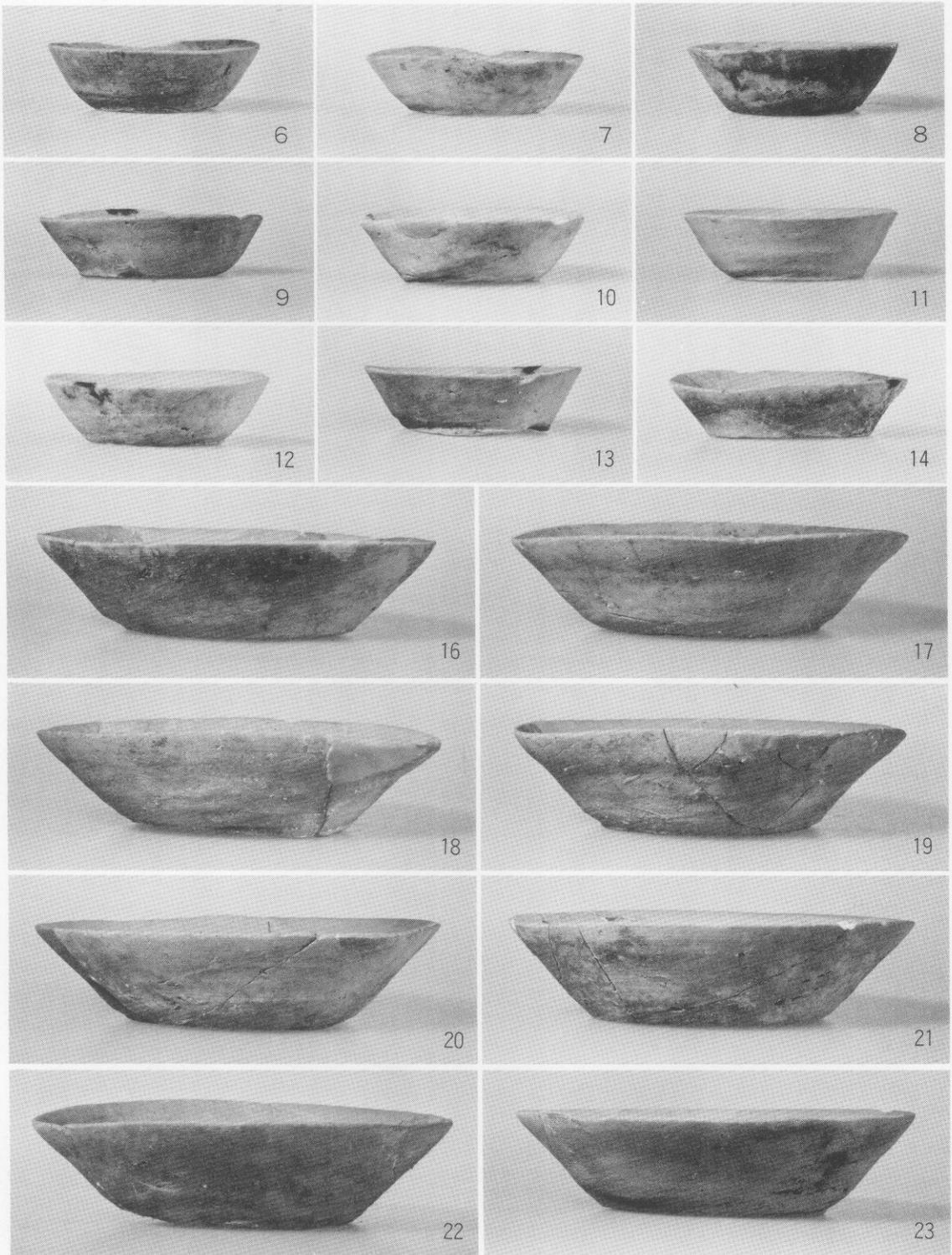
(右) 土壇SK1910の瓦出土状態







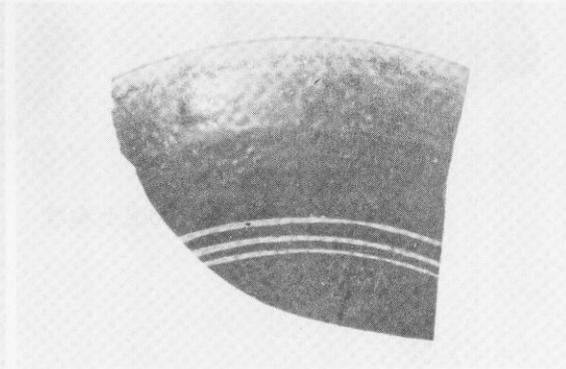
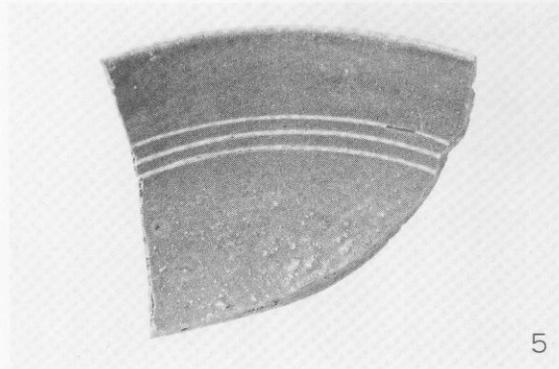
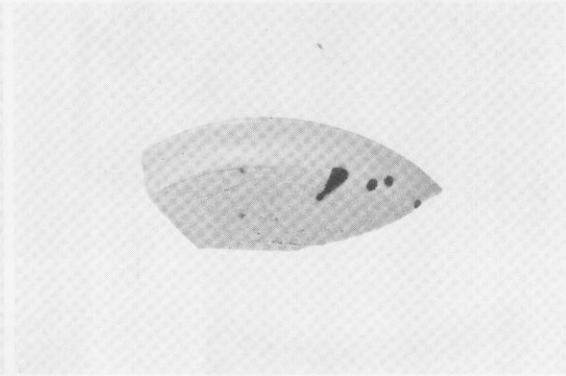
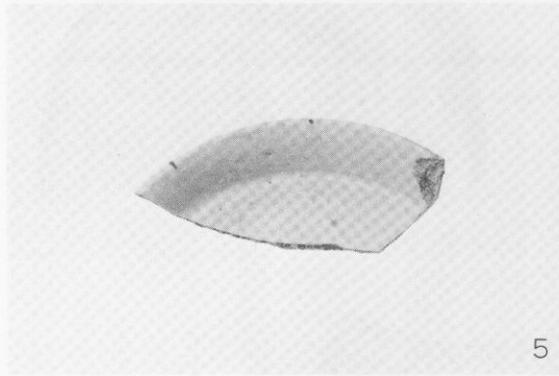
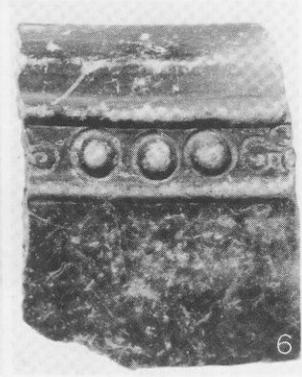
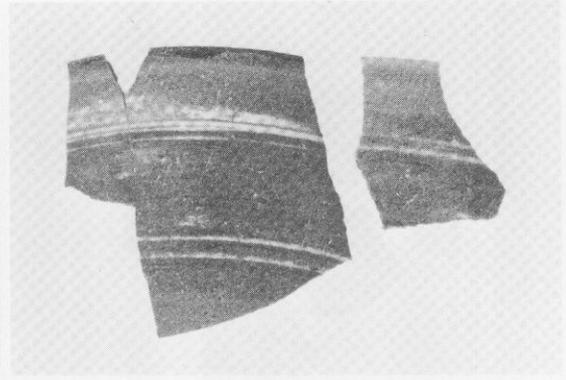
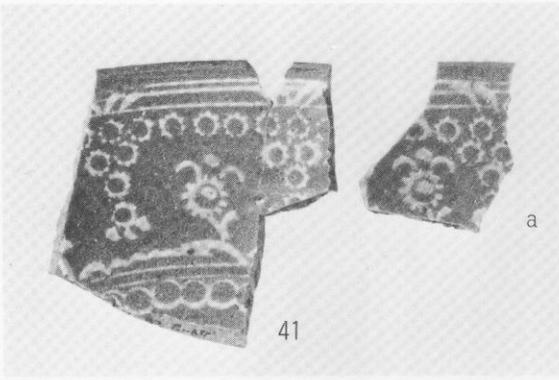
第67次調査 SDI587(18・21)・SDI653(10・20)
SDI659(15)出土土器・陶磁器



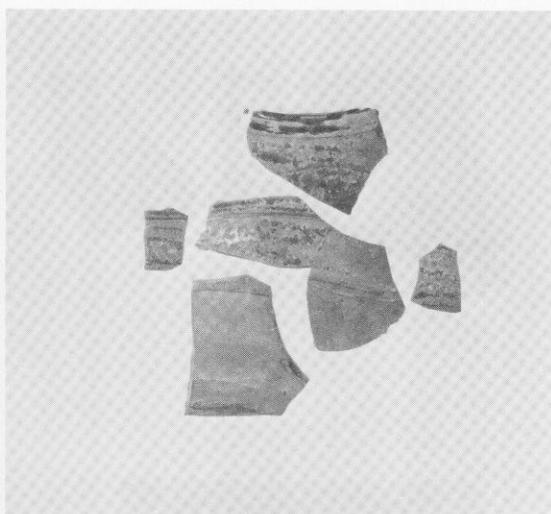
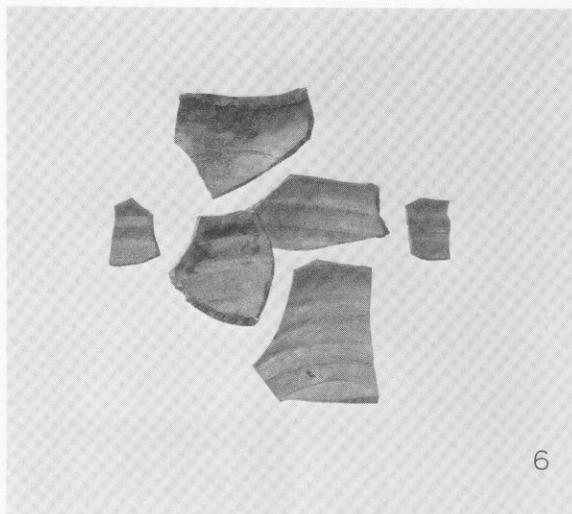
第67次調査 SK1603出土土器



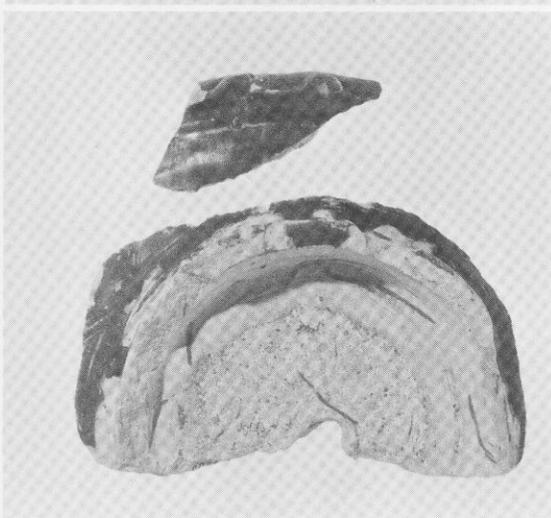
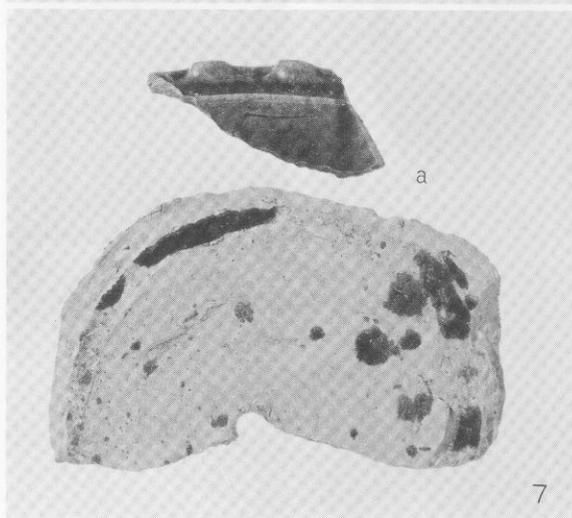
第67次調査 SK I615出土陶磁器



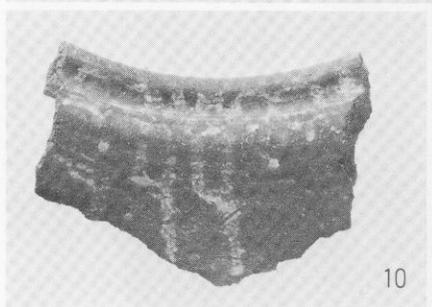
第67次調査 SK1588(4・5)・SK1603(5・6)・SK1605(41)
SK1655(5)出土陶磁器



6



7

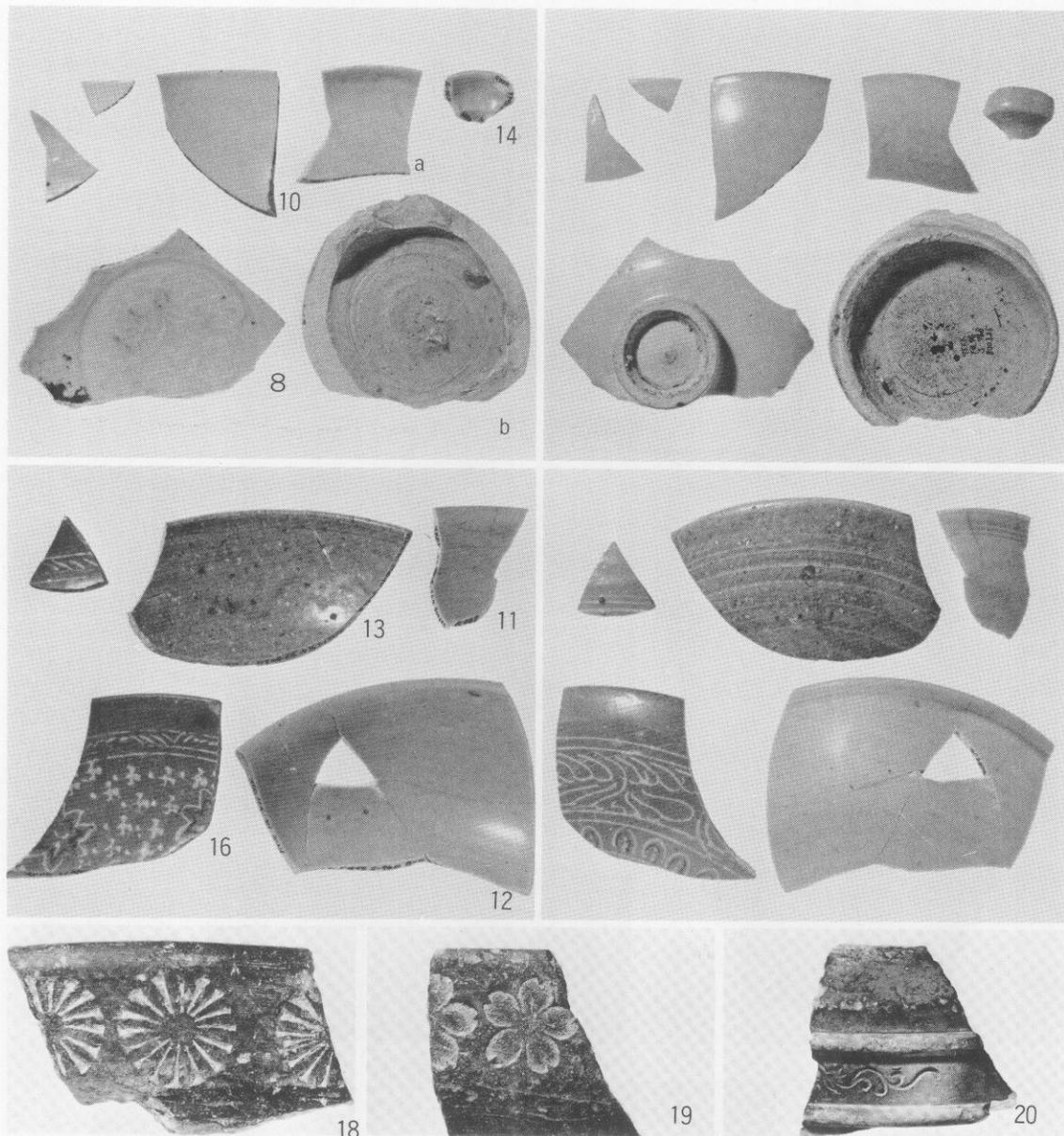


10

第67次調査 SX1630出土陶器



第67次調査 SX 1663(1・3・4・7・10・12・16・23)・SX 1629(3・4)
SX 1637(17・18・21・22・24)出土土器・陶磁器

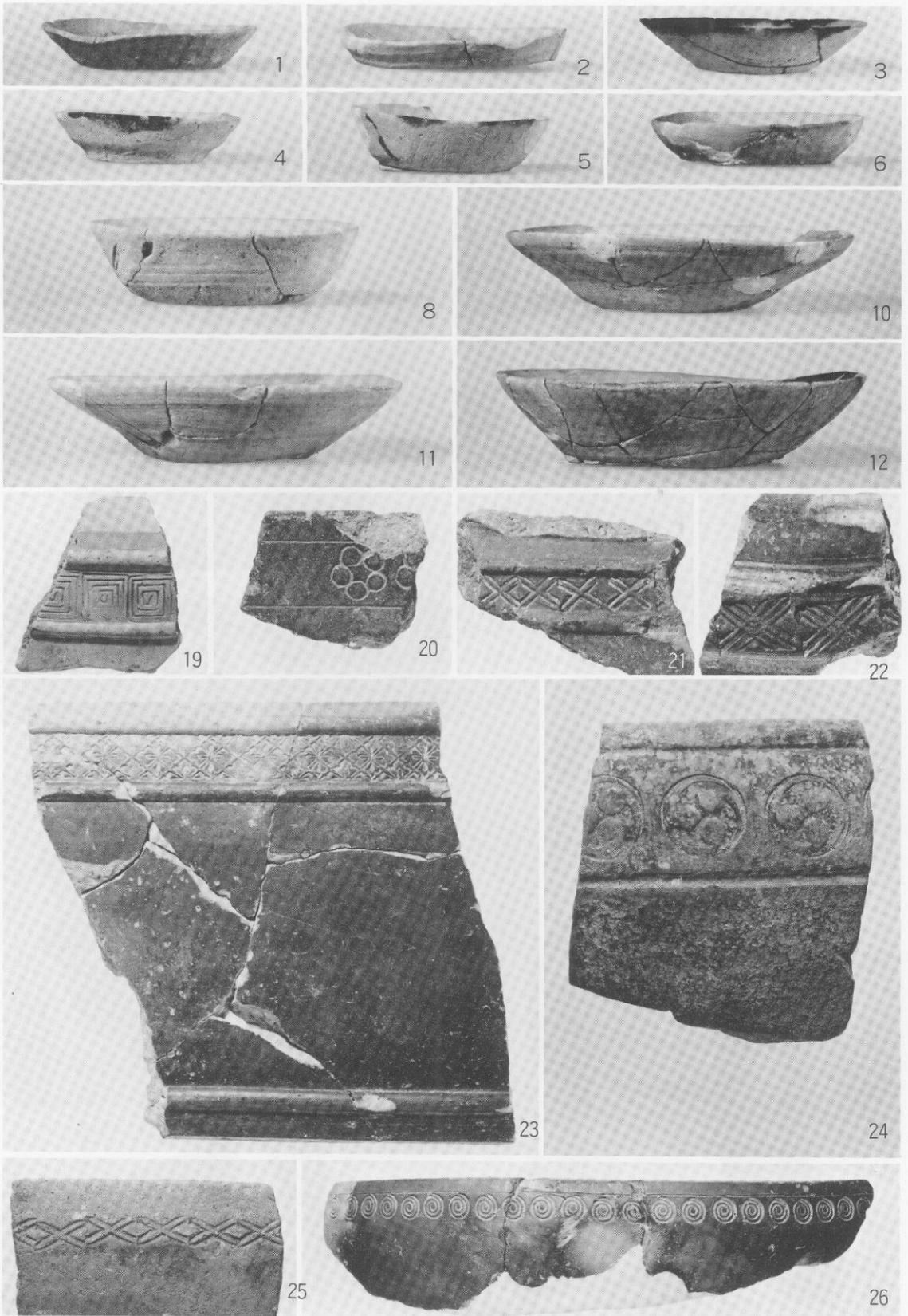


第67次調査 整地層出土土器・陶磁器

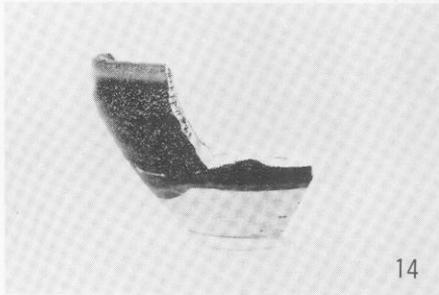
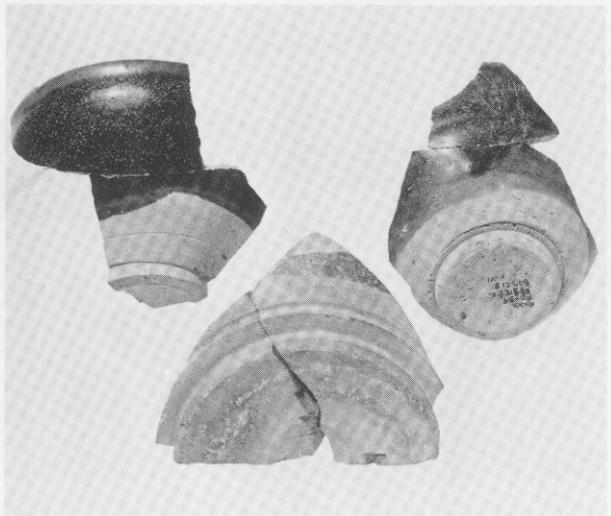
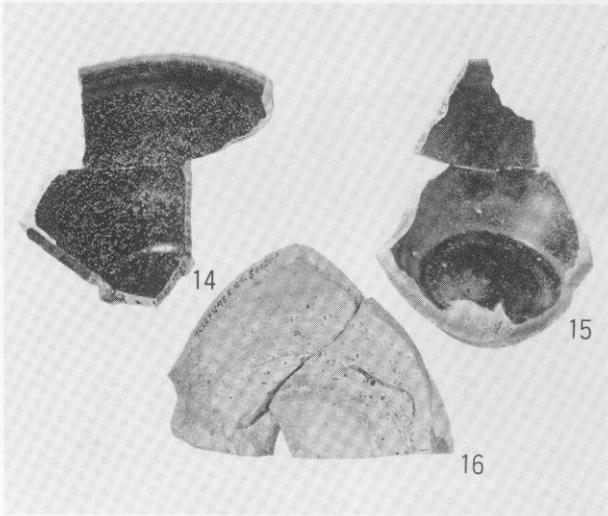
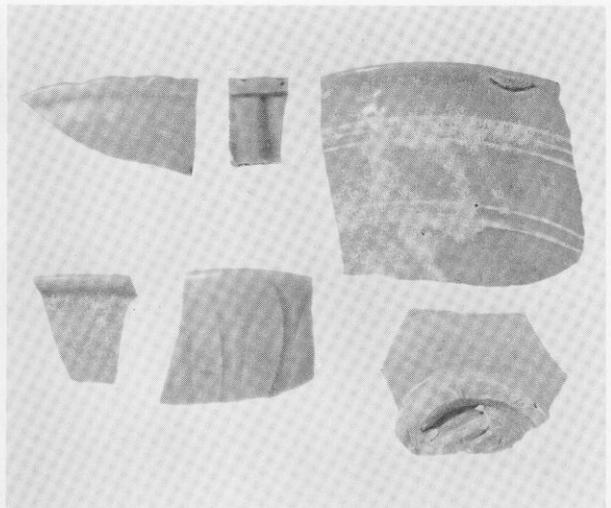
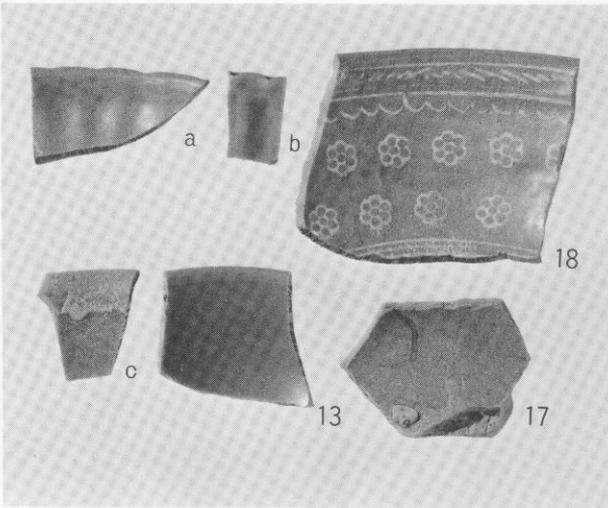


第67次調査

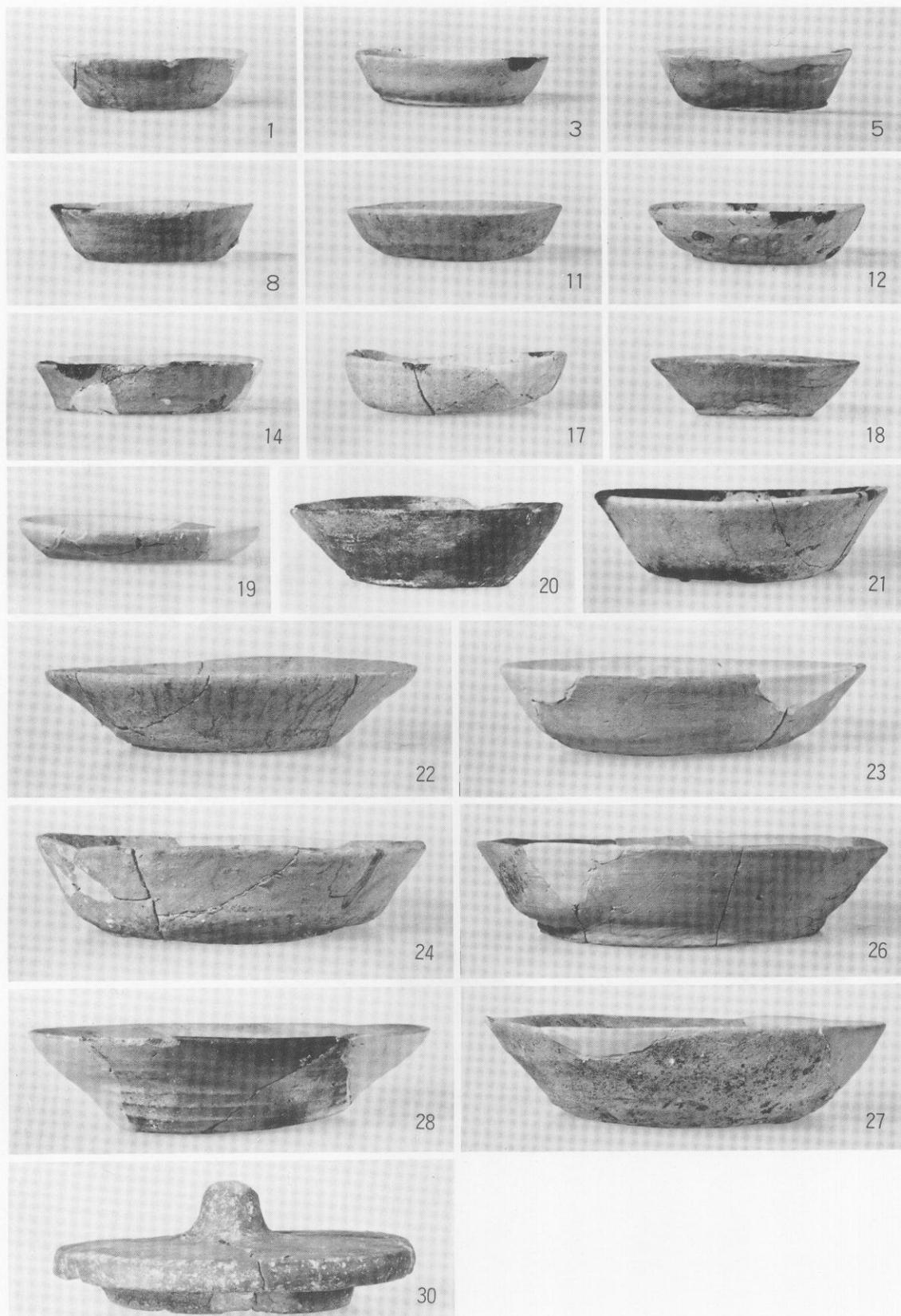
腐植土層(1・3・4・5・6・7・10)・暗茶色土層(5・6・7)出土土器・陶磁器



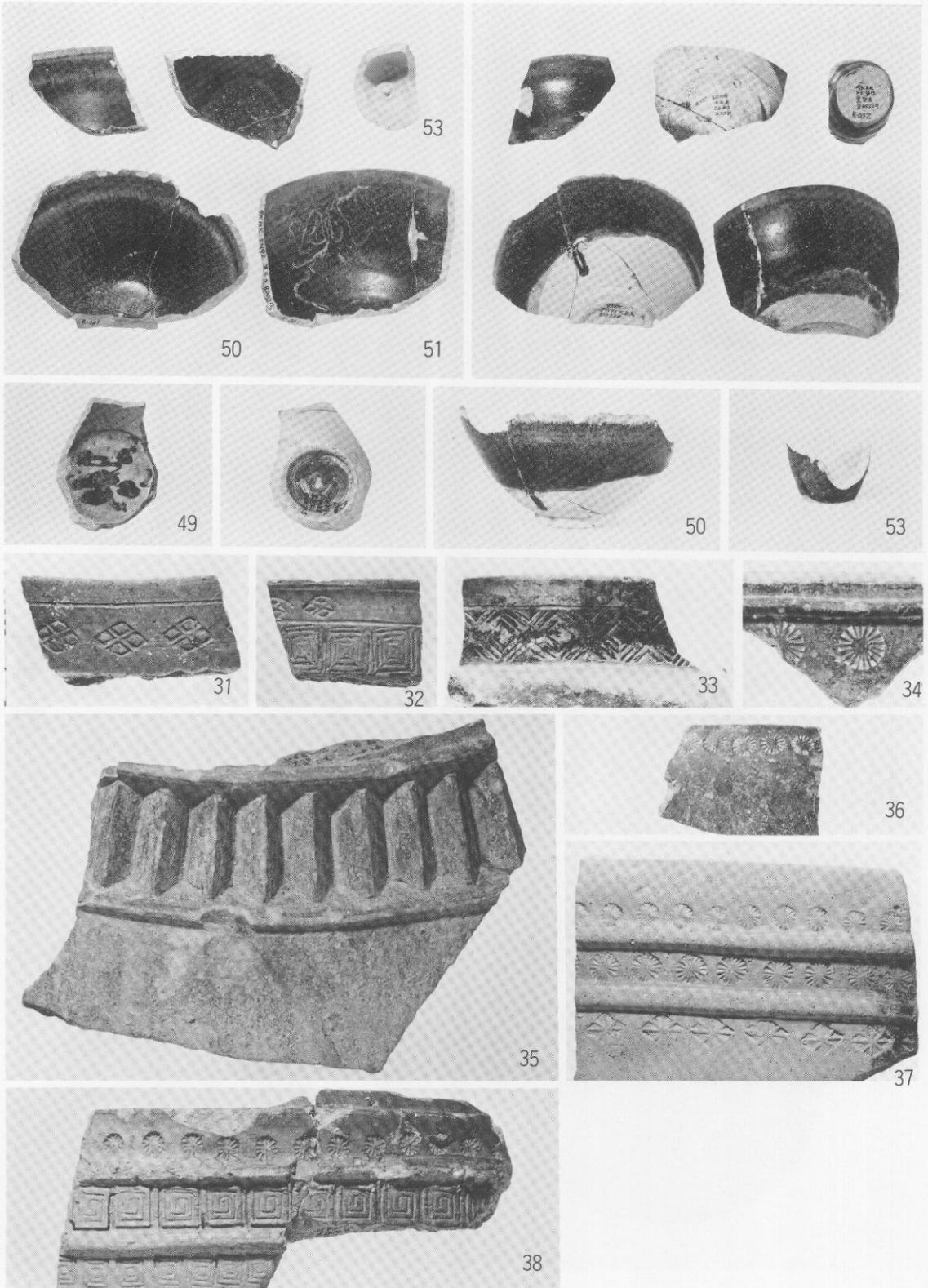
第67次調査 暗青灰色土層出土土器



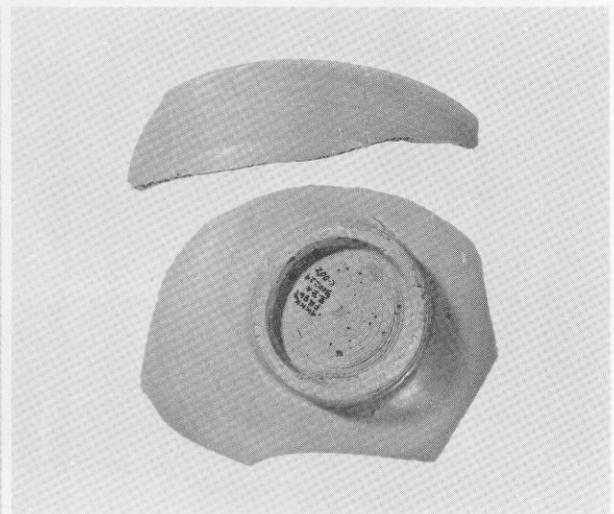
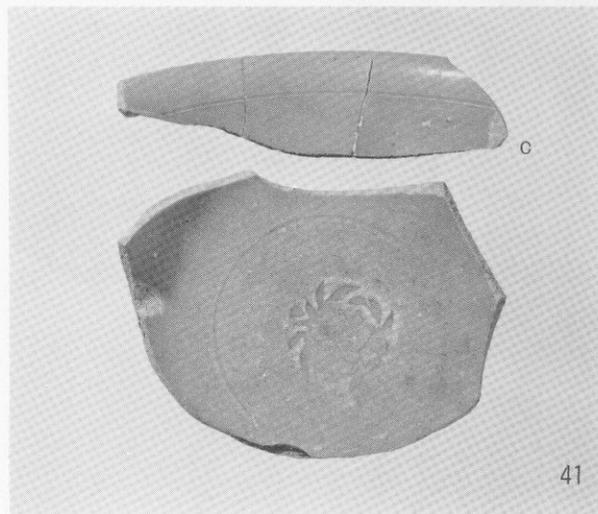
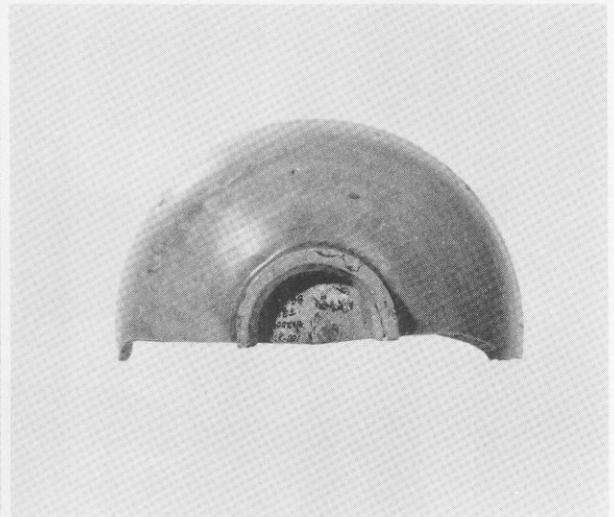
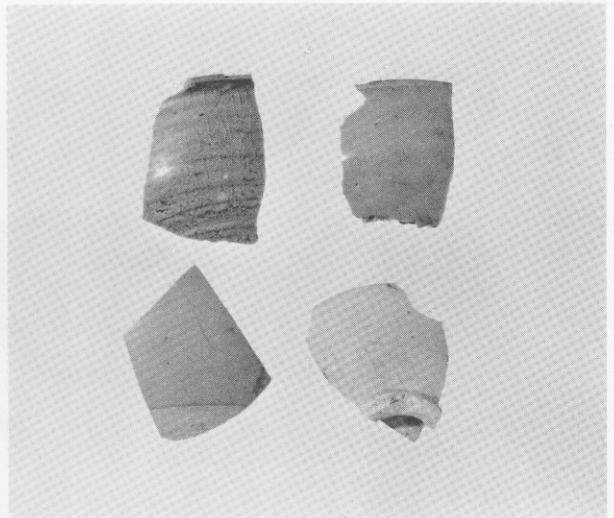
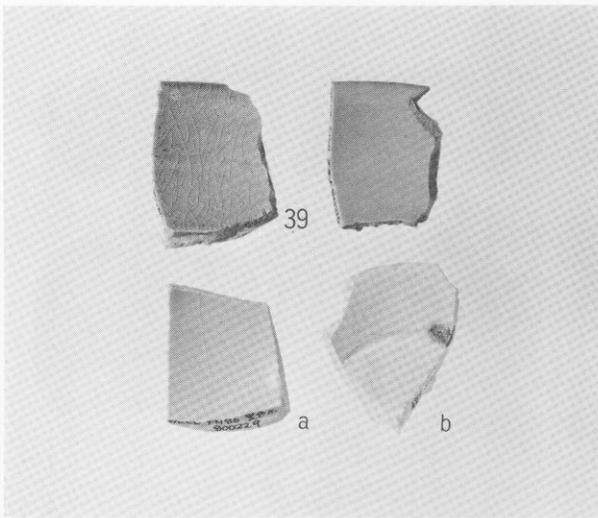
第67次調査 暗青灰色土層出土土器・陶磁器



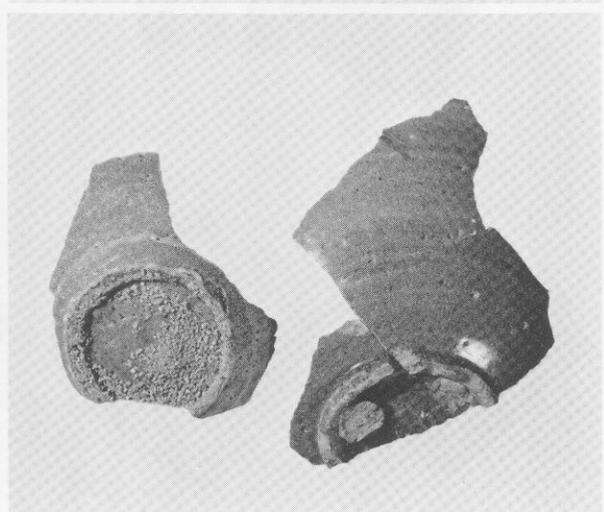
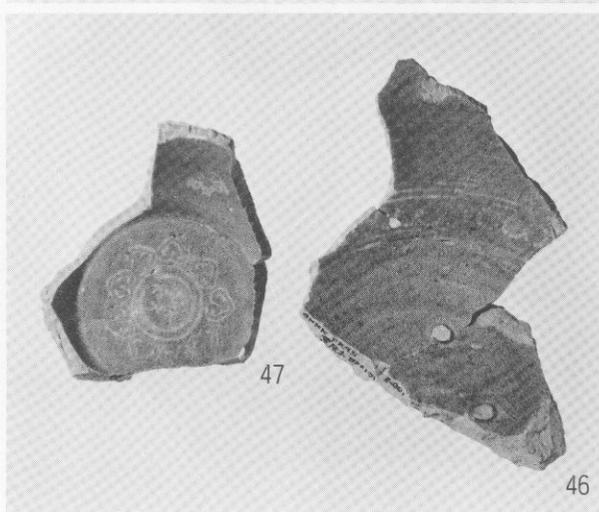
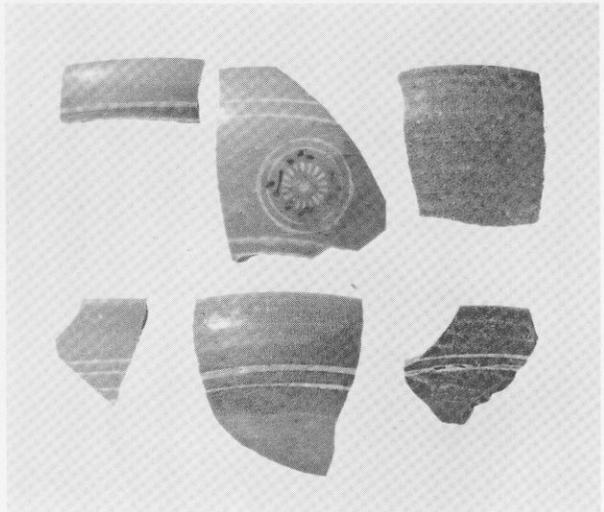
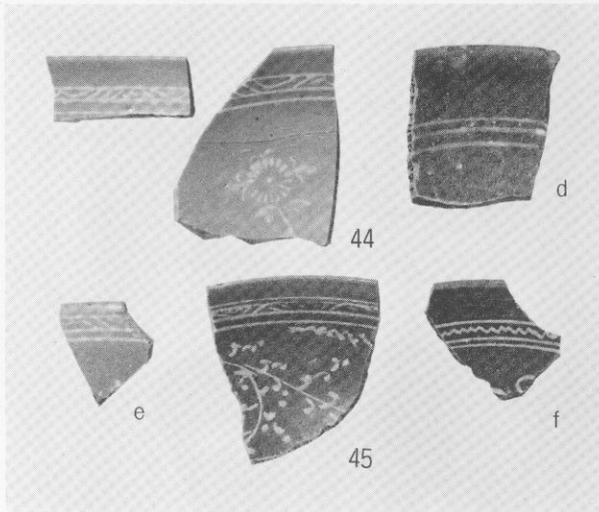
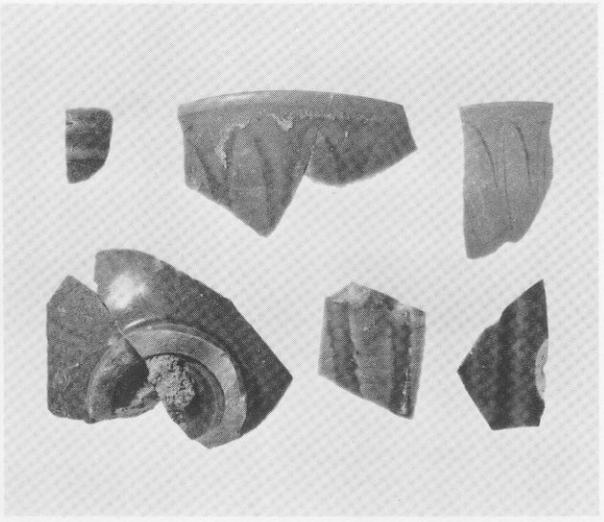
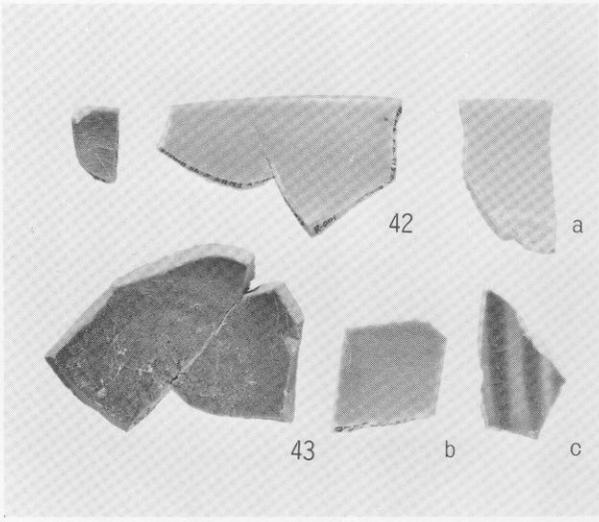
第67次調査 黒色土層出土土器



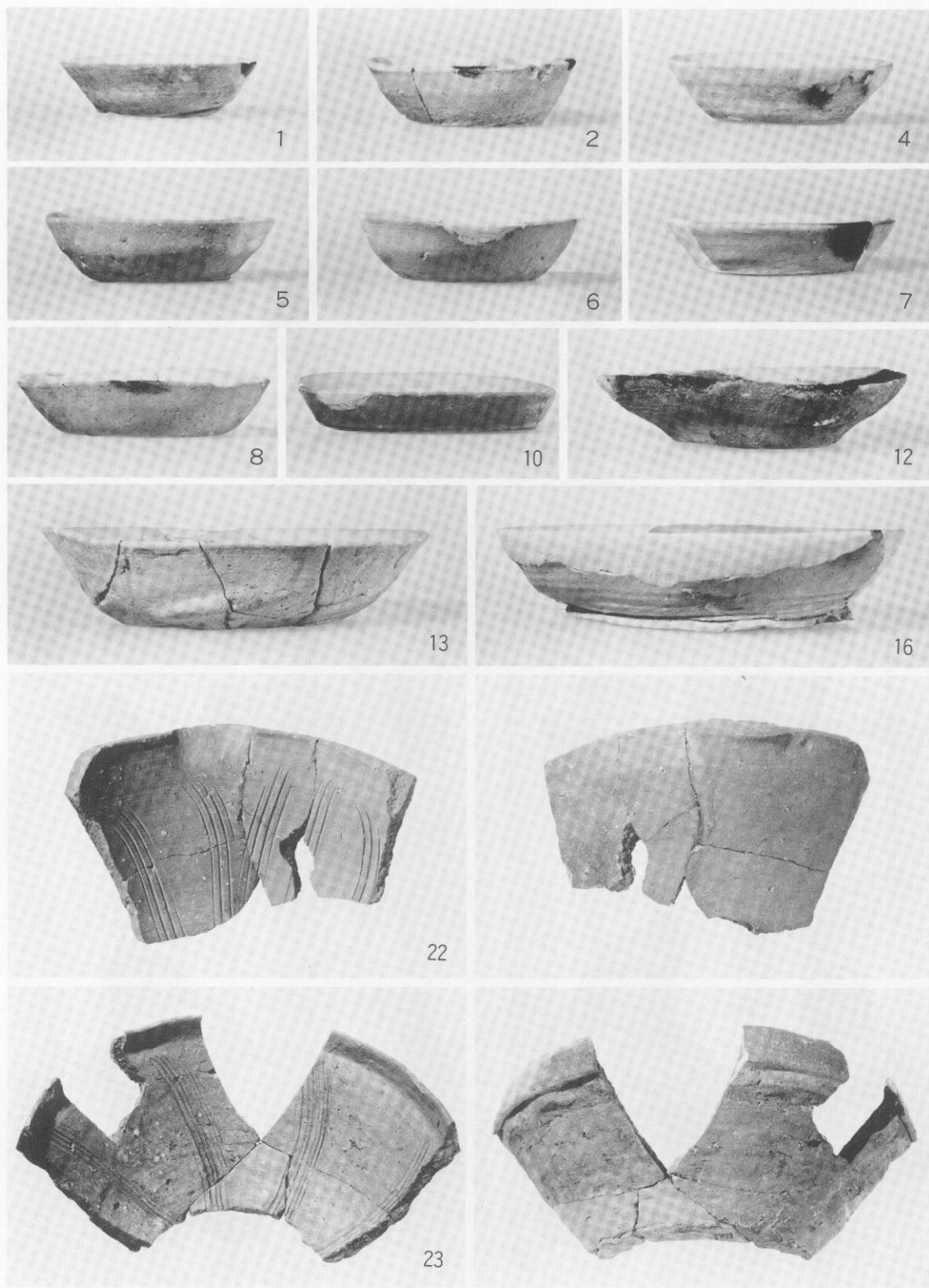
第67次調査 黒色土層出土土器・陶磁器



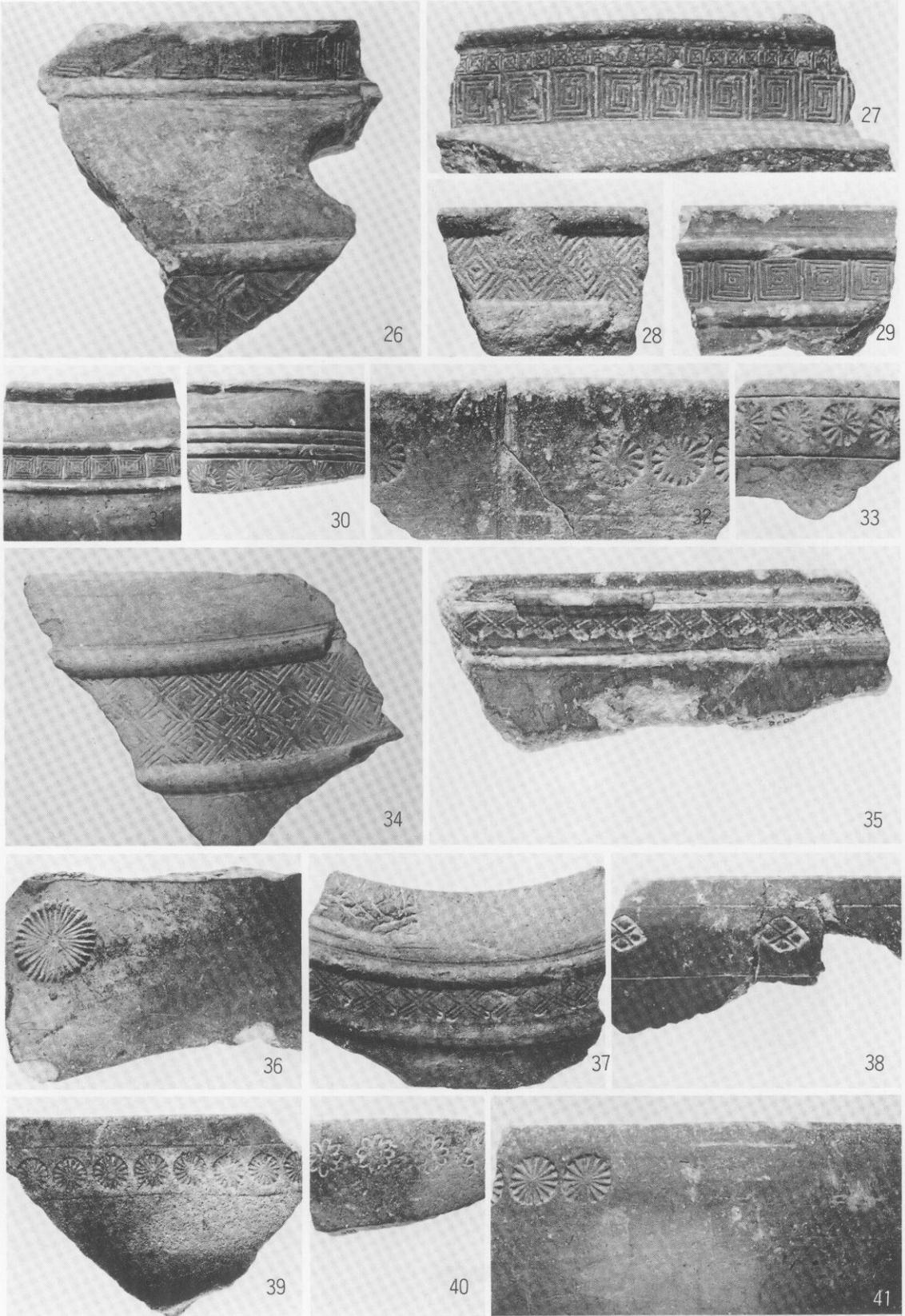
第67次調査 黒色土層出土陶磁器

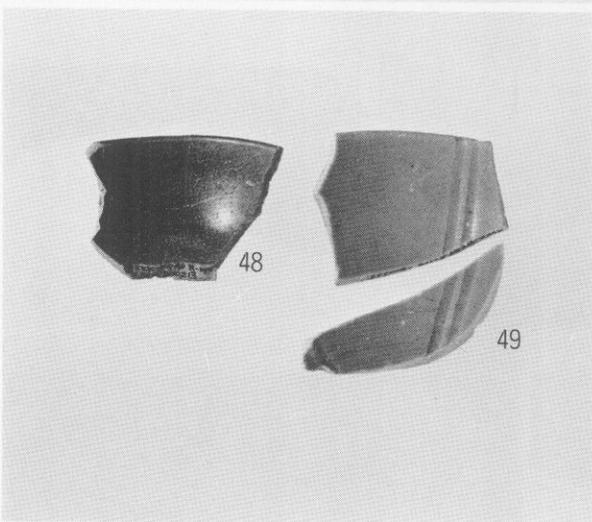
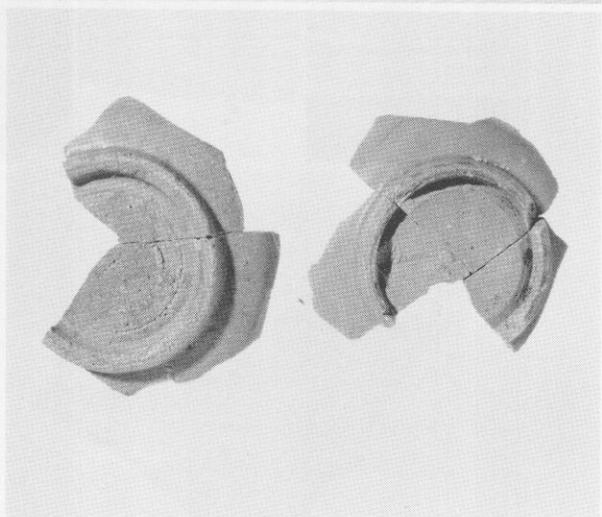
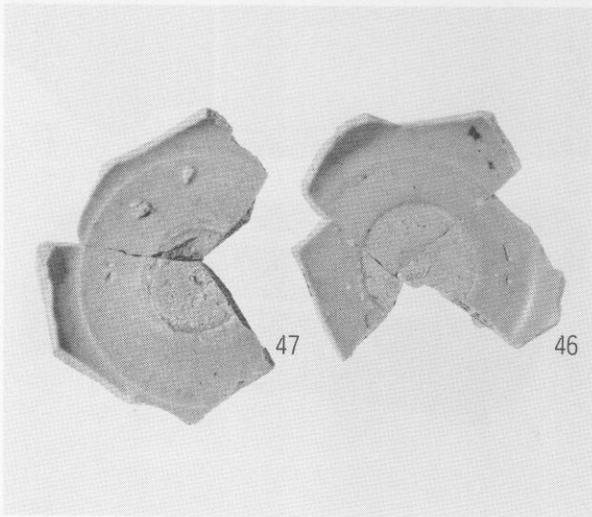
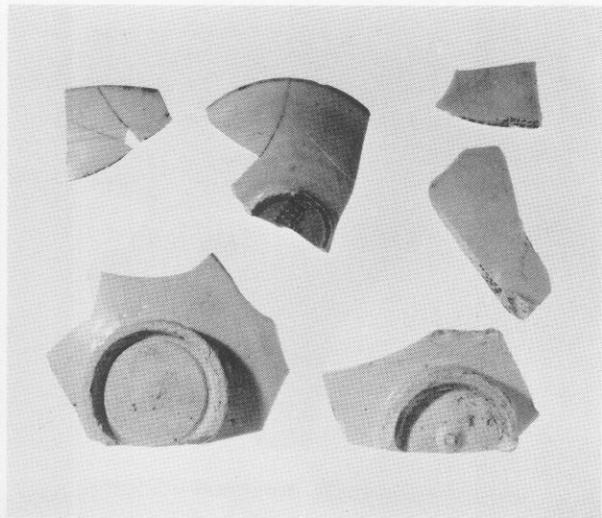
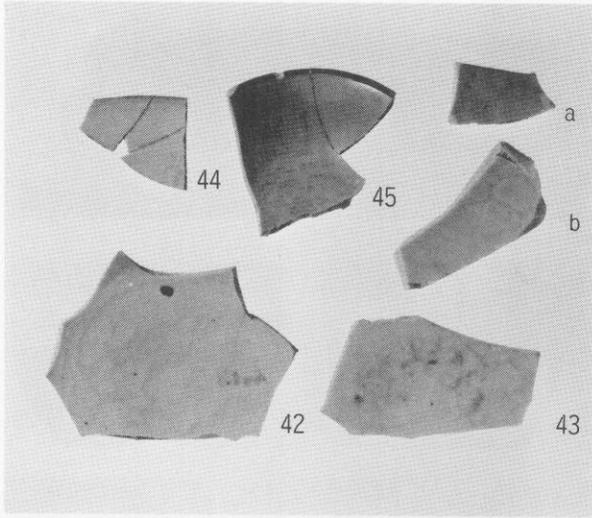


第67次調査 黒色土層出土陶磁器

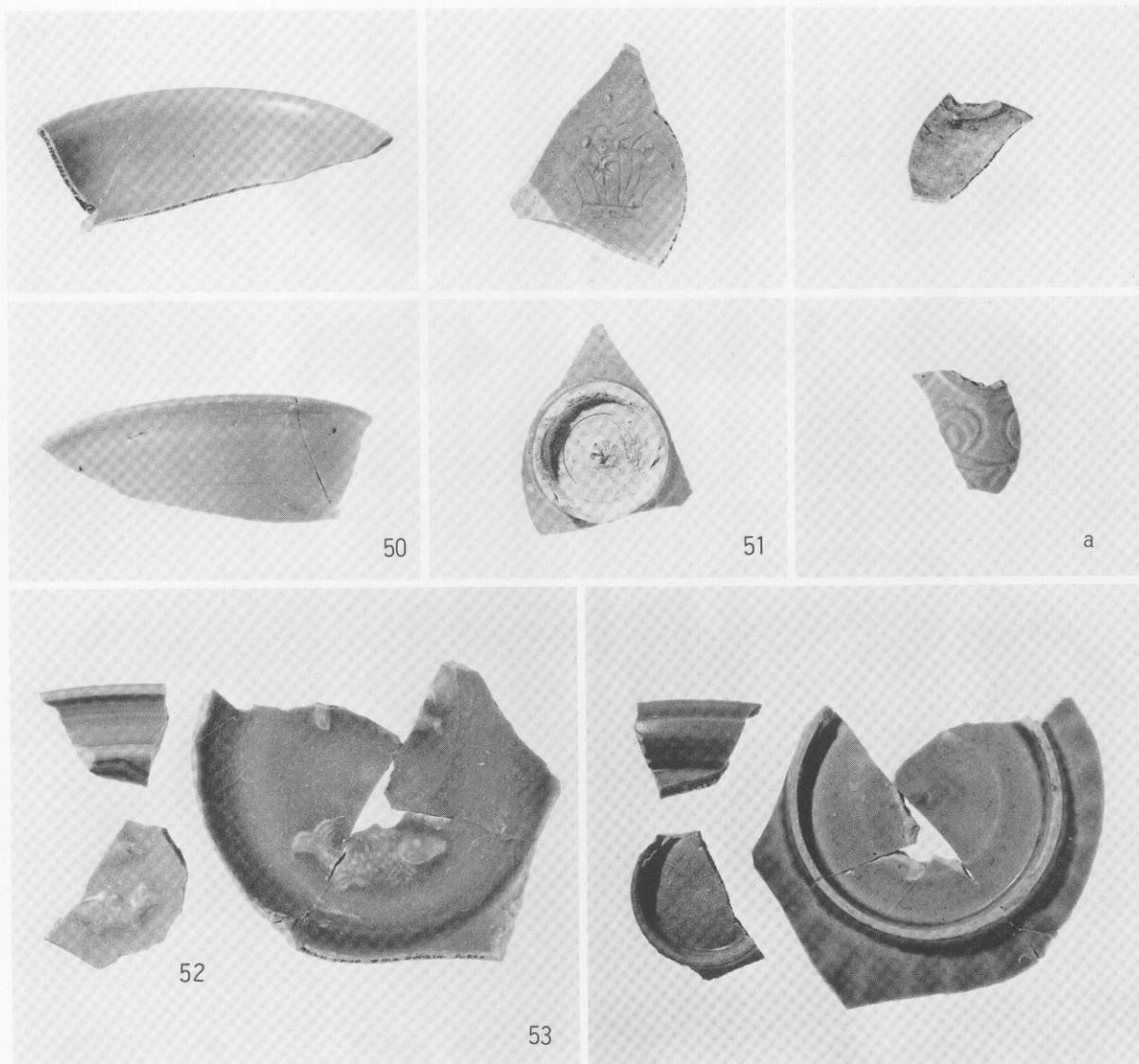


第67次調査 黒灰色土層出土土器・陶器

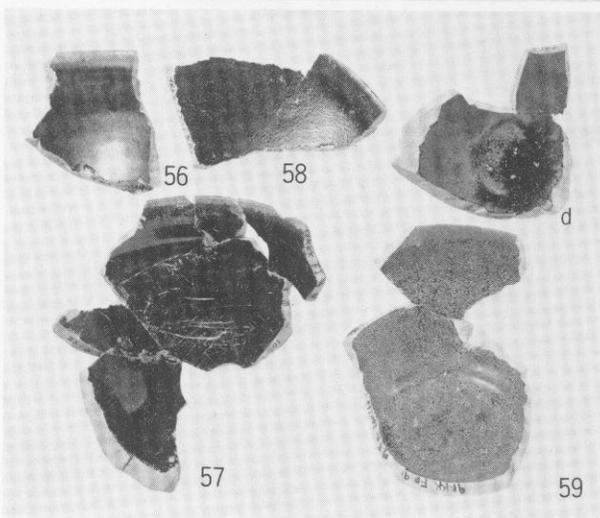
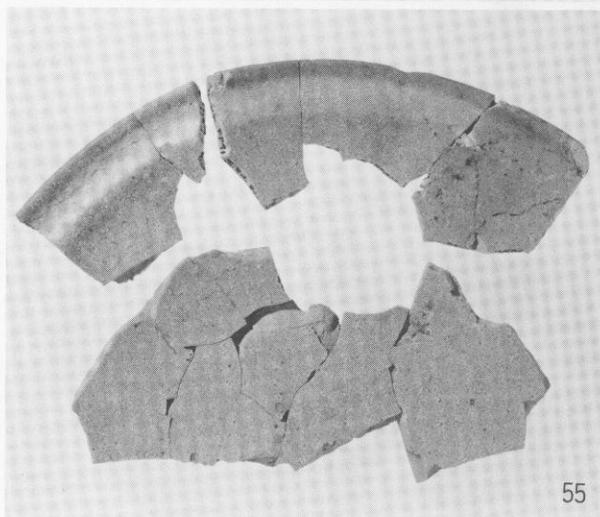
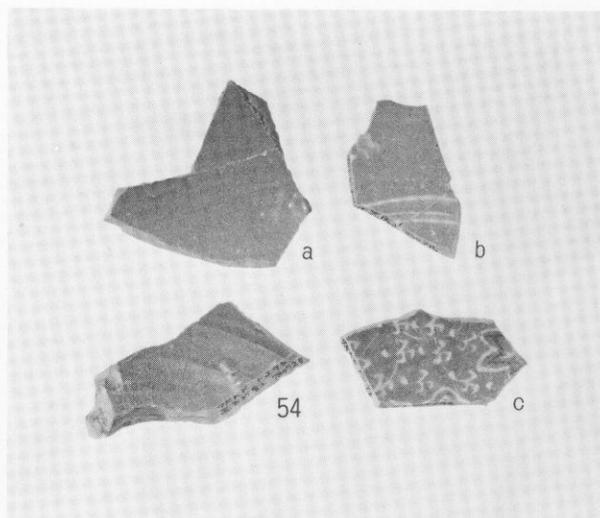




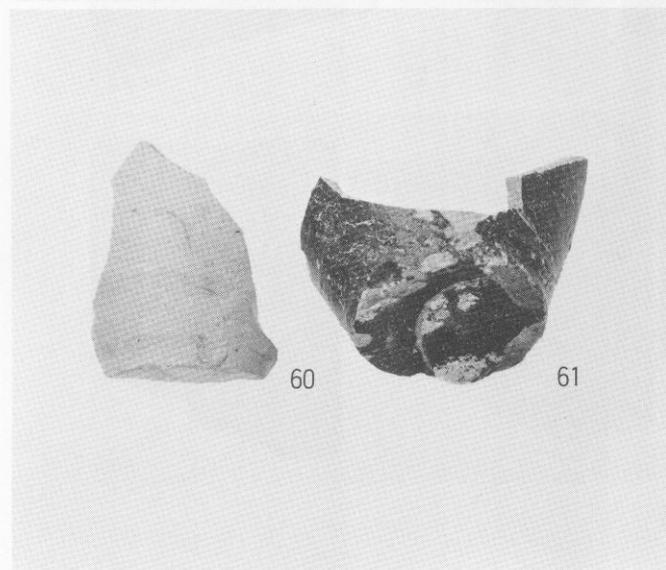
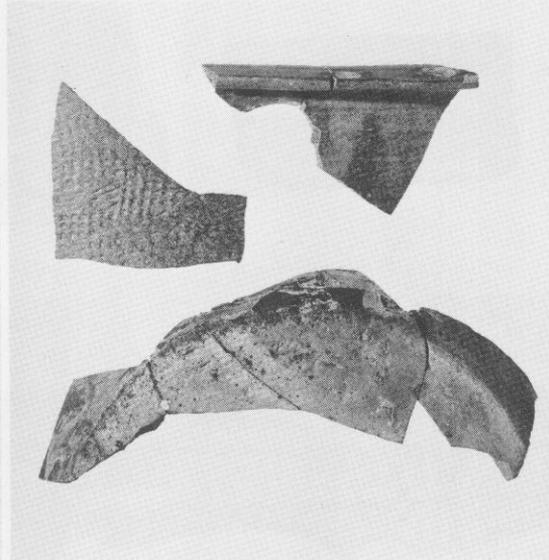
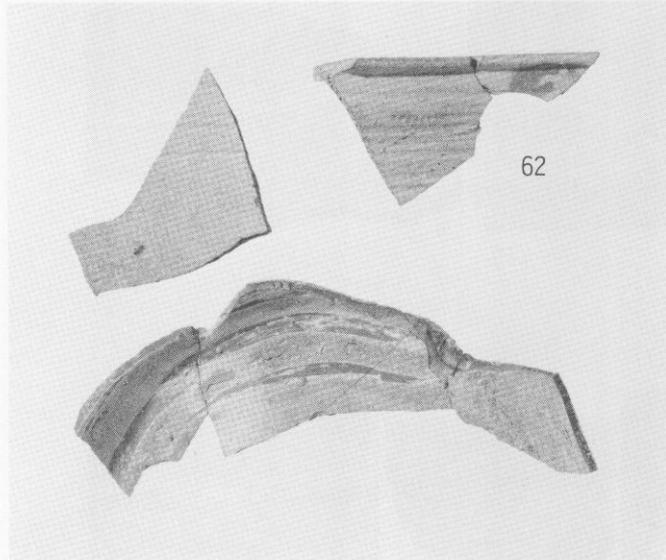
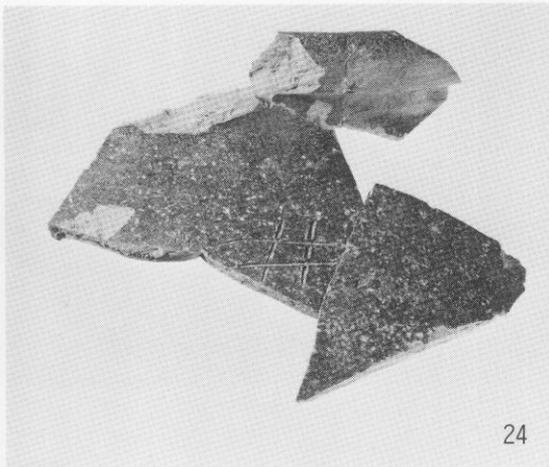
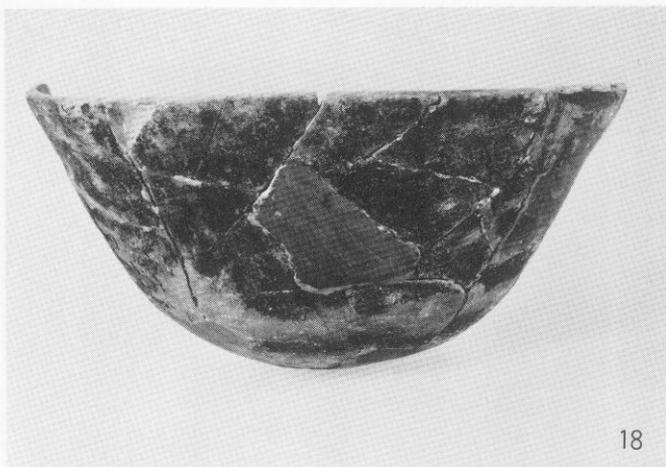
第67次調査 黒灰色土層出土陶磁器

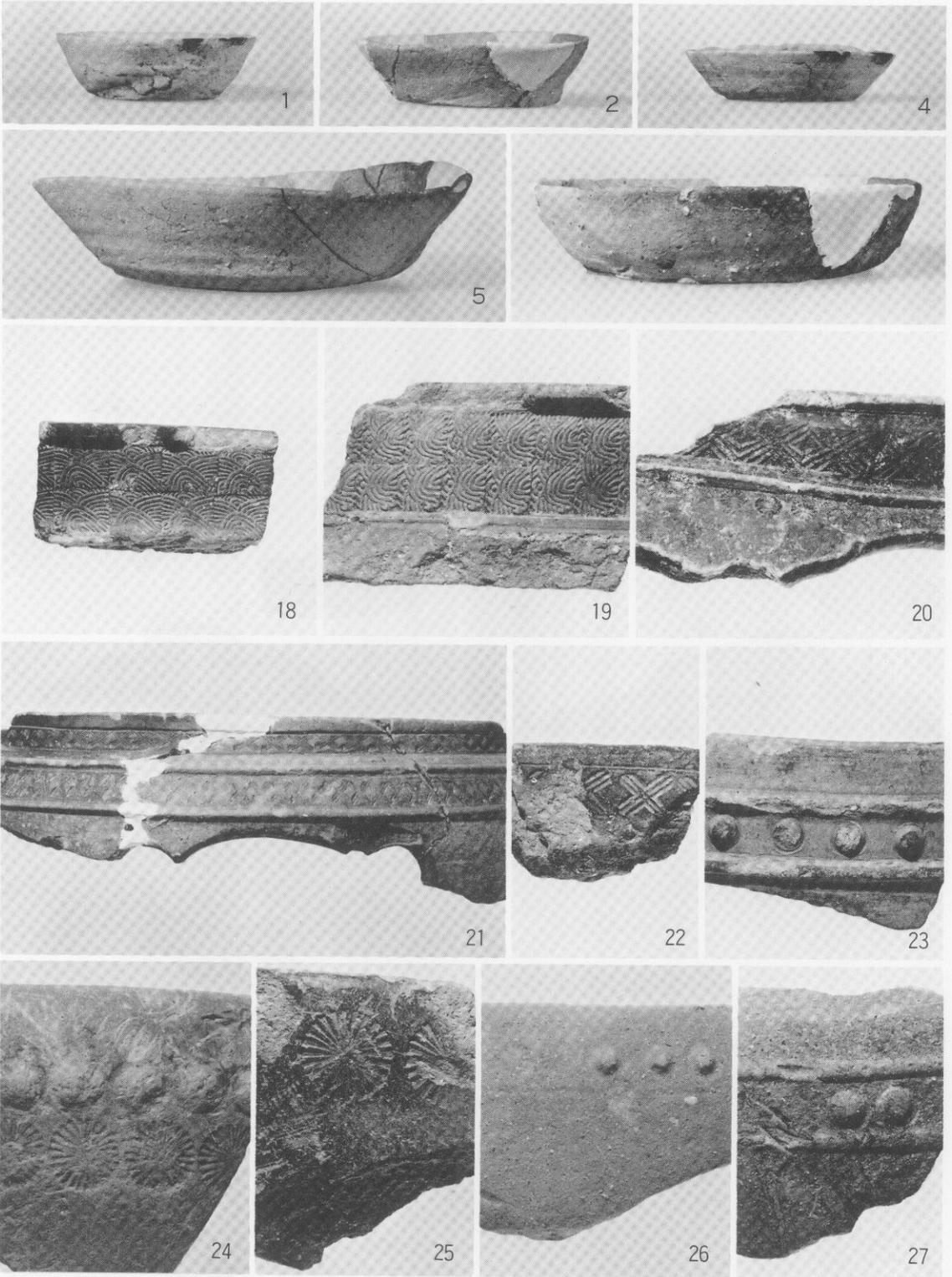


第67次調査 黒灰色土層出土陶磁器

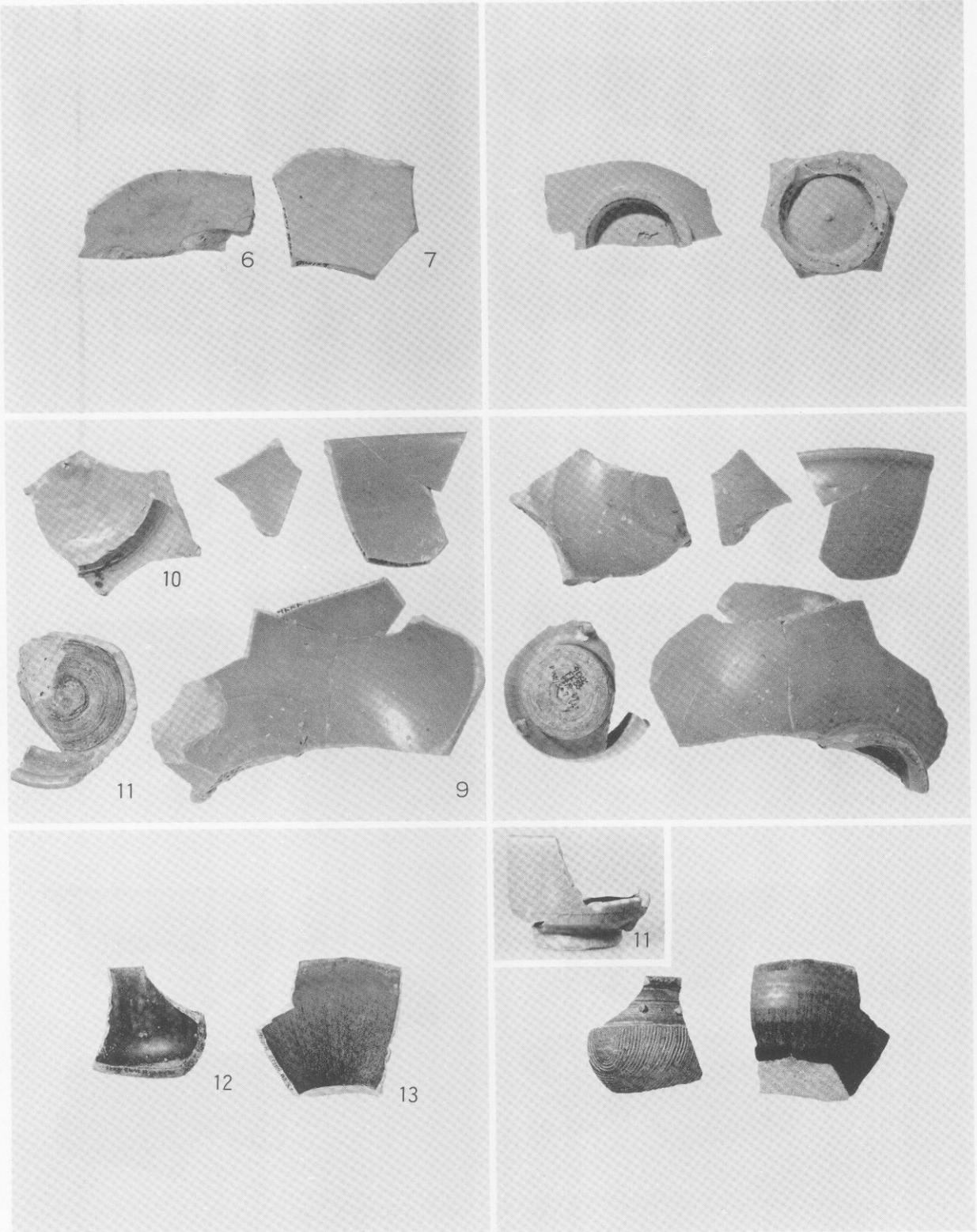


第67次調査 黒灰色土層出土陶磁器

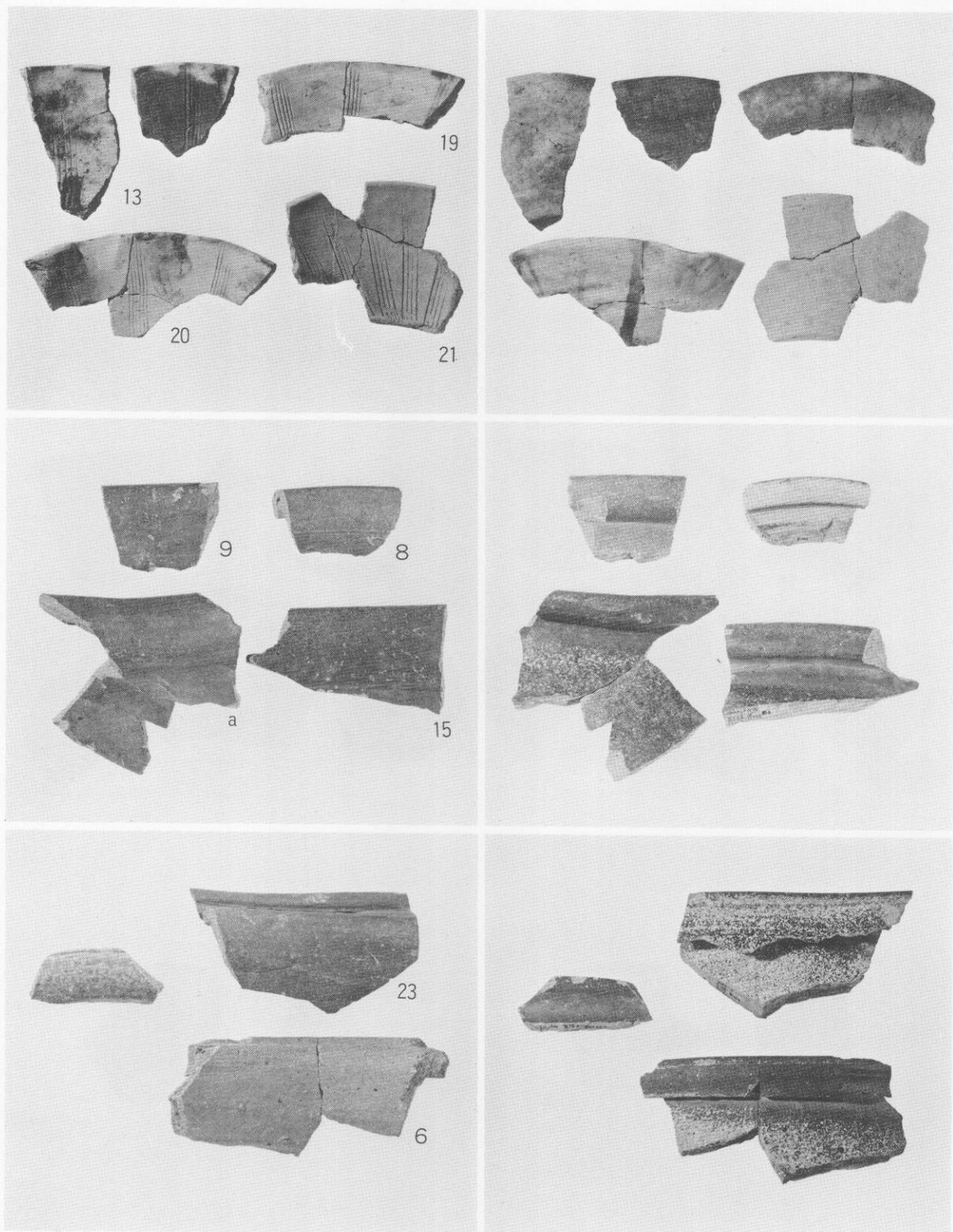




第67次調査 暗灰色土層出土土器

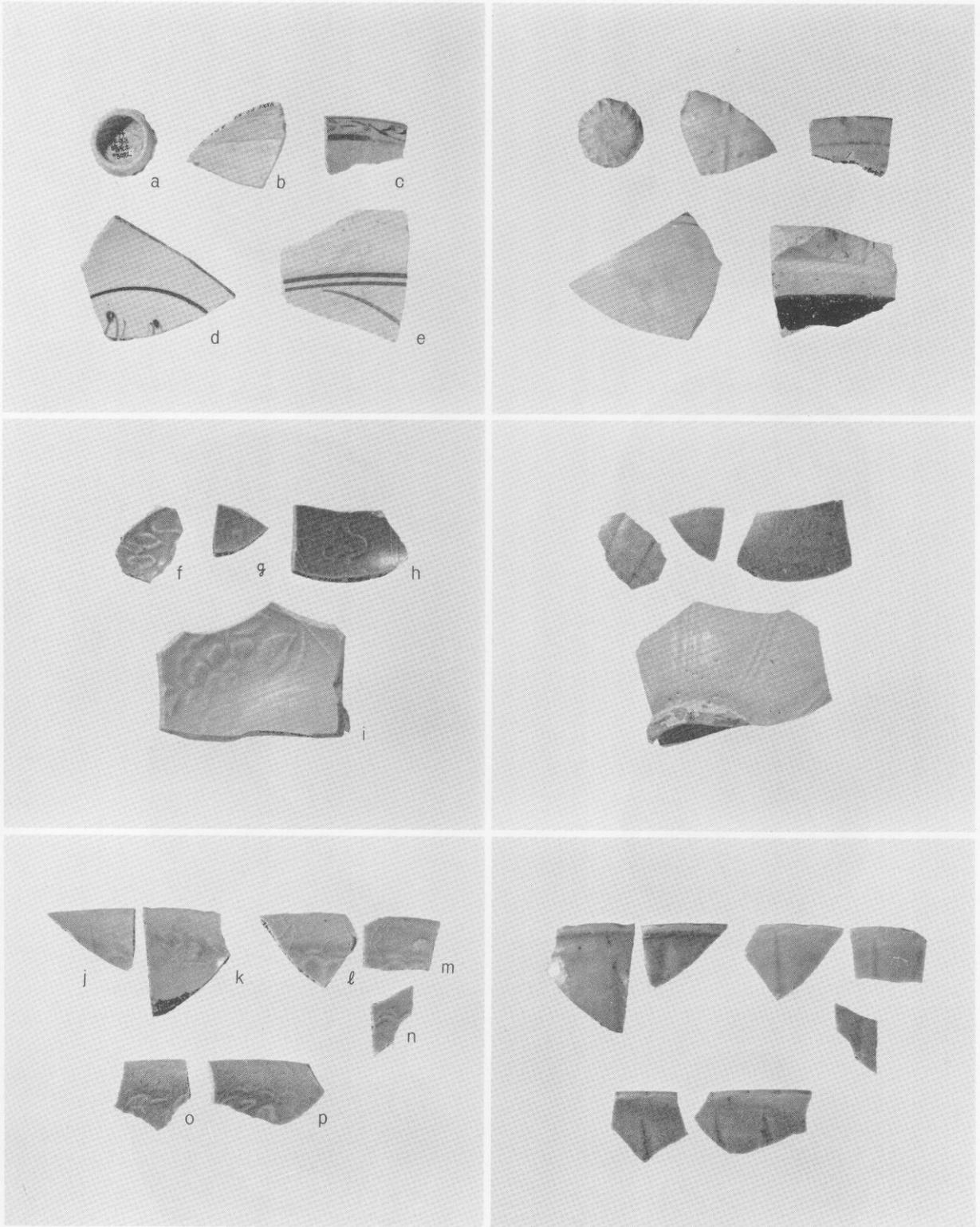


第67次調査 暗灰色土層出土土器・陶磁器



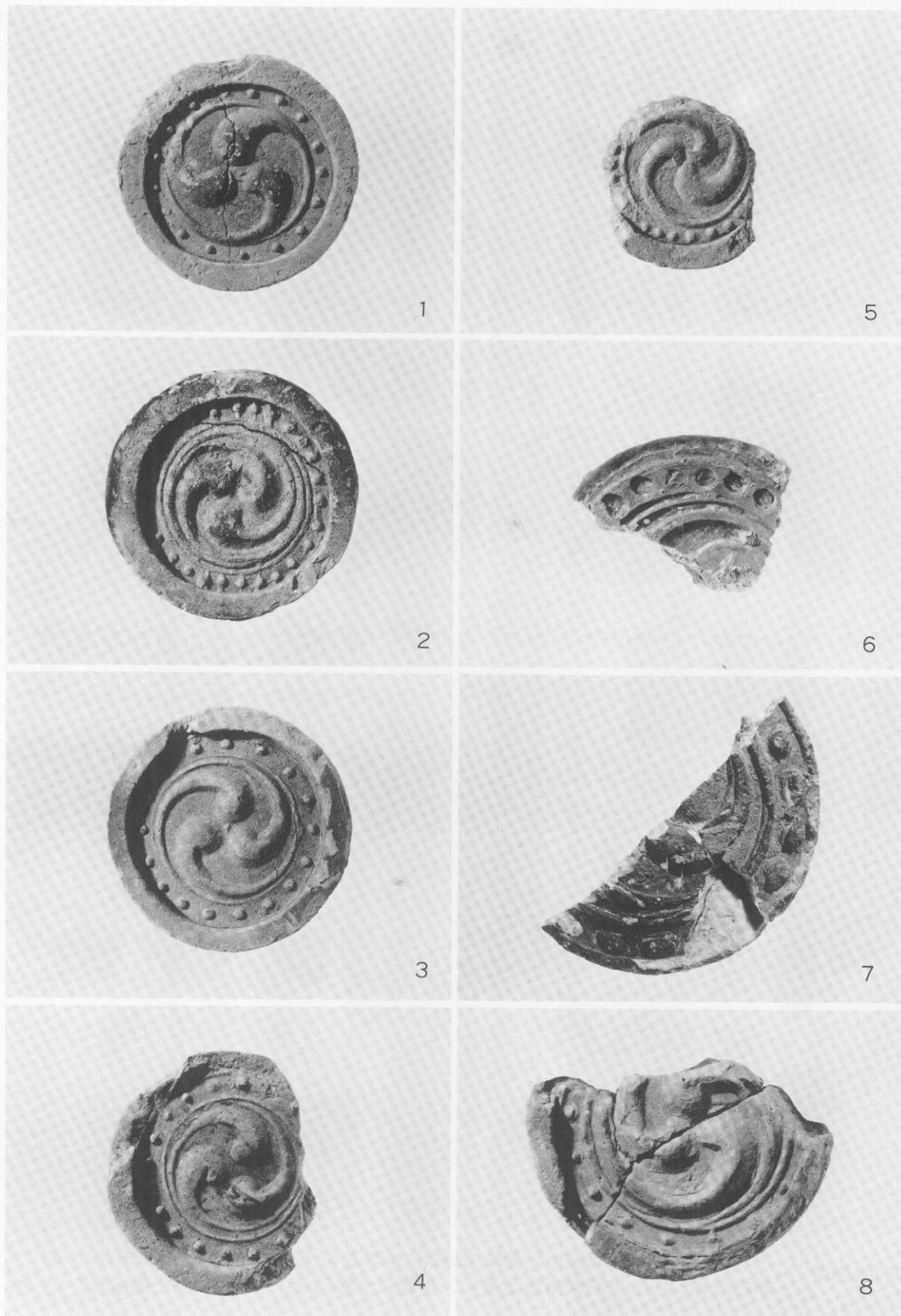
第67次調査

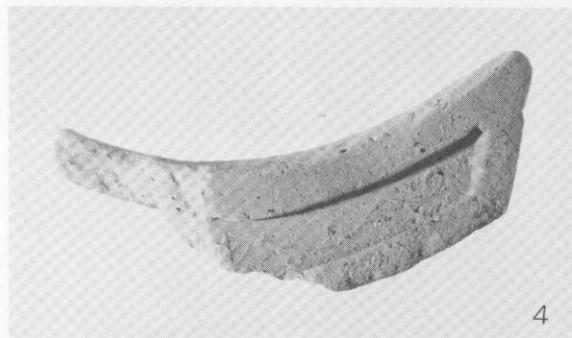
SD I439(19・20・23)、SK I603(6)、腐植土層(13・15)、暗茶色土層(8・9)、
黒灰色土層(21)出土土器・陶器



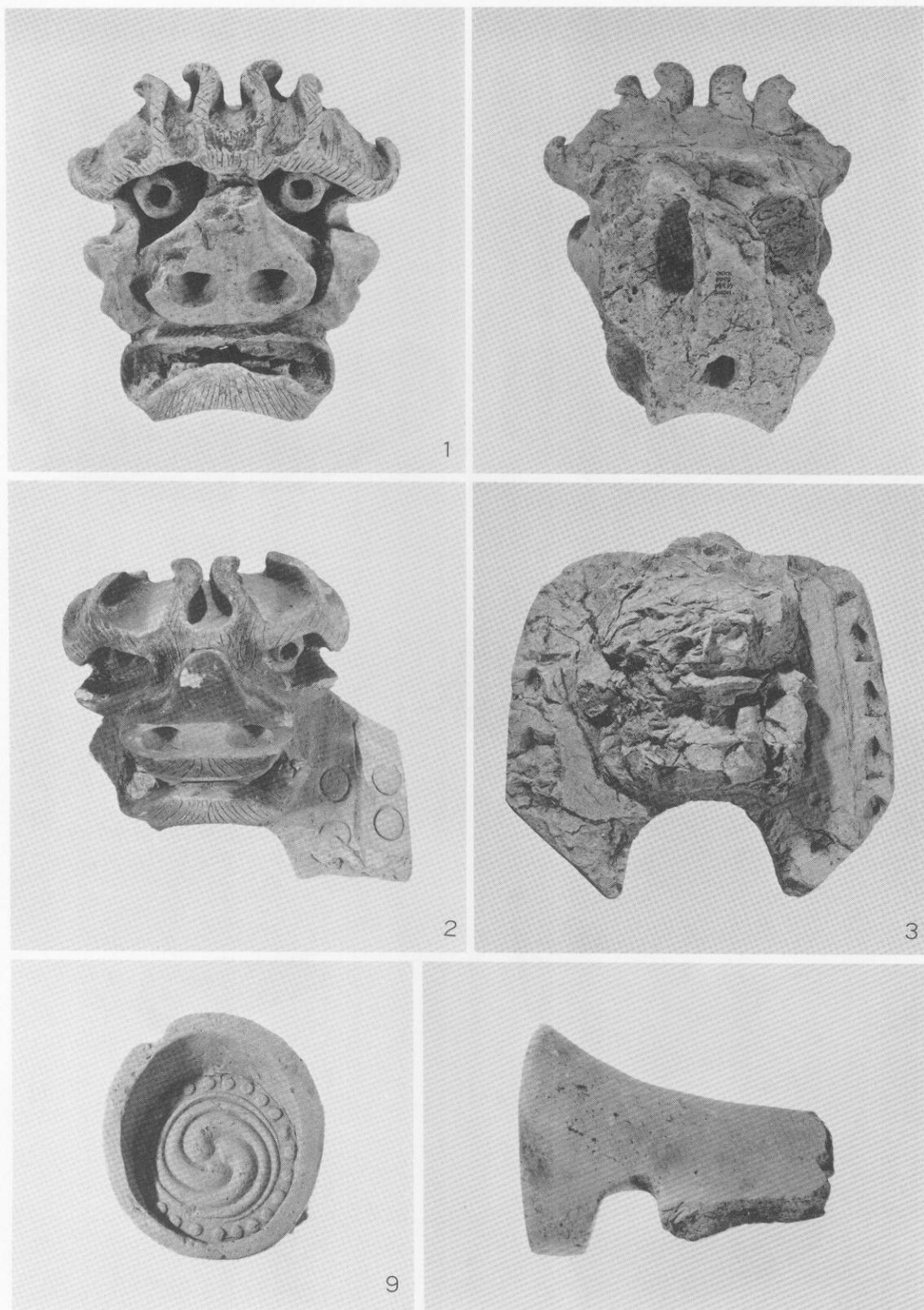
第67次調査

SDI439(n)・SKI655(o・p)・腐植土層(f)・暗青灰色土層(j・k)・黒灰色土層(b・c・d) 黒色土層(g・h・l)・茶褐色土層(i)・暗灰色土層(a・m)・床土(e)出土陶磁器





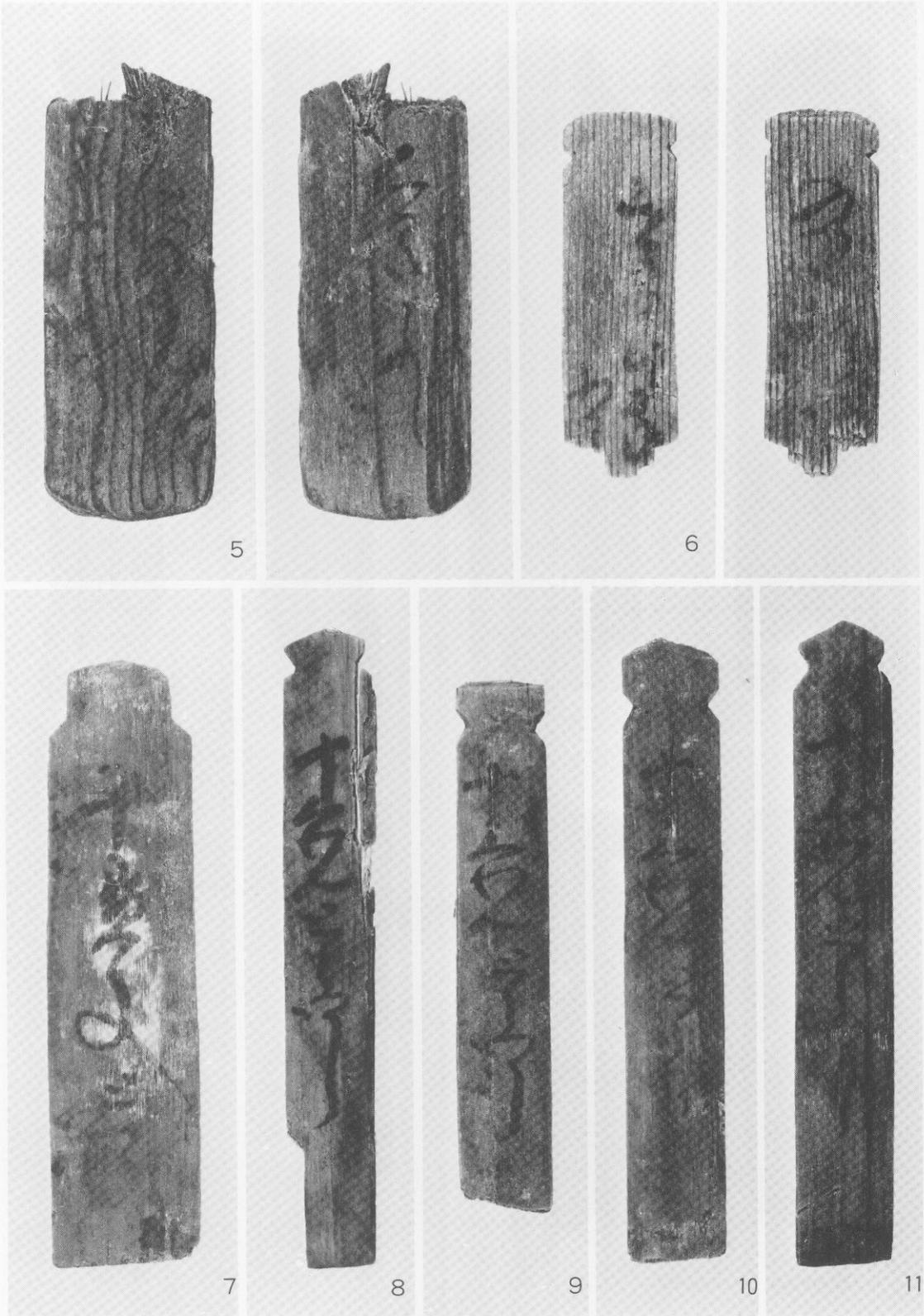
第67次調査 出土軒平瓦



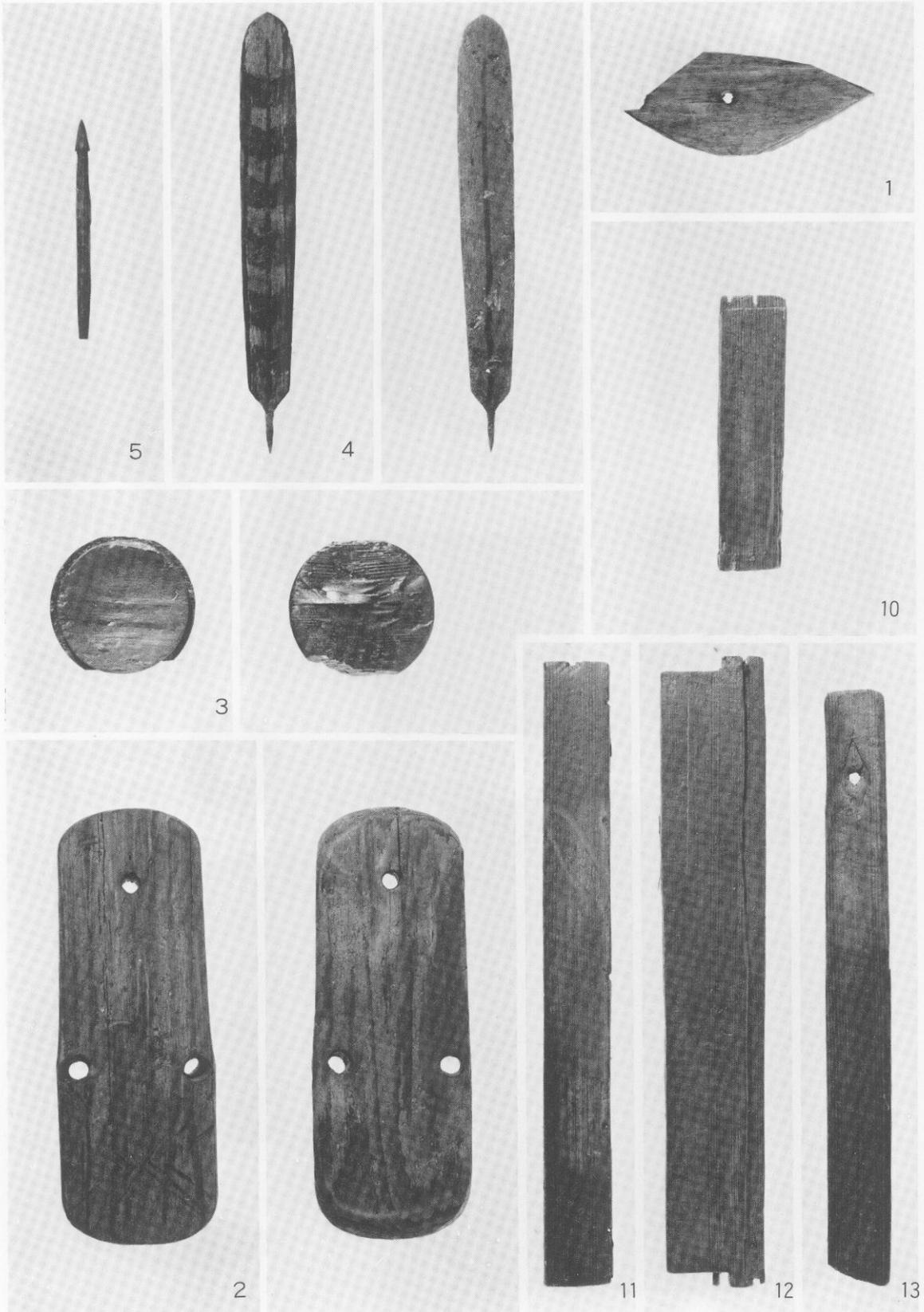
第67次調査 出土鬼瓦・鳥衾



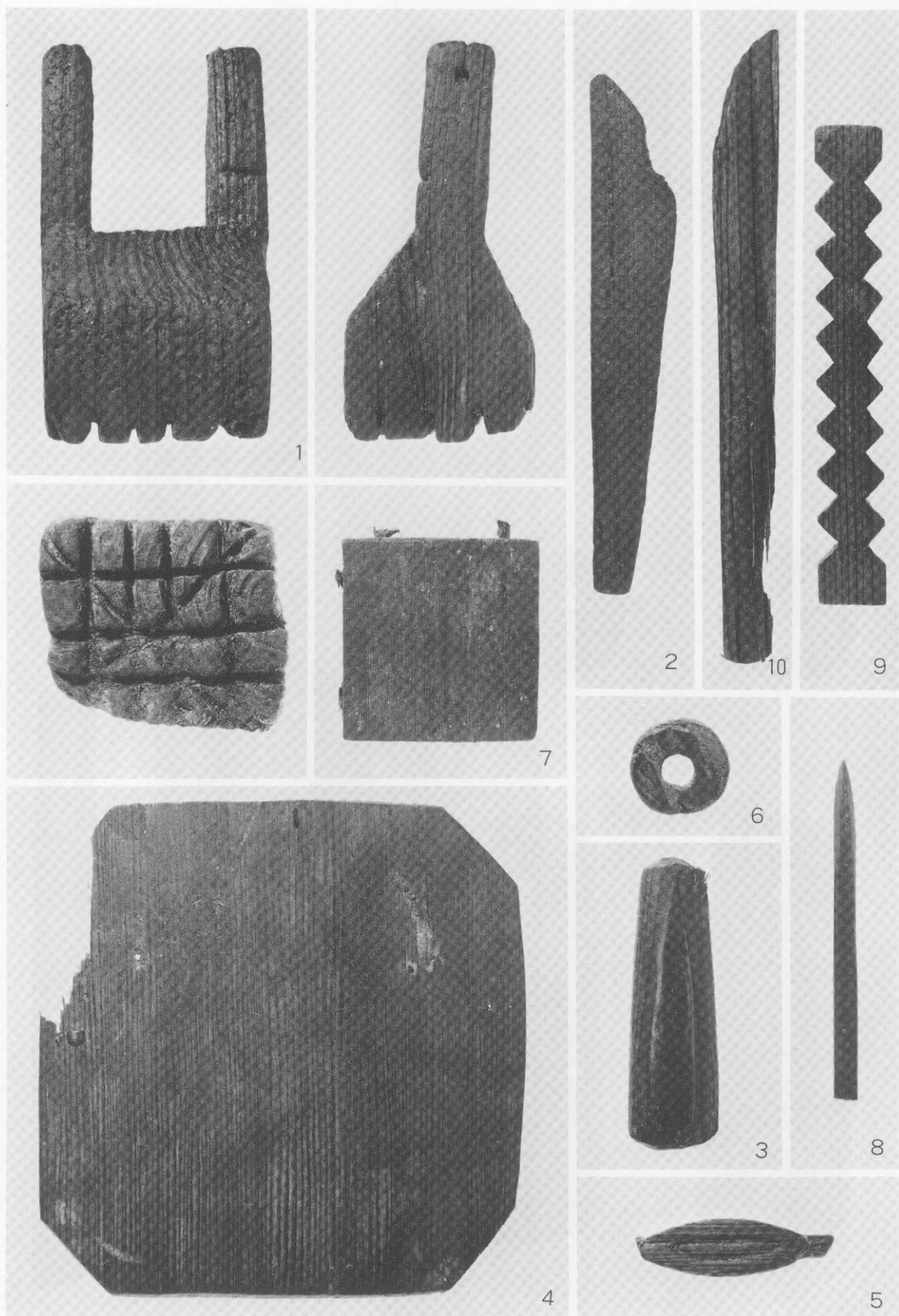
第67次調査 腐植土層出土木簡



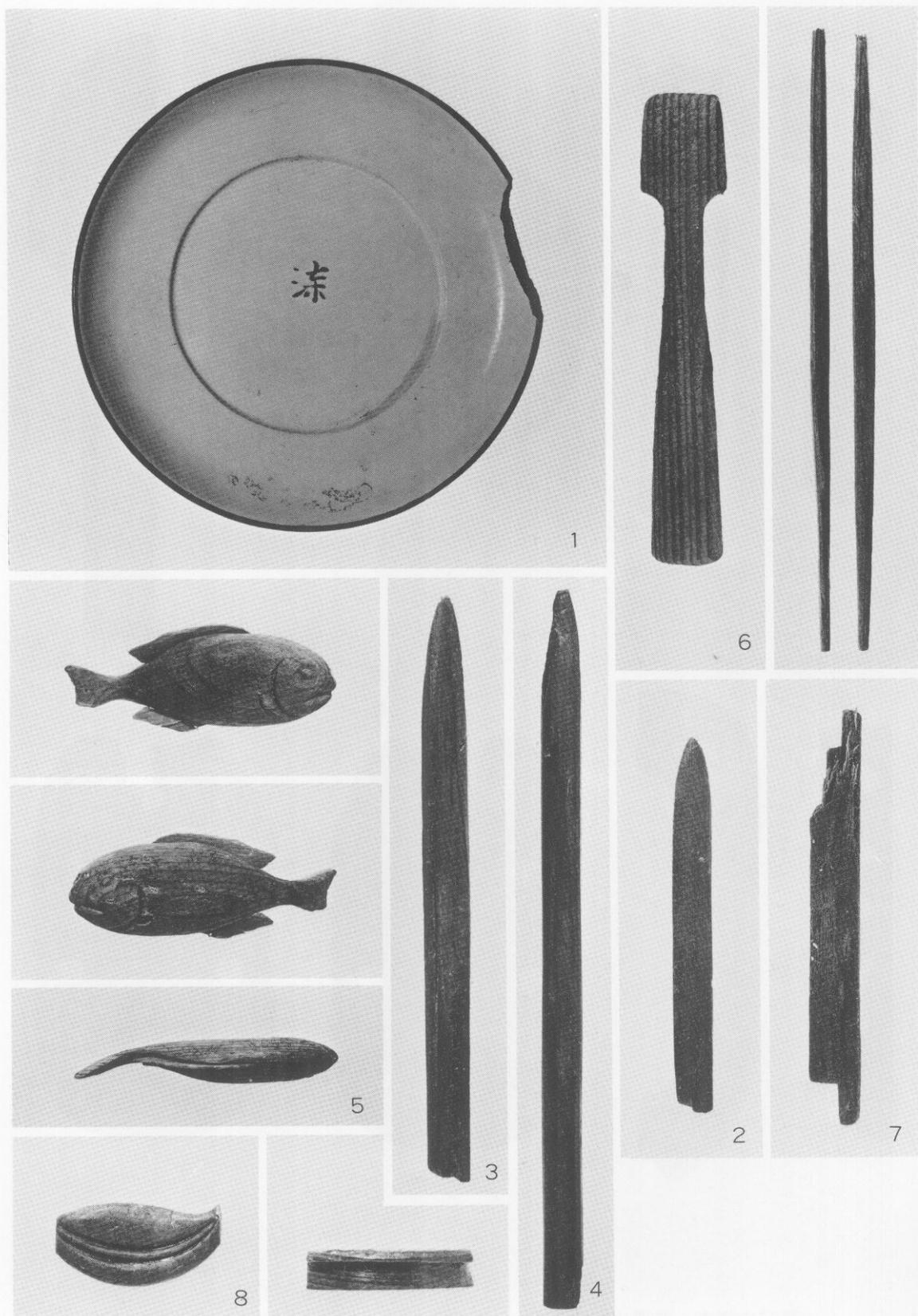
第67次調査 腐植土層・SK I595出土木簡



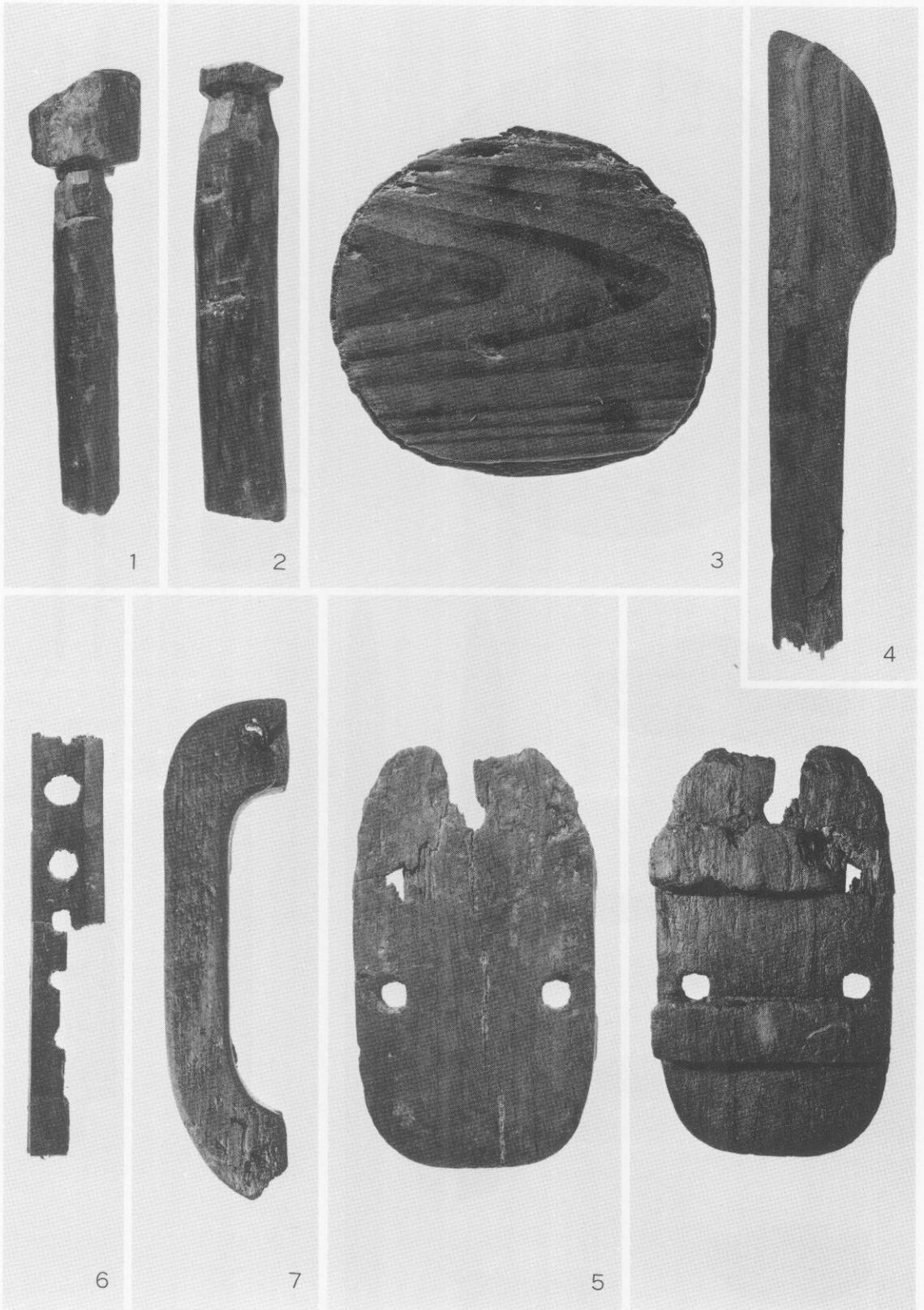
第67次調査 SK1615出土木製品



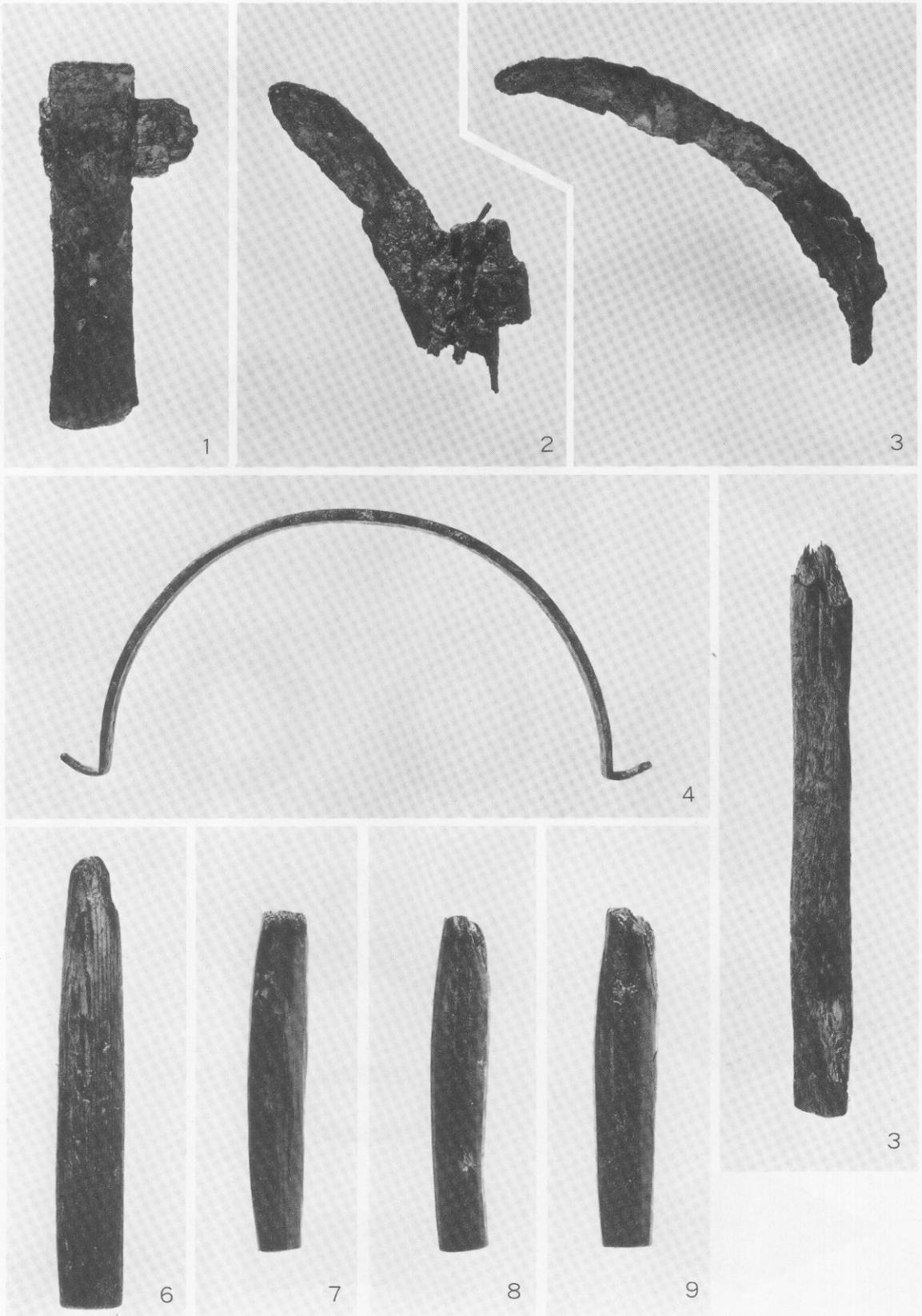
第67次調査 SD1452・1642・1656・SK1595・1603・1605出土木製品



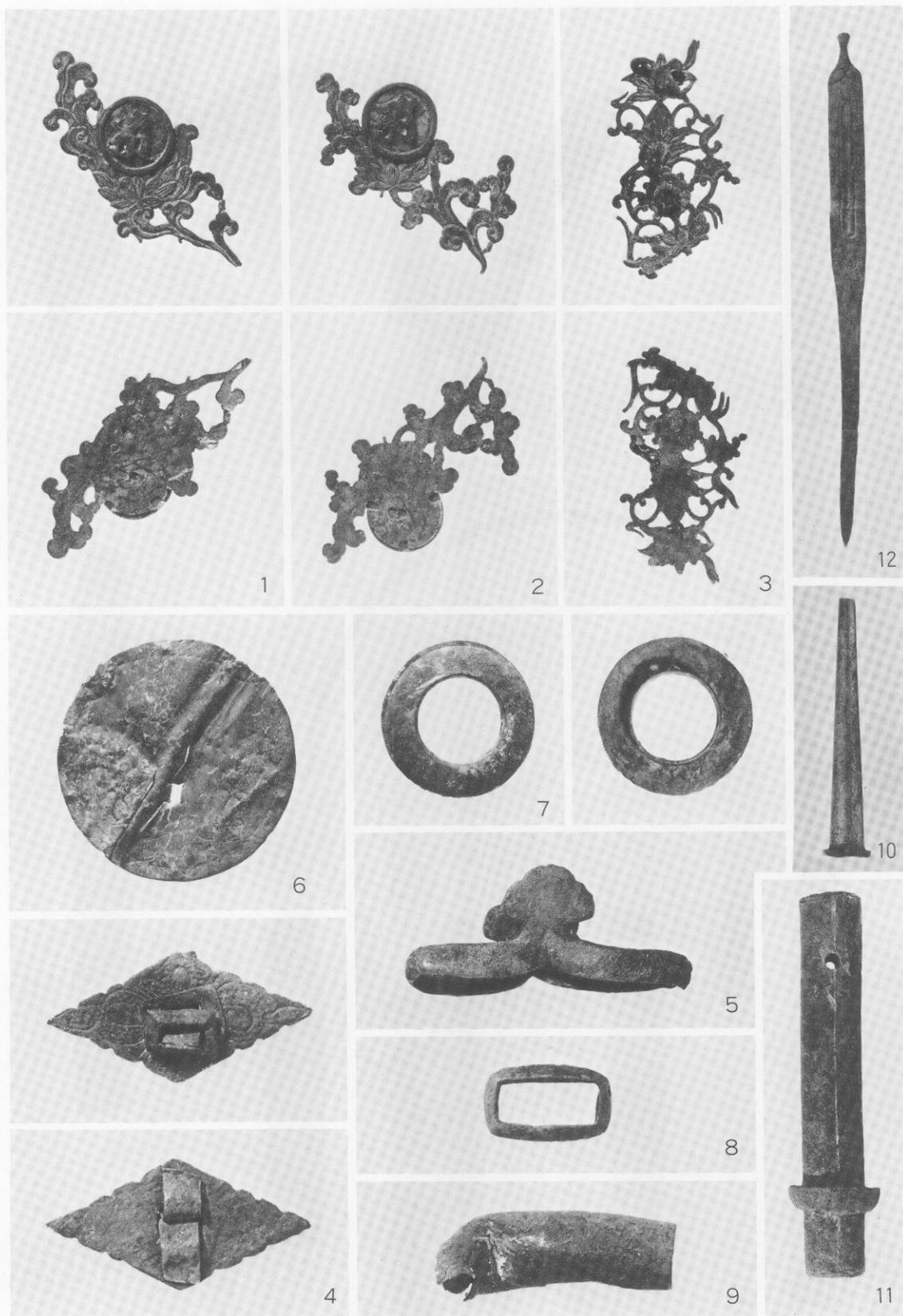
第67次調査 整地層出土木製品



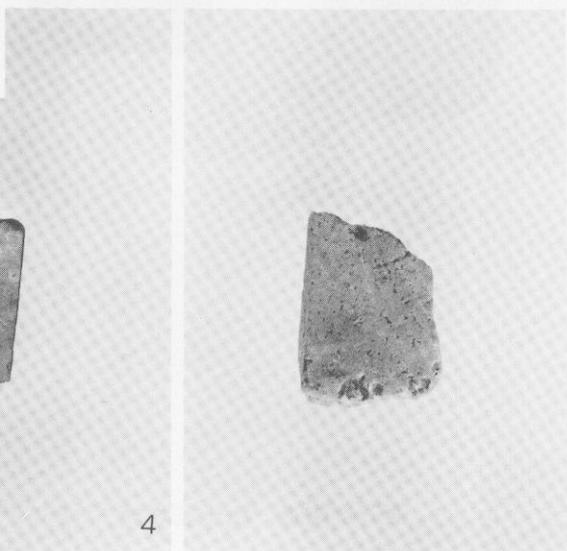
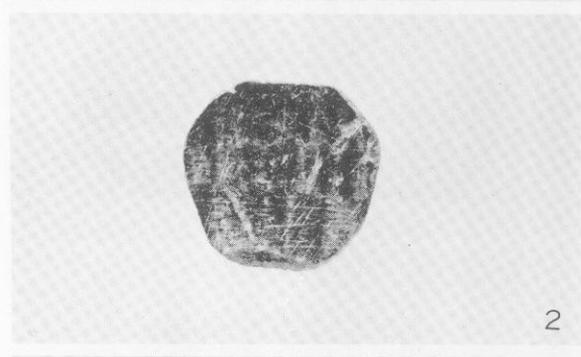
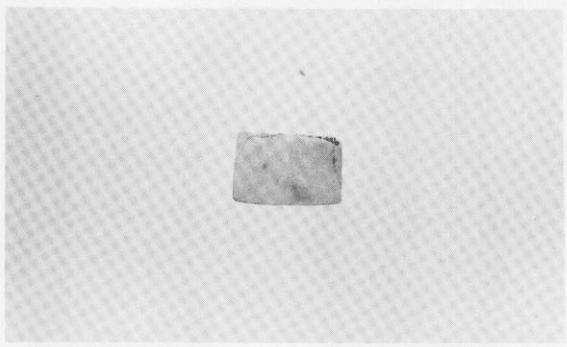
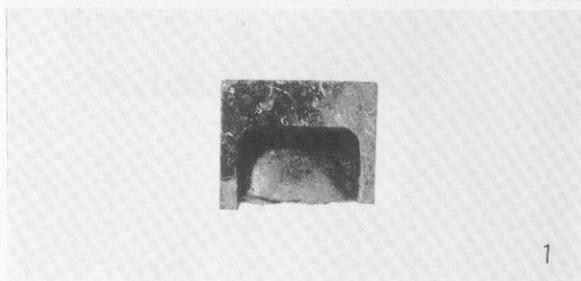
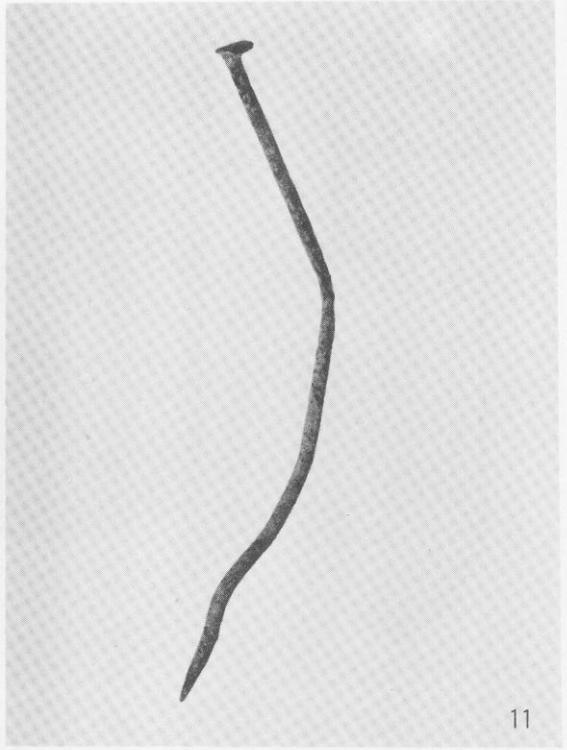
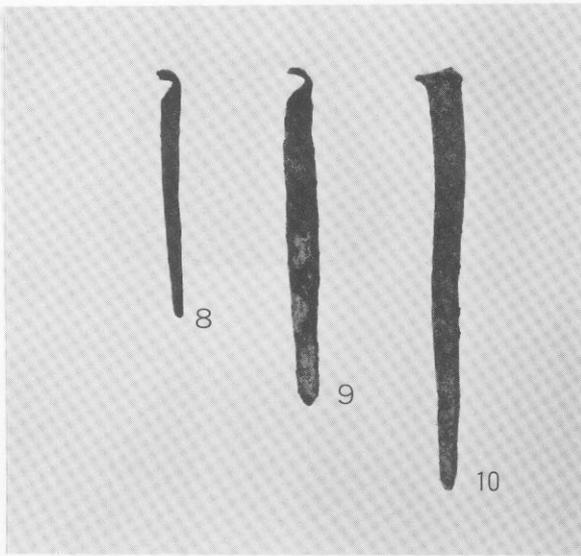
第67次調査 各層出土木製品



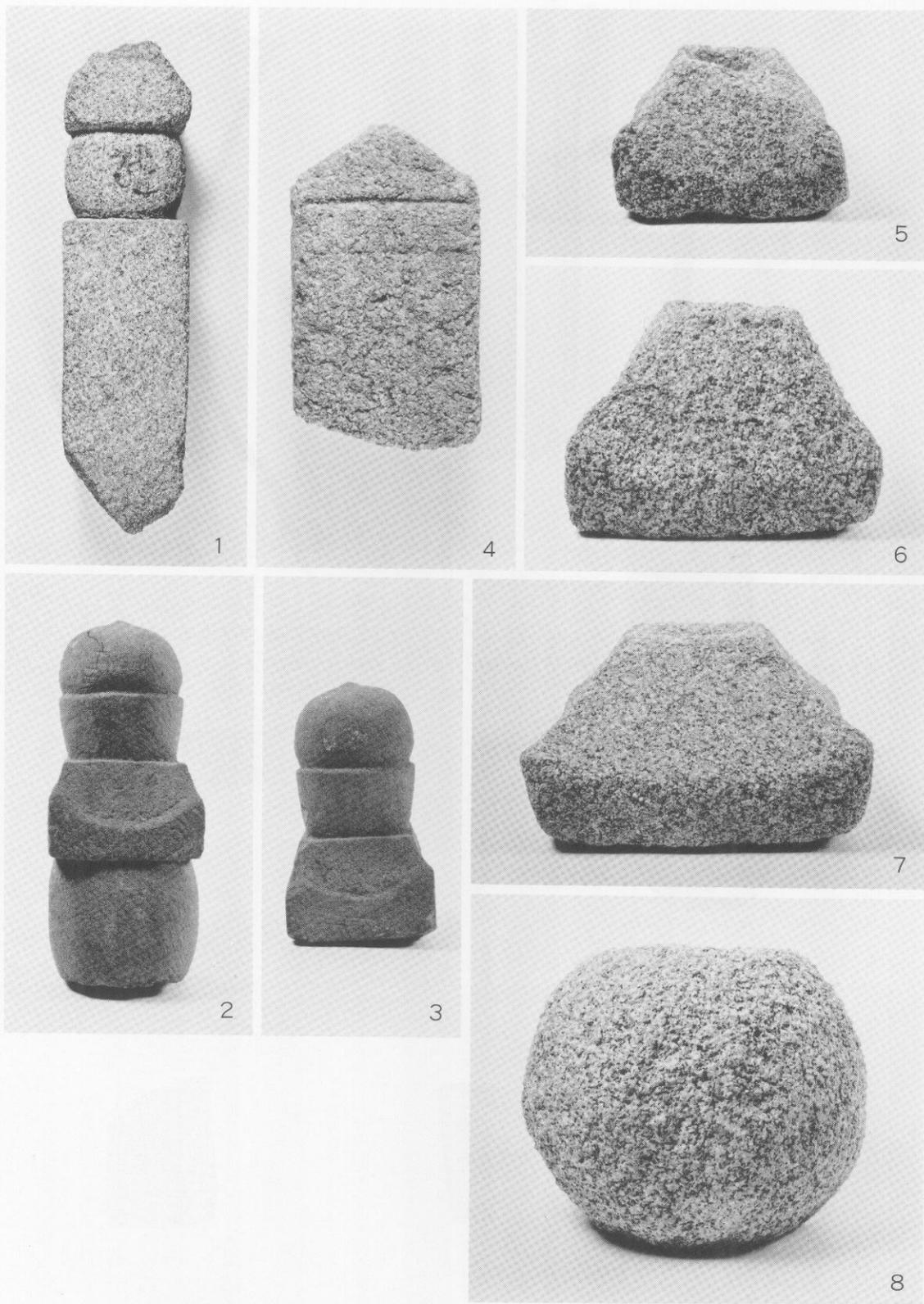
第67次調査 SK1615出土鉄製品・銅製品



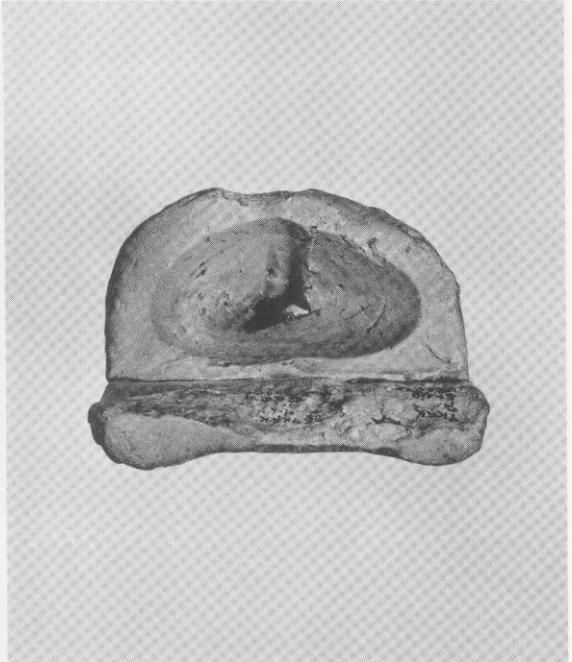
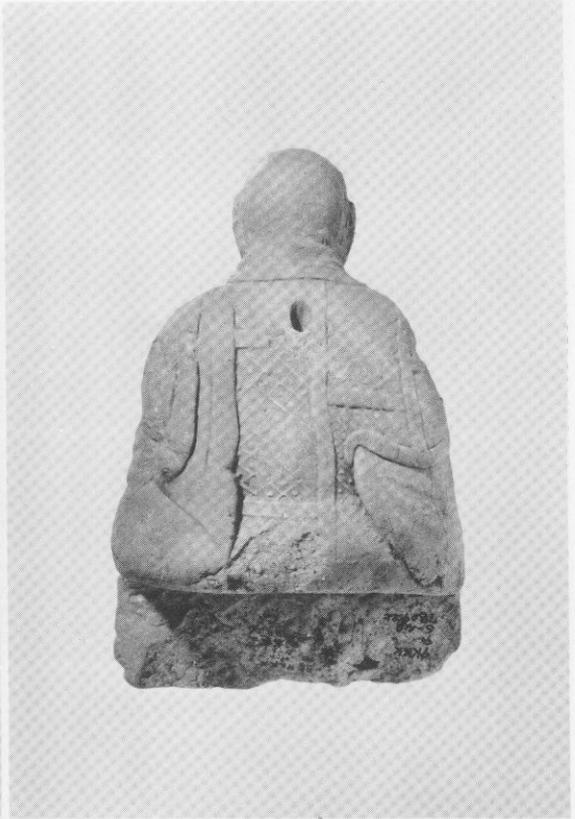
第67次調査 出土金属製品



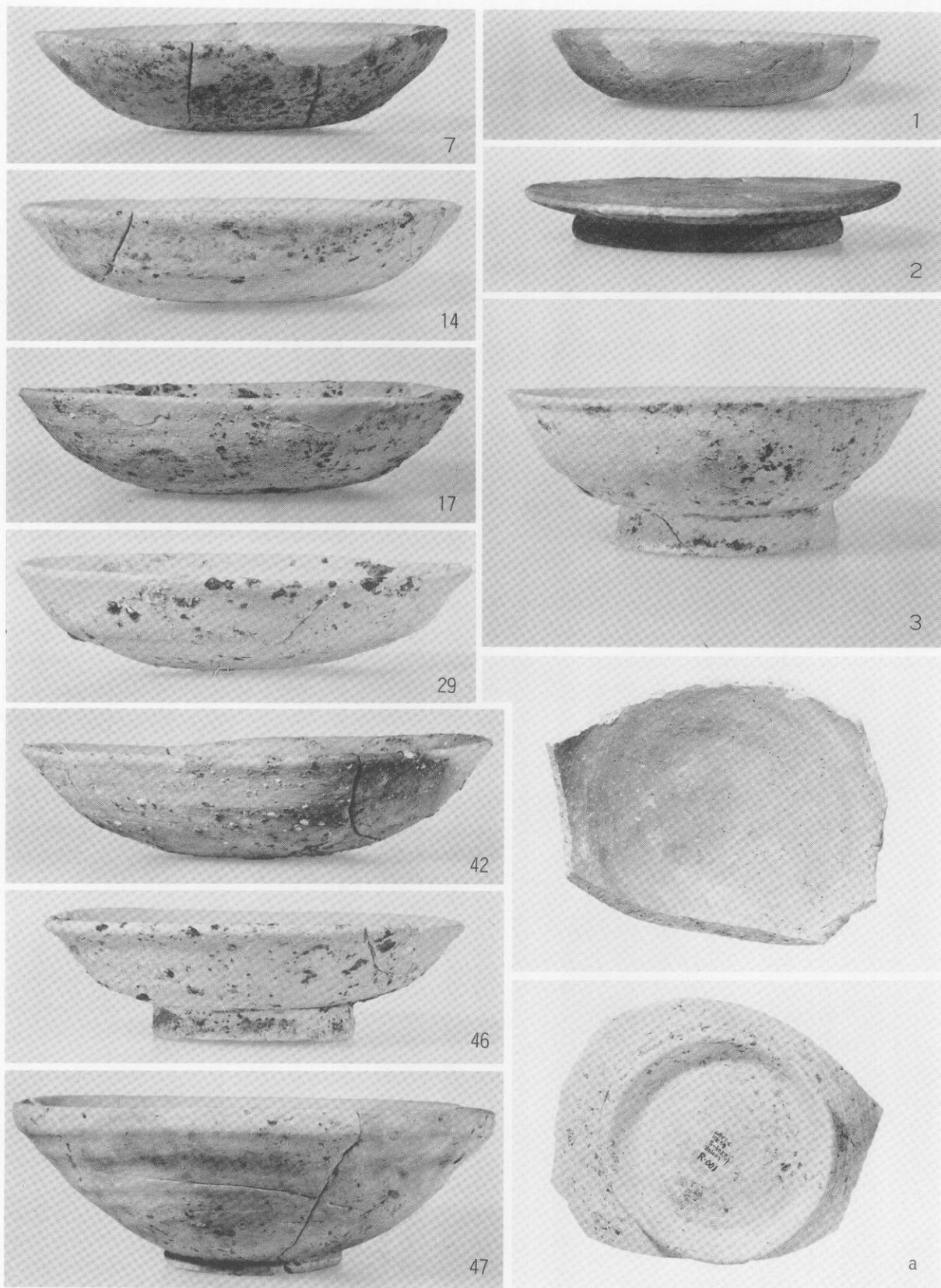
第67次調査 出土石製品・鉄釘



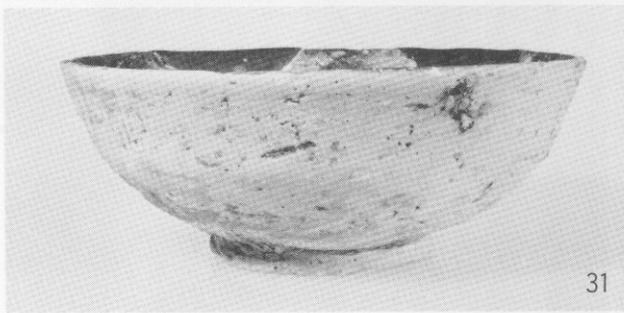
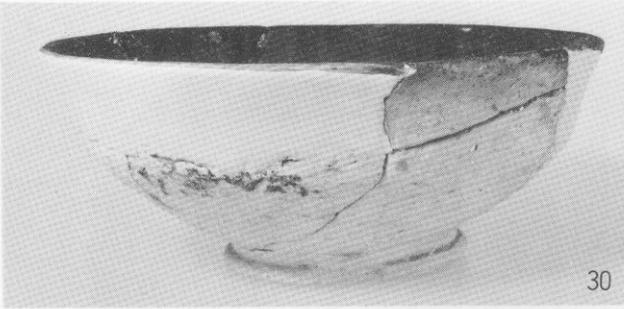
第67次調査 出土石塔類



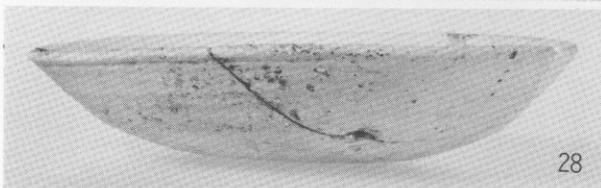
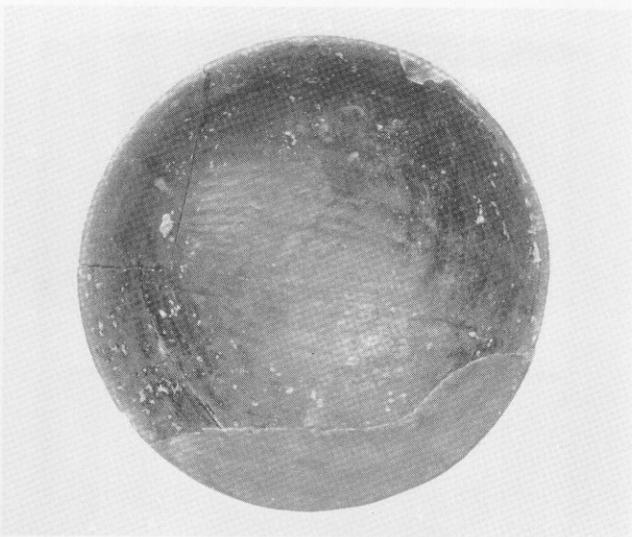
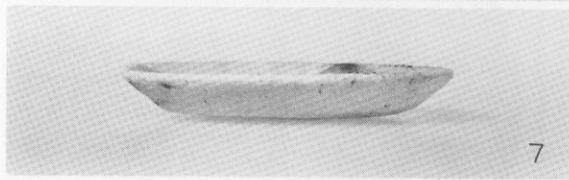
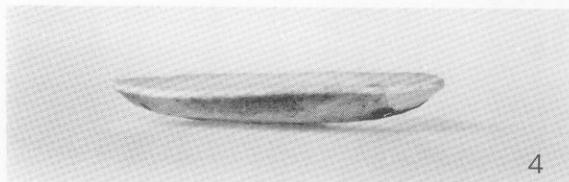
第67次調査 出土土製地像菩薩像



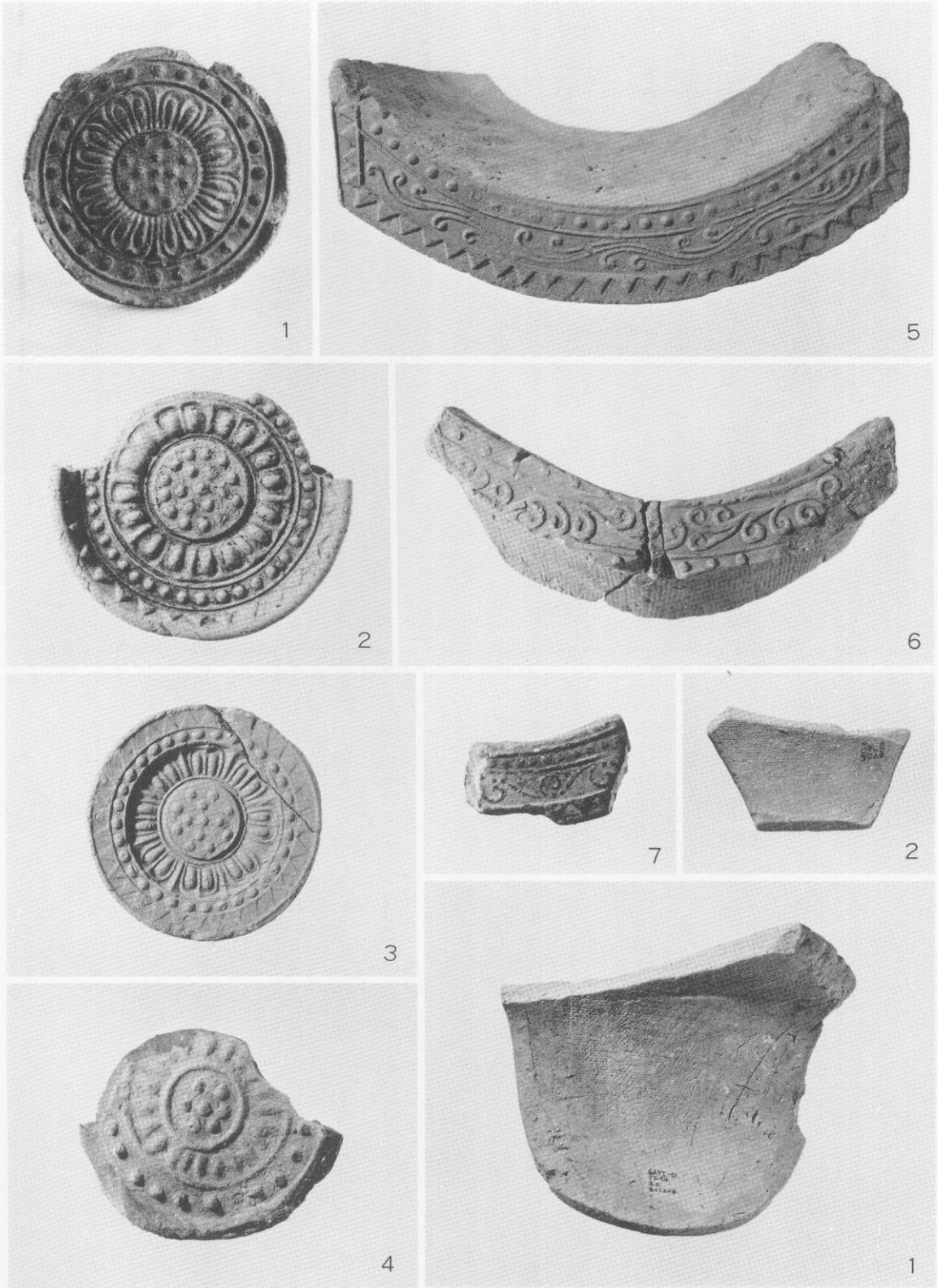
第72次調査 SD570(1・2・3)・SD587- I (7・14・17・29・42・46・47)・SK 18
86(a)出土土器



第72次調査 SD587-2 下層出土土器



第72次調査 SD587-2 上層出土土器



第73次調査 出土軒丸瓦・軒平瓦・面戸瓦

大 宰 府 史 跡

昭和55年度発掘調査概報

昭和 56 年 3 月

発 行 九 州 歴 史 資 料 館
筑紫郡太宰府町大字太宰府字太郎左近1025

印 刷 正 光 印 刷 株 式 会 社
福岡市中央区赤坂 1 丁目 2-21

正 誤 表

頁	行	誤	正
6	21	東	西
	23	西	東
23	第 16 図		縮 尺 $\frac{1}{3}$
31	21	鉢(19・21)	摺鉢(19), 鉢(21)
	”	胎土中に:……	19は胎土中に…
52	2	白 磁	青白磁
69	8	「柒」	「柒」
	第 54 図	E141.00	E140.00
	第 64 図	+56.626.00	+56.629.00